茨城県教育財団文化財調査報告第116集

伊奈・谷和原丘陵部特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書2

前田村遺跡C・D・E区
(中　　巻)

平成9年3月

茨　　城　　県
財団法人　茨城県教育財団

茨城県教育財団文化財調査報告第116集

伊奈・谷和原丘陵部特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書2

前田村遺跡C・D・E区
（中　　巻）

平成9年3月

茨　　城　　県
財団法人　茨城県教育財団

目　　次

― 中 巻 ―

2　C区の遺構と遺物 …… 1
(1)　竪穴住居跡 …… 1
(2)　地下式壙 …… 156
(3)　土坑 …… 160
①　竪穴状遺構 …… 161
②　粘土張り遺構 …… 164
③　埋設遺構 …… 176
④　形状及び出土遺物に特徴のある土坑 …… 177
⑤　その他の土坑 …… 222
(4)　溝 …… 246
(5)　遺構外出土遺物 …… 248
3　E区の遺構と遺物 …… 263
(1)　竪穴住居跡 …… 263
(2)　地下式壙 …… 272
(3)　井戸 …… 274
(4)　土坑 …… 275
①　竪穴状遺構 …… 276
②　(長)方形土坑 …… 280
③　形状及び出土遺物に特徴のある土坑 …… 284
④　その他の土坑 …… 292
(5)　溝 …… 295
(6)　遺構外出土遺物 …… 297
第4節　まとめ …… 298
付　章
前田村遺跡出土の動物遺体について …… 303

挿 図 目 次

― 中 巻 ―

第286図　第53号住居跡実測図 …… 2
第287図　第53号住居跡出土遺物実測・拓影図 …… 2
第288図　第54号住居跡実測図 …… 3
第289図　第54号住居跡出土遺物実測・拓影図 …… 4
第290図　第55号住居跡実測図 …… 5
第291図　第55号住居跡出土遺物実測・拓影図 …… 5
第292図　第59号住居跡実測図 …… 6
第293図　第59号住居跡出土遺物実測・拓影図 …… 7
第294図　第60号住居跡実測図 …… 8
第295図　第60号住居跡出土遺物実測・拓影図 …… 9

第296図　第61号住居跡実測図 …… 10
第297図　第61号住居跡出土遺物実測・拓影図 …… 10
第298図　第62号住居跡実測図 …… 12
第299図　第62号住居跡出土遺物実測・拓影図 …… 13
第300図　第63号住居跡実測図 …… 15
第301図　第63号住居跡出土遺物実測・拓影図 …… 15
第302図　第64号住居跡実測図 …… 16
第303図　第64号住居跡出土遺物実測・拓影図 …… 17
第304図　第65号住居跡実測図 …… 18
第305図　第65号住居跡出土遺物実測・拓影図 …… 19
第306図　第67号住居跡実測図 …… 21
第307図　第67号住居跡出土遺物実測・拓影図 …… 22
第308図　第68号住居跡実測図 …… 24
第309図　第68号住居跡出土遺物実測・拓影図(1) … 25
第310図　第68号住居跡出土遺物実測・拓影図(2) … 26
第311図　第68号住居跡出土遺物実測・拓影図(3) … 27
第312図　第69号住居跡実測図 …… 29
第313図　第69号住居跡出土遺物実測・拓影図(1) … 31
第314図　第69号住居跡出土遺物実測・拓影図(2) … 32
第315図　第70・71・77号住居跡実測図 …… 33
第316図　第70・71・77号住居跡遺物出土状況図 …… 34
第317図　第70・71号住居跡出土遺物実測・
拓影図(1) …… 35
第318図　第70・71号住居跡出土遺物実測・
拓影図(2) …… 36
第319図　第70・71号住居跡出土遺物実測・
拓影図(3) …… 37
第320図　第70・71号住居跡出土遺物実測図(4)…… 38
第321図　第77号住居跡出土遺物実測・拓影図 …… 40
第322図　第72号住居跡実測図 …… 41
第323図　第72号住居跡出土遺物実測・拓影図(1) … 42
第324図　第72号住居跡出土遺物実測・拓影図(2) … 43
第325図　第72号住居跡出土遺物実測・拓影図(3) … 44
第326図　第73号住居跡実測図 …… 47
第327図　第73号住居跡出土遺物実測・拓影図(1) … 48
第328図　第73号住居跡出土遺物実測・拓影図(2) … 49
第329図　第74A・B号住居跡実測図…… 50
第330図　第74A号住居跡出土遺物実測・拓影図…… 51
第331図　第74B号住居跡出土遺物実測・拓影図…… 52
第332図　第75号住居跡実測図 …… 54
第333図　第75号住居跡出土遺物実測・拓影図(1) … 55
第334図　第75号住居跡出土遺物実測・拓影図(2) … 56
第335図　第75号住居跡出土遺物実測・拓影図(3) … 57
第336図　第75号住居跡出土遺物実測・拓影図(4) … 58
第337図　第75号住居跡出土遺物実測・拓影図(5) … 59
第338図　第75号住居跡出土遺物実測図(6) …… 60
第339図　第76号住居跡実測図 …… 63
第340図　第76号住居跡出土遺物実測・拓影図(1) … 65
第341図　第76号住居跡出土遺物実測・拓影図(2) … 66
第342図　第76号住居跡出土遺物実測・拓影図(3) … 67
第343図　第79号住居跡実測図 …… 69
第344図　第79号住居跡出土遺物実測・拓影図 …… 69
第345図　第80号住居跡実測図 …… 70
第346図　第81号住居跡実測図 …… 71
第347図　第81号住居跡出土遺物実測・拓影図 …… 72
第348図　第82号住居跡実測図 …… 73
第349図　第82号住居跡出土遺物実測・拓影図 …… 73
第350図　第83号住居跡実測図 …… 74
第351図　第83号住居跡出土遺物実測・拓影図 …… 74
第352図　第88号住居跡実測図 …… 75
第353図　第88号住居跡出土遺物実測・拓影図 …… 75
第354図　第89号住居跡実測図 …… 76
第355図　第89号住居跡出土遺物実測・拓影図 …… 76
第356図　第92・93号住居跡実測図…… 78
第357図　第114号住居跡実測図…… 79
第358図　第114号住居跡出土遺物実測・拓影図…… 80
第359図　第118号住居跡実測図…… 81
第360図　第118号住居跡出土遺物実測・拓影図…… 82
第361図　第119・158号住居跡実測図…… 83
第362図　第119号住居跡出土遺物実測・拓影図…… 84
第363図　第158号住居跡出土遺物実測図…… 85
第364図　第121・122・123号住居跡実測図…… 86
第365図　第121号住居跡出土遺物実測・拓影図…… 87
第366図　第123号住居跡出土遺物実測・拓影図…… 89
第367図　第124号住居跡実測図…… 90
第368図　第124号住居跡出土遺物実測・拓影図…… 90

第369図　第125・126・133号住居跡実測図…… 92
第370図　第126号住居跡出土遺物実測・拓影図…… 93
第371図　第133号住居跡出土遺物実測・拓影図…… 94
第372図　第127号住居跡実測図…… 96
第373図　第127号住居跡出土遺物実測・拓影図(1)… 97
第374図　第127号住居跡出土遺物実測・拓影図(2)… 98
第375図　第128号住居跡実測図…… 99
第376図　第128号住居跡出土遺物実測・拓影図……100
第377図　第129号住居跡実測図……100
第378図　第129号住居跡出土遺物実測・拓影図(1)…101
第379図　第129号住居跡出土遺物実測・拓影図(2)…102
第380図　第130号住居跡実測図……104
第381図　第130号住居跡出土遺物実測・拓影図……105
第382図　第131・134号住居跡実測図……106
第383図　第131号住居跡出土遺物実測・拓影図……107
第384図　第134号住居跡出土遺物実測・拓影図……108
第385図　第132号住居跡実測図……109
第386図　第132号住居跡出土遺物実測・拓影図……110
第387図　第136号住居跡実測図……111
第388図　第136号住居跡出土遺物実測・拓影図……112
第389図　第138・139号住居跡実測図……113
第390図　第138号住居跡出土遺物実測・拓影図……114
第391図　第139号住居跡出土遺物実測・拓影図……115
第392図　第140号住居跡実測図……116
第393図　第140号住居跡出土遺物実測・拓影図……116
第394図　第141号住居跡実測図……117
第395図　第141号住居跡出土遺物実測・拓影図……118
第396図　第142号住居跡実測図……119
第397図　第143号住居跡実測図……120
第398図　第143号住居跡出土遺物実測・拓影図……121
第399図　第144号住居跡実測図……121
第400図　第144号住居跡出土遺物実測・拓影図……122
第401図　第145号住居跡実測図……123
第402図　第147号住居跡実測図……123
第403図　第148・149号住居跡実測図……125
第404図　第148号住居跡出土遺物実測・拓影図……126
第405図　第149号住居跡出土遺物実測・拓影図……127
第406図　第151・152号住居跡実測図……129
第407図　第151号住居跡出土遺物実測図……130
第408図　第152号住居跡出土遺物実測・拓影図……131
第409図　第153・154号住居跡実測図……133
第410図　第153号住居跡出土遺物実測・拓影図……134
第411図　第154号住居跡出土遺物実測・拓影図……135
第412図　第155号住居跡実測図……137
第413図　第155号住居跡出土遺物実測・拓影図……138
第414図　第156号住居跡実測図……139
第415図　第157・159号住居跡実測図……140
第416図　第159号住居跡出土遺物実測・拓影図……141
第417図　第160号住居跡出土遺物実測・拓影図……142
第418図　第160号住居跡実測図……143
第419図　第161号住居跡実測図……144
第420図　第161号住居跡出土遺物実測・拓影図……144
第421図　第162号住居跡実測図……145
第422図　第162号住居跡出土遺物実測・拓影図……145
第423図　第163・164号住居跡実測図……146
第424図　第164号住居跡出土遺物実測・拓影図……147
第425図　第165号住居跡実測図……148
第426図　第165号住居跡出土遺物実測・拓影図……149
第427図　第166号住居跡出土遺物実測・拓影図……150
第428図　第166・167号住居跡実測図……151
第429図　第167号住居跡出土遺物実測・拓影図……152
第430図　第２号地下式壙実測図 ……156
第431図　第3・4号地下式壙実測図……157
第432図　第３号地下式壙出土遺物実測図 ……158
第433図　第５号地下式壙実測図 ……159
第434図　第270号土坑出土遺物実測・拓影図……161
第435図　竪穴状遺構(SK-270・398・409・470)
実測図 ……163
第436図　第360号土坑出土遺物実測・拓影図……164
第437図　第369号土坑出土遺物実測図……166
第438図　第574号土坑出土遺物実測図……167
第439図　第654号土坑出土遺物実測・拓影図……169
第440図　第657号土坑出土遺物実測図……169
第441図　第675号土坑出土遺物実測図……170
第442図　第688号土坑出土遺物実測・拓影図……172
第443図　第689号土坑出土遺物実測・拓影図……173

第444図　粘土張り遺構実測図 ……174
第445図　第553号土坑実測図……176
第446図　第553号土坑出土遺物実測・拓影図……176
第447図　第207・214・215・232・242号土坑実測図……186
第448図　第266・355・380・414号土坑実測図……187
第449図　第402・408・410・417号土坑実測図……188
第450図　第418・421・422・425号土坑実測図……189
第451図　第428・429・434・435・438号土坑実測図……190
第452図　第437・440・442・443号土坑実測図……191
第453図　第444・446・447・451号土坑実測図……192
第454図　第449・450・456号土坑実測図……193
第455図　第452・453・465・467号土坑実測図……194
第456図　第454・455・474・475号土坑実測図……195
第457図　第491・494・500・512号土坑実測図……196
第458図　第532・534A・538・541・545号土坑実測図 …197
第459図　第544・550・563・596号土坑実測図……198
第460図　第566・576・600・601・621・622号土坑
実測図 ……199
第461図　第614・629・636・668号土坑実測図……200
第462図　第682・683号土坑実測図……201
第463図　第207・215・232(1)号土坑出土遺物実測・
拓影図 ……202
第464図　第232(2)・242号土坑出土遺物実測・
拓影図 ……203
第465図　第402・408号土坑出土遺物実測・
拓影図 ……204
第466図　第410・414号土坑出土遺物実測・
拓影図 ……205
第467図　第417・418・421・422・425(1)号土坑出土
遺物実測・拓影図 ……206
第468図　第425(2)号土坑出土遺物実測・拓影図……207
第469図　第425(3)・428・429・435号土坑出土
遺物実測・拓影図 ……208
第470図　第437・440・442・443号土坑出土遺物
実測・拓影図 ……209
第471図　第444・446・452号土坑出土遺物実測・
拓影図 ……210
第472図　第453・454・475・500号土坑出土遺物
実測・拓影図 ……211
第473図　第512・534A・538号土坑出土遺物実測・
拓影図 ……212
第474図　第541・545・563・566・596号土坑出土遺物
実測・拓影図 ……213
第475図　第576・600・621号土坑出土遺物実測・
拓影図 ……214
第476図　第622・629・636・683号土坑出土遺物
実測・拓影図 ……215
第477図　第668号土坑出土遺物実測・拓影図……216
第478図　その他の土坑出土遺物実測・拓影図(1) …223
第479図　その他の土坑出土遺物実測・拓影図(2) …224
第480図　その他の土坑出土遺物実測・拓影図(3) …225
第481図　その他の土坑出土遺物実測・拓影図(4) …226
第482図　その他の土坑出土遺物実測・拓影図(5) …227
第483図　その他の土坑出土土製品実測・拓影図(6) …230
第484図　その他の土坑出土石製品実測図(7) ……231
第485図　その他の土坑出土石製品実測図(8) ……232
第486図　その他の土坑出土古銭拓影図(9) ……232
第487図　その他の土坑出土遺物実測・拓影図(10) …233
第488図　その他の土坑出土遺物実測・拓影図(11) …234
第489図　その他の土坑出土遺物実測・拓影図(12) …235
第490図　その他の土坑出土遺物実測・拓影図(13) …236
第491図　溝断面実測図 ……246
第492図　溝出土遺物実測・拓影図 ……246
第493図　遺構外出土遺物実測・拓影図(1) ……249
第494図　遺構外出土遺物実測・拓影図(2) ……250
第495図　遺構外出土遺物実測・拓影図(3) ……251
第496図　遺構外出土石製品実測図(4) ……252
第497図　遺構外出土石製品実測図(5) ……253
第498図　遺構外出土遺物実測・拓影図(6) ……254
第499図　遺構外出土遺物実測・拓影図(7) ……259
第500図　遺構外出土遺物実測・拓影図(8) ……260
第501図　遺構外出土遺物実測・拓影図(9) ……261
第502図　第220・221号住居跡実測図……264
第503図　第220号住居跡出土遺物実測・拓影図……265
第504図　第221号住居跡出土遺物実測・拓影図……266
第505図　第222号住居跡実測図……268

第506図　第222号住居跡出土遺物実測・拓影図……269
第507図　第223号住居跡実測図……270
第508図　第223号住居跡出土遺物実測・拓影図……271
第509図　第6号地下式壙実測図……273
第510図　第6号地下式壙出土遺物実測図……273
第511図　第7号地下式壙実測図……273
第512図　第2号井戸実測図……274
第513図　第3号井戸実測図……275
第514図　竪穴状遺構実測図……277
第515図　(長)方形土坑実測図(1)……281
第516図　(長)方形土坑実測図(2)……282
第517図　(長)方形土坑出土遺物実測・拓影図……283
第518図　第903・909・912・914・990号土坑実測図……287
第519図　第916・989・1013号土坑実測図……288
第520図　第1017・1027・1032・1033・1036号土坑実測図……289
第521図　第914・916・989・990号土坑出土遺物実測・拓影図……290
第522図　第1013・1017・1027・1032(1)号土坑出土遺物実測・拓影図……291
第523図　第1032(2)・1036号土坑出土遺物実測・拓影図……292
第524図　その他の土坑出土遺物実測・拓影図……292
第525図　溝土層・断面実測図……296
第526図　溝出土遺物実測・拓影図……296
第527図　遺構外出土遺物実測・拓影図……297

付　　図

前田村遺跡C・D区遺構配置図
前田村遺跡E区遺構配置図

表　目　次

―中　巻―

表4　前田村遺跡C区住居跡一覧表……153
表5　前田村遺跡C区土坑一覧表……237
表6　前田村遺跡C区溝一覧表……247
表7　前田村遺跡E区住居跡一覧表……272
表8　前田村遺跡E区(長)方形土坑一覧表……283
表9　前田村遺跡E区土坑一覧表……293
表10　前田村遺跡E区溝一覧表……297

次　目　表

現地説明会

2　C区の遺構と遺物

C区は，当遺跡の北部に位置している。C区の南側にD・E・F区，東側にA区，南東側にB・G区，西側にH・I区がある。当遺跡の北と南には谷津が入り込み，C区は北側の谷津に面した台地縁辺部にあり，谷津との境は崖となっている。

C区からは，竪穴住居跡84軒，地下式壙4基，土坑437基，溝8条を検出した。

C区の遺構番号は平成4年度調査のB区からの続きとなるため，住居跡は第53号から，土坑は第203号から，溝は第18号からとなる。なお，住居跡でも炉跡や壁の一部分しか確認できず，全体像が不明のものは一覧表に掲載した。

(1)　竪穴住居跡

第53号住居跡（第286図）

位置　調査区のほぼ中央部，B17hs区。

重複関係　本跡は，北東側部分が第58号住居跡の炉跡の上に構築されており，本跡の方が新しい。また，本跡の北東側部分で第57号住居跡の炉跡を確認したが，新旧関係は不明である。

規模と平面形　北側部分の覆土がほとんど削平され，南西側部分の壁の立ち上がりしか確認できなかったが，長径〔5.00〕m，短径〔4.30〕mの楕円形と推定される。

長径方向　〔N－18°－E〕

壁　南西壁が残存しており，壁高1～20cmで，外傾して立ち上がる。

床　平坦である。踏み固められた面は見られない。

ピット　16か所。P_1～P_5は長径30～41cm，短径22～37cmの円形あるいは楕円形で，深さ24～51cm。これらは，規模にややばらつきは見られるが，推定プランの内側を囲む様に位置し，主柱穴と思われる。P_{15}は長径45cm，短径41cmの楕円形で，深さ74cm。炉に近接しているが，主柱穴の可能性も考えられる。他のピット及び本跡外のピットは第57号，58号住居跡との関連も考えられるが，性格は不明である。

炉　中央から北西寄りに付設されている。長径90cm，短径70cmの楕円形で，床を8cmほど掘りくぼめた地床炉である。炉床は火熱で赤く焼け，硬化している。

炉土層解説

1　暗赤褐色　焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
2　暗赤褐色　焼土小ブロック・焼土粒子中量，ローム粒子少量
3　暗赤褐色　焼土粒子・炭化物・ローム小ブロック少量

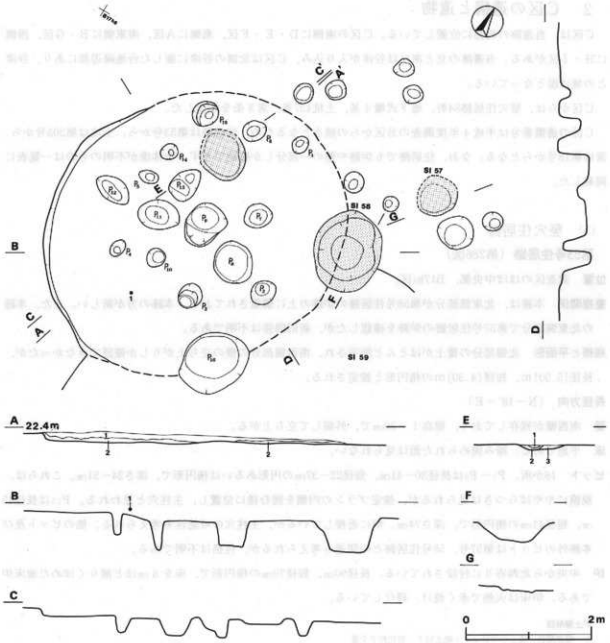
覆土　2層からなる。褐色土主体の自然堆積である。

土層解説

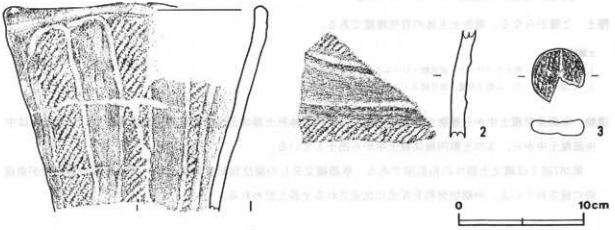
1　褐　　色　焼土小ブロック・炭化物・ローム小ブロック少量
2　にぶい褐色　ローム粒子中量，炭化粒子・ローム小ブロック少量

遺物　床面及び覆土中から遺物が出土している。1の深鉢形土器は正位の状態で南部床面から，2の破片は中央部覆土中から，3の土製円板は覆土中から出土している。

第287図2は縄文土器片の拓影図である。単節縄文RLの縦位回転を地文とし，隆線区画の磨消帯が曲線的に施されている。中期加曽利EⅣ式に比定される土器と思われる。



第286図　第53号住居跡実測図



第287図　第53号住居跡出土遺物実測・拓影図

第53号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第287図1	深鉢形土器 縄文土器	A(20.9) B(16.5)	胴部から口縁部にかけての破片。胴部は外傾しながら立ち上がり，口縁部に至る。口縁部下に沈線が施され，胴部文様帯と分離されている。胴部には単節縄文及Lを縦位回転で施文し，「∩」状の沈線区画の磨消帯に文様が分断されている。	砂粒 にぶい橙色 普通	P1 30% 南部床面 (加曽利E類)

図版番号	器種	計測値(cm) 最大長	最大幅	最大厚	重量(g)	現存率(%)	器形及び文様の特徴	備考
第287図3	土製円板	4.3	4.4	1.2	(20.5)	75	表面に縄文施文（擦滅が著しい）一部欠損	DP1 覆土下層

所見 本跡は，南西壁しか立ち上がりが確認できなかったが，残存している壁及び柱穴から規模及び平面形を推定した。遺物は中期加曽利EⅢ－Ⅳ式期のものが混在しているが，主体となる遺物から縄文時代中期加曽利EⅢ式期が本跡の時期である。

第54号住居跡（第288図）

位置 調査区のほぼ中央部，B17g8区。

規模と平面形 覆土が薄く，東壁と南壁の一部が確認できなかったが，長径3.35m，短径(2.75)mの楕円形である。

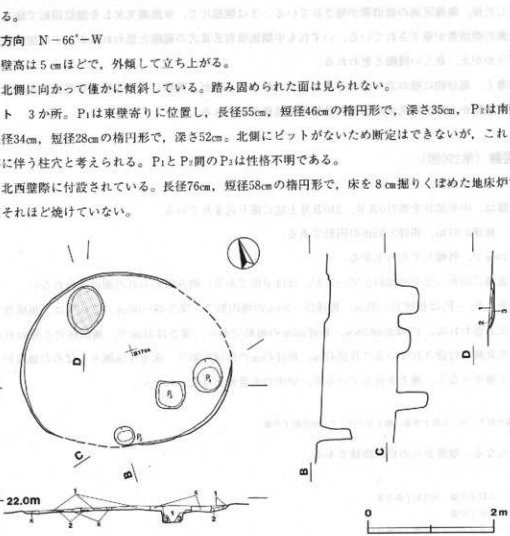
長径方向 N－66°－W

壁 壁高は5cmほどで，外傾して立ち上がる。

床 北側に向かって僅かに傾斜している。踏み固められた面は見られない。

ピット 3か所。P_1は東壁寄りに位置し，長径55cm，短径46cmの楕円形で，深さ35cm，P_2は南壁際に位置し，長径34cm，短径28cmの楕円形で，深さ52cm。北側にピットがないため断定はできないが，これら2本は，本跡に伴う柱穴と考えられる。P_1とP_2間のP_3は性格不明である。

炉 北西壁際に付設されている。長径76cm，短径58cmの楕円形で，床を8cm掘りくぼめた地床炉である。炉床はそれほど焼けていない。



第288図 第54号住居跡実測図

炉土層解説

1　暗褐色　焼土小ブロック・焼土粒子・ローム粒子中量，炭化粒子・ローム中ブロック・ローム小ブロック極少量

2　褐　色　ローム粒子多量，焼土粒子・炭化粒子少量

3　褐　色　ローム粒子多量，焼土粒子・炭化粒子・ローム小ブロック少量，焼土小ブロック極少量

覆土　3層からなる。土層2，3の堆積後，土層1が堆積した自然堆積である。

土層解説

1　暗褐色　焼土粒子・炭化粒子・ローム小ブロック少量

2　褐　色　ローム粒子多量，焼土粒子少量

3　褐　色　ローム粒子多量

遺物　覆土中から少量の縄文土器片が出土しているが，いずれも細片である。

第289図　第54号住居跡出土遺物実測・拓影図

第289図1，2は縄文土器片の拓影図である。1は波状を呈する口縁部片で，地文に縦位回転の単節縄文RLを施文した後，隆線区画の磨消帯が施されている。2は胴部片で，単節縄文RLを縦位回転で施文した後，沈線区画の磨消帯が垂下されている。いずれも中期加曽利EⅢ式の範疇と思われるが，1は加曽利EⅣ式の手法がうかがえ，新しい段階と思われる。

所見　覆土が薄く，部分的に壁の立ち上がりをとらえられなかったが，残存している壁から平面形を推定した。時期は，出土遺物から縄文時代中期加曽利EⅢ式期前後と思われる。

第55号住居跡（第290図）

位置　調査区のほぼ中央部，B17i_7区。

重複関係　本跡は，中央部分を第210A号，210B号土坑に掘り込まれている。

規模と平面形　長径3.97m，短径3.95mの円形である。

壁　壁高7～10cmで，外傾して立ち上がる。

床　西側から北側に向かってやや傾斜しているが，ほぼ平坦である。踏み固められた面は見られない。

ピット　5か所。P_1～P_4は長径30～38cm，短径25～30cmの楕円形で，深さ48～66cm。これらは，規模及び配列から主柱穴と思われる。P_5は長径28cm，短径26cmの卵形であり，深さは31cmで，補助柱穴と思われる。

炉　中央部やや北側に付設されている。長径47cm，短径45cmのほぼ円形で，床を4cm掘りくぼめた地床炉である。覆土は1層からなり，焼土を含んでいるが，炉床の赤変硬化は見られない。

炉土層解説

1　褐　色　焼土粒子・ローム粒子中量，焼土小ブロック・炭化粒子少量

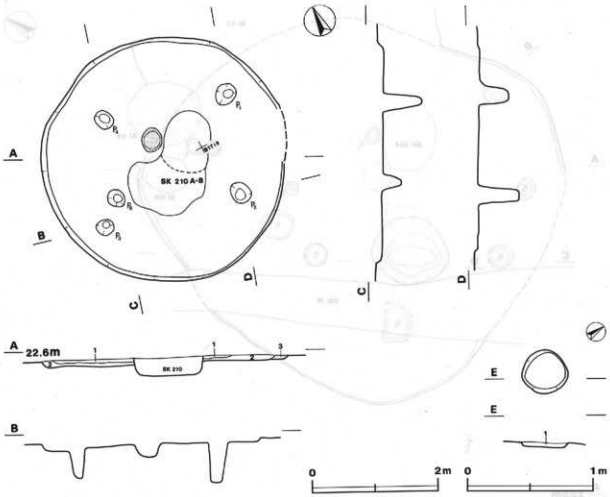
覆土　3層からなる。壁際からの自然堆積である。

土層解説

1　褐　色　ローム粒子少量，炭化粒子極少量

2　明褐色　ローム粒子中量

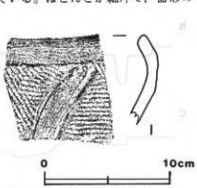
3　明褐色　ローム中ブロックを下層に少量含む



第290図　第55号住居跡実測図

遺物　床面から遺物は出土していないが，覆土中から縄文土器片が出土している。ほとんどが細片で，器形の判別できるものはない。

第291図１は縄文土器片の拓影図である。内彎する口縁部片で，無文の口縁部下に微隆起線を施し，胴部には地文の単節縄文ＬＲを切って，斜方向に曲線的に垂下する微隆起線区画の磨消帯が施されている。中期加曽利ＥⅣ式に比定される土器と思われる。



第291図　第55号住居跡出土遺物
実測・拓影図

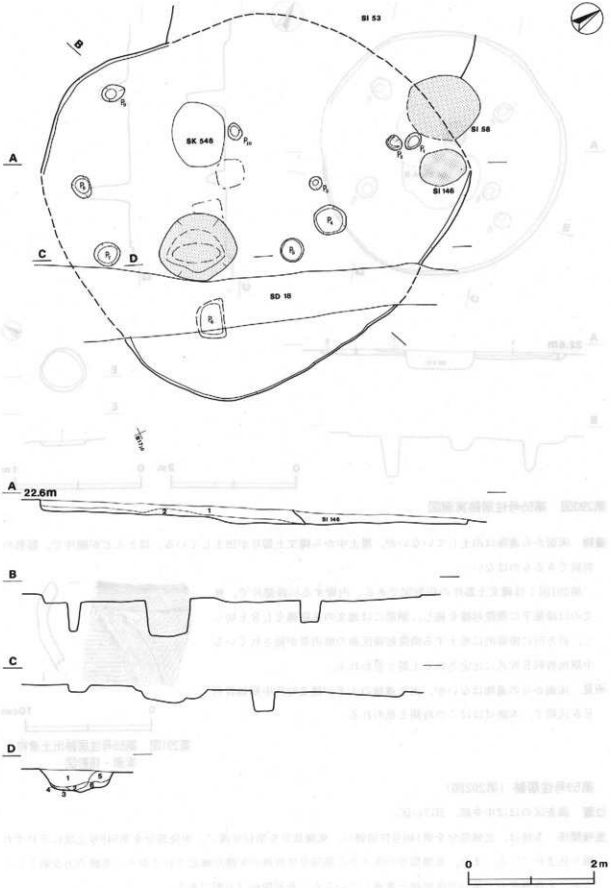
所見　床面からの遺物はないが，出土遺物の大半が縄文時代中期加曽利ＥⅣ式期で，本跡はほぼこの時期と思われる。

第59号住居跡（第292図）

位置　調査区のほぼ中央部，B17i₉区。

重複関係　本跡は，北側部分を第146号住居跡に，東側部分を第18号溝に，中央部分を第548号土坑にそれぞれ掘り込まれている。また，北側部分の床下から第58号住居跡の炉跡が確認されており，本跡の方が新しい。なお，北西側部分で第53号住居跡と重複しているが，新旧関係は不明である。

規模と平面形　北西壁と南壁の立ち上がりが部分的に確認できなかったが，長径6.8m，短径〔6.15〕mの楕円



第292図　第59号住居跡実測図

形と推定される。

長径方向　N－28°－E

壁　残存部分は，壁高３～14cmで，外傾して立ち上がる。

床　平坦である。炉の北西側で部分的に硬化面が見られる。

ピット　10か所。P_4は長径53cm，短径48cmの楕円形で，深さ33cm，P_8は長径40cm，短径30cmの楕円形で，深さ60cm，P_9は長径40cm，短径28cmの楕円形で，深さ50cm。これらは，炉を囲むように位置し，本跡に伴う柱穴と考えられるが，北西側部分にピットが確認できず，しかも配列も不自然であるため，判断は難しい。他は性格不明である。

炉　中央部やや南西側に付設されている。長径124cm，短径107cmの楕円形で，床を34cm皿状に掘りくぼめた地床炉である。炉床は火熱で赤く焼け，硬化している。

炉土層解説
1　暗赤褐色　焼土小ブロック・焼土粒子中量，ローム小ブロック少量，炭化粒子極少量
2　暗赤褐色　焼土粒子多量，焼土小ブロック・ローム粒子少量，焼土中ブロック極少量
3　にぶい赤褐色　焼土粒子多量，ローム粒子中量，焼土中ブロック・焼土小ブロック極少量
4　にぶい赤褐色　焼土粒子・ローム粒子多量，焼土小ブロック・炭化粒子少量
5　暗赤褐色　焼土中ブロック・焼土粒子中量，ローム小ブロック少量
6　にぶい赤褐色　焼土粒子多量，焼土小ブロック・ローム小ブロック中量，炭化粒子少量，焼土中ブロック極少量

覆土　２層からなる。下層に褐色土，上層に暗褐色土の自然堆積である。

土層解説
1　暗褐色　ローム粒子中量，炭化粒子・ローム小ブロック少量，焼土粒子極少量
2　褐　色　ローム小ブロック中量，ローム中ブロック少量，炭化粒子極少量

遺物　覆土中から縄文土器片が出土している。いずれも破片で，器形のわかるものはない。

第293図　第59号住居跡出土遺物実測・拓影図

第293図１～３は縄文土器口縁部片の拓影図である。１は単節縄文ＬＲが地文に施され，磨り消しを伴う隆線に文様が切断されている。２は波状口縁の波頂部に突起を有し，以下地文の縄文が沈線を伴う曲線的な隆線に切られている。３は口唇部が欠損しているが，口縁部無文帯で，胴部には沈線を沿わせた隆線で文様が施され，地文の縄文を切っている。いずれも中期加曽利ＥⅢ式に比定される土器である。

所見　本跡は，北西壁と南壁の立ち上がりが部分的に確認できなかったが，残存している壁から平面形は推定した。時期は，出土遺物から縄文時代中期加曽利ＥⅢ式期と思われる。

第60号住居跡（第294図）

位置　調査区のほぼ中央部，B17h₇区。

重複関係　本跡は，北東側部分の床が第227号土坑に掘り込まれている。

規模と平面形　長径3.05m，短径2.50mで，やや隅丸長方形に近い形をしている。

長径方向　N－85°－W

壁　壁高6～13cmで，外傾して立ち上がる。

床　平坦である。踏み固められた面は見られない。

ピット　3か所。P_1は長径28cm，短径24cmの楕円形で，深さ13cm，P_2は径25cmの円形で，深さ17cm，P_3は径25cmの円形で，深さ71cm。炉を囲むように位置しているが，性格は不明である。

炉　北側に付設されている。長径70cm，短径48cmの卵形で，床を7cm掘りくぼめた地床炉である。炉床のほぼ中央部が特に火熱を受けており，焼土のブロックが見られる。

炉土層解説

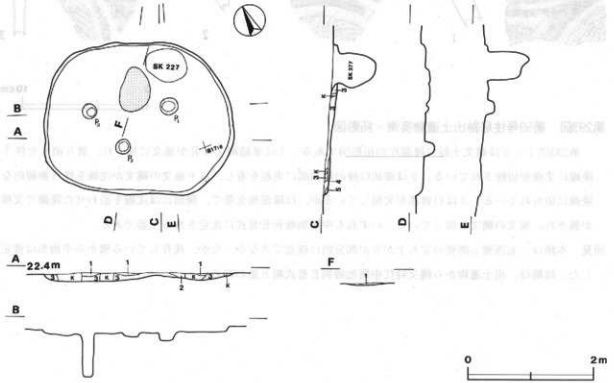
1　赤褐色　焼土中ブロックまばらに中量，炭化粒子少量

覆土　5層からなる。土層3が主体の自然堆積である。

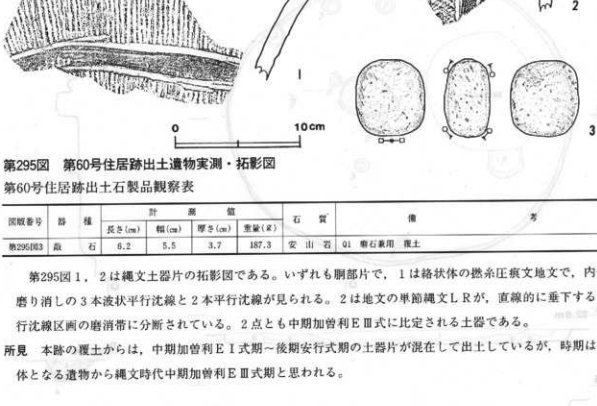
土層解説

1　褐　色　焼土粒子・炭化粒子・ローム小ブロック少量
2　褐　色　炭化物・ローム小ブロック少量
3　暗褐色　焼土中ブロック・炭化物・ローム小ブロック少量
4　褐　色　ローム小ブロック中量，炭化物少量
5　明褐色　ローム小ブロック多量

遺物　床面からの出土はないが，覆土中から遺物が出土している。縄文土器の細片がほとんどで，器形の判別できるものはない。



第294図　第60号住居跡実測図



第295図　第60号住居跡出土遺物実測・拓影図

第60号住居跡出土石製品観察表

図版番号	器	種	計測値 長さ(cm)	計測値 幅(cm)	計測値 厚さ(cm)	計測値 重量(g)	石質	備考
第296図3	敲	石	6.2	5.5	3.7	187.3	安山岩	Q1 磨石兼用　覆土

第295図1，2は縄文土器片の拓影図である。いずれも胴部片で，1は絡状体の撚糸圧痕文地文で，内部磨り消しの3本波状平行沈線と2本平行沈線が見られる。2は地文の単節縄文LRが，直線的に垂下する平行沈線区画の磨消帯に分断されている。2点とも中期加曽利EⅢ式に比定される土器である。

所見　本跡の覆土からは，中期加曽利EⅠ式期～後期安行式期の土器片が混在して出土しているが，時期は主体となる遺物から縄文時代中期加曽利EⅢ式期と思われる。

第61号住居跡（第296図）

位置　調査区のほぼ中央部，B17$_{i6}$区。

重複関係　本跡は，南西側部分で第351号土坑と重複しているが，本跡の方が新しい。

規模と平面形　長径4.90m，短径4.40mの楕円形である。

長径方向　N－28°－E

壁　壁高10～23cmで，外傾して立ち上がる。

床　平坦である。部分的に踏み固められている。

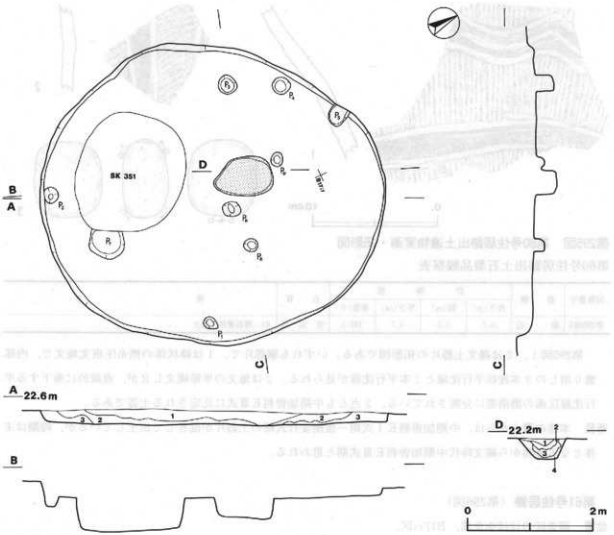
ピット　9か所。P_1は長径26cm，短径20cmの卵形で，深さ10cm，P_2は長径26cm，短径20cmの楕円形で，深さ20cm，P_3は径31cmの円形で，深さ26cm。北側部分に相当するピットが確認できなかったが，配列からこれらのピットは主柱穴と思われる。また，P_2とほぼ同規模のP_4が北西側の柱穴という見方もできるが，位置的に補助柱穴の可能性が強い。他は性格不明である。

炉　中央部やや北寄りに付設されている。長径93cm，短径65cmの楕円形で，床を32cmほど摺鉢状に掘りくぼめた地床炉である。炉床は火熱で赤く焼け，硬化している。特に北側部分が著しい。

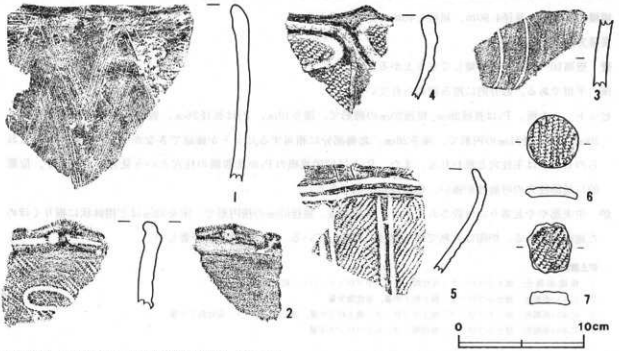
炉土層解説

1　極暗赤褐色　焼土小ブロック・炭化物・ローム中ブロック・ローム粒子少量
2　にぶい赤褐色　焼土小ブロック・焼土粒子中量，炭化物少量
3　にぶい赤褐色　焼土大ブロック・焼土中ブロック・焼土粒子中量，焼土小ブロック・炭化粒子少量
4　にぶい赤褐色　焼土小ブロック・炭化物・ローム小ブロック少量

覆土　3層からなる。壁際からの自然堆積である。



第296図　第61号住居跡実測図



第297図　第61号住居跡出土遺物実測・拓影図

土層解説
1　暗　褐　色　炭化物中量，焼土小ブロック・ローム小ブロック少量
2　褐　色　炭化物・ローム小ブロック少量
3　にぶい褐色　ローム小ブロック少量，炭化物極少量

遺物　全面から遺物が出土しているが，覆土中が多く，大部分が破片である。1の口縁部片は西壁際から，2の口縁部片，3の胴部片は南西部からで，いずれも覆土中層からの出土である。6の土製円板，7の土器片錘も覆土中からの出土である。

第61号住居跡出土土製品観察表

図版番号	器　種	計測値(cm)			重　量	現存率	器形及び文様の特徴		備　考	
		最大長	最大幅	最大厚	(g)	(%)				
第297図6	土製円板	4.3	3.9	0.9	16.6	100	表面に単節縄文RL　裏面に切り込み1か所　土器片錘か		DP2　覆土	
7	土器片錘	3.9	3.5	1.1	15.6	100	表面に単節縄文RL		DP3　覆土	

第297図1～5は縄文土器片の拓影図である。1の口縁部片は，斜行する数本単位の平行沈線が器面に施されている。2は僅かに波状を呈する口縁部片で，波頂部内・外面に刺突文と口縁部に沈線が施され，胴部は地文の縄文を切って曲線的なモチーフが沈線で描かれている。3は胴部片で，曲線的な平行沈線が見られる。1，2は後期堀之内1式，3は称名寺2式の範疇と思われる。4は口縁部に小突起を有する口縁部片で，口縁部文様帯に隆線を沿わせた楕円形区画文，胴部には直線的に垂下する沈線区画の磨消帯が見られ，隙間には単節縄文が施文されている。中期加曽利EⅢ式に比定される。5は口縁部に平行沈線が施され，胴部には地文の単節縄文を切断して，直線的に垂下する内部磨り消しの幅の狭い平行沈線が施文されている。中期加曽利EⅡ～Ⅲ式に比定される土器と思われる。

所見　本跡は，中期加曽利EⅡ式期～後期堀之内式期までの遺物が混在して出土しているが，主体となる遺物から，時期は縄文時代後期堀之内式期と思われる。

第62号住居跡（第298図）

位置　調査区のほぼ中央部，B17h4区。

規模と平面形　覆土が薄く，北東側の壁の立ち上がりが一部不明瞭だが，長径5.91m，短径5.67m，南西側に柄部長1.75m，幅1.50mの出入り口施設を持つ柄鏡形である。

主軸方向　N－47°－E

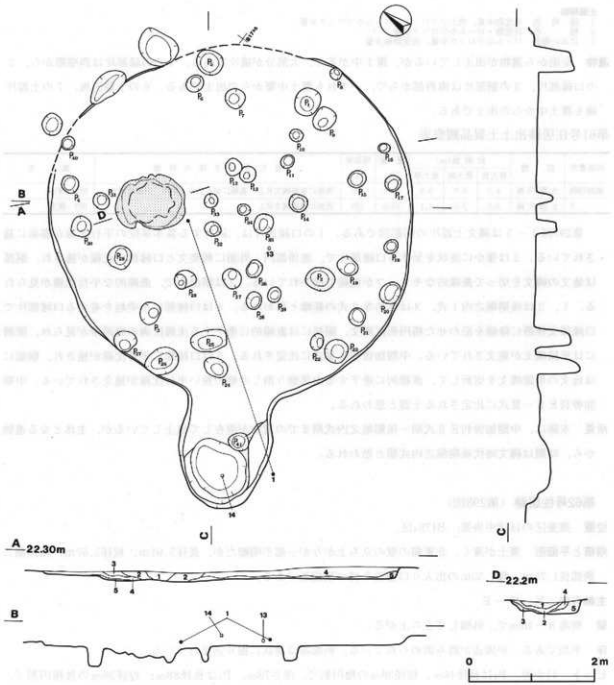
壁　壁高8～16cmで，外傾して立ち上がる。

床　平坦である。炉周辺が踏み固められている。柄部端は皿状に掘り込まれている。

ピット　41か所。P_1は長径46cm，短径39cmの楕円形で，深さ78cm，P_2は長径88cm，短径36cmの長楕円形で，深さ88cm，P_3は長径46cm，短径32cmの楕円形で，深さ38cm，P_4は径26cmの円形で，深さ62cm。P_5の深さがやや浅いが，これらは配列から主柱穴と思われる。P_6，P_{15}，P_{38}，P_{39}は長径26～38cm，短径25～35cmの楕円形で，深さ25～52cm。これらは，主柱穴間に位置し，補助柱穴と思われる。P_{41}は柄部に位置し，長径35cm，短径26cmの卵形で，深さ72cm。他は性格不明である。

炉　中央部北寄りに付設されている。長径140cm，短径106cmの楕円形で，床を20cm掘りくぼめた地床炉である。覆土中層から遺物が出土してあり，炉床は火熱で赤く焼け，硬化した焼土ブロックで凸凹である。

炉土層解説
1　暗　赤　褐　色　焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量
2　暗　赤　褐　色　焼土小ブロック・焼土粒子中量，炭化粒子・ローム粒子極少量
3　暗　赤　褐　色　焼土粒子多量，焼土中ブロック・焼土小ブロック少量，ローム粒子極少量
4　暗　赤　褐　色　焼土小ブロック・ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子極少量
5　にぶい赤褐色　焼土小ブロック・ローム小ブロック少量，焼土粒子・炭化粒子極少量

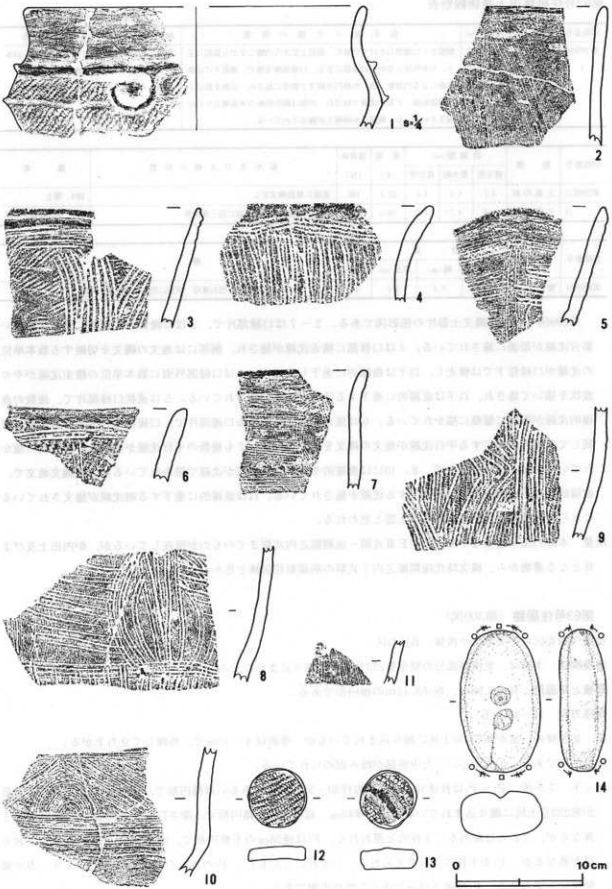


第298図　第62号住居跡実測図

覆土　5層からなる。褐色土主体の自然堆積である。土層1～3は，炉上層の覆土である。

土層解説
1　暗褐色　焼土粒子・炭化粒子中量，ローム粒子少量
2　褐　色　ローム小ブロック中量，焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量
3　褐　色　焼土粒子・炭化粒子・ローム小ブロック・ローム粒子少量
4　褐　色　ローム粒子少量，焼土粒子・ローム小ブロック・ローム粒子極少量
5　褐　色　ローム粒子中量，ローム中ブロック少量，焼土粒子極少量

遺物　本跡の中央部を中心に，覆土中から多量の遺物が出土している。1の鉢形土器は中央部北寄りの覆土中から破片で出土しているが，混入と思われる。2，4～8及び13の破片は多量の遺物が出土している中央部南側覆土中から出土しており，一括投棄と思われる。11の破片は炉の焼土ブロック上から出土している。



第299図　第62号住居跡出土遺物実測・拓影図

第62号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第299図1	鉢形土器 縄文土器	A(35.8) B(12.9)	胴部から口縁部にかけての破片。胴部上位から内彎しながら頸部に至り，やや外反しながら口縁部に至る。口縁部無文帯で，頸部下には隆起線による内部磨り消しの楕円区画文が要所に施され，区画文間は上部が隆起線，下部が沈線で結ばれ，内部は縦位回転の単節縄文RLが施文されている。胴部にも同縄文が施文されている。	砂粒・長石・石英 にぶい橙色 普通	P2　15% 中央部覆土下層 (加曽利EⅢ)

図版番号	器種	計測値(cm) 最大長	最大幅	最大厚	重量(g)	現存率(%)	器形及び文様の特徴	備考
第299図12	土製円板	4.7	4.6	1.1	29.1	100	表面に単節縄文RL	DP4　覆土
13	土器片錘	4.6	4.5	1.7	39.5	100	表面に単節縄文と隆起線に沿う磨消帯	DP5　中央部覆土下層

図版番号	器種	計測値 長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	備考
第299図14	磨石	11.2	6.4	3.6	446.0	安山岩	Q30　磨・凹石兼用　表面に凹み　柄部覆土中層

第299図2～11は縄文土器片の拓影図である。2～7は口縁部片で，2は口縁部から胴部に垂下する細い集合沈線が器面に施されている。3は口唇部に横走沈線が施され，胴部には地文の縄文を切断する数本単位の沈線が口縁部下では横走し，以下は曲線的に垂下している。4は口縁部外面に数本単位の横走沈線がやや波状を描いて施され，以下は直線的に垂下する沈線が粗く充填されている。5は波状口縁部片で，複数の直線的沈線が胴部に縦横に描かれている。6は僅かに波状を呈する口縁部片で，口縁部下の横走平行沈線に接続して直線的に垂下する平行沈線が地文の縄文を切っている。7も複数の平行沈線が曲線及び直線的に描かれている。8～11は胴部片で，8，10には曲線的モチーフや直線が沈線で描かれている。9は縄文地文で，直線的あるいは曲線を描いて垂下する沈線が施されている。11は直線的に垂下する細沈線が施文されている。これらは後期堀之内1式の範疇の土器と思われる。

所見　本跡の出土遺物は中期加曽利EⅢ式期～後期堀之内式期までのものが混在しているが，炉内出土及び主体となる遺物から，縄文時代後期堀之内1式期の柄鏡形住居跡と思われる。

第63号住居跡（第300図）

位置　調査区の中央部やや西側，B17d₂区。

重複関係　本跡は，北西側部分の壁が第233号土坑に掘り込まれている。

規模と平面形　長径3.98m，短径3.12mの楕円形である。

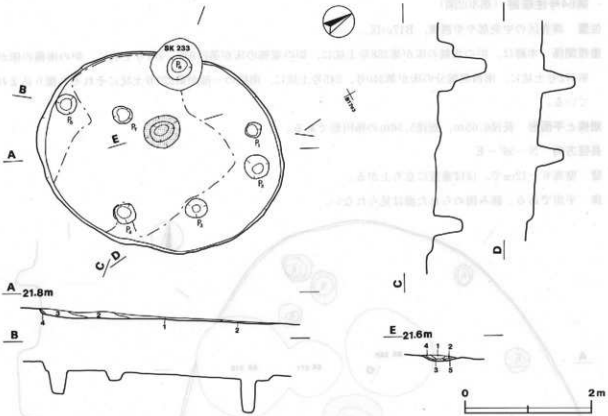
長径方向　N－46°－E

壁　北西壁の一部が第233号土坑に掘り込まれているが，壁高は4～10cmで，外傾して立ち上がる。

床　平坦である。炉を中心にした中央部が踏み固められている。

ピット　7か所。P_2～P_5は長径34～37cm，短径30～36cmの円形あるいは楕円形で，深さ39～51cm，P_6は上部が第233号土坑に掘り込まれているが，長径40cm，短径36cmの楕円形で，深さ77cm。P_6の深さが他と著しく異なるが，これらは配列から主柱穴と思われる。P_1は径26cmの不整円形で，深さ54cm。P_2に近接しており，径が異なるが，P_1が主柱穴とも考えられる。いずれにしてもP_1，P_2のどちらかが主柱穴で，もう一方が補助柱穴と思われる。P_7は深さ18cmと浅く，性格不明である。

炉　中央部やや西寄りに付設されている。長径60cm，短径50cmの楕円形で，床を9cm皿状に掘りくぼめた地床



第300図　第63号住居跡実測図

炉である。覆土に焼土を含んでいるが，炉床はそれほど焼けていない。

炉土層解説

1　暗赤褐色　焼土中ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子・ローム粒子少量，炭化粒子極少量
2　にぶい赤褐色　焼土粒子・ローム粒子少量，焼土大ブロック極少量
3　赤　褐　色　焼土粒子中量，焼土小ブロック・ローム粒子少量
4　にぶい赤褐色　焼土小ブロック・焼土粒子・ローム粒子少量，炭化粒子極少量
5　にぶい赤褐色　焼土粒子・ローム粒子少量，ローム小ブロック極少量

覆土　4層からなる。壁際からの自然堆積である。

土層解説

1　褐　　色　焼土中ブロック中量，炭化物・ローム粒子少量
2　にぶい褐色　焼土小ブロック・炭化物・ローム小ブロック・ローム粒子少量
3　にぶい褐色　ローム粒子中量，ローム小ブロック極少量
4　明　褐　色　ローム粒子多量

遺物　床面及び覆土中から遺物が少量出土しており，いずれも細片である。1の胴部片は炉の覆土直上からの出土である。

第301図1は縄文土器片の拓影図である。胴部片で，地文に単節縄文ＬＲが縦位回転で施文され，沈線区画の幅広の磨消帯が文様を分断している。中期加曽利ＥⅢ式に比定される土器である。

所見　本跡は，中期加曽利ＥⅠ～Ⅲ式期にかけての遺物が出土しているが，時期は主体となる遺物から縄文時代中期加曽利ＥⅢ式期と思われる。

第301図　第63号住居跡出土遺物実測・拓影図

第64号住居跡（第302図）

位置　調査区の中央部やや西側，B17e3区。

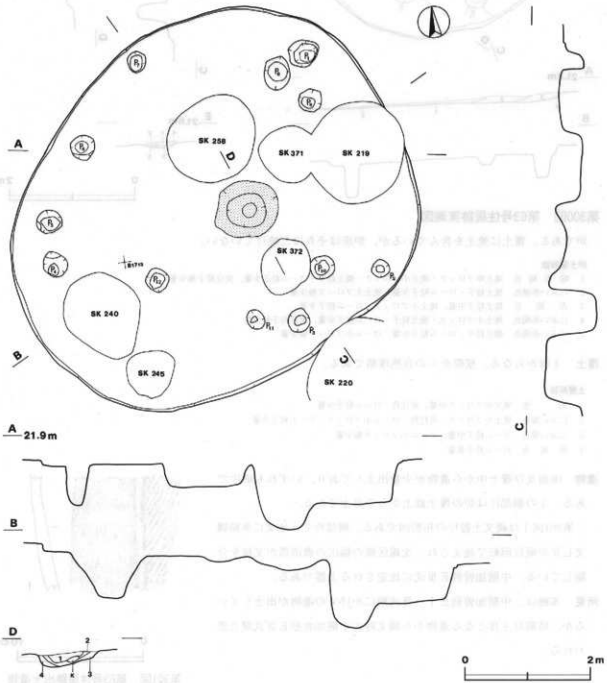
重複関係　本跡は，炉の北側の床が第258号土坑に，炉の東側の床が第219号，371号土坑に，炉の南側の床が第372号土坑に，南西側部分の床が第240号，245号土坑に，南壁の一部が第220号土坑にそれぞれ掘り込まれている。

規模と平面形　長径6.65m，短径5.56mの楕円形である。

長径方向　N－59°－E

壁　壁高6－12cmで，ほぼ垂直に立ち上がる。

床　平坦である。踏み固められた面は見られない。



第302図　第64号住居跡実測図

ピット　12か所。P_1～P_7は長径30～50㎝，短径29～45㎝の楕円形あるいは円形で，深さ24～67㎝。規模にばらつきが見られ，土坑に掘り込まれて確認できない部分もあるが，これらは壁沿いに位置し，主柱穴と思われる。P_4とP_5は近接しており，P_5は補助柱穴の可能性もある。他は性格不明である。

炉　ほぼ中央に付設されている。長径106㎝，短径80㎝の楕円形で，床を19㎝掘りくぼめた地床炉である。炉床は火熱で赤く焼け，硬化している。炉床及び炉土層２～４から遺物が出土している。

炉土層解説

1　にぶい赤褐色　焼土小ブロック多量，焼土粒子中量，炭化粒子・ローム粒子極少量
2　暗赤褐色　焼土小ブロック・焼土粒子少量，ローム小ブロック極少量
3　暗赤褐色　焼土小ブロック中量，焼土粒子少量，炭化粒子・ローム粒子極少量
4　暗赤褐色　焼土小ブロック・焼土粒子・ローム小ブロック・ローム粒子少量，炭化粒子極少量

遺物　炉内及び南西部覆土中から遺物が少量出土している。１と２の口縁部片は炉内西部覆土中から，３の土製円板は南西部覆土中から出土している。

第303図　第64号住居跡出土遺物実測・拓影図

第64号住居跡出土土製品観察表

図版番号	器種	計測値(cm) 最大長	最大幅	最大厚	重量(g)	現存率(%)	器形及び文様の特徴	備考
第303図3	土製円板	3.3	3.2	1.0	12.7	100	表面に単節縄文RL	D16　南西部覆土中層

第303図１，２は縄文土器片の拓影図である。１，２とも小波状を呈する口縁部片で，波頂部に指頭により作出した微隆起線による双耳状の小突起を有し，胴部にも地文の縄文を切って微隆起線区画の磨消帯が口縁部から胴部に派生している。中期加曽利ＥⅣ式に比定される土器である。

所見　本跡の時期は，出土遺物から縄文時代中期加曽利ＥⅣ式期である。

第65号住居跡（第304図）

位置　調査区のほぼ中央部，B17i5区。

規模と平面形　長径5.50m，短径4.20mで，南東壁が曲線的であるが，南西壁，北西壁及び北東壁は直線的で，隅丸長方形に近い形である。

長径方向　N－39°－W

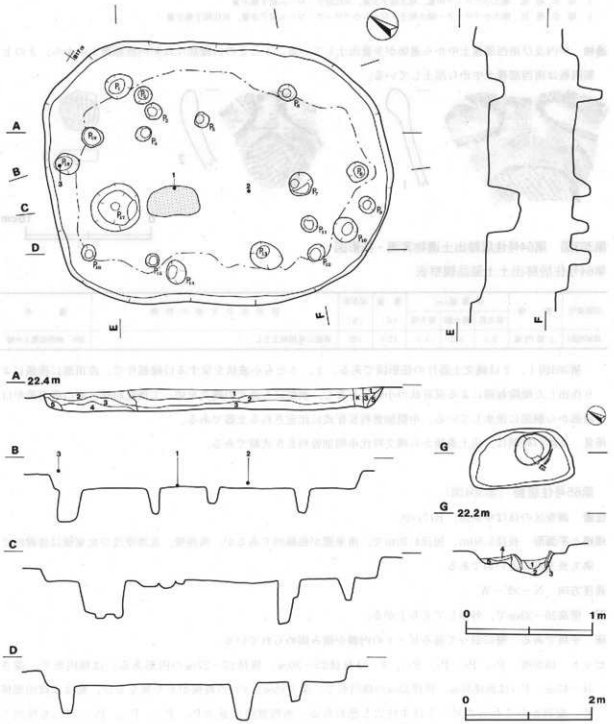
壁　壁高20～33㎝で，外傾して立ち上がる。

床　平坦である。壁に沿って巡るピットの内側が踏み固められている。

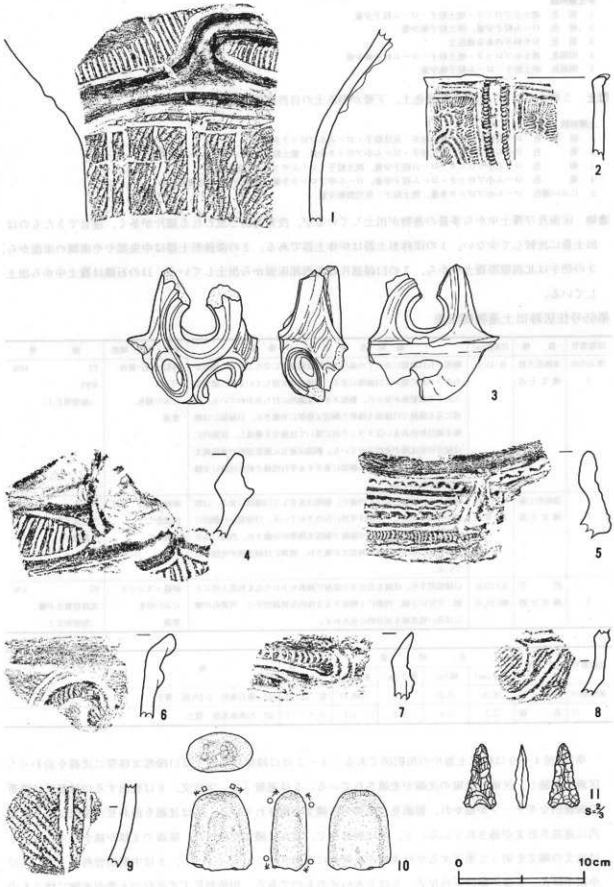
ピット　19か所。P_1，P_6，P_8，P_{12}，P_{15}は長径25～30㎝，短径22～27㎝の円形あるいは楕円形で，深さ31～42㎝，P_{18}は長径37㎝，短径33㎝の楕円形で，深さ52㎝。P_{18}の規模がやや異なるが，他はほぼ同規模で，配列からこれらのピットは主柱穴と思われる。南西壁際に並ぶP_9，P_{10}，P_{13}，P_{14}，P_{16}も柱穴という可能性もあるが，北東壁際に柱穴が確認できず，また規模もばらばらであることから疑問が残る。炉の

北西にあるP17は，長径80cm，短径77cmの円形で，深さ50cm，底面中央部に深さ5cmほどの凹みを有する大形のピットだが，本跡に伴うものかどうかは不明である。他は性格不明である。

炉　中央部やや北西寄りに付設されている。掘り方は長径79cm，短径46cmの楕円形で，深さ21cm，南東側に深鉢形土器を埋設した土器埋設炉で，土器の埋設部分の掘り方は41cmである。埋設土器の北側で，火熱を受けた焼土ブロックを一部確認したが，土器内及び掘り方の覆土に含まれる焼土は少量である。



第304図　第65号住居跡実測図



第305図　第65号住居跡出土遺物実測・拓影図

炉土層解説
1　褐　色　焼土小ブロック・焼土粒子・ローム粒子少量
2　褐　色　ローム粒子少量，焼土粒子極少量
3　褐　色　やや粘りのある褐色土
4　明褐色　焼土小ブロック・焼土粒子・ローム粒子極少量
5　明褐色　焼土粒子・ローム粒子極少量

覆土　5層からなる。上層が暗褐色土，下層が褐色土の自然堆積である。

土層解説
1　暗　褐　色　ローム粒子中量，焼土粒子・炭化粒子・ローム小ブロック少量
2　褐　　色　ローム粒子多量，炭化粒子・ローム小ブロック少量，焼土粒子・ローム中ブロック極少量
3　褐　　色　ローム小ブロック・ローム粒子少量，焼土粒子・ローム中ブロック極少量
4　褐　　色　ローム小ブロック・ローム粒子中量，ローム中ブロック少量，焼土粒子・炭化物極少量
5　にぶい褐色　ローム小ブロック多量，焼土粒子・炭化物極少量

遺物　床面及び覆土中から多量の遺物が出土しているが，投棄遺物と思われる細片が多く，接合できたものは出土量に比較して少ない。1の深鉢形土器は炉体土器である。2の深鉢形土器は中央部やや南側の床面から，3の把手は北西壁際覆土中から，7の口縁部片は北西部床面から出土している。11の石鏃は覆土中から出土している。

第65号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第305図 1	深鉢形土器 縄文土器	B(15.4)	胴部から口縁部にかけての破片。胴部は直線的に立ち上がり，頸部からラッパ状に開いて口縁部に至る。口縁部は欠損しているが，磨り切りによる調整痕が見られ，頸部下半も意識的に打ち欠かれている。頸部に沿る隆線で胴部文様帯と頸部文様帯に分離され，口縁部には隆線を楕円形状あるいはクランク状に描いて区画文を構成し，区画内には縦位の撚沈線が充填されている。胴部は地文に縦位回転の単節縄文RLが施され，頸部から胴帯に垂下する平行沈線と蛇行沈線に文様が分断されている。	砂粒・長石・雲母・パミス にぶい褐色 普通	P3　40% 炉内 (加曽利EⅠ)
2	深鉢形土器 縄文土器	A(14.6) B(6.8)	胴部から口縁部にかけての破片。胴部は直立して口縁部に至る。口唇部が外側に突出し，上部は平坦に作出されている。口縁部から胴部に垂下する刺みを加えた平行隆線で胴部文様帯が分離され，内部には半截竹管による平行沈線や刺突文が施され，隆間には縦沈線が充填されている。	砂粒・雲母・長石 灰褐色 普通	P4　10% 中央部下層 (勝坂E)
3	把手 縄文土器	長さ(10.8) 幅(10.3)	口縁部把手片。沈線を沿わせた隆線で綾取りされた孔を外面上位に1個，下位に2個，内面に1個有する立体的な装飾把手で，外面孔の横には浅い縦沈線も部分的に見られる。	砂粒・スコリア にぶい橙色 普通	P5　5% 北西部覆土中層 (加曽利EⅠ)

図版番号	器種	計測値				石質	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
第305図10	磨石	(6.3)	(5.2)	2.8	(148.1)	安山岩	Q2　敲石兼用　1/2欠損　覆土
11	石鏃	2.5	1.4	0.6	1.2	チャート	Q3　凹基無茎鏃　覆土

第305図4～9は縄文土器片の拓影図である。4～7は口縁部片で，4は口縁部文様帯に沈線を沿わせた区画文を施し，区画内は縦の沈線が充填されている。5は連続「コ」字状文，6は突出する口縁部下に隆帯で曲線的なモチーフが描かれ，器面及び隆帯上に縄文が施されている。7は沈線を沿わせた隆線による区画内に連続爪形文が施されている。8，9は胴部片で，地文に縄文が施され，隆線で文様が描かれている。9は地文の縄文を切って垂下する平行沈線が直線的に施文されている。4，7，9は中期加曽利EⅠ式，5は中期中峠式，6は中期阿玉台Ⅳ式，8は大木8a式のものである。加曽利EⅠ式並行の土器が本跡に伴うものである。

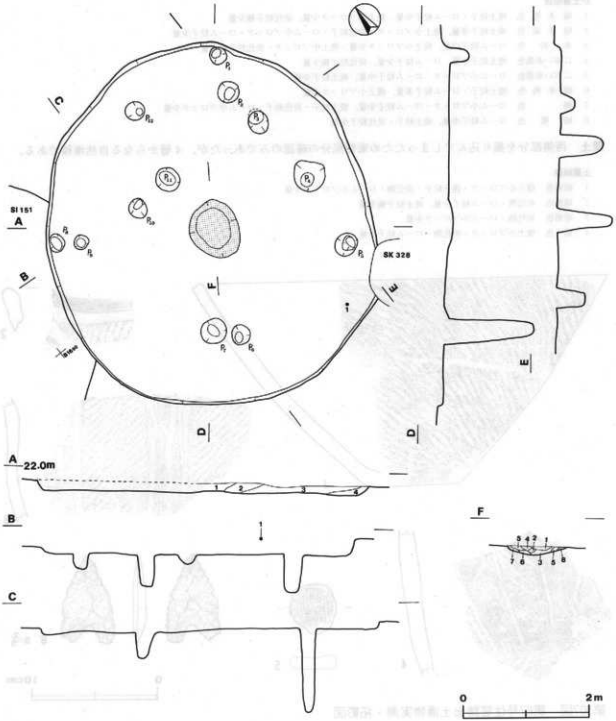
所見　本跡の覆土中から中期阿玉台Ⅳ式期～加曽利ＥⅠ式期にかけての遺物が出土しているが，炉体土器及び主体となる遺物から，時期は縄文時代中期加曽利ＥⅠ式期である。

第67号住居跡（第306図）

位置　調査区の中央部やや西側，B16g₀区。

重複関係　本跡は，南東側部分が第328号土坑に掘り込まれている。

規模と平面形　長径5.70m，短径5.33mの惰円形である。



第306図　第67号住居跡実測図

壁　壁高10～25cmで，外傾して立ち上がる。

床　平坦である。踏み固められた面は見られない。

ピット　12か所。P_{12}は径30cmの円形で，深さ125cm，P_3は長径38cm，短径32cmの楕円形で，深さ62cm，P_5は長径38cm，短径34cmの楕円形で，深さ45cm，P_7は径42cmの円形で，深さ148cm，P_9は径26cmの円形で，深さ26cm。これらは規模にばらつきは見られるが，配列から主柱穴と思われる。他は性格不明である。

炉　ほぼ中央に付設されている。長径91cm，短径80cmの楕円形で，床を14cm皿状に掘りくぼめた地床炉である。炉床は火熱で赤く焼け，硬化している。

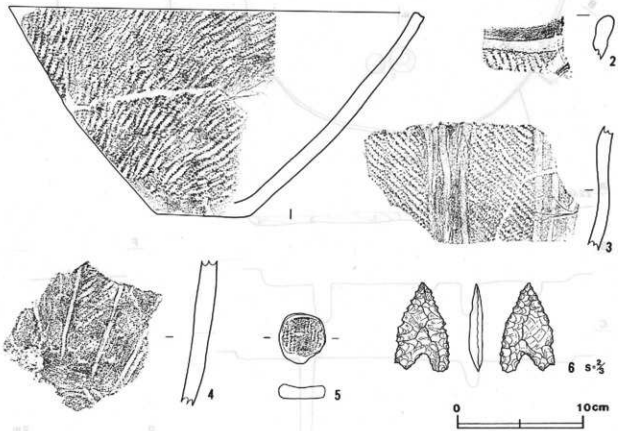
炉土層解説

1　暗赤褐色　焼土粒子・ローム粒子中量，焼土小ブロック少量，炭化粒子極少量
2　暗赤褐色　焼土粒子多量，焼土小ブロック・炭化粒子・ローム小ブロック・ローム粒子少量
3　赤　褐　色　ローム粒子中量，焼土小ブロック少量，焼土中ブロック・炭化粒子極少量
4　にぶい赤褐色　焼土粒子中量，ローム粒子少量，炭化粒子極少量
5　にぶい赤褐色　ローム小ブロック・ローム粒子中量，焼土粒子少量
6　暗赤褐色　焼土粒子・ローム粒子多量，焼土小ブロック少量
7　褐　　色　ローム小ブロック・ローム粒子中量，焼土粒子・炭化粒子・ローム中ブロック少量
8　暗　褐　色　ローム粒子中量，焼土粒子・炭化粒子少量

覆土　西側部分を掘り込んでしまったため東側部分の確認のみであったが，4層からなる自然堆積である。

土層解説

1　暗褐色　焼土小ブロック・焼土粒子・炭化物・ローム小ブロック少量
2　暗褐色　炭化物・ローム粒子少量，焼土粒子極少量
3　暗褐色　炭化物・ローム小ブロック少量
4　褐　色　焼土小ブロック・炭化物・ローム粒子少量



第307図　第67号住居跡出土遺物実測・拓影図

遺物　主として北側及び南壁寄りの覆土中から遺物が出土している。1の浅鉢形土器が南壁際覆土中から正位の状態で，また2の口縁部片も同様の位置から出土している。4の胴部片は北側覆土下層から，5の土製円板，6の石鏃も覆土中から出土している。

第67号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第307図1	浅鉢形土器 縄文土器	A 32.9 B 16.9 C 7.4	深鉢形土器の胴部下位を再利用した浅鉢形土器。平底で，胴部は僅かに内彎しながら外縁して立ち上がる。口縁部上端には磨り切りの調整痕が見られる。器面には単節縄文RLが縦位回転で施文され，底部から3cmほどは磨り消されている。	砂粒 灰褐色 普通	P6　45% 南壁際覆土上層 (加曽利EⅢ)

図版番号	器種	計測値(cm)			重量(g)	現存率(%)	器形及び文様の特徴	備考
		最大長	最大幅	最大厚				
第307図5	土製円板	(4.0)	3.7	1.3	(18.5)	90	表面部分的に単節縄文RL　一部欠損	DP7　覆土

図版番号	器種	計測値				石質	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
第307図6	石鏃	3.6	2.1	0.5	(3.2)	黒曜石	Q4　凹基無茎鏃　側面錐状　一部欠損　覆土

第307図2～4は縄文土器片の拓影図である。2は波状を呈する口縁部片で，口縁部無文帯と胴部縄文帯が沈線で分離されている。3は胴部片で，地文に単節縄文LRが縦位回転で施文された後，太く浅い沈線区画の磨消帯が直線的に垂下されている。4も胴下部の破片で，地文の縄文を切る沈線区画の磨消帯が垂下し，底部近くは磨り消しの無文となっている。これらは中期加曽利EⅢ式に比定される土器である。

所見　本跡の時期は，出土遺物から縄文時代中期加曽利EⅢ式期と思われる。

第68号住居跡（第308図）

位置　調査区の中央部やや西側，B17g2区。

重複関係　本跡は南東側部分で第69号住居跡と重複しているが，本跡の方が古い。

規模と平面形　長径5.25m，短径4.20mの楕円形である。

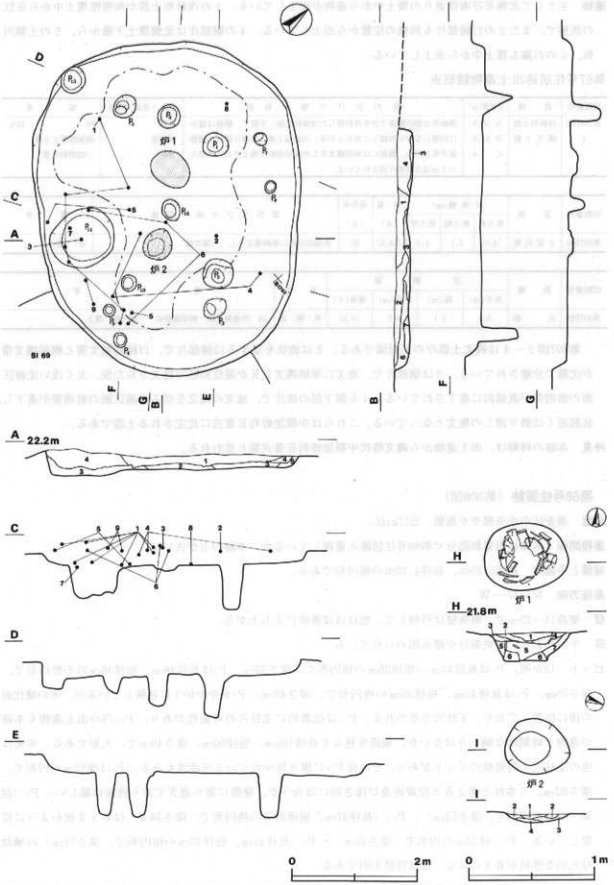
長径方向　N－47°－W

壁　壁高15～25cmで，南東壁は外傾して，他はほぼ垂直に立ち上がる。

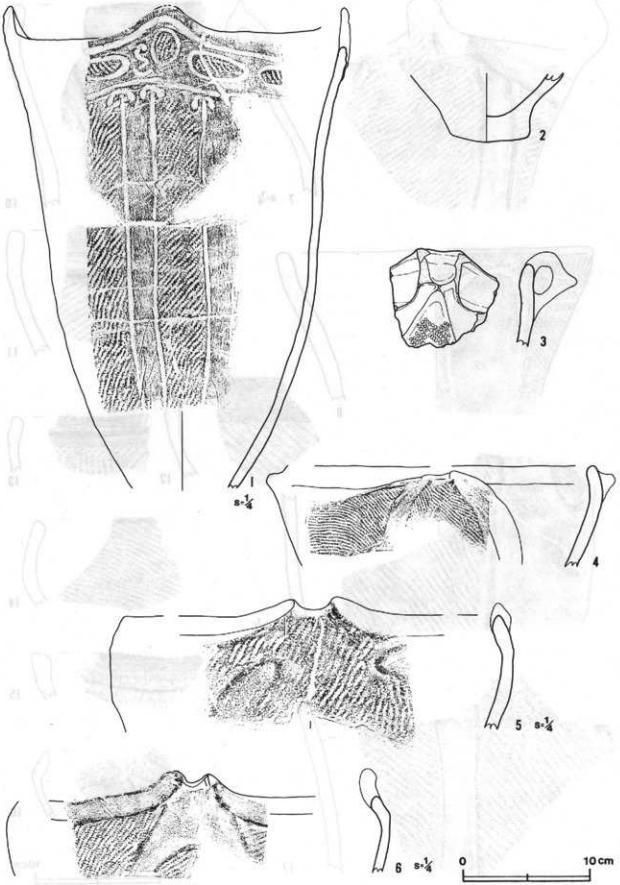
床　平坦である。中央部分が踏み固められている。

ピット　13か所。P_1は長径43cm，短径38cmの楕円形で，深さ52cm，P_2は長径48cm，短径46cmの不整円形で，深さ75cm，P_5は長径42cm，短径35cmの楕円形で，深さ49cm。P_1がやや炉1に近接しているが，床の硬化面の縁に位置しており，主柱穴と思われる。P_{11}は位置的に主柱穴の可能性があり，P_{11}内の出土遺物も本跡の遺物と時期的な隔たりはないが，規模を見ると長径105cm，短径90cm，深さ49cmで，大形である。本来は他の主柱穴と同規模のピットがあり，その後P_{11}に掘り抜かれている可能性もある。P_4は径22cmの円形で，深さ62cm，5本柱と考えると位置的及び深さ的には合うが，壁際に寄り過ぎており判断は難しい。P_6（径36～38cmの円形で，深さ52cm），P_{12}（長径37cm，短径31cmの楕円形で，深さ24cm）は炉1を挟むように位置している。P_7（径22cmの円形で，深さ40cm），P_3（長径42cm，短径32cmの楕円形で，深さ71cm）は補助柱穴的な性格が考えられる。他は性格不明である。

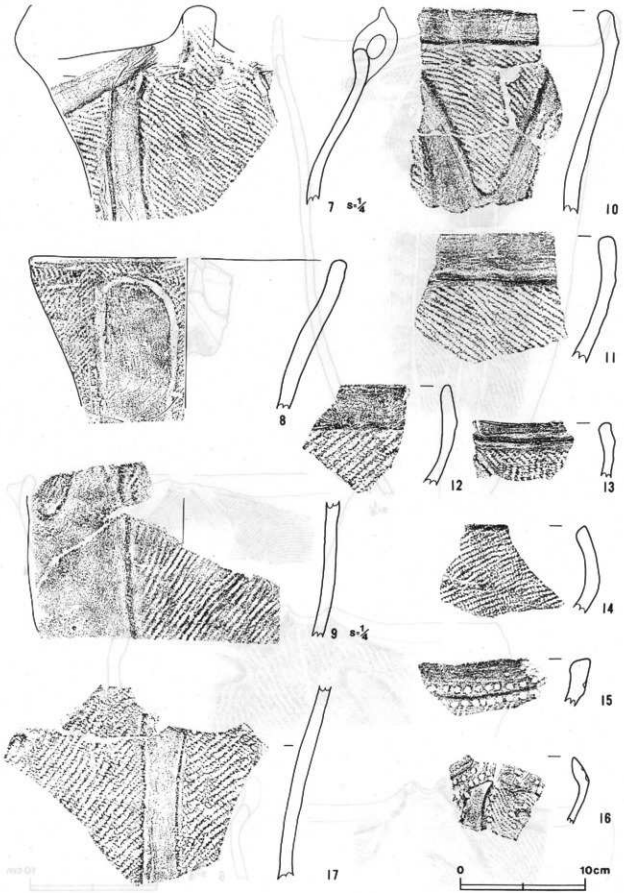
炉　2か所。炉1は中央部北西側に付設され，長径67cm，短径53cmの楕円形で，土器片で炉を構築した土器片囲い炉である。土層6が炉床と思われ，火熱を受けた焼土がブロック状に硬化している。炉2は中央部南西



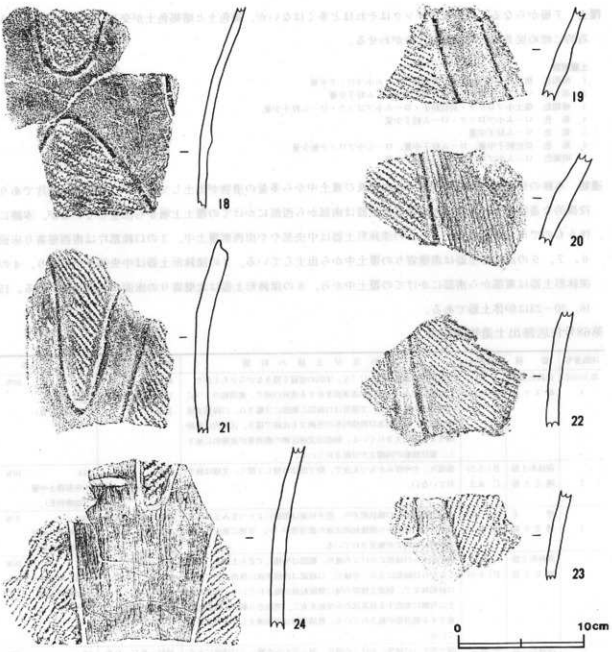
第308図　第68号住居跡実測図



第309図　第68号住居跡出土遺物実測・拓影図(1)



第310図　第68号住居跡出土遺物実測・拓影図(2)



第311図　第68号住居跡出土遺物実測・拓影図(3)

側に付設されており，長径48㎝，短径43㎝の楕円形で，床を８㎝掘りくぼめた地床炉である。炉床は火熱で赤く焼け，硬化している。

炉１土層解説

1　褐　　色　焼土小ブロック・焼土粒子・ローム粒子少量
2　赤　褐　色　焼土小ブロック・焼土粒子中量，ローム粒子少量，焼土中ブロック・ローム中ブロック極少量
3　にぶい赤褐色　焼土粒子・ローム粒子・ローム小ブロック極少量
4　にぶい褐色　ローム粒子少量，ローム中ブロック極少量
5　にぶい赤褐色　焼土粒子・炭化粒子少量
6　橙　　色　焼土大ブロック多量
7　赤　褐　色　焼土粒子・炭化物・ローム粒子少量

炉２土層解説

1　にぶい褐色　焼土粒子・ローム粒子中量，炭化粒子少量，焼土小ブロック極少量
2　にぶい褐色　焼土小ブロック・焼土粒子・ローム中ブロック少量
3　にぶい褐色　焼土小ブロック・焼土粒子・ローム小ブロック中量，炭化粒子極少量
4　赤　褐　色　焼土小ブロック・焼土粒子中量，焼土中ブロック・ローム小ブロック少量

覆土　7層からなる。ロームブロックはそれほど多くはないが，褐色土と暗褐色土が交互に堆積しており，人為的に埋め戻された可能性をうかがわせる。

土層解説

1　暗褐色　焼土小ブロック・炭化物中量，ローム小ブロック少量
2　褐　色　ローム小ブロック中量，炭化物・ローム粒子少量
3　暗褐色　焼土小ブロック・炭化粒子・ローム小ブロック・ローム粒子少量
4　褐　色　ローム小ブロック・ローム粒子少量
5　褐　色　ローム粒子中量
6　褐　色　炭化粒子中量，ローム粒子少量，ローム小ブロック極少量
7　明褐色　ローム小ブロック・ローム粒子中量

遺物　本跡の炉1内と南部を主とする床面及び覆土中から多量の遺物が出土しているが，いずれも破片であり，投機的な遺物と思われる。1の深鉢形土器は南部から西部にかけての覆土上層から出土しているが，本跡に伴うものではないと思われる。5の深鉢形土器は中央部やや南西側覆土中，3の口縁部片は南西壁寄り床面，6，7，9の深鉢形土器は南壁寄りの覆土中から出土している。2の深鉢形土器は中央部やや東寄り，4の深鉢形土器は東部から南部にかけての覆土中から，8の深鉢形土器は北壁寄りの床面から出土している。15，16，20～23は炉体土器である。

第68号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第309図 1	深鉢形土器 縄文土器	A 36.4 B (50.2)	底部欠損。胴部は僅かに「S」字状の曲線を描きながら立ち上がり，口縁部に至る。4単位の波頂部を有する波状口縁で，波頂部の1つに未貫通孔が見られる。文様帯は口縁部と胴部に分離され，口縁部文様帯は円形，楕円形及び長楕円形の区画文を流線で描き，区画内は単節縄文RLが施文されている。胴部は流線区画の磨消帯が直線的に並び，縦位回転の閉縄文が分割されている。	砂粒 にぶい橙色 普通	P7　60% 覆土上層 (加曽利E Ⅲ)
2	深鉢形土器 縄文土器	B (5.5) C　6.2	底部片。やや厚みをもつ丸底で，胴下部は外傾して開く。文様は施されていない。	砂粒 にぶい黄橙色 普通	P14　10% 中央部覆土中層 (加曽利E)
3	把　手 縄文土器	長さ(7.9) 幅 (8.5)	波状口縁波頂部の楕状把手片。把手外面は指頭によりつまみ上げられ，突出する。把手から微隆起線区画の磨消帯が「八」字状に派生し，胴消帯間には縄文が施文されている。	砂粒・長石・石英 暗赤褐色 普通	P15　5% 南西壁寄り床面 (加曽利E Ⅳ)
4	深鉢形土器 縄文土器	A (24.4) B (8.0)	胴上部から口縁部にかけての破片。胴部は外傾して立ち上がり，内湾しながら口縁部に至る。平縁で，口縁部は内面ミガキに作出されている。口縁部無文で，胴部文様帯の境に微隆起線が施されている。微隆起線上に外側に突出する双耳状の小突起を有し，突起から胴部に曲線的に垂下する磨消帯が施されている。磨消帯間は単節縄文LRが充填されている。	砂粒・長石 黒褐色 普通	P10　30% 東部～南部覆土下層 (加曽利E Ⅳ)
5	深鉢形土器 縄文土器	A (39.6) B (12.0)	胴上部から口縁部にかけての破片。胴上部から内湾して口縁部に至る。波状口縁で，口縁部を巡る微隆起線区画の磨消帯が波頂部で鋭り上がり，及耳状の小突起を有する。胴部は単節縄文RLが縦位回転で施文され，波頂部から派生する微隆起線区画の磨消帯が，曲線的に胴部に垂下されている。	砂粒・長石・石英 灰色 普通	P8　5% 中央部覆土下層 (加曽利E Ⅳ)
6	深鉢形土器 縄文土器	A (37.4) B (10.9)	胴上部から口縁部にかけての破片。2より僅かに小部で，波頂部下の磨消帯の施文方法が異なっているが，器形及び文様構成は2と類似している。	砂粒・長石 にぶい橙色 普通	P9　5% 南壁寄り覆土中層 (加曽利E Ⅳ)
第310図 7	深鉢形土器 縄文土器	A (36.8) B (20.0)	胴部から口縁部にかけての破片。胴部は外傾しながら立ち上がり，僅かに内湾して口縁部に至る。波状口縁で，波頂部に横状把手を有する。口縁部磨り消し，胴部にも把手から派生する微隆起線区画の磨消帯が施され，胴間は単節縄文LRが施文されている。	砂粒・長石・スコリア にぶい黄橙色 普通	P11　10% 南壁寄り覆土中層 (加曽利E Ⅳ)
8	深鉢形土器 縄文土器	A (25.3) B (11.7)	胴部から口縁部にかけての破片。胴部は外傾しながら立ち上がり，口縁部に至る。胴部の縄文施文を「ハ」状の区画文が切り，区画内は磨り消されている。	砂粒・スコリア・雲母 浅黄橙色　普通	P12　5% 北壁寄り覆土中層 (加曽利E Ⅲ)
9	深鉢形土器 縄文土器	B (14.3)	胴部片。胴部は僅かに内湾しながら直立気味に立ち上がる。単節縄文LRが縦位回転で施文され，微隆起線区画の磨消帯に文様が分断されている。	砂粒・長石・雲母・礫 浅黄橙色　普通	P13　5% 南壁寄り覆土中層 (加曽利E Ⅳ)

第310・311図10～24は縄文土器片の拓影図である。10～16は口縁部片で，17～24は胴部片である。10～13は口縁部無文帯と胴部縄文帯を微隆起線で区画し，10，13は胴部に微隆起線区画の磨消帯が見られる。14は口縁部まで横位回転の単節縄文ＬＲが施文されている。15は口縁部の微隆起線を挟むように連続刺突文，16にも口縁部と胴部に連続刺突文が見られる。17～23は胴部片で，地文の縄文が微隆起線区画の磨消帯に切られている。これらは中期加曽利ＥⅣ式に比定される土器である。24は縄文施文後沈線区画の磨消帯が施され，中期加曽利ＥⅢ式の範疇と思われる。

所見　本跡の時期は，中期加曽利ＥⅢ式期の遺物も少量出土しているが，炉体土器及び主体となる遺物から縄文時代中期加曽利ＥⅣ式期である。

第69号住居跡（第312図）

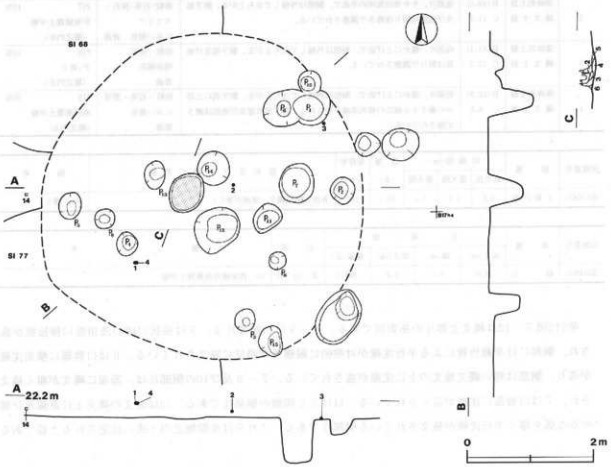
位置　調査区の中央部やや西側，B17g₃区。

重複関係　本跡は，北西側部分が第68号住居跡を掘り込んでいる。

規模と平面形　遺構の確認プランが明瞭に把握できず，壁の立ち上がりは確認できなかったが，長径〔5.45〕m，短径〔5.10〕mの円形と推定される。

床　平坦である。踏み固められた面は見られない。

ピット　推定線内に15か所，推定線外で東側に３か所。P_1は径57cmの不整円形で，深さ24cm，P_2は径40～43cmの円形で，深さ28cm，P_3は径34cmの円形で，深さ37cm，P_4は径36cmの円形で，深さ56cm，P_5は長径45cm，短径34cmの楕円形で，深さ42cm。これらは，規模にばらつきは見られるが，推定線沿いに炉を囲むよう



第312図　第69号住居跡実測図

に位置し，主柱穴と思われるが，P_1に近接したP_6（長径70cm，短径55cm，深さ76cm），P_{10}（長径45cm，短径35cm，深さ23cm）あるいはP_2（長径64cm，短径55cm，深さ74cm）も主柱穴の可能性があり，断定はできない。他は性格不明である。

炉　推定線のほぼ中央に付設されている。長径70cm，短径54cmの楕円形で，床を4cmほど皿状に掘りくぼめた地床炉である。炉床は火熱で赤く焼け，硬化している。炉の上層の覆土から遺物が出土している。

炉土層解説
1　褐　色　焼土小ブロック・炭化物・ローム小ブロック少量
2　暗褐色　炭化粒子・ローム小ブロック少量，焼土小ブロック極少量
3　暗褐色　ローム粒子少量，焼土小ブロック極少量
4　褐　色　ローム粒子中量，焼土粒子・炭化物少量
5　赤褐色　焼土粒子中量，炭化粒子・ローム粒子少量
6　褐　色　ローム粒子中量，炭化粒子少量

遺物　本跡全域の床面及び覆土中から多量の遺物が出土している。5の口縁部片，11，12の胴部片は炉の覆土中から，2の深鉢形土器は炉の東側覆土中から，6，8の口縁部片と一緒に3の底部が正位の状態でP_1直上の床面レベルから，7，9の口縁部片と10の胴部片は東部から南部にかけての覆土中から，1の深鉢形土器はばらばらの状態で，4の深鉢形土器の底部は正位の状態でP_4付近の覆土中から出土している。13の土製円板も覆土中から出土している。14の敲石は本跡の推定プラン外の出土で，西側から出土している。

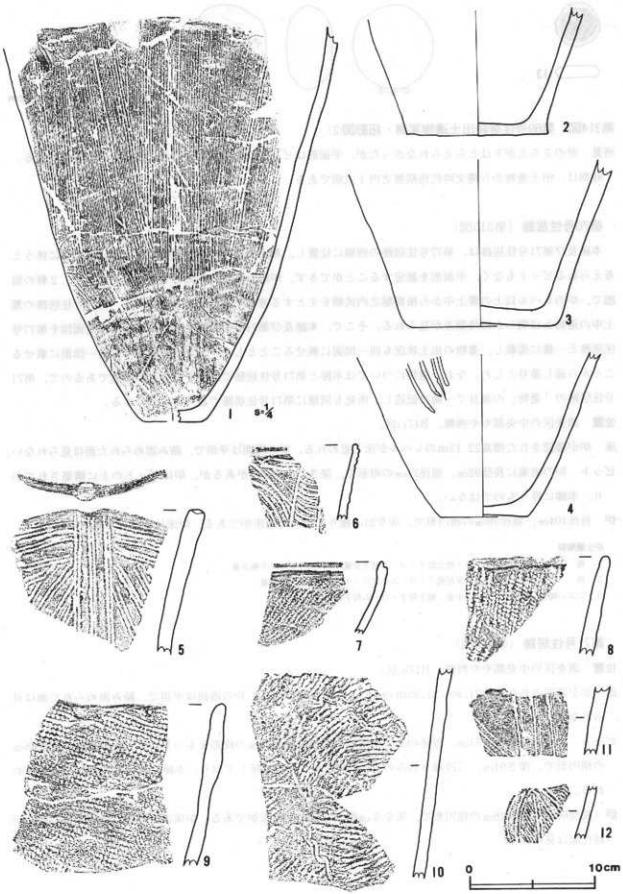
第69号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第313図 1	深鉢形土器 縄文土器	B (40.9) C (6.4)	口縁部欠損。平底で，胴部は外傾して立ち上がる。櫛歯状施文具による複列の平行沈線が，胴上部から下部にかけて直線的に施文されている。底部から13cmほどは無文である。	砂粒・スコリア 明赤褐色 普通	P16　50% 南西部覆土中層 (堀之内1)
2	深鉢形土器 縄文土器	B (10.0) C 11.1	底部片。やや突出気味の平底で，胴部は外傾して立ち上がる。胴下部及び底部は削り後磨きで調整されている。	砂粒・石英・長石・スコリア にぶい橙色　普通	P17　10% 炉東側覆土中層 (堀之内か)
3	深鉢形土器 縄文土器	B (13.1) C 12.3	底部片。僅かに上げ底で，胴部は外傾して立ち上がる。胴下部及び底部は削りで調整されている。	砂粒・長石 明赤褐色 普通	P18　10% P_1直上 (堀之内か)
4	深鉢形土器 縄文土器	B (12.9) C 6.8	底部片。僅かに上げ底で，胴部は外傾して立ち上がる。胴下部に上部から垂下する複位の複列沈線が見られる。胴下部外周及び底部は磨きが施されている。	砂粒・石英・雲母 にぶい橙色 普通	P19　30% 南西部覆土中層 (堀之内か)

図版番号	器種	計測値(cm) 最大長	最大幅	最大厚	重量(g)	現存率(%)	器形及び文様の特徴	備考
第314図13	土製円板	3.6	3.6	1.0	15.1	100	表面に単節縄文　摩滅が著しい	DP8　覆土

図版番号	器種	計測値 長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	備考
第314図14	敲石	6.8	6.5	3.8	209.1	安山岩	05　推定線外西側覆土中層

第313図5～12は縄文土器片の拓影図である。5～9は口縁部片で，5は波状口縁の波頂部に押捺痕が施され，胴部には半截竹管による平行沈線が対照的に縦横及び斜位に施文されている。6は口唇部に横走沈線が巡り，胴部は粗い縄文地文の上に沈線が施されている。7～8及び10の胴部片は，器面に縄文が粗く施文され，7は口唇部に沈線が巡らされている。11は5と同類の胴部片である。12は地文の縄文上に直線及び緩やかな弧を描く平行沈線が施文されている胴部片である。これらは後期堀之内1式に比定される土器である。



第313図　第69号住居跡出土遺物実測・拓影図(1)

第314図　第69号住居跡出土遺物実測・拓影図(2)

所見　壁の立ち上がりはとらえられなかったが，平面形はピットの配列及び遺物の広がりからの推定である。時期は，出土遺物から縄文時代後期堀之内１式期である。

第70号住居跡（第315図）

本跡及び第71号住居跡は，第77号住居跡の西側に位置し，覆土と壁の判断が困難で，周囲に住居跡に伴うと考えられるピットもなく，平面形を推定することができず，炉跡の確認のみにとどまった。しかし，２軒の周囲で，炉のレベル以上の覆土中から後期堀之内式期を主とする遺物が多量に出土しており，第77号住居跡の覆土中の遺物とは明らかに時期差が見られる。そこで，本跡及び第71号住居跡の炉の平面図及び断面図を第77号住居跡と一緒に掲載し，遺物の出土状況も同一図面に載せることとした。また，遺物番号も同一図面に載せることから通し番号とした。なお，遺物については本跡と第71号住居跡で区別することが困難であるので，第71号住居跡の「遺物」の項目で一緒に記述し，所見も同様に第71号住居跡で述べることにする。

位置　調査区の中央部やや西側，B17i_1区。

床　炉が確認された標高22.13mのレベルが床と思われる。炉の周囲は平坦で，踏み固められた面は見られない。

ピット　炉の南東に長径92cm，短径71cmの卵形で，深さ93cmのP_{24}があるが，炉はピットの上に構築されており，本跡に伴うものではない。

炉　長径104cm，短径79cmの楕円形で，床を21cm掘りくぼめた地床炉である。炉床はそれほど焼けてない。

炉土層解説

1　褐　　色　焼土小ブロック・焼土粒子・ローム粒子少量，ローム小ブロック極少量
2　褐　　色　焼土粒子少量，炭化粒子・ローム小ブロック・ローム粒子極少量
3　にぶい褐色　焼土小ブロック少量，焼土粒子・ローム粒子極少量

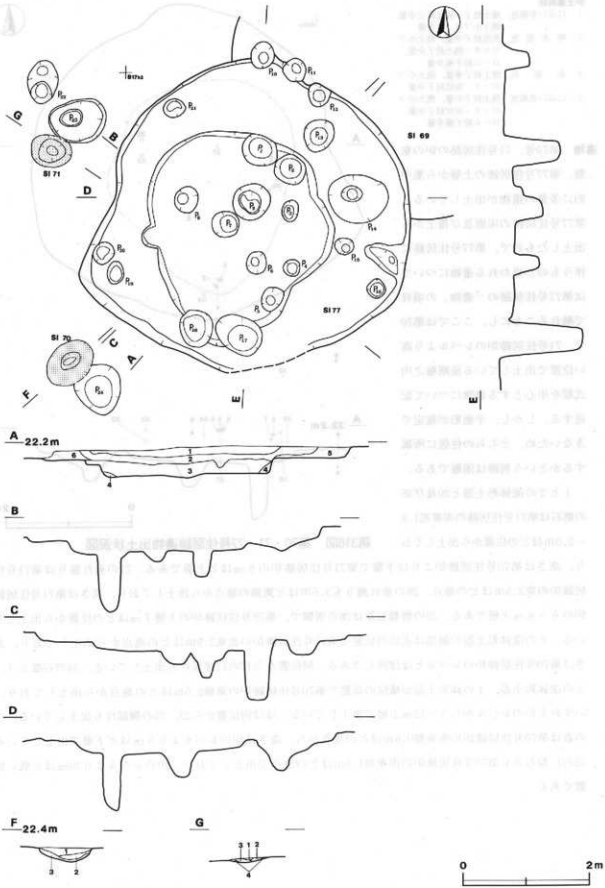
第71号住居跡（第315図）

位置　調査区の中央部やや西側，B17h_1区。

床　炉が確認された標高21.90～21.95mのレベルが床と思われる。炉の周囲は平坦で，踏み固められた面は見られない。

ピット　炉の北側に長径71cm，短径49cmの楕円形で，最深部が63cmの段差をもつP_{22}と，長径92cm，短径66cmの楕円形で，深さ91cm，二段掘り込みのP_{23}があるが，炉に近接しており，本跡に伴うものではないと思われる。

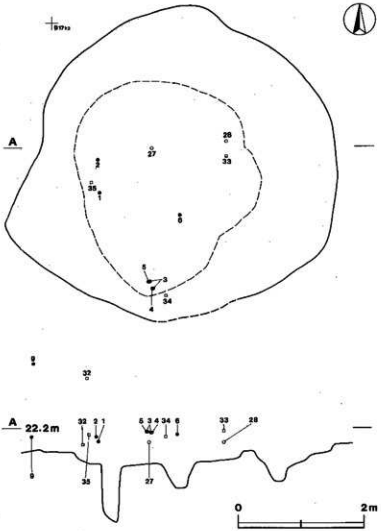
炉　長径66cm，短径48cmの楕円形で，床を６cm掘りくぼめた地床炉である。炉床はそれほど焼けてはいないが，硬化面は見られる。



第315図　第70・71・77号住居跡実測図

炉土層解説

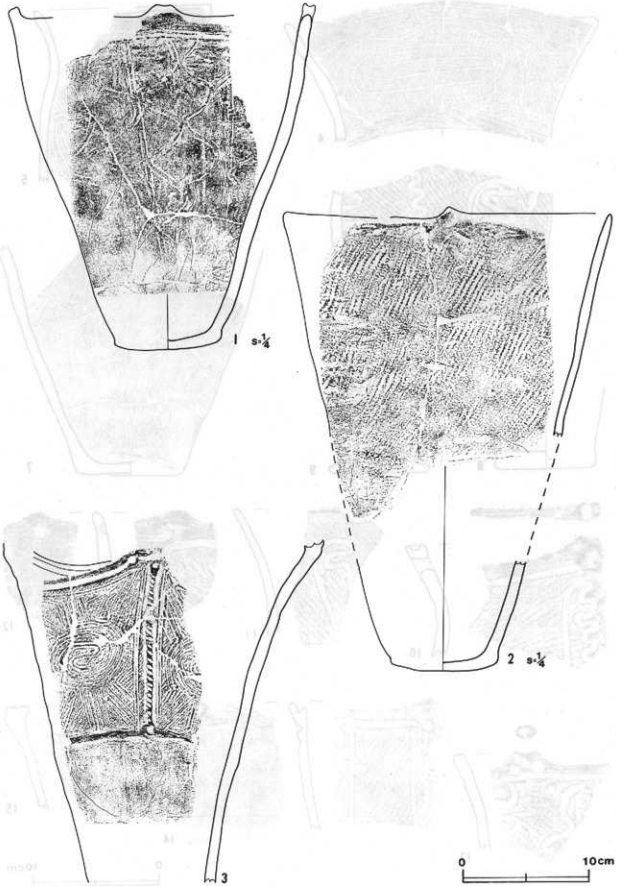
1	にぶい赤褐色	焼土粒子・炭化粒子中量，焼土小ブロック少量
2	明赤褐色	炭化粒子中量，焼土小ブロック・焼土粒子少量，ローム粒子極少量
3	赤褐色	焼土粒子多量，焼土小ブロック・炭化粒子中量
4	にぶい赤褐色	焼土粒子中量，焼土小ブロック・炭化粒子少量，ローム粒子極少量



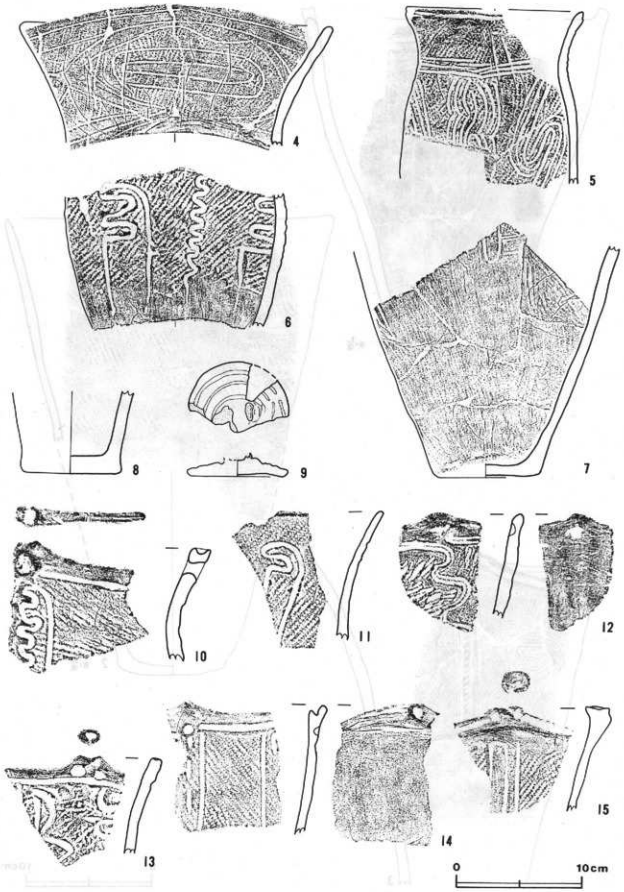
第316図　第70・71・77号住居跡遺物出土状況図

遺物　第70号，71号住居跡の炉の東側，第77号住居跡の上層から集中的に多量の遺物が出土している。第77号住居跡の床面及び覆土から出土したもので，第77号住居跡に伴うものと思われる遺物については第77号住居跡の「遺物」の項目で触れることにし，ここでは第70号，71号住居跡炉のレベルより高い位置で出土している後期堀之内式期を中心とする遺物について記述する。しかし，平面形が推定できないため，どちらの住居に所属するかという判断は困難である。

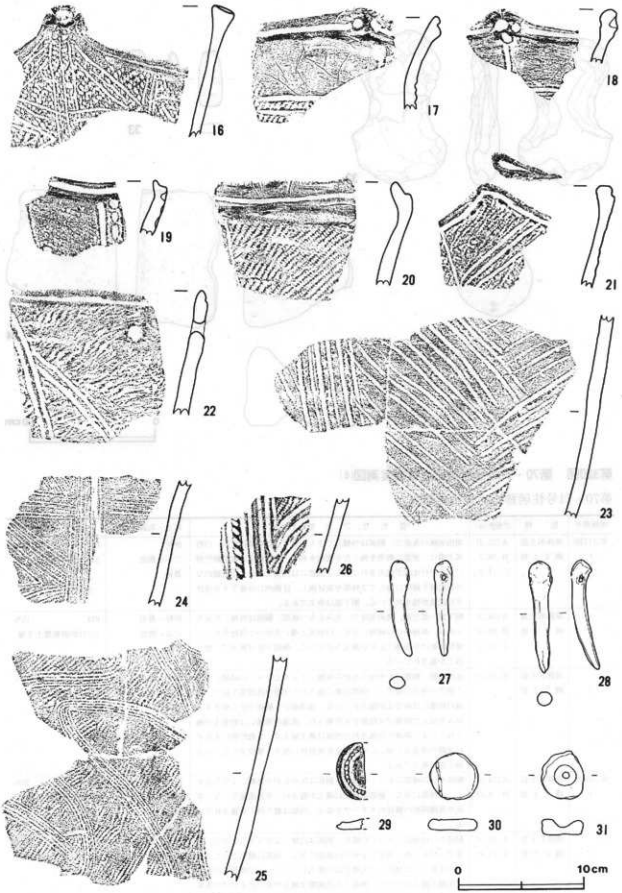
1と2の深鉢形土器と20及び35の磨石は第71号住居跡の南東部1.8～2.0mほどの位置から出土しており，高さは第70号住居跡炉よりは下層で第71号住居跡炉の8㎝ほど上層である。27の垂れ飾りは第71号住居跡炉の東2.5mほどの地点，28の垂れ飾りも3.6mほど東側の地点から出土しており，高さは第71号住居跡炉の6～8㎝上層である。33の磨製石斧は28の南側で，第70号住居跡炉の上層7㎝ほどの位置から出土している。6の深鉢形土器の胴部は正位の状態で第70号住居跡炉の北東2.9mほどの地点から出土しており，高さは第70号住居跡炉のレベルとほぼ同じである。同位置から17の口縁部片も出土している。34の石皿と3，5の深鉢形土器，4の鉢形土器が横位の状態で第70号住居跡炉の東側2.5mほどの地点から出土しており，いずれも炉のレベルから5～12㎝上層で出土している。ほぼ同位置から23，25の胴部片も出土している。9の蓋は第70号住居跡炉の南東側0.6mほどの地点から，高さは炉のレベルより5㎝ほど下層で出土している。32の打製石斧も第70号住居跡炉の南東側1.5mほどの地点で出土しており，炉のレベルより20㎝ほど低い位置である。



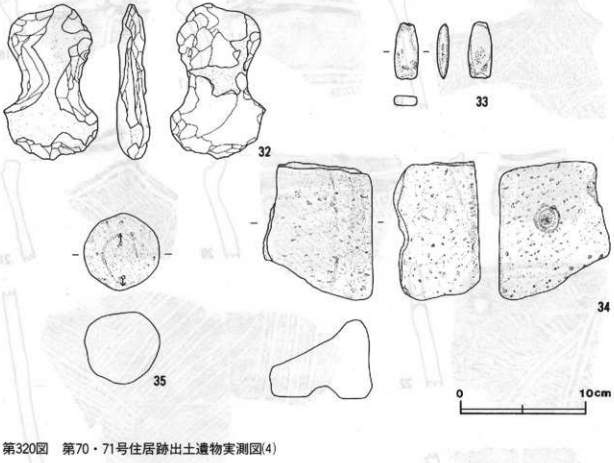
第317図　第70・71号住居跡出土遺物実測・拓影図(1)



第318図　第70・71号住居跡出土遺物実測・拓影図(2)



第319図　第70・71号住居跡出土遺物実測・拓影図(3)



第320図　第70・71号住居跡出土遺物実測図(4)

第70・71号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第317図 1	深鉢形土器 縄文土器	A (32.2) B 36.2 C 11.2	突出気味の丸底で，胴部は外傾して立ち上がり，口縁部に至る。口唇部上端に，頂部に刺突を施した小突起を有し，口縁部下には半截竹管による平行沈線が横走されている。胴部には同施文具による直線的な平行沈線を縦位に施して文様帯を縦区画し，区画内には垂下する波状平行沈線が描かれている。胴下部は無文である。	砂粒 にぶい褐色 普通	P20　40% S1-71炉南東覆土下層 (堀之内1)
2	深鉢形土器 縄文土器	A (34.0) B (48.0) C 11.2	胴下部一部欠損。突出気味で，丸みをもつ底部。胴部は外傾して立ち上がり，直線的に口縁部に至る。口唇部上端に舌状の小突起を有し，縦位回転の単節縄文LRが施文されている。胴部下位は無文で，磨り消しが施されている。	砂粒・長石 にぶい橙色 普通	P21　15% S1-71炉南東覆土下層 (堀之内1)
3	深鉢形土器 縄文土器	B (25.0)	底部欠損。胴部はやや反りながら外傾して立ち上がり，口縁部に至る。2単位の波状口縁で，口縁部外面に施された沈線が波頂部を結び，沈線の両端には刺突文が施されている。波頂部から胴部下位に垂下する組みを加えた隆線で文様帯が4分割され，隆線の両端には刺突文が施されている。隆線で区画された内部は縄文地文で，半截竹管による平行沈線の波巻文を中心に同沈線文を放射状に描き，単位文としている。胴下部は無文である。	砂粒・長石 灰黄褐色 普通	P22　70% S1-70炉東覆土下層 (堀之内1)
第318図 4	深鉢形土器 縄文土器	A (24.9) B (9.8)	胴部から口縁部にかけての破片。胴部は反りながら外傾して立ち上がり，口縁部に至る。胴部は地文に縄文が施され，平行沈線で「X」字状や長楕円形の模長のモチーフを描き，内部は磨り消しが施されている。	砂粒・長石・スコリア 橙色 普通	P23　20% S1-70炉東覆土下層 (堀之内2)
5	深鉢形土器 縄文土器	A (14.0) B (13.8)	胴部から口縁部にかけての破片。胴部は内弯しながら立ち上がり，頂部でくびれた後，外反しながら口縁部に至る。頂部に横走された3本平行沈線で1文様帯と2文様帯に分離されている。1文様帯は口唇部に沈線が施されており，頂部との沈線間は縄文が見られるだけである。2文様帯は地文の縄文が，入り組みの「U」状あるいは急角度に折れ曲がる波水状の複列沈線に切られている。	砂粒・長石・雲母 灰黄褐色 普通	P24　15% S1-70炉東覆土中層 (堀之内1)

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第318図 6	深鉢形土器 縄文土器	B(10.5)	僅かに内彎する胴部片。縦位回転の単節縄文LR地文で，素手状あるいは小波状を描いて垂下する沈線が胴部に複かれている。胴下部は地文がなく，磨り消しが施されている。	砂粒・長石 褐色 普通	P25 40% SI-70炉北東覆土下層 (堀之内1)
7	深鉢形土器 縄文土器	B(18.3) C 8.6	底部から胴下部にかけての破片。僅かに上げ底で，胴部は外傾して立ち上がる。胴上部から垂下する沈線が僅かに見られる。外面磨きが施されており，整形時の条痕が残存している。	砂粒 橙色 普通	P26 20% 覆土 (堀之内)
8	深鉢形土器 縄文土器	B(6.6) C 8.0	底部から胴下部にかけての破片。やや突出気味の平底で，胴部は外傾して立ち上がる。外面磨きが施されている。	砂粒・石英・長石 暗赤褐色 普通	P27 5% 覆土 (堀之内)
9	壺 縄文土器	高3(1.9) 径 8.0	円形。形状に沿い3列の沈線が円形に施されている。中央部に把手を有するが，欠損しているため詳細は不明である。	砂粒 にぶい橙色 普通	P28 50% SI-70炉南東覆土下層 (堀之内1)

図版番号	器種	計測値(cm) 最大長	最大幅	最大厚	重量(g)	現存率(%)	器形及び文様の特徴	備考
第319図27	垂れ飾り	7.6	1.8	1.1	12.1	100	牙状の土製垂れ飾り 基部に穿孔	DP9 SI-71炉覆土下層
28	垂れ飾り	8.8	1.8	1.1	15.5	100	牙状の土製垂れ飾り 基部に穿孔	DP10 SI-71炉東覆土下層
29	土製円板	4.5	(2.3)	(0.9)	(8.3)	50	表面に刻文を加えた接線 1/2欠損	DP11 覆土
30	土製円板	3.7	3.9	0.9	17.2	100	表面に結節沈線文	DP13 覆土
31	土製円板	3.9	3.3	1.3	16.5	100	表面に未貫通孔	DP14 覆土

図版番号	器種	計測値 長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	備考
第320図32	打製石斧	12.3	7.4	2.6	207.3	安山岩	Q6 分銅型 SI-70炉南東覆土下層
33	磨製石斧	4.5	1.9	0.8	11.1	粘板岩	Q7 定角式(ミニチュア) SI-71炉東覆土下層
34	石皿	(11.0)	(8.8)	6.3	(544.0)	安山岩	Q8 凹み石転用 欠損品 SI-70炉東覆土下層
35	磨石	6.2	6.0	5.8	258.5	安山岩	Q9 SI-71炉南東覆土下層

第318・319図10～26は縄文土器片の拓影図で，10～22は口縁部片，23～26は胴部片である。10は波状口縁で，波頂部頂部に刺突文が施され，胴部には地文の縄文の上に蕨手懸垂文が描かれている。11も同様の文様が描かれている。12，13は波頂部に小突起を有し，胴部は粗い縄文を施文した後蛇行沈線が垂下されている。14～16は頂部に刺突を施した小突起が付され，胴部は縄文施文後14，15が直線的に垂下する平行沈線が複列，16が垂下あるいは斜行するやや細い沈線が施されている。いずれも口縁部外面要所に刺突文が見られる。17，18は口縁部に刺突を有する小突起と口唇部を巡る沈線が見られ，胴部文様帯との間に無文帯が配されている。19は波状口縁で，口唇部に沈線，胴部は縄文地文で沈線と刺突文がセットで口縁部から胴部に施文されている。20は口縁部が短く内彎し，口縁部に沈線，胴部には縦位回転の単節縄文LRが施文されている。21も波状口縁で，口縁部に沈線，胴部には縄文施文後3列の斜行沈線が施されている。22は文様構成が21と似ている半縁の深鉢形土器で，補修孔が見られる。23は地文はなく，複列の平行沈線が縦位あるいは斜位に施されている。24も半截竹管による複列の平行沈線が縦位，横位及び斜位に描かれている。25は縄文地文で半截竹管による複列の平行沈線が大きく蛇行して描かれている。26は刻文を施した隆帯が直線的に縦位に施され，隆帯に沿う沈線と三角形状を呈すると思われるモチーフがその内側に描かれている。いずれも後期堀之内式に比定される土器である。

所見 第70号，71号住居跡炉の東側で多量の遺物が出土しており，位置的には第77号住居跡の確認面の上層から出土している。ほとんどが破片であり，投棄遺物と思われる。これらの遺物の出土位置が，第70号，71号住居跡炉のレベルと同等かそれ以上であり，住居跡に伴う遺物かどうかは不明であるが，時期的にはそれほどの隔たりはないものと推測できる。

第77号住居跡（第315図）

位置　調査区の中央部やや西側，B17h2区。

規模と平面形　長径5.32m，短径4.75mの不整楕円形で，二段掘り込みの住居跡である。

長径方向　N－8°－E

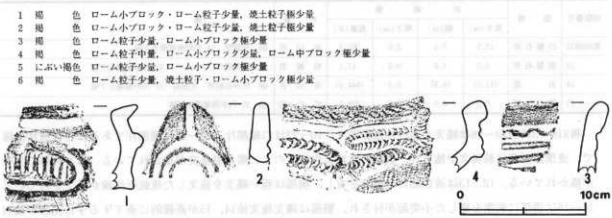
壁　外壁は壁高5～25cmで，外傾して立ち上がる。段差の部分も高さ8～22cmで，外傾して立ち上がる。

床　2段掘り込みの内側は長径3.41m，短径3.02mの不整楕円形で，ほぼ平坦な床面は強く踏み固められている。外側もほぼ平坦であるが，踏み固められた面は見られない。内側と外側の段差は8～22cmである。

ピット　21か所。P_1は長径60cm，短径49cmの楕円形で，深さ74cm，P_{17}は長径77cm，短径57cmの楕円形で，深さ134cm。2本とも長径の線上で段差部に位置しており，主柱穴と思われる。P_{13}，P_{15}，P_{20}，P_{21}（長径32～53cm，短径23～46cmの楕円形で，深さ20～58cm）は内壁と外壁の間に位置し，補助柱穴と思われる。位置的にP_{20}でなくP_{19}（長径36cm，短径28cmの楕円形で，深さ13cm）が補助柱穴の可能性もあるが，やや浅すぎる。中央部に位置するP_7（径45cmの円形で，深さ21cm），P_9（長径62cm，短径56cmの楕円形で，深さ46cm）は覆土に焼土が見られたが性格は不明である。他にもピットが確認されており，住居の建て替えも考えられるが根拠に欠けており，性格は不明である。

覆土　6層からなる。褐色土主体の自然堆積である。

1　褐　色　ローム小ブロック・ローム粒子少量，焼土粒子極少量
2　褐　色　ローム小ブロック・ローム粒子少量，焼土粒子極少量
3　褐　色　ローム粒子少量，ローム小ブロック極少量
4　褐　色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量，ローム中ブロック極少量
5　にぶい褐色　ローム粒子少量，ローム小ブロック極少量
6　褐　色　ローム粒子少量，焼土粒子・ローム小ブロック極少量



第321図　第77号住居跡出土遺物実測・拓影図

遺物　内側床の南西部を主とする床面及び覆土中から遺物が出土している。2の把手は南西部の段差寄りの床面から出土している。3の口縁部片はほぼ同位置の覆土下層から出土している。

第321図1～4は縄文土器片の拓影図である。1は口唇部が外側に突出気味で，上端は平坦に作出されている。口縁部文様帯は沈線を沿わせた隆帯による区画文で構成され，区画内に縦位の短沈線が施されている。2は舌状の把手で，中央の孔を線取るように沈線と隆線が施されている。3は口縁部片で，交互刺突による「コ」字状文が見られる。4も口縁部片で，口縁部文様帯の隆帯上に連続刻文，口唇部外面及び胴部には縄文が施文されている。これらは中期中峠式の範疇であると思われる。

所見　本跡は，遺構の形態及び出土遺物から縄文時代中期中峠式期の二段掘り住居跡である。

第72号住居跡（第322図）

位置　調査区の西部，B16c₄区。

重複関係　本跡は，北東側部分を第437号土坑に，西側部分を第464号土坑に，南西側部分の床を第436号土坑に掘り込まれている。

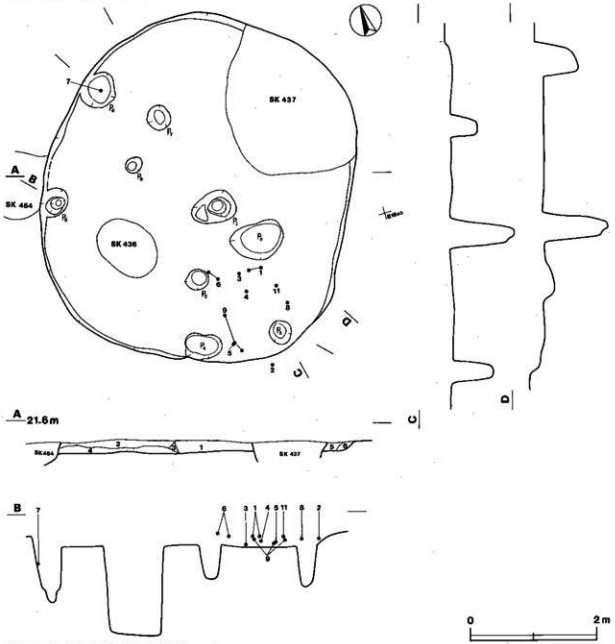
規模と平面形　南側部分の壁が第429号土坑と接しており，部分的に立ち上がりがとらえられなかったが，長径5.65m，短径5.05mの楕円形である。

長径方向　N－4°－E

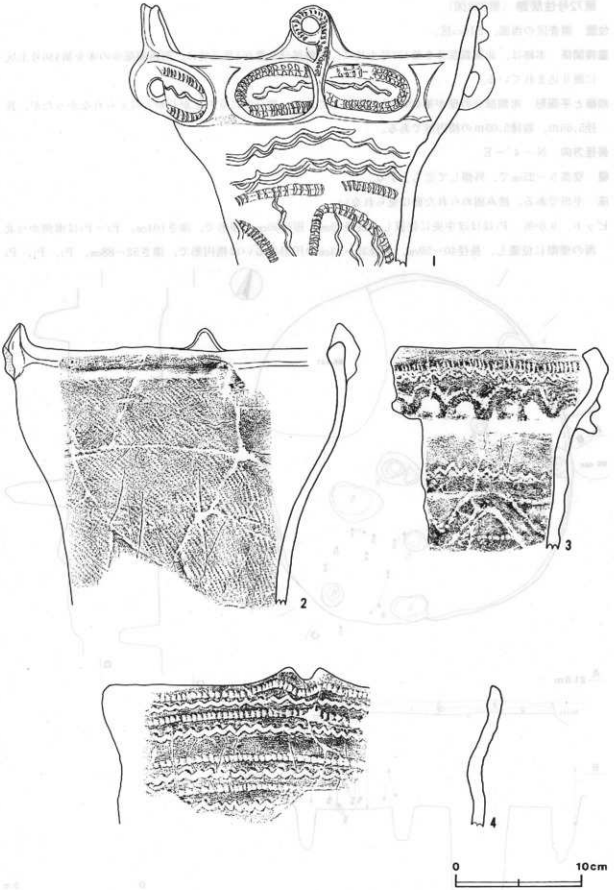
壁　壁高5～25cmで，外傾して立ち上がる。

床　平坦である。踏み固められた面は見られない。

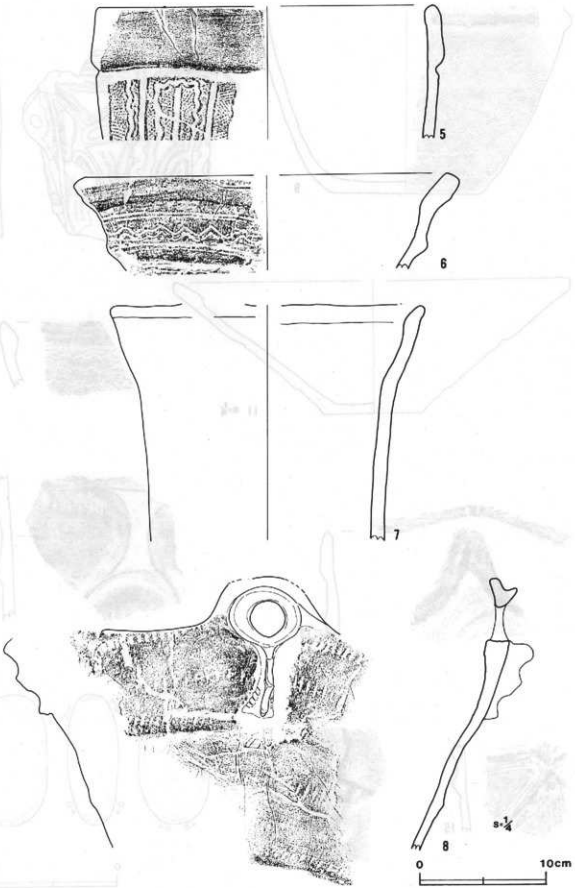
ピット　9か所。P_1はほぼ中央に位置し，長径70cm，短径50cmの卵形で，深さ104cm，P_3～P_6は南側から北西の壁際に位置し，長径40～59cm，短径35～53cmの円形あるいは楕円形で，深さ52～88cm，P_2，P_7，P_8



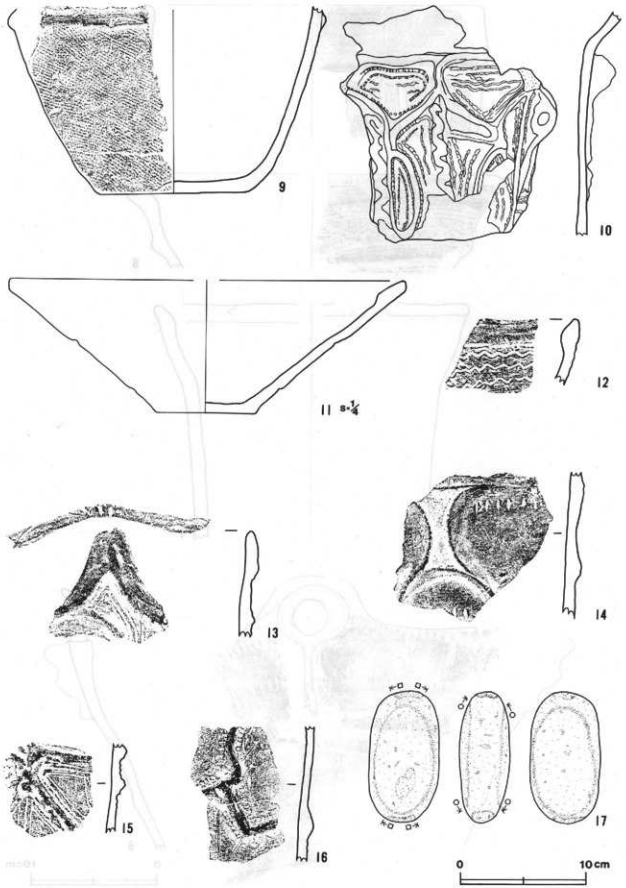
第322図　第72号住居跡実測図



第323図　第72号住居跡出土遺物実測・拓影図(1)



第324図　第72号住居跡出土遺物実測・拓影図(2)



第325図　第72号住居跡出土遺物実測・拓影図(3)

はP_1を囲むように位置し，長径29～47cm，短径25～36cmで，深さ44～53cm。これらのピットの内いずれかが主柱穴になると思われるが，壁及び床が部分的に土坑に掘り込まれているため，全体の配列がとらえられず，判断は困難である。P_9は性格不明である。

覆土　6層からなる。土層4～6は褐色の自然堆積土と思われるが，土層1～3はローム ブロックを含み，人為的に埋め戻した層と思われる。

土層解説
1　暗褐色　ローム中ブロック中量，焼土小ブロック・炭化物・ローム小ブロック少量
2　暗褐色　焼土小ブロック・炭化物・ローム中ブロック・ローム粒子少量
3　黒褐色　炭化粒子中量，ローム小ブロック少量
4　褐　色　ローム粒子中量，炭化粒子・ローム小ブロック少量
5　褐　色　ローム粒子中量，炭化物・ローム小ブロック少量
6　褐　色　ローム粒子中量，炭化物極少量

遺物　本跡の南部床面及び覆土下層から多量の遺物が集中的に出土している。ほとんどが破砕された状況で出土しており，投棄遺物と思われる。1～6，8，9の深鉢形土器と11の浅鉢形土器はいずれも遺物集中地点からの出土で，3の深鉢形土器が逆位の状態で，4，5の口縁部片は器面を表にして床面から出土しており，他はいずれも覆土下層から出土している。7の深鉢形土器はP_6内から，15の胴部片は南西部壁際の覆土下層から，17の磨石は覆土上層から出土している。

第72号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第323図 1	深鉢形土器 縄文土器	A (25.2) B (30.9)	胴下部及び部分的に口縁部欠損。胴上部は外傾しながら立ち上がり，頸部からやや開いて口縁部に至る。口縁部上端に4単位の突起を有し，突起外面に施された円形の隆帯がロ縁部から胴部に流れて，口縁部の隆帯と接続して細い横状の把手が形成されている。口縁部は隆帯で挽円形区画文と区画に沿う角押文を施し，更に内部には半截竹管による波状平行沈線が描かれている。区画文の下から頸部にかけても波状沈線が見られ，頸部には横走された角押文が施され，以下に胴部文様帯が構成されている。胴部文様帯には曲線を描く角押文や胴下部に垂下する波状沈線が描かれている。	砂粒・スコリア・長石・雲母 にぶい橙色 普通	P29　40% 南部覆土下層 (阿玉台Ⅱ)
2	深鉢形土器 縄文土器	A 25.5 B (22.2)	胴部下半及び口縁部一部欠損。キャリパー形で，小波状を呈する。口縁部は内削ぎ状で，口唇部外面下にも波状沈線が横走されている。波頂部外面に縦長の突起を有し，胴部には無節Lの縄文が胴部上位では横位回転で，頸部付近から以下は縦位回転で施文されている。	砂粒・長石・スコリア にぶい橙色 普通	P30　35% 南部覆土下層 (阿玉台Ⅱ)
3	深鉢形土器 縄文土器	A 15.5 B (15.9)	胴部下半欠損。胴部は直立気味に立ち上がり，頸部で外傾した後内彎して口縁部に至る。内削ぎ状の口唇部で，口縁部文様帯は上から連続刻文，縦歯状沈線，結文を沿わせた波状を描く隆帯及び胴部との境に段差を形成する直線的な横位の隆帯が施され，隆帯が載り上がることによる小突起が部分的に見られる。胴部には横位の隆帯を結ぶ波状の隆帯と隆帯に沿う縦歯状文や爪形文が描かれている。	砂粒・長石 にぶい赤褐色 普通	P31　60% 南部床面 (勝坂Ⅱ)
4	深鉢形土器 縄文土器	A (31.6) B (12.5)	胴部から口縁部にかけての破片。胴部は僅かに内彎し，頸部でくびれた後外傾して口縁部に至る。口縁部内面に稜を有し，口唇部上端に双耳状の突起を有する。文様は，横位の角押文と小波状沈線が口縁部から胴部に交互に施文されている。	砂粒・長石・スコリア にぶい橙色 普通	P32　10% 南部床面 (勝坂Ⅱ並行)
第324図 5	深鉢形土器 縄文土器	A (26.8) B (10.8)	胴上部から口縁部にかけての破片。直立気味に立ち上がり，口縁部に至る。口縁部は幅5cmの無文帯で，やや厚みをもち，胴部との境に沈線が施されている。胴部は撚糸文地文で，沈線で方形に分割された区画内に，区画に沿う波状沈線と更に内部に施された縦位の沈線が見られる。	砂粒・長石・石英・雲母 橙色 普通	P33　5% 南部床面 (勝坂Ⅱ)
6	深鉢形土器 縄文土器	A (30.7) B (7.6)	口縁部片。口縁部は外反する。口唇部及び口縁部下位に施された横位の隆帯間に口縁部文様帯が展開され，上下の隆帯に沿って複列の結節沈線文，中央に複列の波状沈線文が施されている。	砂粒・長石・雲母 褐色 普通	P34　5% 南部覆土下層 (阿玉台Ⅱ)
7	深鉢形土器 縄文土器	A (25.0) B (18.6)	胴部からは縦部にかけての破片。胴部は直立気味に立ち上がり，頸部で外傾して口縁部に至る。口縁部外面に粘土紐を貼り付け，内面は内削ぎ状で，稜をもつ。文様は施されていない。	砂粒・長石・雲母 にぶい赤褐色 普通	P35　20% P_6内 (阿玉台)

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第324図 8	深鉢形土器 縄文土器	A(55.0) B(28.7)	胴部から口縁部にかけての破片。胴部は外傾して立ち上がり，口縁部に至る。波状口縁で，波頂部に孔を有する突起が付けられている。波頂部及び波底部から隆帯が垂下し，頸部に巡る隆帯と接続する。頸部以下にも横位の隆帯が見られ，隆帯に沿って角押文が施されている。	砂粒・長石・石英・雲母 にぶい橙色 普通	P36 10% 南部覆土下層 (阿玉台Ⅱ)
第325図 9	深鉢形土器 縄文土器	B(14.8) C 11.9	底部から胴下部にかけての破片。平底で，胴部は外傾して立ち上がる。胴下部に横位の隆帯が見られ，無加工の縦位断転で施文されているが，部分的に回転方向が異なる所が見られる。底部に剥代痕が見られる。	砂粒・長石・石英・雲母 にぶい褐色 普通	P37 20% 南部覆土下層 (阿玉台Ⅱ)
10	深鉢形土器 縄文土器	B(17.8)	胴部から口縁部下位にかけての破片。胴部は直立し，頸部や外傾する。頸部以上は無文である。胴部には隆帯で三角形や楕円形状の区画文あるいは縦位の波状文が見られる。区画内は複列の結節沈線文や波状沈線が施されている。	砂粒・長石・石英・雲母 明赤褐色 普通	P38 20% 覆土 (勝坂Ⅱ)
11	浅鉢形土器 縄文土器	A(41.2) B 14.1 C 10.0	口縁部一部欠損。平底で，胴部は外傾して開き，口縁部に至る。口縁部は肥厚し，内面に稜を有する。内・外面削り後磨きが施されている。	砂粒・長石・雲母 暗褐色 普通	P39 70% 南部覆土下層 (阿玉台)

図版番号	器種	計測値 長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	備考
第325図17	磨石	10.6	7.2	4.0	373.7	安山岩	Q10 敲石兼用 南西部覆土

第325図12～16は縄文土器片の拓影図である。12は厚みをもつ無文の口縁部下に偏平な鋸歯状沈線が3列見られる。13は縦長の舌状突起を波頂部に有する口縁部片で，隆帯による区画内は隆帯に沿って結節沈線文が2列施されている。14は胴部片で，偏平な隆帯区画内に部分的に縦長の刺突文が見られる。15，16も隆帯による区画に沿って，15は半截竹管による沈線が複列，16には角押文が施されている。中期阿玉台Ⅱ式の範疇と思われる。

所見　本跡の南側部分から投棄と思われる遺物が多量に出土している。これらの遺物の大半は中期阿玉台Ⅱ式期に比定されるもので，本跡の時期もこの前後と思われる。

第73号住居跡（第326図）

位置　調査区の西部，B16j$_5$区。

重複関係　本跡は，北側部分で第74号住居跡，第333号土坑と，西側部分で第334号土坑と重複しているが，新旧関係は不明である。

規模と平面形　南側部分が調査区域外に延びているため，全体像は不明だが，東西径5.68m，南北径(2.98)mで，半円形をしている。

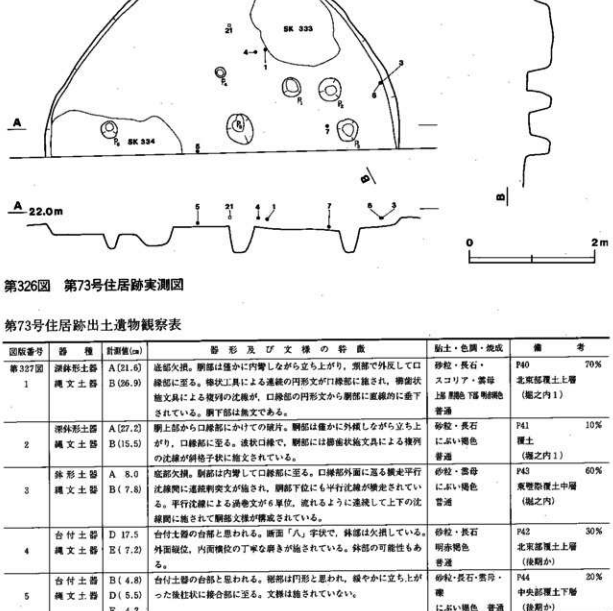
壁　第74号住居跡と接している北側部分の立ち上がりが不明だが，残存部分は壁高10～18cmで，外傾して立ち上がる。

床　平坦である。踏み固められた面は見られない。

ピット　6か所。P_2は径40cmの円形で，深さ38cm，P_3は径35cmの不整円形で，深さ40cm，P_6は第334号土坑の中からの確認で，径28cm，本跡の床面からの深さは37cm。北西側部分で対応するピットが確認できないため断定はできないが，これらはほぼ同規模で，本跡の主柱穴の可能性がある。他は性格不明である。

炉　確認されなかった。

遺物　本跡の東側部分を中心として多量の遺物が出土しているが，ほとんどが覆土中からで，床面出土は少ない。3の鉢と6の注口土器は東壁際から，1の深鉢形土器，4の台付土器台部，21の石鏃は北東部から，いずれも覆土中から出土している。7の壺は東部覆土下層から，5の台付土器は中央部やや西寄りの覆土中から出土している。

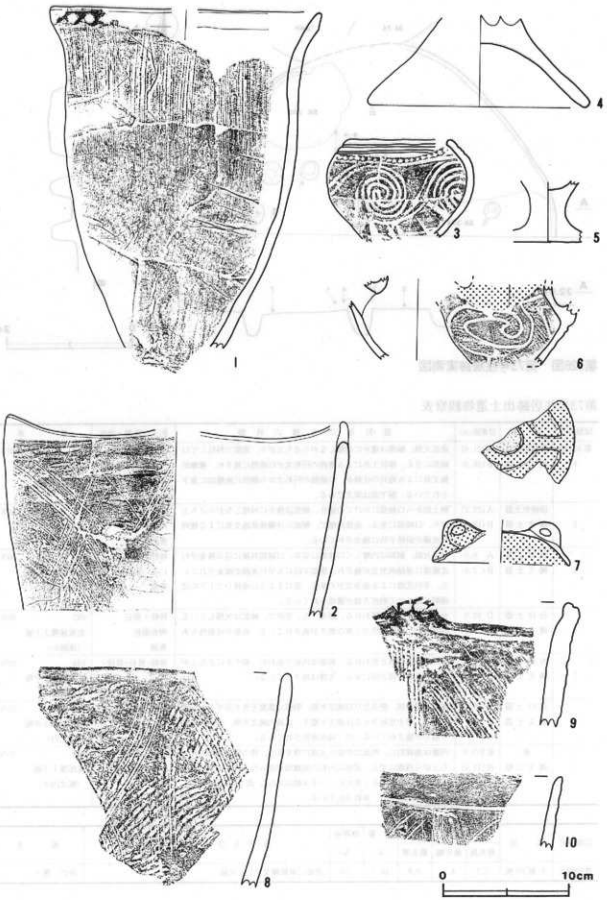


第326図　第73号住居跡実測図

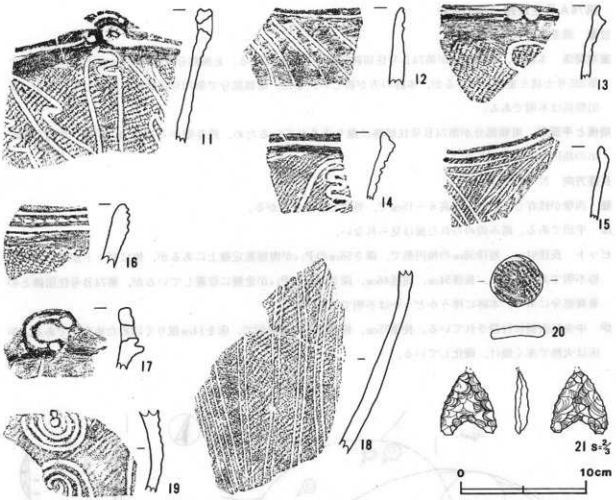
第73号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第327図 1	深鉢形土器 縄文土器	A(21.6) B(36.9)	底部欠損。胴部は僅かに内弯しながら立ち上がり，頂部で外反して口縁部に至る。棒状工具による連続の円形文が口縁部に施され，櫛歯状施文具による複列の沈線が，口縁部の円形文から胴部に直線的に垂下されている。胴下部は無文である。	砂粒・長石・スコリア・雲母 上等 黒褐色 下部 明褐色 普通	P40 70% 北東部覆土上層 (堀之内1)
2	深鉢形土器 縄文土器	A(27.2) B(15.5)	胴上部から口縁部にかけての破片。胴部は僅かに外傾しながら立ち上がり，口縁部に至る。波状口縁で，胴部には櫛歯状施文具による複列の沈線が斜格子状に施文されている。	砂粒・長石 にぶい褐色 普通	P41 10% 覆土 (堀之内1)
3	鉢形土器 縄文土器	A 8.0 B(7.8)	底部欠損。胴部は内弯して口縁部に至る。口縁部外面に沿る横走平行沈線間に連続刺突文が施され，胴部下位にも平行沈線が横走されている。平行沈線による渦巻文が6単位，流れるように連続して上下の沈線間に施されて胴部文様が構成されている。	砂粒・雲母 にぶい褐色 普通	P43 60% 東壁際覆土中層 (堀之内)
4	台付土器 縄文土器	D 17.5 E(7.2)	台付土器の台部と思われる。断面「八」字状で，脚部は欠損している。外面縦位，内面横位の丁寧な磨きが施されている。鉢部の可能性もある。	砂粒・長石 明赤褐色 普通	P42 30% 北東部覆土上層 (後期か)
5	台付土器 縄文土器	B(4.8) D(5.5) E 4.2	台付土器の台部と思われる。裾部は円形と思われ，緩やかに立ち上がった後柱状に接合部に至る。文様は施されていない。	砂粒・長石・雲母・礫 にぶい褐色 普通	P44 20% 中央部覆土下層 (後期か)
6	注口土器 縄文土器	B(6.2)	底部，注口部，把手及び口縁部欠損。胴部は算盤玉状を呈する。外面に「丁」字を想起させる区画文を描き，区画内縄文充填。区画外は磨り消しが施されている。内・外面赤彩されている。	砂粒 にぶい橙色 普通	P45 55% 東壁際覆土中層 (堀之内)
7	壺 縄文土器	高さ(3.4) 径(11.4)	内部は曲線的に，外面は中位と上部に被を省し，稜の間は直線的に立ち上がり頂部に至る。頂部に円形の鈕面が見られる。2単位のつまみ状の把手を有すると思われ，つまみ幅は3.2cm，高さ1.9cmである。内・外面磨擦され，赤彩されている。	砂粒・雲母 にぶい黄褐色 普通	P46 35% 東部覆土下層 (堀之内か)

図版番号	器種	計測値(cm) 最大長	最大幅	最大厚	重量(g)	残存率(%)	器形及び文様の特徴	備考
第328図20	土製円板	4.2	4.3	0.9	16.1	100	表裏に羊歯縄文RLと沈線	DP15 覆土



第327図　第73号住居跡出土遺物実測・拓影図(1)



第328図　第73号住居跡出土遺物実測・拓影図(2)

図版番号	器種	計測値				石質	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
第328図21	石製	(2.5)	2.2	0.5	(2.5)	黒曜石	Q11 凹基無茎鏃　北東部撹土上層

第327・328図8～19は縄文土器片の拓影図で，8～17は口縁部片，18，19は胴部片である。8～10は器面に複列の平行沈線が施文されており，8は地文に粗い縄文が施され，9は上端に刺突を伴う小突起が口縁部に見られる。また，9，10は口縁部と胴部の境に沈線が施されている。12は口縁部を巡る沈線以下は斜行沈線が施されている。11，13，14は胴部地文の縄文の上に蕨手文が施され，いずれも口唇部には沈線が巡らされている。11には通孔を伴う小突起，13には口唇部沈線上に2個単位の円形の押捺が見られる。15は波状口縁で，口唇部に沈線，胴部には地文の縄文を切る複列の直線的な沈線が施されている。16は口縁部外面の平行沈線間に刺突文が施され，以下縄文が施文されている。17は通孔を有する口縁部突起で，孔を囲むように「C」字状の沈線が施文され，両端に円形の刺突文が施されている。18，19は地文に縄文が施された胴部片で，18には垂下する平行沈線，19には小突起を囲むように同心円状の沈線が施されている。これらは後期堀之内1式に比定される土器である。

所見　本跡は，南側部分が調査区域外に延びているため，平面形，炉等不明な部分が多い。時期は，出土遺物から縄文時代後期堀之内1式期と思われる。

第74A号住居跡（第329図）

位置　調査区の西部，B16i₉区。

重複関係　本跡は，東側部分が第74B号住居跡に掘り込まれている。北側部分で第390号土坑と，中央部分で第335号土坑と重複しているが，本跡の方が新しい。また，南側部分で第73号住居跡と重複しているが，新旧関係は不明である。

規模と平面形　東側部分が第74B号住居跡に掘り込まれているため，残存壁から長径〔4.32〕m，短径〔3.90〕mの楕円形と推定される。

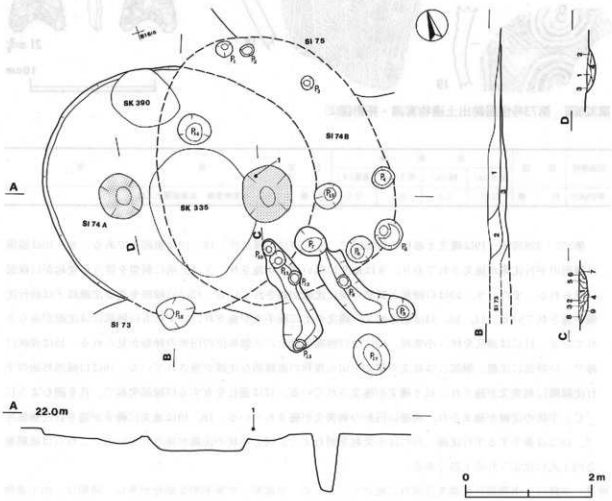
長径方向　N－60°－W

壁　西壁が残存しており，壁高8～15cmで，外傾して立ち上がる。

床　平坦である。踏み固められた面は見られない。

ピット　長径61cm，短径56cmの楕円形で，深さ56cmのP_{16}が南壁推定線上にあるが，他にピットがないため性格不明である。また，長径54cm，短径46cm，深さ99cmのP_{14}が北側に位置しているが，第74B号住居跡との重複部分にあり，本跡に伴うかどうかは不明である。

炉　中央部西側に付設されている。長径75cm，短径65cmの地床炉で，床を14cm掘りくぼめた地床炉である。炉床は火熱で赤く焼け，硬化している。



第329図　第74A・B号住居跡実測図

炉土層解説

1　にぶい赤褐色　焼土粒子・ローム粒子中量，焼土小ブロック・炭化粒子少量
2　赤　褐　色　焼土粒子・ローム粒子中量，焼土小ブロック・炭化粒子少量
3　暗 赤 褐 色　ローム粒子多量，焼土粒子中量，焼土小ブロック少量，炭化粒子極少量
4　赤　褐　色　焼土粒子多量，焼土小ブロック・ローム小ブロック少量，炭化粒子極少量

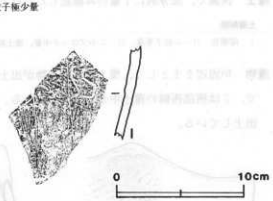
覆土　部分的にしか確認できなかったが，2層からなる自然堆積と思われる。

土層解説

2　暗 褐 色　ローム粒子中量，炭化粒子少量，焼土粒子極少量
3　にぶい褐色　ローム粒子中量，ローム中ブロック少量，焼土粒子・炭化粒子極少量

遺物　炉及び炉周辺の覆土中から遺物が出土している。すべて細片で，器形の判別できるものはない。1の胴部片は炉の東側覆土中から出土している。

第330図1は縄文土器片の拓影図である。胴下部の破片で，直線的あるいは曲線的に垂下する文様が器面に細沈線で描かれている。後期堀之内1式の範疇と思われる。



第330図　第74A号住居跡出土遺物実測・拓影図

所見　本跡は，東側部分が第74B号住居跡に掘り込まれているため，平面形は西壁からの推定である。時期は，出土遺物から縄文時代後期堀之内1式期である。

第74B号住居跡（第329図）

位置　調査区の西部，B16i_9区。

重複関係　本跡は，西側部分で第74A号住居跡，第335号土坑を，北西側部分で第390号土坑を掘り込んでいる。

規模と平面形　覆土が薄く，壁の立ち上がりは確認できなかったが，長径[4.16]m，短径[3.15]mの楕円形で，南側に出入り口施設をもつ柄鏡形と思われる。柄部は「八」字形の溝で区画され，その先端にピットが位置する。

長軸方向　N－10°－W

床　平坦である。本跡の床は第74A号住居跡の床の上に構築されており，ロームの硬化面がブロック状に見られる。

ピット　16か所。P_1，P_3～P_5は長径26～45cm，短径23～40cmの円形あるいは楕円形で，深さ31～52cm。これらは炉を囲むように東側の推定線沿いに位置し，主柱穴と思われる。P_2（長径23cm，短径20cmの楕円形で，深さ48cm）はP_1の東側に位置する補助柱穴と思われる。西側に位置するP_{14}（長径52cm，短径46cmの楕円形で，深さ99cm）は規模が大形で，本跡に伴うものではないと思われる。P_7～P_{13}は柄部の溝底に掘られた小ピットで，出入り口施設に伴う柱穴と思われる。P_{17}は長径64cm，短径52cmの楕円形で，深さが130cmあり，位置関係から柄部の出入り口施設に伴うものと思われる。

炉　中央から柄部寄りに付設されている。長径90cm，短径79cmの楕円形で，床を15cm掘りくぼめた地床炉である。炉床は火熱で赤く焼け，硬化している。

炉土層解説

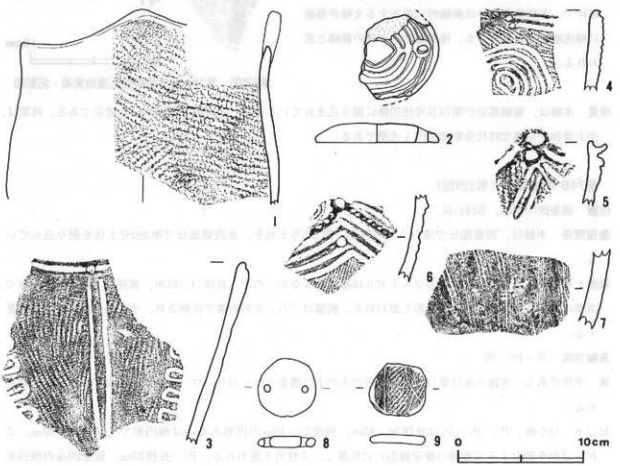
1　極暗赤褐色　焼土粒子中量，焼土小ブロック・炭化粒子・ローム小ブロック少量
2　暗赤褐色　焼土小ブロック・焼土粒子中量，ローム小ブロック少量，炭化粒子極少量
3　赤　褐　色　焼土粒子多量，焼土小ブロック中量，炭化粒子少量，ローム小ブロック極少量
4　にぶい赤褐色　焼土粒子多量，焼土小ブロック中量，ローム小ブロック少量，炭化粒子極少量
5　赤　褐　色　焼土小ブロック・焼土粒子多量，ローム小ブロック少量，炭化粒子極少量
6　暗　褐　色　焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
7　暗　褐　色　焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量
8　にぶい赤褐色　焼土粒子中量，焼土小ブロック・ローム粒子少量，炭化粒子極少量
9　にぶい赤褐色　焼土粒子中量，焼土小ブロック少量，炭化粒子・ローム粒子極少量

覆土　西側で，部分的に1層のみ確認しただけで，堆積状況は不明である。

土層解説

1　暗褐色　ローム粒子多量，ローム小ブロック中量，焼土粒子・炭化粒子少量，焼土小ブロック極少量

遺物　炉周辺を主として，覆土中から遺物が出土している。1の深鉢形土器は炉上層の覆土中から正位の状態で，7は柄部西側の覆土中から出土している。他に，2の蓋，8の双孔円板及び9の土器片錘も覆土中から出土している。



第331図　第74B号住居跡出土遺物実測・拓影図

第74B号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第331図 1	深鉢形土器 縄文上器	A(19.8) B(15.2)	胴部から口縁部にかけての破片。胴部は僅かに内傾しながら立ち上がり，頸部で僅かにくびれた後外傾して口縁部に至る。波状口縁で，波頂部は舌状突起状を呈する。外面は単節縄文RLが横位回転で施文されているが，部分的に縦位回転も見られる。	砂粒・長石 にぶい褐色 普通	P47　10% 炉上層 (覆之内1)

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第331図2	壷 縄文土器	高さ1.5 径〔9.8〕	円形で，中央部に最大高をもつ。形状に沿う不連続の同心円が沈線で5重に描かれ，頸部近くに孔が穿たれている。	砂粒・長石 にぶい橙色 普通	P48　45% 覆土 (堀之内1)

図版番号	器種	計測値(cm)			重量	残存率	器形及び文様の特徴	備考
		最大長	最大幅	最大厚	(g)	(%)		
第331図8	炭孔円板	5.0	4.8	0.9	24.0	100	径0.5cmの孔2か所	DP16　覆土
9	土器片錘	4.2	4.6	0.8	16.7	100	表面に単節縄文RLと沈線区画の胴部	DP17　覆土

第331図3～7は縄文土器片の拓影図である。3～5は波状を呈する口縁部片で，いずれも口唇部に1本あるいは2本の沈線が施され，円形の刺突文が加えられている。胴部には，地文の縄文の上に，3は直線的沈線と蛇行沈線，4は渦巻きと同心円状の沈線，5は波頂部から胴部に斜行して垂下する沈線がそれぞれ描かれている。6，7は胴部片で，6は連続刻文を施した山形の隆線に平行する4本の沈線が下に加えられ，沈線上に刺突文，沈線以下には縄文が施されている。7は櫛歯状の施文具による条線状の集合短沈線が器面に施されている。後期堀之内1式に比定される土器である。

所見　本跡は，覆土が薄く壁の立ち上がりはとらえられなかったが，柱穴の配列と床面の状態から平面形を推定した。時期は，住居の形態及び出土遺物から縄文時代後期堀之内1式期である。

第75号住居跡（第332図）

位置　調査区の西部，B17i₁区。

重複関係　本跡は，北西側部分が第149号住居跡を掘り込んでいる。南西側部分で第74B号住居跡と重複しているが，新旧関係は不明である。

規模と平面形　西側部分の壁の立ち上がりが確認できなかったが，長径〔5.05〕m，短径〔4.82〕mの円形と推定され，南側に出入り口施設をもつ柄鏡形と思われる。柄部は「八」字形の溝によって区画されている。

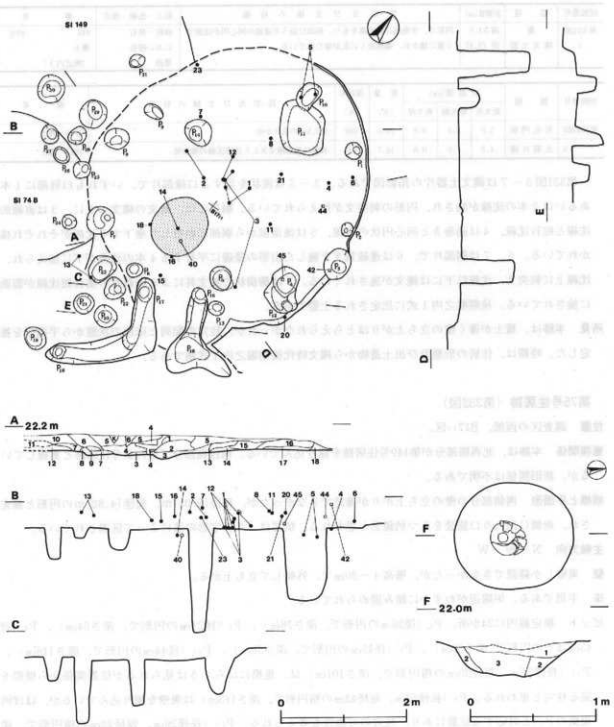
主軸方向　N－29°－W

壁　東壁しか確認できなかったが，壁高4～20cmで，外傾して立ち上がる。

床　平坦である。炉周辺がわずかに踏み固められている。

ピット　推定線内に24か所。P_1（径26cmの円形で，深さ78cm），P_2（径21cmの円形で，深さ54cm），P_4（径43cmほどの円形で，深さ88cm），P_7（径45cmの円形で，深さ58cm），P_{29}（径44cmの円形で，深さ116cm），P_{31}（長径26cm，短径20cmの楕円形で，深さ101cm）は，規模にばらつきは見られるが位置関係から壁際を巡る柱穴と思われる。P_3（長径53cm，短径42cmの楕円形で，深さ115cm）は東壁を掘り込んでいるが，ほぼ同規模のP_{29}と対応する位置にあり，柱穴の可能性も考えられる。P_{15}（長径29cm，短径22cmの楕円形で，深さ75cm），P_{16}（長径75cm，短径55cmの不定形で，深さ47cm），P_{17}（長径32cm，短径23cmの楕円形で，深さ106cm），P_{18}（径20cmの円形で，深さ46cm）は，柄部の区画溝内に位置し，出入り口施設に伴うものと思われる。また，P_{13}（径22～25cm，深さ36cm），P_6（径25cm，深さ31cm）は内側の柄部を挟んで位置し，補助柱穴的な性格をもつピットと思われる。他は性格不明である。

炉　出入り口近くに付設され，長径95cm，短径90cmのほぼ円形で，中央に土器を埋設した土器埋設炉である。炉床は火熱で赤く焼け，硬化している。

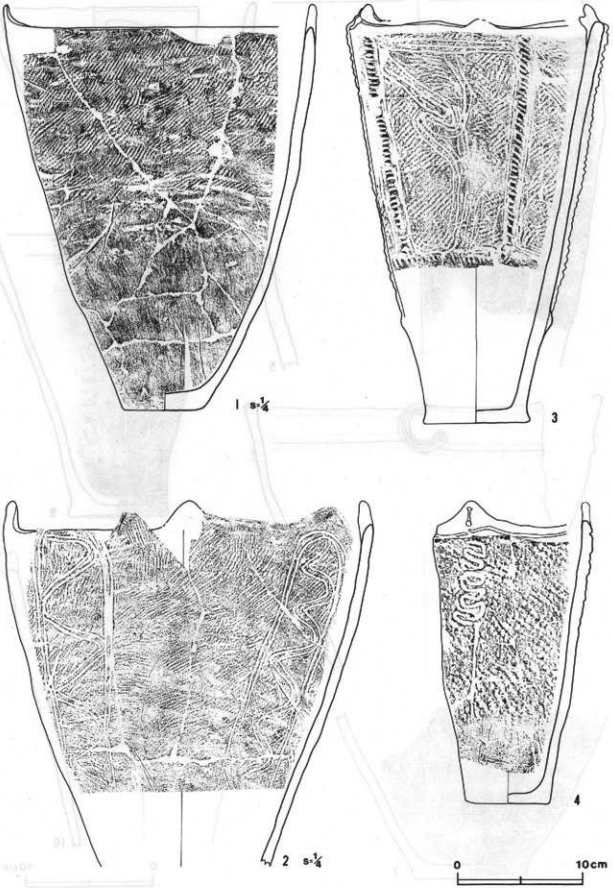


第332図　第75号住居跡実測図

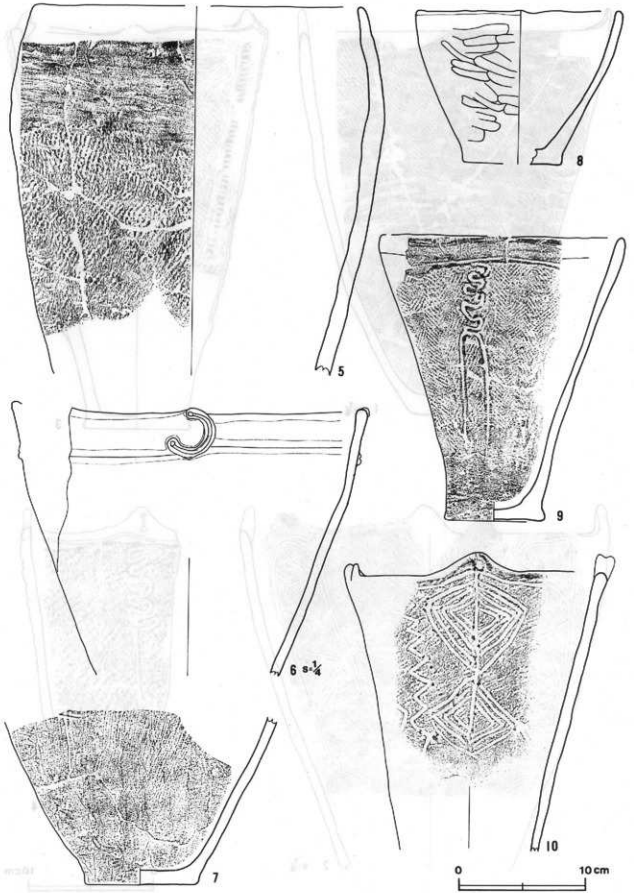
炉土層解説

1　にぶい赤褐色　炭化粒子中量，焼土小ブロック・焼土粒子・炭化物・ローム粒子少量
2　明 赤 褐 色　焼土粒子・炭化粒子中量，焼土小ブロック少量
3　明 赤 褐 色　焼土粒子多量，焼土中ブロック・焼土小ブロック・炭化粒子少量

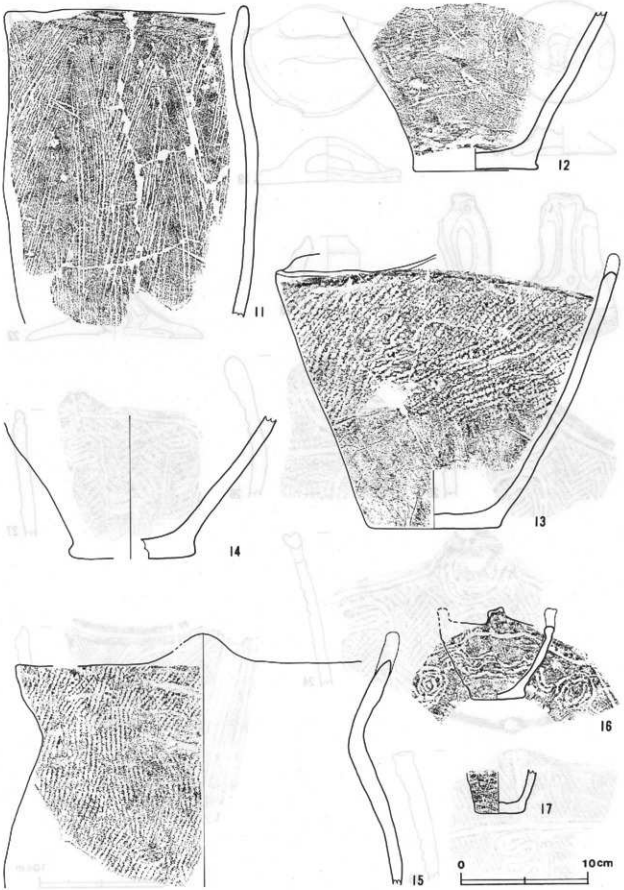
覆土　18層からなる。複雑で不自然な人為堆積の様相をしている。



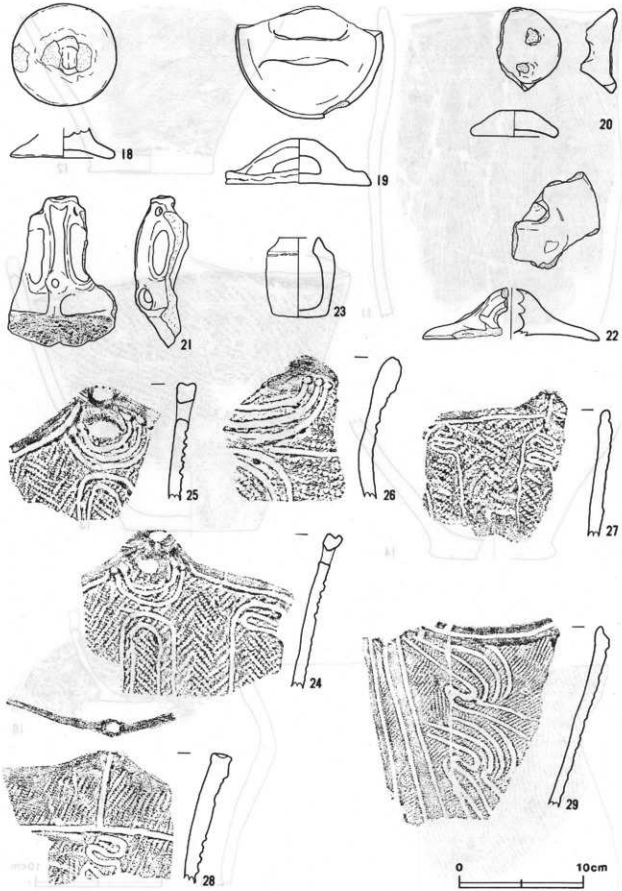
第333図　第75号住居跡出土遺物実測・拓影図(1)



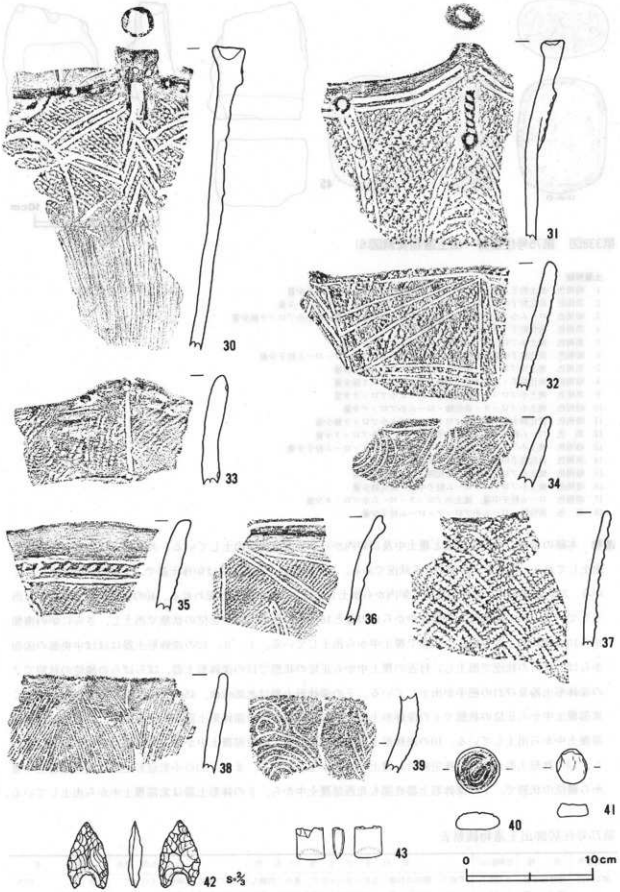
第334図　第75号住居跡出土遺物実測・拓影図(2)



第335図　第75号住居跡出土遺物実測・拓影図(3)



第336図　第75号住居跡出土遺物実測・拓影図(4)



第337図　第75号住居跡出土遺物実測・拓影図(5)

第338図　第75号住居跡・出土遺物実測図(6)

土層解説

1　暗褐色　焼土粒子・焼土小ブロック・炭化粒子・ローム小ブロック少量
2　黒褐色　炭化粒子中量，焼土小ブロック・炭化物・ローム小ブロック少量
3　暗褐色　ローム小ブロック・ローム粒子中量，炭化粒子少量，焼土小ブロック極少量
4　黒褐色　炭化粒子・ローム小ブロック少量
5　黒褐色　焼土小ブロック・炭化物・ローム小ブロック少量
6　暗褐色　炭化粒子中量，焼土小ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子少量
7　黒褐色　焼土中ブロック・焼土小ブロック・ローム粒子少量
8　暗褐色　炭化粒子・ローム粒子少量，焼土小ブロック極少量
9　黒褐色　焼土小ブロック・炭化粒子・ローム小ブロック少量
10　暗褐色　焼土小ブロック・炭化物・ローム小ブロック少量
11　暗褐色　炭化物少量，焼土小ブロック・ローム小ブロック極少量
12　褐　色　ローム粒子中量，炭化粒子少量，ローム小ブロック少量
13　暗褐色　焼土小ブロック・炭化物・ローム小ブロック・ローム粒子少量
14　黒褐色　炭化粒子中量，ローム粒子少量
15　暗褐色　焼土小ブロック中量，炭化物・ローム粒子少量
16　暗褐色　焼土小ブロック・ローム粒子中量，炭化物少量
17　暗褐色　ローム粒子中量，焼土小ブロック・ローム小ブロック少量
18　褐　色　炭化物・ローム小ブロック・ローム粒子少量

遺物　本跡の全域にわたる床面と覆土中及び炉内から多量の遺物が出土している。大部分がばらばらの破片で出土しており，投棄をうかがわせる状況である。14の深鉢形土器底部片は炉体土器で，正位の状態で出土している。34の口縁部片，39の胴部片も炉内から出土しており，同一個体と思われる。40の土製円板も炉内から出土している。炉の南部直上の覆土中から18の蓋と16の小形鉢形土器が正位の状態で出土し，さらに炉の南側から10の深鉢形土器が斜位の状態で覆土中から出土している。1，3，12の深鉢形土器はほぼ中央部の床面からばらばらの状況で出土し，付近の覆土中から正位の状態で11の深鉢形土器，ばらばらの横位の状態で2の深鉢形土器及び21の把手が出土している。5の深鉢形土器は北部床面，45の磨石は東部床面から，同じく東部覆土中から正位の状態で6の深鉢形土器，横位の状態で4の深鉢形土器と44の石皿が，42の石鏃は東壁際覆土中から出土している。10の深鉢形土器が横位の状態で南東部覆土中から，20の蓋は南東壁際覆土中から，13の鉢形土器が南西部推定線沿い覆土中から出土している。また，23の小形壺形土器は北西部覆土中層から横位の状態で，7の深鉢形土器底部も北西部覆土中から，8の鉢形土器は北部覆土中から出土している。

第75号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第333図 1	深鉢形土器 縄文土器	A〔32.7〕 B 42.5 C 8.4	平底で，胴部は外傾しながら立ち上がり，僅かに内彎しながら口縁部に至る。口唇部上端に舌状の突起を2単位有する。胴上半には単節縄文LRが無作為の回転方向で充填され，胴下半は無文である。	砂粒・スコリア 橙色 普通	P49　65% 中央部床面 (概之内1)

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第333図 2	深鉢形土器 縄文土器	A (36.7) B (38.3)	底部欠損。胴部は外傾しながら立ち上がり，頸部に至る。口縁部上端に否状の突起を4単位有すると思われ，内部に紐行線を描いた「口」状の区画文が，突起から胴部に4単位半蛇行曲による平行沈線で垂下されている。地文は単節縄文LRで，横々な回転方向で施文され，胴下部は施文されていない。	砂粒 にぶい褐色 普通	P50　70% 中央部覆土上層 (堀之内1)
3	深鉢形土器 縄文土器	A (20.5) B 33.3 C 8.5	突出する平底で，胴部は直線的に外傾して立ち上がり，口縁部に至る。口縁部に小突起を4単位有し，小突起から胴部下位に垂らされた隆帯を垂下させ，胴部文様帯が4分割される。隆帯には刻みが施されている。分割された文様間には，隆帯に沿って沈線が区画を形成し，内部には地文の縄文を切る流水状の復列の沈線が施されている。胴部下位の隆帯下から底部までは磨きが施されている。	砂粒 にぶい褐色 普通	P53　50% 中央部南面 (堀之内1)
4	深鉢形土器 縄文土器	A (11.8) B 24.0 C 6.8	平底で，胴部は僅かに外傾して直線的に立ち上がり，口縁部に至る。3単位の波状口縁で，波頂部には両端に刺突を施した短沈線が縦位に施されている。口縁部下に横位の沈線が施され，以下胴部地文に縄文が施され，波頂部から垂下する蛇行沈線文に文様が切られている。胴下部は磨きが施されている。	砂粒・長石・雲母 にぶい橙色 普通	P55　80% 東部覆土上層 (堀之内1)
第334図 5	深鉢形土器 縄文土器	A (26.0) B (29.3)	底部欠損。胴部は僅かに内彎しながら口縁部に至る。地文に単節縄文LRが横位回転で施に施文されている。口縁部から7cmほどは横ナデにより無文である。	砂粒・長石 にぶい黄橙色 普通	P51　65% 北部床面 (堀之内1)
6	深鉢形土器 縄文土器	A (37.2) B (28.3)	底部及び口縁部一部欠損。胴部は外傾して直線的に立ち上がり，口縁部に至る。僅かに波状を呈する口縁部で，4単位の波頂部には胴部の横走隆線に接続する「C」字状文が貼り付けられている。貼付文の両脇には刺突文が施され，沈線で結ばれている。地文はない。	砂粒・長石・雲母 にぶい橙色 普通	P52　30% 東部覆土中層 (網取虎行)
7	深鉢形土器 縄文土器	B (13.3) C 9.0	底部から胴下部にかけての破片。平底で，胴部は外傾して立ち上がる。胴上部から垂下する集合沈線が見られるが，底部から7－9cmは磨きが施されている。	砂粒・長石・雲母 にぶい橙色 普通	P59　20% 北西部覆土上層 (堀之内1)
8	鉢形土器 縄文土器	A 16.5 B 12.3 C (7.8)	平底で，胴部は内彎気味に外傾しながら口縁部に至る。外面は無文で，横方向の削りで整形されている。	砂粒・雲母・ スコリア 橙色　普通	P63　70% 北部覆土上層 (堀之内1)
9	深鉢形土器 縄文土器	A (19.4) B 22.7 C 7.9	底部は突出気味で，削り出しにより僅かに上げ底。胴部は外傾して立ち上がり，口縁部に至る。口縁部無文で，胴部との境に沈線が施されている。沈線以下は縦位の羽状縄文が地文で，蛇行した後2本に分離して直線的に垂下する沈線が口縁部沈線から胴下部にかけて6単位施文されている。底部から6－7cmは磨きが施されている。	砂粒・長石 にぶい黄橙色 普通	P56　50% 覆土 (堀之内1)
10	深鉢形土器 縄文土器	A 21.5 B (23.5)	底部欠損。胴部は外傾して直線的に立ち上がる。4単位の波状口縁で，波頂部外面に小突起が付されている。胴部は地文に縄文が縦く施文され，波頂部からは直線，波底部からは大きな鋸歯状文が沈線で垂下されている。波頂部下には復列の三角形文が直線を挟んで縦対称で描かれている。胴部下位は磨きが施されている。	砂粒・長石 灰褐色 普通	P54　70% 南東部覆土中層 (堀之内1)
第335図 11	深鉢形土器 縄文土器	A (19.5) B (24.9)	胴部から口縁部にかけての破片。胴部は僅かに内彎しながら立ち上がり，僅かにくびれた後口縁部に至る。器面には櫛歯状施文具による復列の沈線がやや斜行して垂下されている。	砂粒 にぶい褐色 普通	P57　40% 中央部覆土上層 (堀之内1)
12	深鉢形土器 縄文土器	B (12.5) C 9.9	底部から胴下部にかけての破片。突出する平底で，胴部は外傾して立ち上がる。器面には縄文と復列の沈線が見られるが，底部付近は磨り消されている。	砂粒・長石・石英 橙色 普通	P60　10% 中央部床面 (堀之内1)
13	鉢形土器 縄文土器	A (27.1) B (21.9) C 10.6	平底で，胴部は外傾して立ち上がり，口縁部に至る。波状口縁で，口縁部から胴部中位にかけて単節縄文LRが横位回転で施文され，以下底部までは無文で磨きが施されている。	砂粒 にぶい橙色 普通	P61　70% 南西部覆土上層 (堀之内1)
14	深鉢形土器 縄文土器	B (11.4) C (10.0)	胴部上半欠損。突出する平底で，やや丸みをもつ。胴部は外傾して立ち上がる。文様はなく，縦位の磨きが施されている。	砂粒・長石・ スコリア にぶい黄橙色　普通	P62　15% 炉内 (堀之内1)
15	深鉢形土器 縄文土器	A (29.6) B (20.1)	胴上部から口縁部にかけての破片。胴部は内彎して立ち上がり，頸部でくびれた後外反して口縁部に至る。最大径は胴部中位にもつと思われる。波状口縁で，単節縄文LRが縦面に充填されている。	砂粒・長石 にぶい橙色 普通	P58　15% 炉南側覆土上層 (堀之内)
16	鉢形土器 縄文土器	A (9.5) B 7.3 C 4.2	底部は突出し，胴部はやや内彎しながら立ち上がり，口縁部に至る。上端に円形の刺突を施した小突起を4単位有すると思われ，口縁部下に横走沈線，胴部に3列の沈線で描かれた2単位の円形文が5列の波状沈線に連結されている。整形は粗雑である。	砂粒 灰黄褐色 普通	P64　80% 炉内部直上 (堀之内)

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第335図 17	深鉢形土器 縄文土器	B(3.4) C 4.0	小形深鉢形土器の底部片。僅かに突出気味の底部で，胴部は外傾して立ち上がる。整形は雑で，斜位の沈線が僅かに見られる。	砂粒・長石 にぶい黄橙色 普通	P65 30% 覆土 (堀之内)
第336図 18	鉢 縄文土器	高5(2.4) 径 8.3	円形で，最大厚を頂部にもつ。頂部に把手を有するが，欠損しており詳細は不明である。文様は施されていない。	砂粒・長石・石英 にぶい褐色 普通	P66 85% 炉南部直上 (堀之内)
19	鉢 縄文土器	高さ 3.7 径 11.6	円形で，中央に長さ8.8cm，高さ2.8cmの横状把手を有する。最大厚を端部に有し，粘土を貼り合わせた痕跡が見られる。文様は施されてない。	砂粒・長石・雲母 にぶい褐色 普通	P67 60% 覆土 (堀之内)
20	鉢 縄文土器	高さ(2.9) 径 [7.1]	不整円形で，最大厚を頂部にもつ。頂部に把手を有するが，欠損しているため詳細は不明である。文様は見られない。	砂粒 にぶい橙色 普通	P68 70% 東壁際覆土上層 (堀之内)
21	把手 縄文土器	長さ(11.9) 幅 (8.6) 厚さ 4.1	波状口縁の波頂部把手片。上端に円形文を加えた小突起を波頂部に有し，突起から渦状把手が頸部に派生し，把手下部からもう1つの小形渦状把手が最大張部を高る隆線に接続している。上部の把手は貼り合わせにより周縁が絞り上がって中央が凹むように作出され，下部に円形の胴突文を有する。頸部の隆線以下には縄文が施されている。	砂粒 にぶい黄橙色 普通	P69 5% 中央部覆土中層 (堀之内)
22	鉢 縄文土器	高さ 4.1 径(14.0)	円形で，中央に長さ(9.0)cm，高さ2.8cmの把手を有する。把手の接合部に刺突文と円形と思われる隆線が施されている。文様は見られない。	砂粒・長石・雲母 にぶい褐色 普通	P70 20% 覆土 (堀之内)
23	壺形土器 縄文土器	A 3.1 B 6.3 C 4.3	小形の壺形土器。僅かに丸みを持つ平底で，胴部はやや外傾して立ち上がり，頸部で内傾して口縁部に至る。口縁部は短い。作りは雑く，文様は施されていない。	砂粒・長石・石英・雲母 にぶい橙色 普通	P217 100% 北西部覆土中層 (堀之内か)

図版番号	器種	計測値(cm)			重量	現存率	器形及び文様の特徴	備考
		最大長	最大幅	最大厚	(g)	(%)		
第337図40	土製円板	3.6	3.6	1.4	15.5	100	表面に沈線による同心円文	DP18 炉内
41	土製円板	2.9	2.4	1.0	8.2	100	無文	DP19 覆土

図版番号	器種	計測値				石質	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
第337図42	石鏃	2.7	1.6	0.6	1.7	チャート	Q12 凹基無茎鏃 東壁際覆土上層
43	磨製石斧	(2.5)	2.2	0.8	(9.6)	緑泥片岩	Q13 定角式 欠損品 覆土
第338図44	石皿	(9.4)	(7.9)	5.6	(322.8)	安山岩	Q14 底部脚付き 煤付着 東部覆土上層
45	磨石	9.2	7.1	4.7	524.5	安山岩	Q15 敲石兼用 東部床面

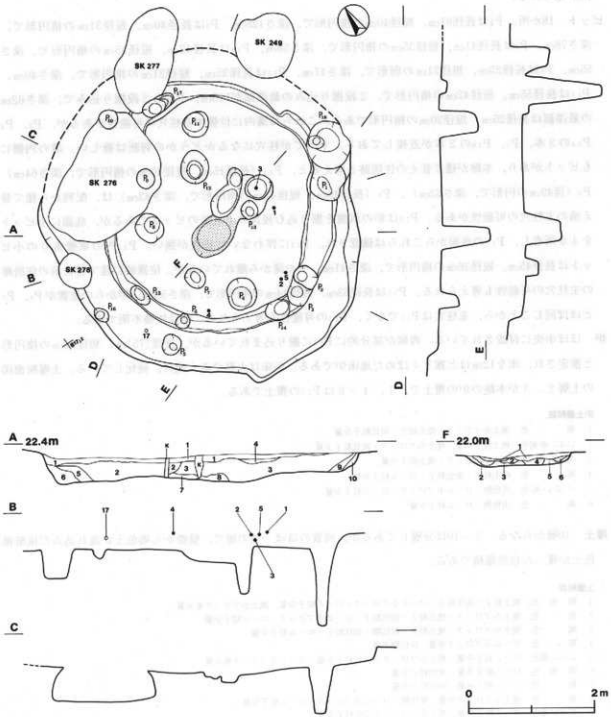
第336・337図24～39は縄文土器片の拓影図である。24～38は口縁部片，39は胴部片である。24，25は同一個体と思われる波状口縁の深鉢形土器で，波頂部両側の刺突文を結んで中央の弧を囲むように複列の沈線が描かれている。胴部は異条の縄文が縦位回転で羽状に施文され，沈線で文様が描かれている。26も刺突文と沈線による文様が描かれている。27，28は口縁部に突起を有し，胴部には地文の縄文を切って蕨手文や直線的文様が沈線で描かれている。29は波状口縁で，両側磨り消しの直線的に垂下する4列の沈線を挟んで地文の縄文を切る曲線的文様が対照的に描かれている。30は口縁部に突起，胴部には縄文を切る矢羽状や斜行及び蕨手文が沈線で描かれ，胴部下半は無文で磨きが施されている。31は地文が複節縄文で，沈線間の連続刺突文，隆線上の刻みが見られる。32は小突起を口縁部にもち，縦横及び斜位の沈線，33は上下の刺突を結ぶ縦位の沈線，34は複列の曲線的モチーフが施され，いずれも地文に縄文が施されている。35，36は口縁部無文で，35は口縁部下の横走沈線内に連続刻文，36は口唇部に沈線が見られ，いずれも胴部には縄文が施文され，36は斜行沈線主体のモチーフが描かれている。37は波状口縁で，羽状構成の縄文が口縁部まで施文されている。38は櫛歯状施文具による斜位の集合沈線が口縁部から施文されている。39は34と同一個体である。これらは後期堀之内1式に比定される土器である。

所見　本跡は，遺構の形態及び出土遺物から縄文時代後期堀之内１式期の柄鏡形住居である。

第76号住居跡（第339図）

位置　調査区の中央部，B17i2区。

重複関係　本跡は北側部分を第277号土坑に，北東側部分を第249号土坑に，西壁を第278号土坑に掘り込まれている。北西側部分で第276号土坑と重複しているが，出土遺物から判断すると本跡の方が新しい。



第339図　第76号住居跡実測図

規模と平面形　北側部分の壁の立ち上がりが確認できなかったが，長径〔6.80〕m，短径5.10mの楕円形と推定される。

長径方向　N－46°－E

壁　残存部は壁高３～40cmで，南側の一部がほぼ垂直に，他は外傾して立ち上がる。

床　壁から15～60cm内側に，上幅20～47cm，下幅11～39cmで，底面が平坦あるいは皿状の溝が巡っている。第276号土坑との切り合い部分が確認できなかったが，全周すると思われる。壁から溝にかけては僅かに傾斜しており，踏み固められた面は見られない。溝の内側はロームがブロック状に強く踏み締められ，小さな凸凹が見られる。

ピット　18か所。P_1は長径61cm，短径40cmの楕円形で，深さ126cm，P_2は長径40cm，短径31cmの楕円形で，深さ78cm，P_3は長径41cm，短径35cmの楕円形で，深さ58cm，P_{14}は長径42cm，短径35cmの楕円形で，深さ55cm，P_6は長径25cm，短径21cmの卵形で，深さ47cm，P_{15}は長径35cm，短径21cmの楕円形で，深さ40cm，P_{17}は長径55cm，短径42cmの楕円形で，２段掘り込みの最深部が115cm，P_{18}も２段掘り込みで，深さ62cmの最深部は長径25cm，短径20cmの楕円形である。これらは溝内に位置する柱穴の可能性があるが，P_2，P_3，P_{14}の３本，P_1，P_{18}の２本が近接しており，すべてが柱穴になるかどうかの判断は難しい。溝の内側にもピットがあり，本跡が建て替えの住居跡と考えると，P_{11}（長径45cm，短径40cmの楕円形で，深さ64cm），P_4（径49cmの円形で，深さ62cm），P_8（長径49cm，短径43cmの楕円形で，深さ82cm）は，配列から建て替え前の主柱穴の可能性がある。P_{13}は炉の西側を掘り込む後世の土坑状のピットであるが，底面に小ピットを４か所有し，P_{13}の底面からこれらは確認され，P_{13}に伴わない可能性が強い。P_{13}内の東壁寄りの小ピットは長径45cm，短径36cmの楕円形で，深さ41cm，やや溝から離れているが，位置的に建て替え前の住居跡の主柱穴の可能性も考えられる。P_{12}は長径53cm，短径44cmの楕円形で，深さ53cm。炉からの位置がP_4，P_8とほぼ同じことから，主柱穴はP_{11}でなく，P_{12}の可能性も考えられる。他は性格不明である。

炉　ほぼ中央に付設されている。西側が部分的にP_{13}に掘り込まれているが，長径〔75〕cm，短径55cmの楕円形と推定され，床を12cmほど掘りくぼめた地床炉である。炉床は火熱で赤く焼け，硬化している。土層断面図の土層２，３が本跡の炉の覆土で，１，４～６はP_{13}の覆土である。

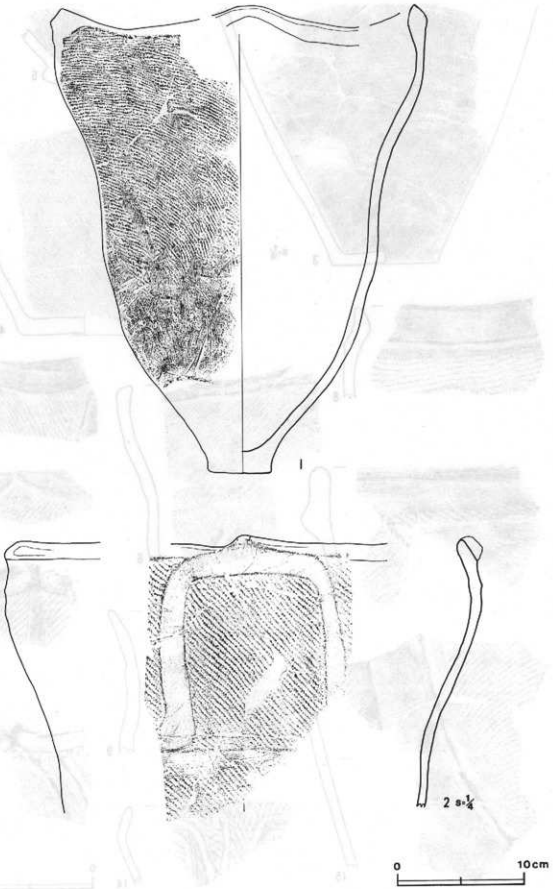
炉土層解説

1　褐　　色　焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
2　にぶい赤褐色　焼土粒子中量，焼土小ブロック・炭化粒子少量
3　明 赤 褐 色　焼土中ブロック・焼土粒子中量
4　褐　　色　焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量
5　にぶい褐色　炭化物・ローム中ブロック・ローム粒子少量
6　褐　　色　炭化物・ローム粒子少量

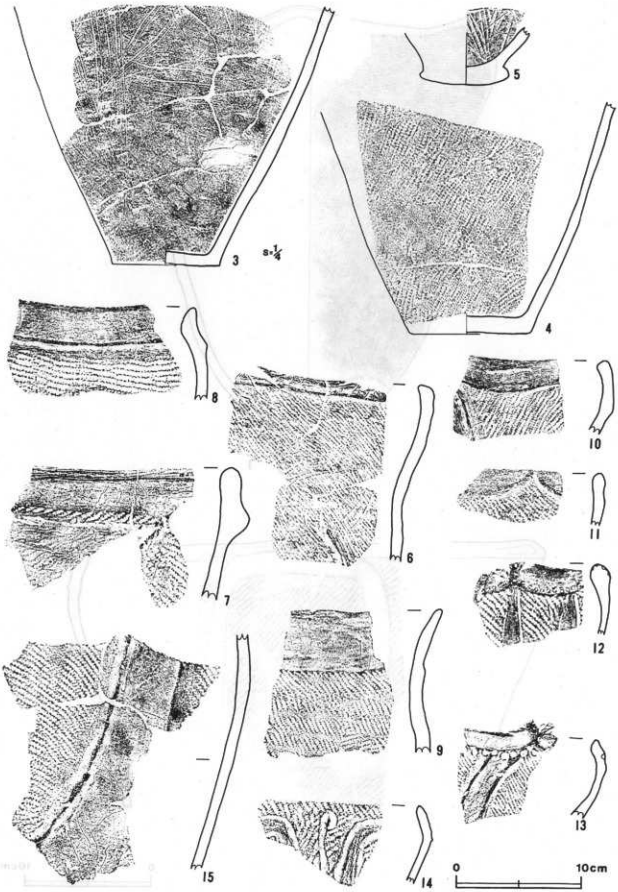
覆土　10層からなる。２～10は分層してあるが，同質のほぼ一連の層で，壁際から褐色土が流れ込んだ後暗褐色土が覆った自然堆積である。

土層解説

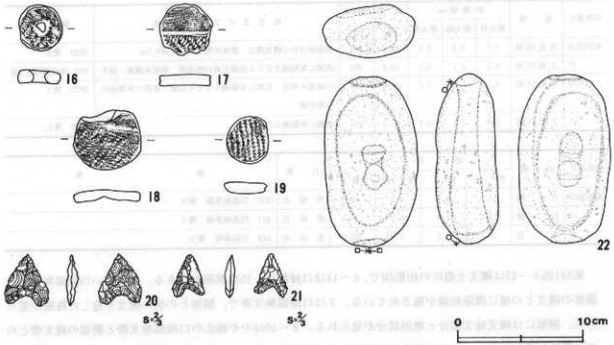
1　暗　褐　色　焼土粒子・炭化粒子・ローム小ブロック・ローム粒子少量，焼土小ブロック極少量
2　褐　　色　焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子・ローム小ブロック・ローム粒子少量
3　褐　　色　焼土小ブロック・焼土粒子・炭化物・炭化粒子・ローム粒子少量
4　褐　　色　ローム小ブロック中量，炭化物少量
5　にぶい褐色　ローム粒子中量，焼土小ブロック・炭化粒子少量，ローム小ブロック極少量
6　明　褐　色　ローム粒子多量，炭化粒子少量
7　褐　　色　ローム粒子中量，炭化粒子少量
8　褐　　色　焼土小ブロック中量，炭化物・ローム小ブロック・ローム粒子少量
9　にぶい褐色　ローム粒子中量，焼土小ブロック・炭化粒子少量
10　にぶい褐色　ローム粒子中量，焼土粒子極少量



第340図　第76号住居跡出土遺物実測・拓影図(1)



第341図　第76号住居跡出土遺物実測・拓影図(2)



第342図　第76号住居跡出土遺物実測・拓影図(3)

遺物　覆土上層から中層にかけて多量の遺物が出土しているが，床面からの出土は少ない。特に炉の南東部に遺物の集中地点があり，その大部分が破片で投棄遺物と思われる。1の深鉢形土器は炉の東側から横位の状態で，2の深鉢形土器と5の底部片及び6，9，11，14の口縁部片と15の胴部片は炉の南東部の遺物の集中地点から他の遺物とともに，17の土製円板は南西壁付近から，いずれも覆土中から出土している。3の深鉢形土器は新しい掘り込みであるP13の上層から，4の底部片は炉の南西部覆土中から出土しているが，本跡に伴うものではない。

第76号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第340図 1	深鉢形土器 縄文土器	A (28.0) B 37.2 C 5.0	やや突出気味の小形の平底で，胴部は緩やかな「S」字状を描いて立ち上がり，口縁部に至る。口縁部は4単位の波状口縁を望すると思われる。口縁部は幅の狭い無文帯で，胴部文様帯との境に微隆起線が施されている。胴部は異条縄文を縦位回転で充填し，底部から11cmほどは無文である。	砂粒・スコリア・長石 橙色 普通	P71　40% 炉東側覆土中層 (加曽利E IV)
2	深鉢形土器 縄文土器	A (49.6) B (28.4)	胴上部から口縁部にかけての破片。胴部は外傾しながら立ち上がり，内湾して口縁部に至る。口縁に微隆起線区画の磨消帯を施し，磨消帯が跨り上がって小突起が形成されている。胴部は縦位回転の羊歯縄文RLが，「∩」状の微隆起線区画の磨消帯に切られている。	砂粒 橙色 普通	P72　10% 炉南東側覆土中層 (加曽利E IV)
第341図 3	深鉢形土器 縄文土器	B (27.2) C 11.4	胴上部欠損。平底で，胴部は外傾して直線的に立ち上がる。細かい単節縄文RLが地文に施され，櫛歯状施文具による複列の平行沈線が斜位あるいは斜位に施文されている。胴下部は無文である。	砂粒・スコリア・雲母 明赤褐色　普通	P73　30% P13上層 (堀之内1)
4	深鉢形土器 縄文土器	B (18.3) C 9.8	底部から胴下部にかけての破片。底部中央が削り出しにより僅かに上げ底で，胴部は外傾して開く。胴部には単節縄文RLが底部まで充填されている。	砂粒・長石 にぶい褐色 普通	P74　20% 炉南西側覆土中層 (堀之内1)
5	深鉢形土器 縄文土器	B (4.7) C 7.1	底部片。突出する丸底で，胴部は外傾する。同下部及び底部は削りで成型され，内面にも調整痕が残されている。	砂粒・長石 橙色 普通	P75　5% 炉南東側覆土中層 (加曽利E)

図版番号	器種	計測値(cm) 最大長	最大幅	最大厚	重量(g)	現存率(%)	器形及び文様の特徴	備考
第342図16	有孔円板	3.7	3.4	1.1	13.9	100	表面部分的に縄文施文　摩滅が著しい　孔径0.7cm	DP20　覆土
17	土製円板	4.2	4.1	0.9	19.8	100	表面に単節縄文RLと沈線区画の磨消帯　側面未調整　錆か	DP21　南西壁際覆土中層
18	土製円板	5.3	4.8	1.1	(27.0)	90	口縁部片利用　表面に単節縄文RLと沈線　裏面に未貫通孔　一部欠損	DP22　覆土
19	土製円板	3.7	3.4	0.9	12.9	100	表面に単節縄文LR	DP23　覆土

図版番号	器種	計測値 長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	備考
第342図20	石鏃	2.0	1.7	0.5	0.9	黒曜石	Q16　凹基無茎鏃　覆土
21	石鏃	1.7	1.3	0.5	0.4	黒曜石	Q17　凹基無茎鏃　覆土
22	敲石	13.5	7.3	5.0	702.8	安山岩	Q18　凹石兼用　覆土

第341図6～15は縄文土器片の拓影図で，6～14は口縁部片，15は胴部片である。6は狭い口縁部無文帯と胴部の縄文との境に微隆起線が施されている。7は口縁部無文帯で，胴部との境に縄文を施した隆線が巡らされ，胴部には縄文施文部分と磨消部分が見られる。8～10はやや幅広の口縁部無文帯と胴部の縄文帯との境に微隆起線が施され，10には微隆起線区画の磨消帯が見られる。11～13は波状口縁で，口縁部と胴部文様帯との境に微隆起線が施され，12には微隆起線に沿う列点文が口縁部に見られ，波頂部から沈線区画の磨消帯が胴部に垂下されている。13は列点文が微隆起線下に施文され，微隆起線区画の磨消帯が斜位に施されている。14は縄文地文が，太い沈線による懸垂文及び磨消帯に切られている。15は縄文施文後，微隆起線で緩やかな曲線が描かれ，間は磨り消しが施されている。これらの土器の内14は中期加曽利EⅢ式，他は中期加曽利EⅣ式の範疇と思われる。

所見　本跡は床に溝を有し，建て替えの可能性が考えられる住居跡である。後期堀之内式期の土器も極少量混入しているが，時期は，主体となる遺物から縄文時代中期加曽利EⅣ式期と思われる。

第79号住居跡（第343図）

位置　調査区の中央部やや東側，C18e₂区。

重複関係　本跡は，北側部分で第80号住居跡と，西側部分で第552号土坑，第19号溝と重複しているが，第19号溝は本跡より新しく，第80号住居跡と第552号土坑は本跡より古い。

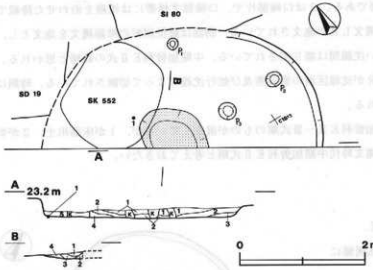
規模と平面形　東西径〔4.40〕m，南側部分は調査区域外に延びており，南北径及び平面形は不明である。

壁　第552号土坑，第19号溝と重複している西側部分は確認できなかったが，残存部は壁高15cmで，外傾して立ち上がる。

床　平坦である。踏み固められた面は見られない。

ピット　3か所。P_1は径20cmの円形で，深さ28cm，P_2は長径25cm，短径22cmの円形で，深さ36cm。この2本は壁際に位置し，主柱穴と思われる。炉の東側に径29cmの円形で，深さ52cmのP_3があるが，性格は不明である。

炉　東西径のほぼ中央に付設されている。南側部分は調査区域外のため全体像は不明だが，東西径92cmの円形あるいは楕円形と推定され，床を12cm掘りくぼめた地床炉である。炉床は火熱で赤く焼け，硬化している。



炉土層解説

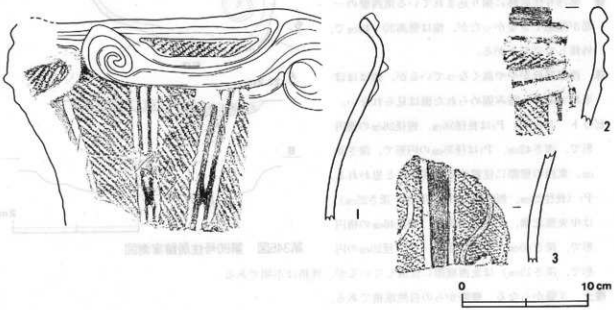
1 赤 褐 色　焼土粒子中量，焼土小ブロック少量，ローム小ブロック極少量
2 明赤褐色　焼土小ブロック・焼土粒子少量
3 明赤褐色　焼土小ブロック・焼土粒子・ローム小ブロック少量
4 明赤褐色　焼土小ブロック・焼土粒子・ローム小ブロック・ローム粒子少量

覆土　5層からなる。壁際から流れ込んだ自然堆積である。土層4は炉上層の覆土で，焼土を含んでいる。

土層解説

1 褐　色　焼土粒子・ローム小ブロック・ローム粒子極少量
2 褐　色　ローム粒子少量，ローム中ブロック極少量
3 明 褐 色　ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子少量
4 暗赤褐色　焼土粒子多量，炭化粒子少量
5 褐　色　ローム粒子中量，炭化粒子・ローム小ブロック少量

第343図　第79号住居跡実測図



第344図　第79号住居跡出土遺物実測・拓影図

遺物　床面及び覆土中から極少量の遺物が出土している。1の深鉢形土器は炉の西側床面から正位の状態で出土している。2の口縁部片は炉内から，3の胴部片はP_3の東側の覆土中から出土している。

第79号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第344図 1	深鉢形土器 縄文土器	A(28.2) B(17.0)	胴上部から口縁部にかけての破片。胴部は外傾して立ち上がり，内彎して口縁部に至る。口縁部文様帯と胴部文様帯に分離され，口縁部文様帯は沈線を沿わせた隆線で楕円区画文と渦巻文を描き，区画内は単節縄文LRが横位回転で施文されている。楕円区画文が口唇部と接続する瘤部は小突起となり，渦巻文も上部は上方向への突起状を呈している。胴部は単節縄文LRが縦位回転で施文され，直線的に垂下する3列の平行沈線に文様が分断されている。沈線間は磨り消されている。	砂粒・長石 にぶい褐色 普通	P76　10% 炉西側床面 (加曽利E II)

第344図２，３は縄文土器片の拓影図である。２は口縁部片で，口縁部文様帯には沈線を沿わせた隆線で楕円形区画が描かれ，区画内には単節縄文ＬＲが施文されている。胴部は縦位回転の単節縄文を地文とし，複列の沈線が垂下されている。幅の狭い沈線間は磨り消されている。中期加曽利ＥⅡ式の範疇と思われる。３は胴部片で，縦位回転の単節縄文ＬＲが沈線区画の磨消帯及び蛇行沈線によって切断されている。時期は中期加曽利ＥⅢ式に比定されると思われる。

所見　本跡の出土遺物は極少量で，中期加曽利ＥⅡ～Ⅲ式期のものが混在しているが，１が床面出土，２が炉内から出土していることから，時期は縄文時代中期加曽利ＥⅡ式期と考えておきたい。

第80号住居跡（第345図）

位置　調査区の中央部やや東側，C18e₃区。

重複関係　本跡は，南西側部分が第79号住居跡に掘り込まれている。

規模と平面形　長径3.75m，短径2.75mの楕円形である。

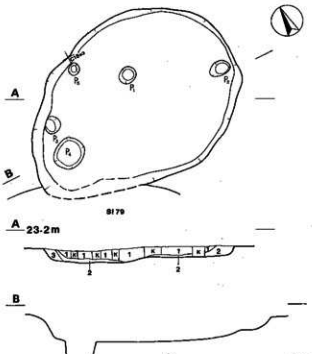
長径方向　N－74°－E

壁　第79号住居跡に掘り込まれている南西壁の一部が確認できなかったが，他は壁高20～40cmで，外傾して立ち上がる。

床　西側部分がやや高くなっているが，他はほぼ平坦である。踏み固められた面は見られない。

ピット　5か所。P_2は長径36cm，短径26cmの楕円形で，深さ42cm，P_3は径35cmの円形で，深さ38cm。東西の壁際に位置する２本柱穴と思われる。P_1（長径29cm，短径25cmの楕円形で，深さ25cm）は中央部北側，P_4（長径55cm，短径46cmの楕円形で，深さ40cm）は西壁寄り，P_5（径20cmの円形で，深さ15cm）は北西壁際に位置しているが，性格は不明である。

覆土　３層からなる。壁際からの自然堆積である。



第345図　第80号住居跡実測図

土層解説
1　褐　色　炭化物・ローム小ブロック・ローム粒子少量，焼土粒子極少量
2　にぶい褐色　ローム粒子中量，炭化粒子少量
3　暗　褐　色　ローム小ブロック少量，炭化粒子極少量

遺物　覆土中から極少量の遺物が出土しているが，細片である。

所見　出土遺物は細片が極少量出土しているだけで，時期を判断するには困難であるが，遺物の時期が縄文時代中期中葉と思われるものの割合が高く，時期もこの前後と考えておきたい。

第81号住居跡（第346図）

位置　調査区の中央部やや東側，C18e4区。

重複関係　本跡は，南側部分が第279号，280号土坑に掘り込まれている。

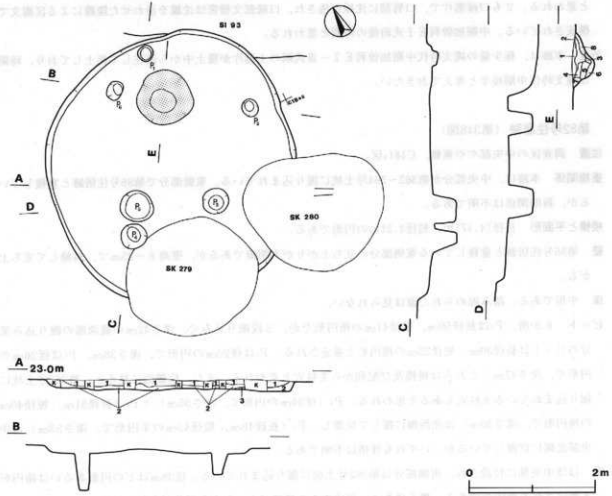
規模と平面形　径4.15mの円形である。

壁　土坑に掘り込まれている南壁の立ち上がりが部分的にとらえられなかったが，残存部は壁高10～18cmで，外傾して立ち上がる。

床　平坦である。踏み固められた面は見られない。

ピット　6か所。P_2～P_4，P_5は長径28～45cm，短径24～40cmの楕円形（P_4は円形）で，深さ35～62cm。これらは，規模及び配列から主柱穴と思われる。P_1は径25cmの円形で，深さ8cm，P_5は長径53cm，短径48cmの楕円形で，深さ40cm。性格は不明である。

炉　北壁に近接して付設されている。径85cmの円形で，床を30cm掘りくぼめた地床炉である。6層の上面が炉床で，火熱を受け，硬化している。



第346図　第81号住居跡実測図

炉土層解説

1　暗赤褐色　焼土粒子中量，焼土小ブロック少量，ローム粒子極少量
2　赤　褐　色　焼土粒子多量，焼土小ブロック中量，焼土中ブロック・炭化粒子少量，ローム粒子極少量
3　明赤褐色　焼土小ブロック・焼土粒子・ローム大ブロック少量
4　赤　褐　色　焼土粒子多量，焼土小ブロック中量，焼土中ブロック・ローム小ブロック極少量
5　赤　褐　色　焼土大ブロック・焼土粒子多量，焼土小ブロック中量，ローム小ブロック極少量
6　にぶい褐色　ローム小ブロック・ローム粒子中量，焼土粒子少量，焼土小ブロック極少量

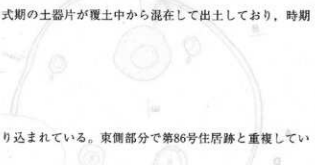
7　暗赤褐色　焼土小ブロック・焼土粒子・ローム小ブロック・ローム粒子少量
8　赤　褐　色　焼土粒子中量，ローム小ブロック・ローム粒子少量，焼土小ブロック極少量

覆土　3層からなる自然堆積である。

土層解説
1　暗　褐　色　焼土小ブロック・炭化物・炭化粒子・ローム中ブロック・ローム小ブロック少量
2　にぶい褐色　ローム粒子中量，炭化物・ローム中ブロック少量
3　褐　　色　炭化粒子・ローム粒子少量

遺物　覆土中から極少量の遺物が出土しているが，細片である。床面からの出土はない。

第347図1，2は縄文土器片の拓影図である。1は波状口縁の波頂部片で，沈線で円形あるいは楕円形の区画文を描き，区画内には単節縄文が施文されている。中期加曽利EⅢ式期の範疇と思われる。2も口縁部片で，口唇部に沈線が施され，口縁部文様帯は沈線を沿わせた隆線による区画文で構成されている。中期加曽利EⅠ式前後の時期と思われる。



第347図　第81号住居跡出土遺物実測・拓影図

所見　本跡は，極少量の縄文時代中期加曽利EⅠ～Ⅲ式期の土器片が覆土中から混在して出土しており，時期は縄文時代中期後半と考えておきたい。

第82号住居跡（第348図）

位置　調査区の中央部やや東側，C18f4区。

重複関係　本跡は，中央部分が第362～364号土坑に掘り込まれている。東側部分で第86号住居跡と重複しているが，新旧関係は不明である。

規模と平面形　長径〔4.47〕m，短径4.21mの円形である。

壁　第86号住居跡と重複している東側部分の立ち上がりが不明瞭であるが，壁高8～25cmで，外傾して立ち上がる。

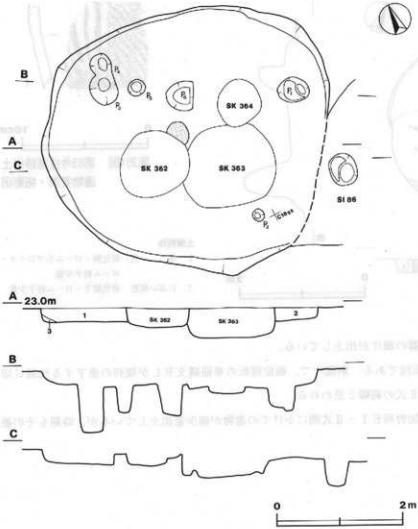
床　平坦である。踏み固められた面は見られない。

ピット　6か所。P_1は長径50cm，短径41cmの楕円形だが，2段掘り込みで，深さ42cmの最深部の掘り込み部分のピットは長径30cm，短径22cmの楕円形と推定される。P_2は径20cmの円形で，深さ38cm，P_5は径26cmの円形で，深さ47cm。これらは規模及び配列から主柱穴と思われる。また，位置的に見ると，第362号土坑に掘り込まれている主柱穴もあると思われる。P_3（径34cmの円形で，深さ55cm）とP_4（長径51cm，短径40cmの楕円形で，深さ80cm）は北西側に接して位置し，P_6（長径48cm，短径43cmの半円形で，深さ53cm）は中央部北側に位置しているが，いずれも性格は不明である。

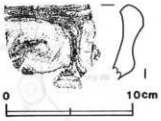
炉　ほぼ中央部に付設され，南側部分は第362号土坑に掘り込まれている。径38cmほどの円形あるいは楕円形と推定される地床炉である。覆土はなく，炉床のみの確認であったが，硬化はしていない。

覆土　3層からなる。自然堆積と思われる。

土層解説
1　褐　色　ローム粒子・ローム小ブロック少量
2　灰褐色　炭化粒子・ローム粒子少量
3　褐　色　ローム粒子中量，ローム大ブロック少量



第348図　第82号住居跡実測図



第349図　第82号住居跡出土遺物実測・拓影図

遺物　覆土中から少量の遺物が出土しているが，いずれも細片である。

第349図1は縄文土器片の拓影図である。口縁部片で，形の崩れた渦巻文が沈線を沿わせた隆線で描かれている。中期加曽利EⅢ式に比定されると思われる。

所見　本跡は，床面出土の遺物はなく，中期中峠式期～加曽利EⅢ式期までの遺物が混在している。主体となる遺物は縄文時代中期加曽利EⅡ～Ⅲ式期で，本跡の時期もこの付近と考えられる。

第83号住居跡（第350図）

位置　調査区の中央部やや東側，C18es区。

重複関係　本跡は，北西側部分が第287号，301号及び321号土坑に，南東側部分が第381号土坑に掘り込まれている。

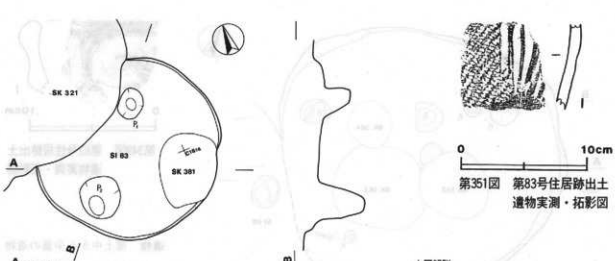
規模と平面形　径2.95mの円形と推定される。

壁　土坑と重複している北西側部分と南東側部分の立ち上がりが不明だが，残存部は壁高15～18cmで，外傾あるいはほぼ垂直に立ち上がる。

床　平坦であるが，南側から北側に向かい傾斜している。踏み固められた面は見られない。

ピット　2か所。P_1は長径47cm，短径40cmの楕円形で，深さ41cm，P_2は長径66cm，短径63cmの卵形で，深さ75cm。本跡に伴う柱穴と思われる。

覆土　2層からなる自然堆積である。



第351図 第83号住居跡出土遺物実測・拓影図

第350図 第83号住居跡実測図

遺物 覆土中から極少量の縄文土器の細片が出土している。

第351図1は縄文土器片の拓影図である。胴部片で，縦位回転の単節縄文ＲＬが複列の垂下する沈線に切られている。中期加曽利ＥⅠ～Ⅱ式の範疇と思われる。

所見 本跡からは，縄文時代中期加曽利ＥⅠ～Ⅱ式期にかけての遺物が極少量出土しているが，時期もその範疇と考えられる。

第88号住居跡（第352図）

位置 調査区の東部，C18f_6区。

重複関係 本跡は，中央部分が第354～356号土坑に，東側部分が第368号土坑に，南側部分が第357号土坑に掘り込まれている。

規模と平面形 長径5.38m，短径4.80mの楕円形である。

長径方向 Ｎ－26°－Ｅ

壁 東側部分と南側部分が土坑と重複しているため，立ち上がりを確認できない部分があるが，残存部は壁高3～10cmで，外傾して立ち上がる。

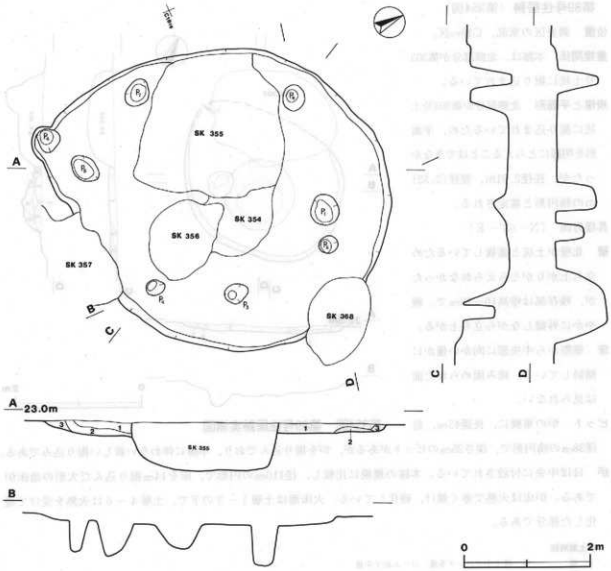
床 中央部分が土坑に掘り込まれているが，残存部は平坦である。踏み固められた面は見られない。

ピット 8か所。P_1，P_3～P_5，P_7，P_8は長径30～51cm，短径25～40cmの楕円形で，深さ44～66cmの。規模及び配列から主柱穴と思われる。P_2は径30cmの円形でP_1の東側に位置し，深さ46cm，補助柱穴的な性格が考えられる。P_6（径35cmの不整円形で，深さ63cm）は南西壁を掘り込んでいるが，性格不明である。

覆土 3層からなる。褐色土が壁際から流れ込んだ自然堆積である。

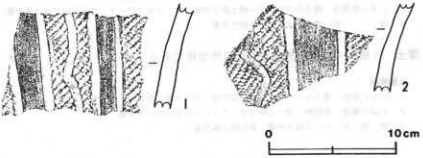
土層解説
1 褐 色 ローム粒子中量，炭化粒子少量，焼土粒子・ローム小ブロック極少量
2 褐 色 ローム粒子中量，ローム小ブロック少量，炭化粒子・焼土粒子・ローム中ブロック極少量
3 褐 色 ローム粒子中量，焼土粒子・炭化粒子・ローム中ブロック・ローム小ブロック少量

遺物 覆土中から極少量の遺物が出土しているが，細片である。



第352図　第88号住居跡実測図

第353図１，２は縄文土器片の拓影図である。いずれも胴部片で，縦位回転の単節縄文ＲＬが地文で，沈線区画の磨消帯と蛇行沈線が垂下されている。中期加曽利ＥⅢ式に比定される土器である。



第353図　第88号住居跡出土遺物実測・拓影図

所見　本跡は，中央部分が土坑に掘り込まれているため炉の有無は確認できなかった。出土遺物が極少量で，すべて覆土中からの出土であるため時期の判断は難しいが，縄文時代中期加曽利ＥⅢ式期の遺物がほとんどであり，時期はこの前後と思われる。

第89号住居跡（第354図）

位置　調査区の東部，C18e6区。

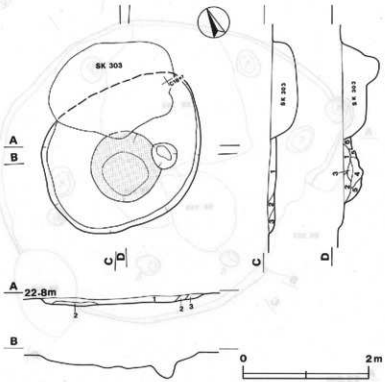
重複関係　本跡は，北側部分が第303号土坑に掘り込まれている。

規模と平面形　北側部分が第303号土坑に掘り込まれているため，平面形を明確にとらえることはできなかったが，長径2.91m，短径〔2.52〕mの楕円形と推定される。

長径方向　〔N－63°－E〕

壁　北壁が土坑と重複しているため立ち上がりがとらえられなかったが，残存部は壁高10～15cmで，緩やかに外傾しながら立ち上がる。

床　壁際から中央部に向かい僅かに傾斜している。踏み固められた面は見られない。



第354図　第89号住居跡実測図

ピット　炉の東側に，長径45cm，短径38cmの楕円形で，深さ25cmのピットがあるが，炉を掘り込んでおり，本跡に伴わない新しい掘り込みである。

炉　ほぼ中央に付設されている。本跡の規模に比較し，径110cmの円形で，床を14cm掘り込んだ大形の地床炉である。炉床は火熱で赤く焼け，硬化している。火床面は土層1～3の下で，土層4～6は火熱を受けて硬化した部分である。

炉土層解説

1　褐　　色　焼土小ブロック多量，ローム粒子中量
2　褐　　色　焼土小ブロック中量，ローム中ブロック・ローム粒子少量
3　赤　褐　色　焼土小ブロック・焼土粒子多量
4　暗赤褐色　焼土大ブロック・焼土中ブロック・焼土粒子多量
5　にぶい赤褐色　焼土小ブロック・焼土粒子中量，ローム大ブロック・ローム中ブロック少量
6　褐　　色　焼土粒子・ローム粒子少量

覆土　3層からなる。壁際からの自然堆積である。

土層解説

1　にぶい褐色　焼土小ブロック中量，炭化物・ローム粒子少量
2　にぶい褐色　炭化物・ローム中ブロック・ローム小ブロック少量
3　明　褐　色　ローム粒子中量，炭化粒子極少量

遺物　覆土中から遺物が出土しているが，いずれも細片で極少量である。

第355図1，2は縄文土器片の拓影図である。いずれも胴部片で，地文の半節縄文が沈線区画の磨消帯に切断されている。中期加曽利EⅢ式に比定される土器である。

第355図　第89号住居跡出土遺物実測・拓影図

所見　本跡は，規模に反して大形の炉を有している。出土遺物は極少量であるが，縄文時代中期加曽利ＥⅢ式期の遺物がほとんどであり，本跡の時期と大きな隔たりはないと思われる。

第92号住居跡（第356図）

位置　調査区の中央部やや東側，C18c4区。

重複関係　本跡は，東側部分で第93号住居跡を掘り込んでいる。

規模と平面形　第93号住居跡と重複している東側部分が確認できなかったが，長径4.90mの円形と推定される。

壁　半分の西側部分しか立ち上がりを確認できなかったが，残存部は壁高５～18cmで，外傾して立ち上がる。

床　北側に向かい僅かに傾斜しているが，平坦である。踏み固められた面は見られない。

ピット　９か所。P_1～P_4は長径62～74cm，短径60～64cmの円形あるいは楕円形で，深さ30～54cm。これらは規模及び配列から主柱穴と思われる。P_{11}は第93号住居跡のピット，他は性格不明である。

覆土　２層からなる。暗褐色土主体の自然堆積と思われる。

土層解説
1　暗褐色　ローム粒子少量，焼土粒子極少量
2　暗褐色　ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子多量

遺物　覆土中から極少量の遺物が出土している。いずれも細片で，器形及び文様の判別できるものはない。

所見　本跡は炉が確認されず，また第93号住居跡と重複している東側部分は壁の立ち上がりもとらえられなかった。平面形は残存している西側部分の壁と主柱穴からの推定である。時期を判断する遺物が極少量で，しかも細片であるが，縄文時代中期の範疇と思われる遺物が覆土中から出土しており，時期はこの前後と考えられる。

第93号住居跡（第356図）

位置　調査区の中央部やや東側，C18d5区。

重複関係　本跡は，東側部分の床が第369号土坑に，西側部分が第92号住居跡に掘り込まれている。南側部分で第81号住居跡と僅かに重複しているが，新旧関係は不明である。

規模と平面形　覆土が薄く，南側部分の立ち上がりしか確認できず，規模と平面形は不明である。

壁　南壁が部分的に残存しており，壁高８cmで，外傾して立ち上がる。

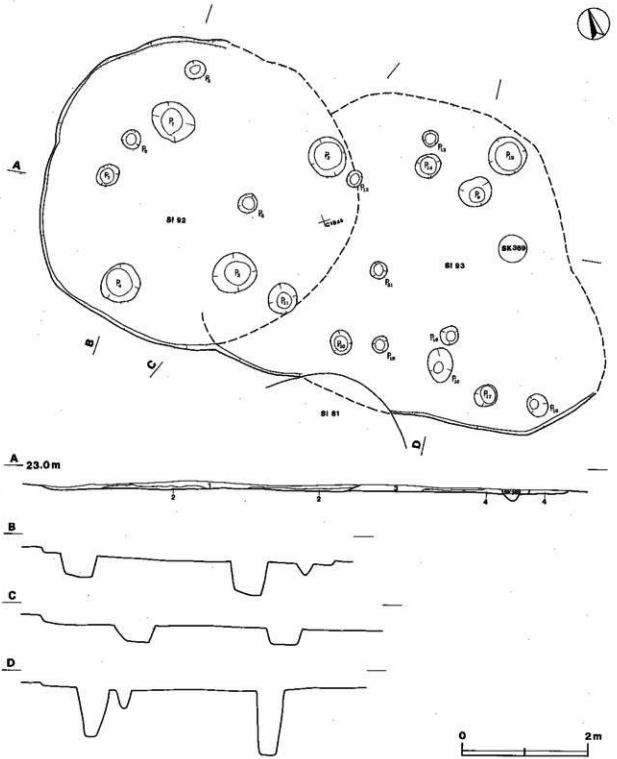
床　北側に向かい僅かに傾斜しているが，平坦である。踏み固められた面は見られない。

ピット　13か所。P_9～P_{13}は長径49～55cm，短径40～45cmの楕円形で，深さ80～104cm。これらは規模及び配列から主柱穴と思われる。P_{14}（長径42cm，短径38cmの楕円形で，深さ32cm），P_{20}（長径40cm，短径32cmの楕円形で，深さ45cm）は主柱穴間に位置し，補助柱穴と思われる。P_6も主柱穴間に位置しているが，深さは10cmで，規模的には疑問である。他は性格不明である。

覆土　２層からなる。覆土が薄く詳細は不明だが，暗褐色土が自然堆積したと思われる。

土層解説
3　暗褐色　ローム小ブロック少量，焼土粒子極少量
4　暗褐色　ローム小ブロック・ローム粒子中量

遺物　覆土中から極少量の遺物が出土しているが，文様及び器形の判別できるものはない。



第356図　第92・93号住居跡実測図

所見　本跡から炉は確認されなかった。プランを主柱穴と思われるピットの配列から推定したが，西側部分が第92号住居跡と重複し，北側部分は覆土が薄く，壁の立ち上がりがとらえられず，規模及び平面形は不明が妥当である。時期は，判断する遺物がなく重複関係から推定すると，第92号住居跡が縄文時代中期頃と思われるので，それ以前と考えられる。

第114号住居跡（第357図）

位置　調査区の東部，C18g9区。

重複関係　本跡は，中央部分が第569号，570号土坑に，南東側部分が第560号，561号土坑に掘り込まれている。また，中央部を南側から北側に第20号溝に掘り込まれている。

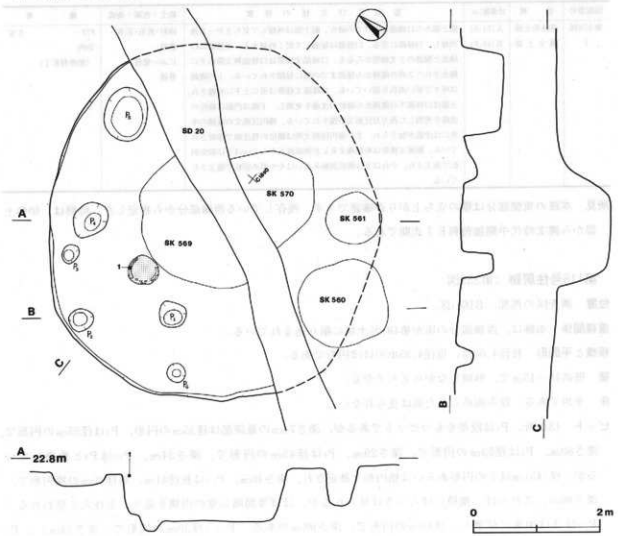
規模と平面形　覆土が薄く，東側部分の平面形が確認できなかったが，長径〔5.76〕m，短径〔5.50〕mの円形と推定される。

壁　西側部分が残存しており，壁高2～5㎝で，外傾して立ち上がる。

床　平坦である。踏み固められた面は見られない。

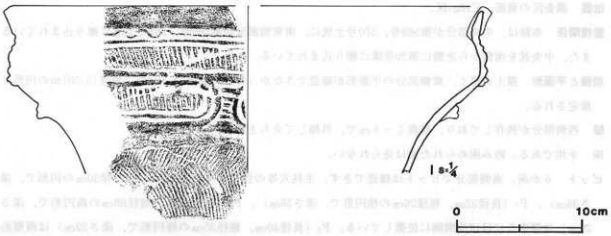
ピット　6か所。東側部分でピットは確認できず，主柱穴等の性格は不明である。P_6（径30㎝の円形で，深さ38㎝），P_3（長径32㎝，短径26㎝の楕円形で，深さ58㎝），P_5（長径86㎝，短径68㎝の楕円形で，深さ29㎝）は壁寄りにほぼ等間隔に位置している。P_2（長径40㎝，短径35㎝の楕円形で，深さ29㎝）は西壁沿い，P_4（長径63㎝，短径48㎝の楕円形で，深さ63㎝）は炉の北側，P_1（長径46㎝，短径42㎝の不整楕円形で，深さ54㎝）は炉の南側に位置している。

炉　中央部西側に付設されていると思われる。径48㎝の円形で，深鉢形土器を埋設した土器埋設炉である。炉床は火熱を受け，硬化している。



第357図　第114号住居跡実測図

覆土　暗褐色土の単一層が薄く本跡を覆っており，詳細は不明である。



第358図　第114号住居跡出土遺物実測・拓影図

遺物　1は炉体土器で，正位の状態で炉に埋設されていた。他は極少量の細片が覆土中から出土しているだけで，器形の判別できるものはない。

第114号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第358図 1	深鉢形土器 縄文土器	A(51.0) B(18.8)	胴上部から口縁部にかけての破片。胴上部は外傾して立ち上がった後内弯し，口縁部に至る。口唇部は肥厚して短く外傾する。文様帯は口縁部と胴部の2文様帯からなる。口縁部文様帯は口唇部無文帯の下に横走きれた2列の隆線から頂部までの間に縦開されている。上の隆線は所々で短い波状を描いている。口縁部文様帯は更に上下に分離され，上部は口唇部下の隆線から縦位の沈線を充填し，下部は内部に縦位の沈線を充填した長方形区画文が描かれている。楕円区画文の縦線の中央には沈線が加えられ，また楕円区画文間は縦位の短沈線で接続されている。胴部文様帯は単節縄文RLが頂部直下から3cmほどは縦位開転で施文され，それ以下は横位開転あるいはやや斜め開転で施文されている。	砂粒・長石・石英・雲母 にぶい褐色 普通	P77　5% 炉内 (加曽利EⅠ)

所見　本跡の東側部分は壁の立ち上がりが確認できず，残存している西側部分から推定した。時期は，炉体土器から縄文時代中期加曽利EⅠ式期である。

第118号住居跡（第359図）

位置　調査区の西部，B16e$_4$区。

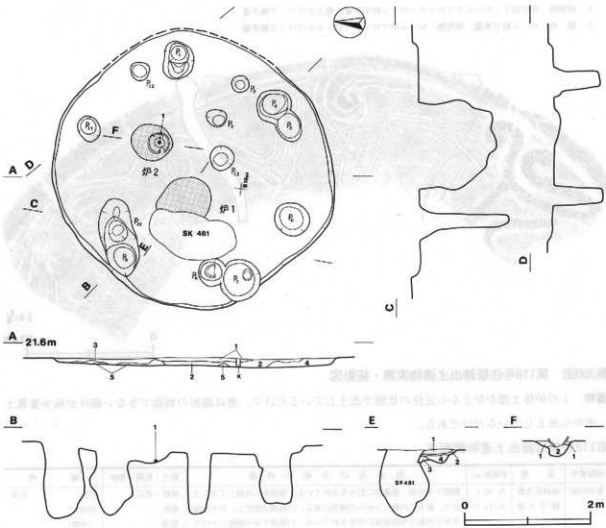
重複関係　本跡は，西側部分の床が第481号土坑に掘り込まれている。

規模と平面形　長径4.60m，短径4.35mのほぼ円形である。

壁　壁高10～15cmで，外傾しながら立ち上がる。

床　平坦である。踏み固められた面は見られない。

ピット　13か所。P_1は段差をもつピットであるが，深さ74cmの最深部は径35cmの円形，P_4は径55cmの円形で，深さ80cm，P_6は径53cmの円形で，深さ29cm，P_8は径45cmの円形で，深さ34cm，P_{16}はP_9と重複しているが，径(45)cmほどの円形あるいは楕円形と推定され，深さ46cm，P_{11}は長径41cm，短径35cmの楕円形で，深さ80cm。これらは，規模にばらつきは見られるが，ほぼ等間隔に壁の内側を巡り，主柱穴と思われる。P_{13}はほぼ中央に位置し，径40cmの円形で，深さ98cmである。P_{12}（径30cmの円形で，深さ24cm），P_3（径28cmの円形で，深さ57cm）は主柱穴間に位置し，補助柱穴の可能性も考えられる。他は性格不明である。



第359図　第118号住居跡実測図

炉　2か所。炉1は中央部やや西側に付設されており，西側部分は第481号土坑に掘り込まれている。残存部は南北径76cmで，楕円形と推定され，床を22cm掘りくぼめた地床炉である。炉床は火熱で赤く焼け，硬化している。炉2は中央部北側に付設されており，長径65cm，短径58cmの楕円形で，やや南側に深鉢形土器を埋設した土器埋設炉である。炉床は硬化しているが，それほど赤くはない。

炉1土層解説

1　暗　褐　色　焼土小ブロック・炭化物少量，焼土中ブロック・ローム小ブロック極少量
2　極暗赤褐色　焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
3　暗赤褐色　焼土小ブロック・焼土粒子中量，炭化粒子少量，焼土中ブロック極少量
4　暗　褐　色　焼土粒子・炭化粒子少量，ローム小ブロック極少量

炉2土層解説

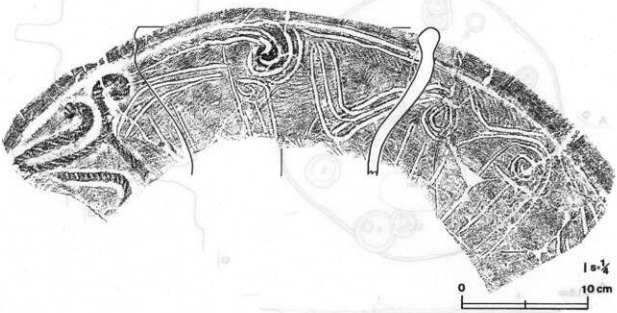
1　褐　色　ローム粒子中量，焼土小ブロック・ローム小ブロック少量
2　褐　色　焼土小ブロック・ローム小ブロック中量，焼土粒子・ローム粒子少量

覆土　5層からなる。北側部分の覆土が褐色土主体，南側部分の覆土が暗褐色土主体の自然堆積と思われる。

土層解説

1　暗褐色　焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子・ローム小ブロック少量
2　暗褐色　ローム粒子中量，焼土粒子・炭化粒子・ローム小ブロック少量
3　褐　色　ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子・ローム小ブロック極少量

4　暗褐色　炭化粒子・ローム小ブロック・ローム粒子少量，焼土小ブロック極少量
5　褐　色　ローム粒子多量，炭化物・ローム中ブロック・ローム小ブロック極少量



第360図　第118号住居跡出土遺物実測・拓影図

遺物　1の炉体土器が炉2から正位の状態で出土しているだけで，他は器形の判別できない細片が極少量覆土中から出土しているだけである。

第118号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備　考	
第360図 1	深鉢形土器 縄文土器	A 32.1 B (15.7)	胴部下半欠損。意識的に打ち欠かれている。頸部から外傾して立ち上がり，僅かに内彎しながら口縁部に至る。口唇部は肥厚し，やや内面を状で外面は突出気味に作出されている。口唇部下から胴部にかけては沈線及び隆帯で直線や曲線を組み合わせたモチーフが描かれているが，単位的な文様はない。隆帯上及び器面には，部分的に単節縄文RLが施文されている。	砂粒・長石 橙色 普通	P78 炉内 (中峠)	50%

所見　本跡の時期は，炉体土器から縄文時代中期中峠式期である。

第119号住居跡（第361図）

位置　調査区の西部，B16h₈区。

重複関係　本跡は，南側部分が第505号，527号及び547号土坑に掘り込まれている。北側部分で第158号住居跡を，北西側部分で第491号土坑を掘り込んでいる。

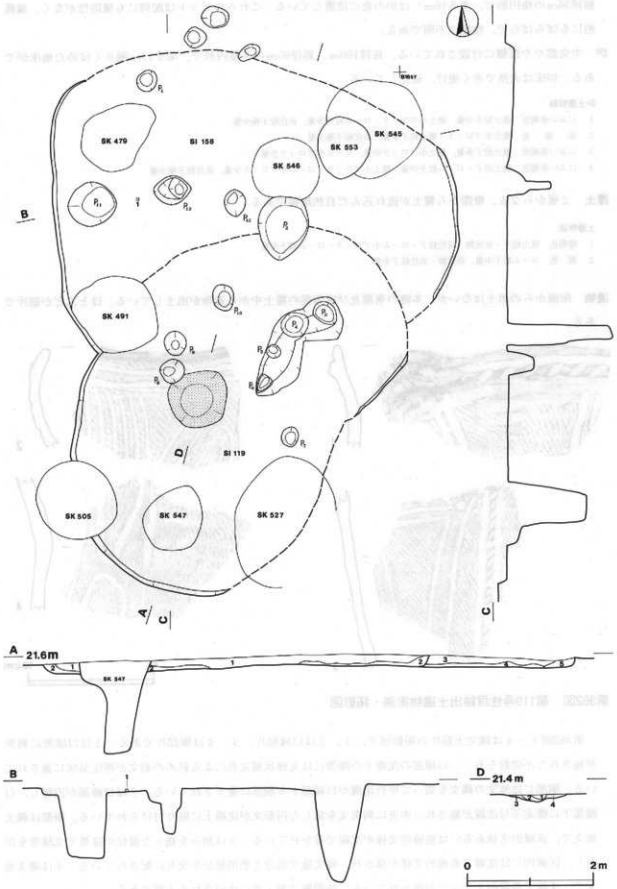
規模と平面形　第158号住居跡と重複している北側部分及び第527号土坑と重複している南側部分の壁の立ち上がりは確認できなかったが，長径〔6.25〕m，短径〔4.10〕mと推定される不定形である。

長径方向　N－23°－E

壁　東壁と西壁が残存しており，壁高6～15cmで，外傾して立ち上がる。

床　平坦である。踏み固められた面は見られない。

ピット　8か所。P_3～P_6は炉の北東側に見られる弓なりの溝状の落ち込み内に10～28cmの間隔をおいて位置し，深さは57～124cmである。P_7は東側に位置し，長径32cm，短径26cmの楕円形で，深さ50cm。P_8（径38cmの円形で，深さ46cm），P_9（径38cmの円形で，深さ170cm）は炉の北西に近接している。P_{10}（長径40cm，



第361図　第119・158号住居跡実測図

短径36cmの楕円形で，深さ16cm）は炉の北に位置している。これらのピットは配列にも規則性がなく，規模的にもばらばらで，性格は不明である。

炉　中央部やや西側に付設されている。長径100cm，短径95cmの不整円形で，床を11cm掘りくぼめた地床炉である。炉床は火熱で赤く焼け，硬化している。

炉土層解説

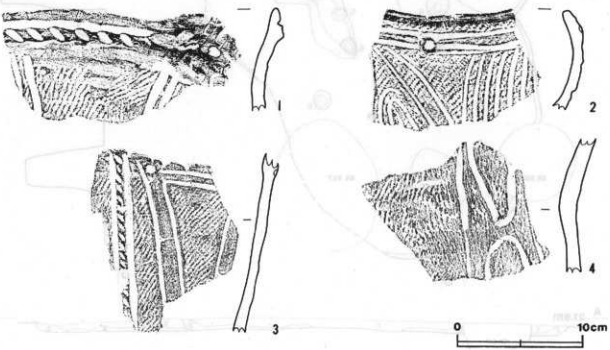
1　にぶい赤褐色　焼土粒子中量，焼土小ブロック・ローム粒子少量，炭化粒子極少量
2　赤　褐　色　焼土小ブロック・焼土粒子多量，炭化粒子極少量
3　にぶい赤褐色　焼土粒子多量，焼土小ブロック中量，ローム小ブロック少量
4　にぶい赤褐色　焼土粒子・ローム粒子中量，焼土小ブロック・ローム小ブロック少量，炭化粒子極少量

覆土　2層からなる。壁際から覆土が流れ込んだ自然堆積である。

土層解説

1　暗褐色　焼土粒子・炭化物・炭化粒子・ローム小ブロック・ローム粒子少量
2　褐　色　ローム粒子中量，炭化物・炭化粒子少量

遺物　床面からの出土はないが，本跡の東部及び南西部の覆土中から遺物が出土している。ほとんどが細片である。



第362図　第119号住居跡出土遺物実測・拓影図

第362図1～4は縄文土器片の拓影図で，1，2は口縁部片，3，4は胴部片である。1は口縁部に刺突が施された小突起を有し，口縁部の沈線下の隆帯には丸棒状施文具による斜めの刻文が押圧気味に施されている。胴部には地文の縄文を切って平行沈線が口縁部から胴部に垂下されている。2は口縁部が内彎し，口縁部下に横走平行沈線が施され，中央に刺突文を施した円形文が沈線上に貼り付けられている。胴部は縄文地文で，直線的文様あるいは曲線的文様が沈線で描かれている。3は刻みを施した縦位の隆帯で文様帯を区画し，区画内には沈線で直線的文様が描かれ，縄文施文部分と磨消部分が交互に配されている。4は縄文地文で，沈線で曲線的モチーフが描かれている。後期堀之内1式に比定される土器である。

所見　本跡の北側は，第158号住居跡を切っている土層の立ち上がりからの推定である。時期は，出土遺物の主体を占める縄文時代後期堀之内１式期と思われる。

第158号住居跡（第361図）

位置　調査区の西部，B16$_{g6}$区。

重複関係　本跡は，北東側部分の床が第553号土坑に，南側部分が第119号住居跡に，北西側部分の床が第479号土坑に掘り込まれている。また，北東側部分で第545号，546号土坑と，南西側部分で第491号土坑と重複しているが，新旧関係は不明である。

規模と平面形　東西径6.8m，南側部分と北側部分は立ち上がりが確認できず，南北径及び平面形は不明である。

壁　東壁と西壁の立ち上がりが部分的にとらえられ，壁高２～19cmで，外傾して立ち上がる。

床　平坦である。踏み固められた面は見られない。

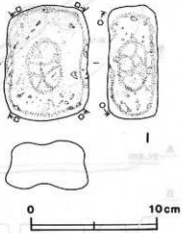
ピット　５か所。規模もばらばらで，配列にも規則性がなく，性格は不明である。

覆土　３層からなる。下層に褐色土が堆積した後，上層を暗褐色土が覆った自然堆積である。

土層解説
3　暗褐色　炭化粒子中量，ローム粒子少量
4　褐　色　ローム粒子中量，炭化粒子少量，ローム中ブロック極少量
5　褐　色　ローム粒子中量，炭化粒子少量

遺物　中期と思われる縄文土器片が極少量出土しているが，いずれも細片で，器形のわかるものはない。１の凹石は西部床面から出土している。

所見　本跡は，炉の有無や規模及び平面形等不明な部分が多い。時期を判断する遺物が出土していないので特定は困難であるが，第119号住居跡が縄文時代後期堀之内１式期頃の住居跡なので，時期はそれ以前と思われる。



第363図
第158号住居跡出土遺物実測図

第158号住居跡出土石製品観察表

図版番号	器　種	計測値 長さ(cm)	計測値 幅(cm)	計測値 厚さ(cm)	計測値 重量(g)	石　質	備　考
第363図1	敲　石	9.1	6.8	3.9	434.9	安　山　岩	619　敲・凹石兼用　表・裏・側面に凹み　西部床面

第121号住居跡（第364図）

位置　調査区の西部，B16$_{d6}$区。

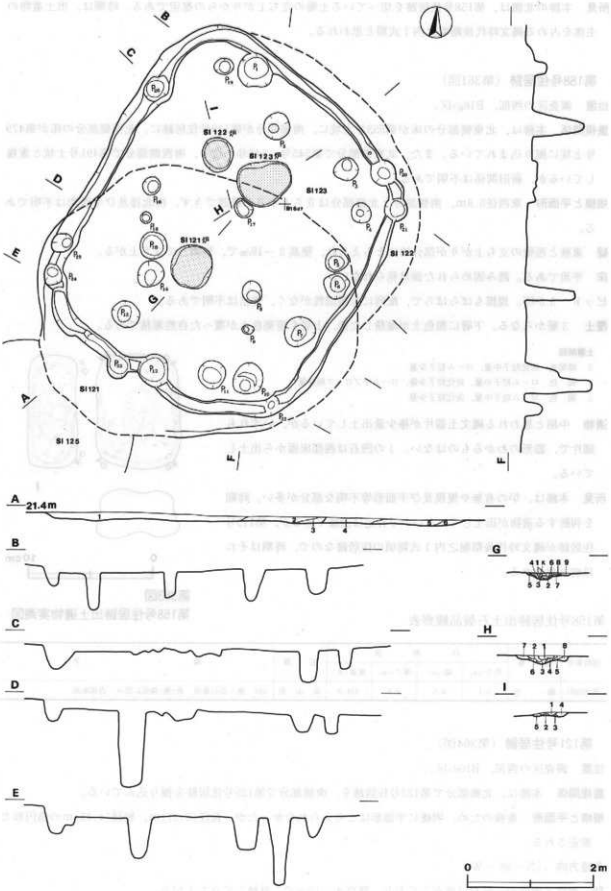
重複関係　本跡は，北側部分で第123号住居跡を，南側部分で第125号住居跡を掘り込んでいる。

規模と平面形　重複のため，明確に平面形はとらえられなかったが，長径〔5.27〕m，短径〔4.45〕mの楕円形と推定される。

長径方向　〔N－68°－W〕

壁　西壁と南壁の一部だけ残存しており，壁高４～15cmで，外傾して立ち上がる。

床　平坦である。踏み固められた面は見られない。



第364図　第121・122・123号住居跡実測図

ピット　推定線内に18か所。P_{17}は長径32cm，短径24cmの不整楕円形で，深さ35cm，P_7は長径50cm，短径45cmの卵形で，深さ29cm，P_{23}は第123号住居跡の溝内に位置しており，径40cm程の円形で，深さ44cm，P_{25}も溝内に位置し，径32cmの円形で，深さ25cm。これらは，炉を囲むように位置しており，規模的にも主柱穴の可能性があるが，第123号住居跡と本跡が重複しており，判断は難しい。他は第123号住居跡に伴うものか，または性格不明のピットである。

炉　中央部やや北側に付設されていると推定される。長径71cm，短径66cmの楕円形で，床を10cm掘りくぼめた地床炉である。炉床は火熱で赤く焼け，硬化した焼土ブロックで凸凹である。

炉土層解説

1　褐　色　焼土小ブロック・焼土粒子・ローム小ブロック・ローム粒子少量
2　褐　色　焼土小ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子少量
3　赤褐色　焼土小ブロック・ローム中ブロック・ローム粒子少量
4　褐　色　焼土小ブロック中量，ローム小ブロック・ローム粒子少量
5　明褐色　ローム小ブロック中量，焼土小ブロック少量
6　褐　色　ローム粒子多量
7　赤褐色　焼土小ブロック中量，焼土大ブロック・炭化物・ローム小ブロック・ローム粒子極少量
8　褐　色　ローム小ブロック中量，焼土小ブロック・ローム粒子少量
9　明褐色　焼土小ブロック・ローム中ブロック・ローム粒子中量

覆土　3層からなる。壁際からの自然堆積である。

土層解説

1　暗褐色　炭化粒子・ローム小ブロック・ローム粒子少量，焼土小ブロック極少量
2　暗褐色　ローム小ブロック・ローム粒子少量，焼土粒子・炭化物極少量
3　褐　色　ローム粒子中量，炭化粒子極少量

遺物　覆土中から極少量の遺物が出土している。いずれも中期中葉前後と思われる土器片で，器形の判別できるものはない。

第365図1は縄文土器片の拓影図である。波状を呈する口縁部片で，口縁部の肥厚面下に沈線が施され，胴部は地文の縄文を切る沈線が見られる。中期阿玉台Ⅳ式の範疇と思われる。

第365図　第121号住居跡
出土遺物実測・拓影図

所見　本跡は，北側が第123号住居跡，南側が第125号住居跡と重複しているため，壁の立ち上がりは部分的に確認できただけである。平面形は，土層の立ち上がりと残存している壁からの推定である。時期は，遺物が少なく特定は難しいが，出土遺物が縄文時代中期中葉前後のものの割合が高く，その前後と思われる。

第122号住居跡（第364図）

位置　調査区の西部，B16c7区。

重複関係　本跡の南側の大部分は第123号住居跡に掘り込まれている。

規模と平面形　本跡は，第123号住居跡との重複で，北西側部分の覆土と炉が確認できただけで，規模及び平面形は不明である。

壁　北側部分の覆土が徐々に薄くなり，壁の立ち上がりは確認できなかった。

床　第123号住居跡の北から東側に巡る溝の外側が本跡の床と思われるが，残存部が僅かで，踏み固められた面は見られない。

ピット　炉を中心に推定すると，P_{19}，P_3，P_8（長径36cm，短径30cmの楕円形で，深さ79cm），P_{18}が考えられるが，P_8以外は第123号住居跡に伴う可能性が高く，詳細は不明である。

炉　やや西側に偏って付設されていると推定される。長径65cm，短径48cmの楕円形で，床を5cmほど掘りくぼめた地床炉である。炉床は硬化しているが，赤くはない。本跡の南東側に近接してもう1基の炉があるが，新しい時期の炉と推定され，重複関係から第123号住居跡の炉と判断した。

炉土層解説
1　褐　色　焼土大ブロック中量，焼土小ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子少量
2　明褐色　ローム小ブロック・ローム粒子中量，焼土小ブロック・ローム中ブロック少量
3　明褐色　ローム小ブロック・ローム粒子中量，焼土小ブロック少量
4　褐　色　ローム中ブロック多量，焼土粒子極少量
5　褐　色　焼土小ブロック・ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子少量

覆土　北側の覆土が僅かに1層だけ確認できたが，堆積状況等詳細は不明である。

土層解説
6　暗褐色　炭化粒子・ローム粒子少量，炭化物極少量

遺物　覆土中から縄文土器片が数点出土しているが，いずれも細片である。

所見　本跡は，中央部が第123号住居跡に掘り込まれており，平面形やピットなど不明な部分が多い。また，時期を判断する遺物が出土していないため，時期は第123号住居跡との重複からの推定となるが，縄文時代中期中葉頃と思われる。

第123号住居跡（第364図）

位置　調査区の西部，B16e区。

重複関係　本跡は，北側部分が第122号住居跡と，南側部分が第121号住居跡と重複している。第122号住居跡より本跡の方が新しいが，第121号住居跡よりは古い。

規模と平面形　長軸6.33m，短軸5.20mの不整隅丸長方形である。

長軸方向　N－31°－E

壁　重複のため，西壁だけが残存しており，壁高4～15cmで，ほぼ垂直に立ち上がる。

壁溝　壁に沿って，上幅15～45cm，下幅8～23cmで，断面「U」字状の溝が全周している。溝内にはピットが確認されている。

床　平坦である。踏み固められた面は見られない。

ピット　26か所。P_3，P_6，P_{10}，P_{13}，P_{18}，P_{19}は長径30～50cm，短径28～45cmの円形あるいは楕円形のピットで，深さ51～68cm（P_{10}は2段掘り込みで，最深部が107cmあるが，1段目の掘り込みは53cmで，2本のピットの重複と考え，深さ53cmの掘り込みが本跡に伴うものと判断）。これらは，規模及び配列から主柱穴と思われる。壁溝内のP_{21}，P_{22}，P_{24}，P_{26}（径25～35cmの円形あるいは楕円形で，深さ22～41cm）はほぼ同規模で，それぞれ対応する位置にあり，補助柱穴的な性格をもつと思われる。P_5，P_{11}はそれぞれP_6，P_{10}に近接して位置するほぼ同規模のピットであり，主柱穴の可能性も考えられるが，位置的にはP_6，P_{10}が自然である。P_7，P_{23}，P_{25}，P_{17}は第121号住居跡に伴う可能性がある。他は性格不明である。

炉　中央部やや北側に付設され，第121号住居跡の床下から確認されている。長径88cm，短径70cmの卵形で，床を11cm掘りくぼめた地床炉である。炉床は火熱で赤く焼け，硬化した焼土ブロックで凸凹である。

炉土層解説
1　褐　色　焼土中ブロック多量，ローム小ブロック・ローム粒子中量，焼土粒子極少量
2　褐　色　焼土小ブロック中量，焼土中ブロック・焼土粒子・ローム小ブロック・ローム粒子少量
3　褐　色　焼土小ブロック・ローム粒子中量，ローム小ブロック少量

4　明褐色　ローム中ブロック中量，焼土小ブロック・焼土粒子少量
5　褐　色　ローム小ブロック中量，焼土小ブロック・焼土粒子・ローム焼土少量
6　褐　色　焼土小ブロック・ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子少量
7　褐　色　ローム小ブロック・ローム粒子中量，焼土小ブロック・焼土粒子少量
8　褐　色　焼土粒子・ローム小ブロック・ローム粒子少量

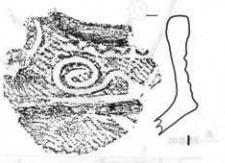
覆土　南側部分が第121号住居跡に掘り込まれ，北側が部分的に確認できただけである。2層からなり，自然堆積と思われる。

土層解説
4　暗褐色　炭化粒子・ローム粒子少量，焼土粒子極少量
5　褐　色　ローム粒子中量，炭化粒子・ローム小ブロック少量

遺物　極少量の遺物が覆土中から出土している。いずれも細片で，器形のわかるものはない。

第366図1は縄文土器片の拓影図である。波状を呈する口縁部片で，口縁部下に交互刺突の連続「コ」字状文，以下は沈線で渦巻文が描かれ，地文に縄文が描かれている。中期中葉式に比定されると思われる。

所見　出土遺物が極少量で時期判断の根拠にはやや不足だが，遺物の時期は縄文時代中期中葉で，第121号住居跡との重複関係からも，本跡の時期は縄文時代中期中葉と思われる。



第366図　第123号住居跡出土遺物
実測・拓影図

第124号住居跡（第367図）

位置　調査区の西部，B16e₀区。

重複関係　本跡は南側部分を第151号住居跡に掘り込まれている。また，北側部分で第131号住居跡と重複しているが，新旧関係は不明である。

規模と平面形　東側から南側にかけての壁の立ち上がりは確認できなかったが，長径〔4.77〕m，短径4.60mの不整円形と推定される。

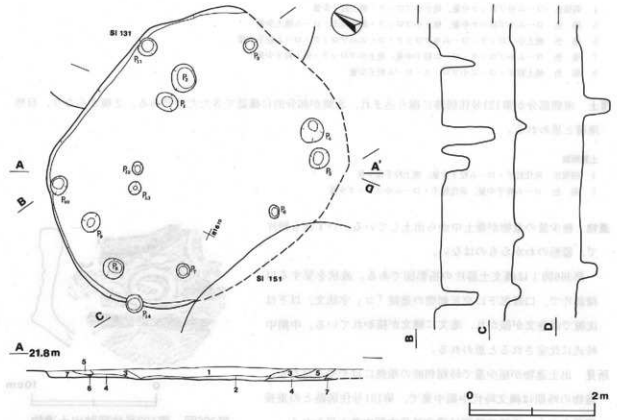
壁　西から北側にかけて残存しており，壁高8～18cmで，外傾して立ち上がる。

床　平坦である。踏み固められた面は見られない。

ピット　14か所。P_3，P_4，P_8は径25～40cm，短径20～34cmの楕円形で，深さ53～70cm。これらは配列から主柱穴と思われる。P_{10}は長径32cm，短径27cmの楕円形で，深さ54cmとほぼ同規模で，位置関係からも主柱穴の可能性がある。P_1，P_6，P_7，P_9は長径22～35cm，短径18～30cmの楕円形で，深さ20～45cm。主柱穴間に位置し，補助柱穴と思われる。P_4の南西側のP_5も深さ31cmで，補助柱穴とも考えられる。他は性格不明である。

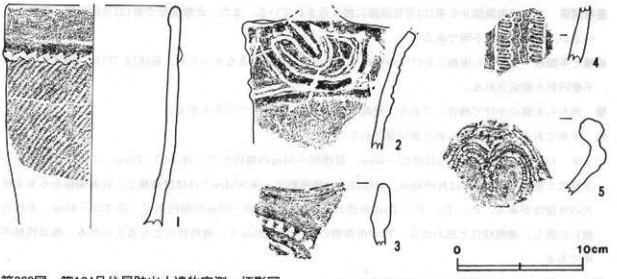
覆土　7層からなる。壁際からの自然堆積である。

土層解説
1　暗褐色　焼土小ブロック・炭化粒子・ローム小ブロック少量，ローム粒子極少量
2　暗褐色　焼土小ブロック中量，焼土粒子・炭化物・ローム小ブロック・ローム粒子少量
3　暗褐色　炭化粒子・ローム粒子少量，焼土小ブロック・ローム中ブロック極少量
4　褐　色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量，炭化粒子極少量
5　暗褐色　ローム小ブロック少量，焼土小ブロック・炭化粒子極少量
6　褐　色　焼土粒子・ローム小ブロック少量，炭化物・ローム中ブロック極少量
7　褐　色　ローム粒子中量，炭化粒子少量



第367図　第124号住居跡実測図

遺物　少量の遺物が覆土中から出土している。1，2の深鉢形土器も破片のまま散在している状況で覆土中から出土している。



第368図　第124号住居跡出土遺物実測・拓影図

第368図3～5は縄文土器片の拓影図である。3は波状を呈する口縁部片で，口縁部下に連続爪形文が見られ，中期阿玉台Ⅲ式に比定される土器である。4は胴部片で，半截竹管による沈線及び縦位に連続する爪形文が見られる。5は口縁部の把手片で，隆線に沿う結節沈線文が施されている。4，5には勝坂Ⅱ式の手法が見られる。

第124号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第369図 1	深鉢形土器 縄文土器	A(13.8) B(17.5)	胴下部から口縁部にかけての破片。胴部は直立気味に立ち上がり，口縁部に至る筒形。口縁部無文帯と胴部文様帯との境に隆線が設けられ，隆線の直下に楕状刺突文が施されている。胴部は単節縄文RLが斜位回転で施文されている。	砂粒・雲母・長石 にぶい橙色 普通	P79　30% 覆土 (勝坂Ⅱ)
2	深鉢形土器 縄文土器	A 13.7 B(9.4)	胴部から口縁部にかけての破片。胴部はやや外傾して立ち上がり，口縁部に至る。口唇部はやや外側に隆曲する。口縁部上端に突起を有するが，欠損しているため詳細不明である。口縁部と胴部上位に高る隆線を接続する隆線に沿って，複列の結節沈線文が施されている。内面及び口唇部に煤が付着している。	砂粒・長石・石英・ 雲母 にぶい赤褐色 普通	P80　40% 覆土 (勝坂Ⅱ)

所見　本跡の東側部分及び北側部分は残存している壁及び柱穴の配列から推定した。出土遺物は縄文時代中期中葉の割合が高く，本跡の時期もその前後と思われる。

第125号住居跡（第369図）

位置　調査区の西部，B16f5区。

重複関係　本跡は，北側部分が第121号住居跡に掘り込まれており，東側部分は第126号住居跡を掘り込んでいる。

規模と平面形　他の住居跡と重複している北側と東側の壁の立ち上がりは確認できなかったが，長軸[3.50]m，短軸[2.95]mの不整隅丸長方形と推定される。

長軸方向　N－29°－E

壁　南側から西側にかけてと北壁の一部が残存しており，壁高10cmほどで，外傾して立ち上がる。

床　平坦である。踏み固められた面は見られない。

ピット　6か所。P_{13}は長径53cm，短径46cmの楕円形で，深さ90cm，P_{14}は長径47cm，短径40cmの楕円形で，深さ60cm，P_{15}は径70cmほどの円形で，深さ98cm，P_{16}は径35cmほどの円形で，深さ66cm，P_{17}は径46cmほどの円形で，深さ79cm，P_{18}は長径42cm，短径26cmの楕円形で，深さ20cm。2本主柱穴と推定すると，P_{13}とP_{16}あるいはP_{17}のセットが考えられる。P_{13}とP_{15}，P_{17}のセットも配列的には考えられるが，対応する北西側に柱穴は見られず，判断は難しい。

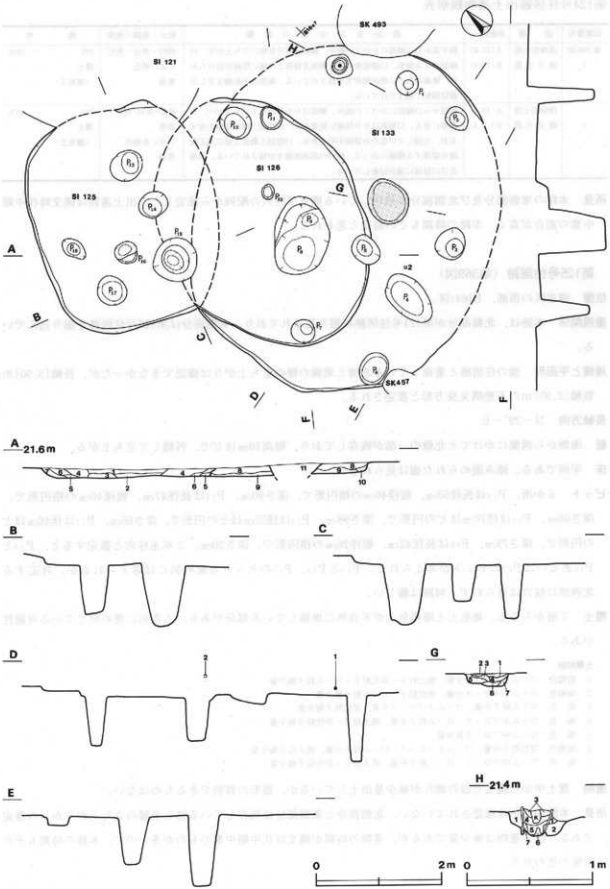
覆土　7層からなる。褐色土と暗褐色土が不自然に堆積している部分があり，人為的に埋め戻している可能性がある。

土層解説

1　暗褐色　ローム小ブロック少量，焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子極少量
2　暗褐色　ローム小ブロック少量，炭化粒子・ローム粒子極少量
3　褐　色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量，炭化粒子極少量
4　褐　色　ローム小ブロック・ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子極少量
5　褐　色　ローム中ブロック極少量
6　暗褐色　炭化粒子中量，ローム小ブロック・ローム粒子少量，焼土粒子極少量
7　褐　色　ローム中ブロック・ローム粒子中量，焼土粒子・炭化粒子極少量

遺物　覆土中から縄文土器の細片が極少量出土しているが，器形の判別できるものはない。

所見　本跡から炉は確認されていない。北側部分と東側部分は残存している壁と土層の立ち上がりからの推定である。出土遺物は極少量であるが，遺物の時期が縄文時代中期中葉のものが多いので，本跡の時期もその前後と思われる。



第369図　第125・126・133号住居跡実測図

第126号住居跡（第369図）

位置　調査区の西部，B16e₆区。

重複関係　本跡は，西側部分が第125号住居跡に掘り込まれており，東側部分は第133号住居跡を掘り込んでいる。

規模と平面形　第125号住居跡と重複している北西側部分が確認できなかったが，長径4.20m，短径〔3.10〕mの楕円形と推定される。

長径方向　N－28°－E

壁　東壁が残存しており，壁高15cmほどで，外傾して立ち上がる。

床　平坦である。踏み固められた面は見られない。

ピット　7か所。P_8，P_9は中央部やや南東側の長径125cm，短径89cmの楕円形の土坑状掘り込みと重複しており，P_8が深さ114cm，P_9が深さ150cm。P_{10}はP_9の北側に位置し，長径25cm，短径20cmの楕円形で，深さ52cm，P_{12}は北壁寄りに位置し，径48－51cmの円形で，深さ67cm，P_5は南東壁を掘り込んでおり，長径49cm，短径39cmの楕円形で，深さ74cm。これらは，配列に規則性がなく性格不明である。P_{11}，P_7は，位置的に第133号住居跡に伴う可能性がある。

覆土　3層からなる。土層8，9がほぼ平行に堆積している自然堆積である。土層11はP_8，P_9の土層で，新しい掘り込みである。

土層解説

8　暗褐色　炭化物中量，炭化粒子・ローム粒子少量，焼土粒子極少量
9　暗褐色　ローム粒子中量，炭化粒子・ローム小ブロック少量
10　褐　色　ローム小ブロック中量，炭化物・ローム小ブロック・ローム粒子少量
11　暗褐色　炭化物・ローム小ブロック・ローム粒子少量，焼土小ブロック・ローム中ブロック極少量

遺物　覆土中から縄文土器片が極少量出土しているが，いずれも細片で，器形の判別できるものはない。

第370図1は縄文土器片の拓影図である。口縁部片で，口縁部下に縄文が加飾された隆帯が見られ，以下胴部は縄文地文で，曲線的文様が複列の沈線で描かれている。中期阿玉台Ⅳ式の範疇と思われる。

所見　第125号住居跡と重複している西側部分は，残存している壁からの推定である。縄文時代中期中葉の遺物が極少量出土しており，時期はこの前後と思われる。

第370図　第126号住居跡出土遺物実測・拓影図

第133号住居跡（第369図）

位置　調査区の西部，B16e₆区。

重複関係　本跡は，西側部分が第126号住居跡に，東側部分は第493号土坑に掘り込まれている。

規模と平面形　重複と覆土が薄いため，平面形を明確にとらえられなかったが，長径5.50m，短径〔4.96〕mの楕円形と推定される。

長径方向　N－40°－E

壁　覆土が薄く，立ち上がりが確認できたのは東壁の一部と南西壁である。壁高6cmほどで，外傾して立ち上がる。

床　平坦である。踏み固められた面は見られない。

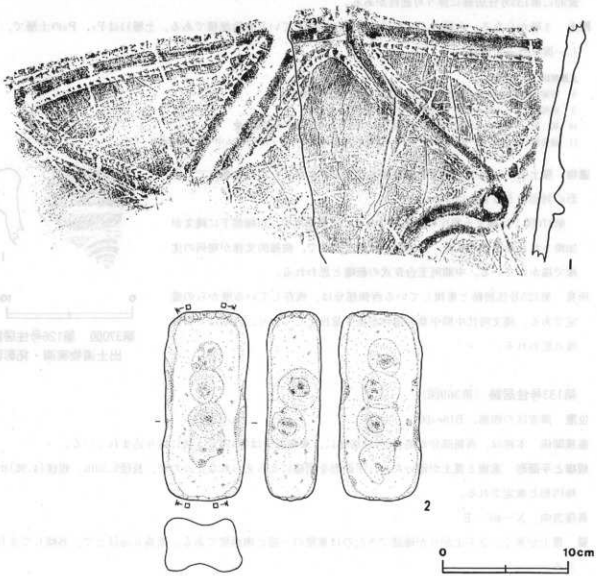
ピット　5か所。P_2は長径40cm，短径31cmの卵形で，深さ109cm，P_3は長径51cm，短径46cmの卵形で，深さ118cm，この他，第126号住居内のP_7（径39cmの円形で，深さ80cm），P_{11}（長径39cm，短径36cmの卵形で，深さ93cm）も本跡に伴うと思われ，規模及び配列から主柱穴と考えられる。P_1はP_{11}とP_2の間に位置し，径37－39cmの円形で，深さ30cm，補助柱穴と思われる。他は性格不明である。

炉　中央部やや南東寄りに付設されている。長径75cm，短径63cmの卵形で，床を18cm掘りくぼめた地床炉である。炉の覆土に焼土を含んでいるが，炉床はそれほど焼けていない。

炉土層解説

1　暗褐色　焼土小ブロック・炭化物・ローム小ブロック少量
2　暗赤褐色　焼土小ブロック・炭化物・ローム粒子少量
3　暗赤褐色　焼土小ブロック中量，焼土粒子・炭化物少量
4　暗赤褐色　焼土小ブロック少量，焼土粒子・炭化物少量
5　暗赤褐色　焼土粒子中量，焼土小ブロック・炭化物・ローム小ブロック少量
6　暗赤褐色　焼土粒子・炭化物・炭化粒子少量，焼土小ブロック微少量
7　暗褐色　焼土粒子・炭化物・ローム小ブロック・ローム粒子少量

埋設土器　本跡の北東部床面から埋設土器が出土している。掘り方は長径50cm，短径40cmの楕円形で，床を20cm程掘り込んでいる。掘り方のほぼ中央に，胴部中位以下を意識的に打ち欠いた深鉢形土器が，口縁部を上



第371図　第133号住居跡出土遺物実測・拓影図

にして正位の状態で埋設され，土層1，2で固定している。土器の中から遺物等は出土していないが，土層4が焼土を少量含んでおり，土器埋設炉的な役割をしていた可能性もある。

埋設土器土層解説

1　褐　　色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量，焼土粒子極少量
2　暗 褐 色　ローム粒子・ローム中ブロック少量，炭化粒子極少量
3　暗 褐 色　ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子極少量
4　暗 褐 色　ローム粒子中量，焼土粒子・炭化粒子少量
5　極暗褐色　ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子・ローム中ブロック極少量
6　褐　　色　ローム粒子少量
7　褐　　色　ローム粒子中量

覆土　覆土は極めて薄く，堆積状況は不明である。

遺物　出土遺物は極少量で，1の埋設土器以外器形の判別できるものはない。2の敲石は炉の南側床面から出土している。

第133号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器　種	計測値(m)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第371図1	深鉢形土器 縄文土器	B(19.2)	胴部片。胴部はやや外傾して直線的に立ち上がる。胴部文様は隆帯で区画文を描き，隆帯に沿って角押文が見られ，内部には縦楕円状文及び「C」字状爪形文が横位に施されている。地文に縦位の条線が粗く施文されている。	砂粒・長石・雲母 暗赤褐色 普通	P90　60% 埋設土器 (阿玉台Ⅲ)

図版番号	器　種	計測値				石　質	備　考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
第371図2	敲　石	15.0	6.7	4.3	643.8	安 山 岩	Q22　凹石兼用　表・裏・側面に複数の凹み　炉南側床面

所見　本跡の規模及び平面形は主柱穴の配列と残存している壁からの推定である。時期は，埋設土器から縄文時代中期阿玉台Ⅲ式期と思われる。

第127号住居跡（第372図）

位置　調査区の西部，B16f₈区。

重複関係　本跡は，北側部分から東側部分にかけて第151号，152号住居跡に，中央部の床が第483号土坑に，南側部分が僅かに第533号土坑に掘り込まれている。また，本跡内で第488号，492号土坑と重複しているが，本跡の方が新しい。

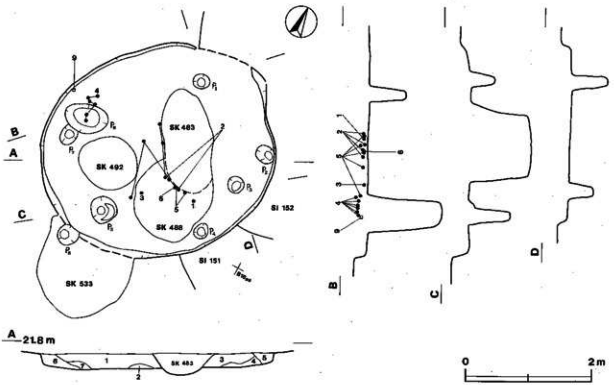
規模と平面形　長径3.88m，短径3.35mの楕円形である。

長径方向　N－26°－E

壁　北側から東側にかけては，壁の上部が第151号，152号住居跡に削平されているため，壁高15cmほどである。他は壁高20cmほどで，北側部分は外傾して，南側部分はほぼ垂直に立ち上がる。

床　平坦である。中央部が踏み固められている。

ピット　8か所。P_1は径26cmほどの円形で，深さ58cm，P_3は径27cmほどの円形で，深さ42cm，P_4は長径26cm，短径22cmの楕円形で，深さ32cm，P_5は長径45cm，短径40cmの楕円形で，深さ66cm，P_7は長径36cm，短径25cmの楕円形で，深さ30cm。これらは，規模及び配列から主柱穴と思われる。P_2（長径32cm，短径28cmの楕円形で，深さ63cm）は北東壁際に位置し，P_6（径32cmの円形で，深さ69cm）は南壁を外から掘り込んでおり，P_8（長径76cm，短径47cmの楕円形で，深さ119cm）は西壁寄りに位置する大形のピットである。いずれも性格は不明である。



第372図　第127号住居跡実測図

覆土　7層からなる。分層してあるが，土層1～3及び7は暗褐色土の一連の層と思われ，壁際から土層4，6の褐色土が流れ込んだ後暗褐色土が中央部を覆った自然堆積と思われる。土層5は褐色土で，攪乱気味の層と思われる。

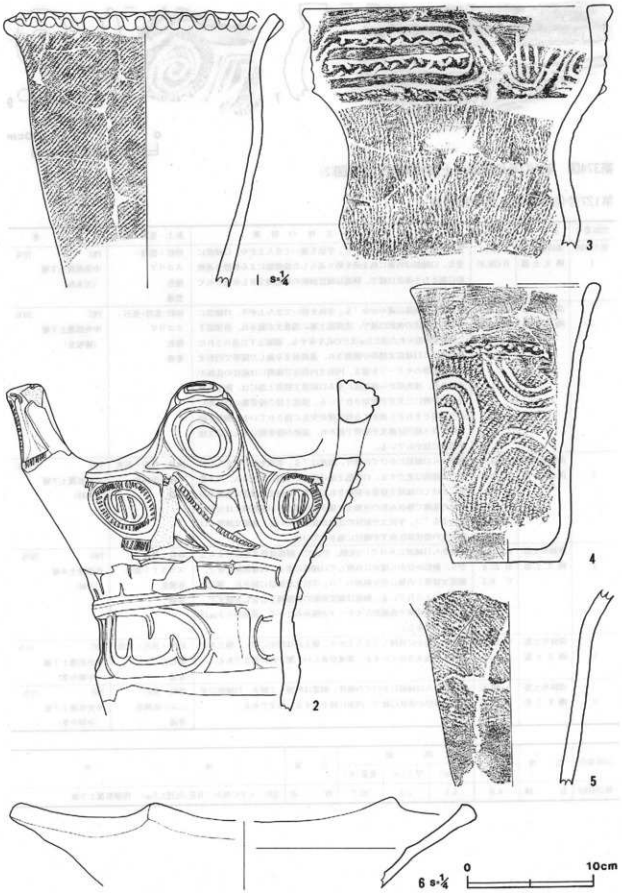
土層解説

1　暗褐色　ローム小ブロック中量，焼土小ブロック・炭化物・炭化粒子少量
2　暗褐色　ローム小ブロック・ローム粒子中量，炭化粒子少量，焼土粒子極少量
3　黒褐色　焼土小ブロック・炭化物・ローム小ブロック・ローム粒子少量
4．褐　色　ローム粒子中量，炭化粒子・ローム小ブロック少量
5　暗褐色　焼土小ブロック・炭化粒子・ローム小ブロック少量
6　褐　色　ローム粒子中量，炭化粒子少量，焼土粒子・ローム小ブロック極少量
7　暗褐色　ローム粒子中量，炭化粒子少量

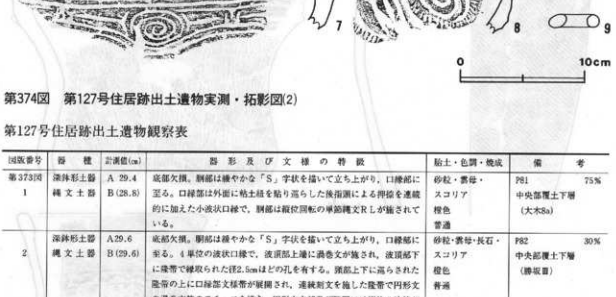
遺物　中央部の覆土中層から下層にかけて集中的に遺物が出土している。いずれも破片が散在した状況で出土しており，一括投棄と思われる。1～3と5の深鉢形土器及び6の浅鉢形土器は中央部覆土下層から，いずれも破片で出土している。西部覆土中層からは4の深鉢形土器と8が，西壁際の覆土下層からは9の石錘が出土している。

第374図7，8は縄文土器片の拓影図である。7は平縁の口縁部片で，口縁部上端及び外面は平坦に作出されている。口縁部下の沈線以下は，沈線で横走，渦巻及び縦「コ」字状のモチーフが描かれている。8は波状口縁の波頂部片で，隆帯上に刻みが施され，隆帯による区画内には渦巻や区画に沿う沈線が充填されている。中期中峠式に比定されると思われる。

所見　本跡の時期は，出土遺物から縄文時代中期中峠式期である。



第373図　第127号住居跡出土遺物実測・拓影図(1)



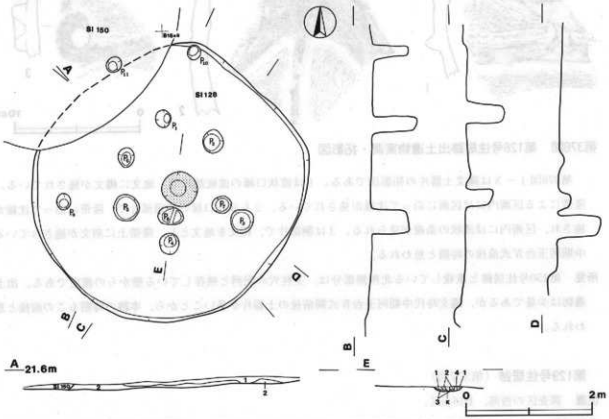
第374図　第127号住居跡出土遺物実測・拓影図(2)

第127号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第373図 1	深鉢形土器 縄文土器	A 29.4 B (28.8)	底部欠損。胴部は緩やかな「S」字状を描いて立ち上がり，口縁部に至る。口縁部は外面に粘土紐を貼り高らした後指頭による押捺を連続的に加えた小波状口縁で，胴部は縦位回転の単節縄文RLが施されている。	砂粒・雲母・スコリア 橙色 普通	P81 75% 中央部覆土下層 (大木8a)
2	深鉢形土器 縄文土器	A29.6 B (29.6)	底部欠損。胴部は緩やかな「S」字状を描いて立ち上がり，口縁部に至る。4単位の波状口縁で，波頂部上端に渦巻文が施され，波頂部下に隆帯で縁取られた径2.5cmほどの孔を有する。頸部上下に高らされた隆帯の上に口縁部文様帯が展開され，連続刺文を施した隆帯で円形文や渦巻文等のモチーフを描き，円形文内部及び隙間には縦位の沈線が充填され，波底部から波頂部に至る口縁部文様帯上部には，隆帯に挟まれた櫛状に三叉文が彫刻されている。頸部2段の隆帯間には隆帯に沿う沈線とそれから派生する蛇沈線が交互に施されている。頸部下段の隆帯以下楕円区画文が隆帯で縁取られ，頸部の隆帯間に見られる文様が同様に描かれている。	砂粒・雲母・長石・スコリア 橙色 普通	P82 30% 中央部覆土下層 (勝坂II)
3	深鉢形土器 縄文土器	A (24.6) B (19.3)	胴部から口縁部にかけての破片。胴部は「S」字状を描いて立ち上がり，口縁部は直立する。口唇部上端は縦位で平坦に作出され，以下頸部にかけて口縁部文様帯が展開されている。口縁部文様帯は沈線を絡ませた隆線で横長台形の区画文を描き，区画内及び区画間には交互刺突による「コ」字状文や縦位の沈線が施されている。胴部文様帯には撚糸文の格状体圧痕文が縦位に施されている。	砂粒・長石・石英 にぶい赤褐色 普通	P83 35% 中央部覆土下層 (中峠)
4	深鉢形土器 縄文土器	A (15.1) B 22.6 C 8.3	胴部から口縁部にかけて1/2欠損。平底で，胴部は直立気味に立ち上がり，胴部中位から徐かに外傾して口縁部に至る。口縁部無文帯で，胴部文様帯との境に交互刺突の「コ」字状文が横位に施され，環状の把手も加えられている。胴部は縦位回転の複節縄文LRLが施文で，3本単位の沈線で曲線的なモチーフが描かれている。底部から3cmほどは無文である。	砂粒・長石・雲母・スコリア・雲母 赤褐色 普通	P84 50% 西部覆土中層 (中峠)
5	深鉢形土器 縄文土器	B (15.3)	胴部片。徐かに外傾して立ち上がり，胴上部は徐かに開く。胴上半には縄文が施文されているが，摩滅が著しい。胴下部は無文である。	砂粒・長石・雲母 橙色 普通	P85 30% 中央部覆土下層 (中期中葉)
6	浅鉢形土器 縄文土器	A (48.8) B (9.5)	胴上部から口縁部にかけての破片。胴部は外傾して開き，口縁部に至る。6単位の波状口縁で，内面に棱を有する。無文である。	砂粒・長石 にぶい赤褐色 普通	P86 20% 中央部覆土下層 (中期中葉)

図版番号	器種	計測値 長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	備考
第374図9	石錘	4.8	4.1	1.2	20.7	砂岩	Q20 上下に刻み 有孔(孔径1.5cm) 西整溝覆土下層

第128号住居跡（第375図）



第375図　第128号住居跡実測図

位置　調査区の西部，B16es区。

重複関係　本跡は，北西側部分が第150号住居跡に掘り込まれている。

規模と平面形　長径4.50m，短径4.36mの円形である。

壁　北西側部分の壁は第150号住居跡に掘り込まれ確認できなかったが，他は壁高5～12cmで，緩やかに外傾して立ち上がる。

床　平坦である。踏み固められた面は見られない。

ピット　11か所。P_1～P_8は長径27～42cm，短径26～40cmの円形あるいは楕円形で，深さ49～74cm。これらは，規模及び配列から主柱穴と思われる。他は性格不明である。

炉　ほぼ中央に付設されている。径56cmほどの円形で，床を7cm皿状に掘りくぼめた地床炉である。炉床は焼けているが，硬くはない。

炉土層解説

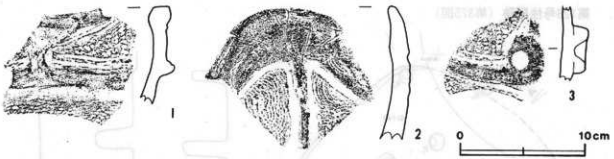
1　にぶい赤褐色　焼土粒子・ローム粒子少量
2　にぶい赤褐色　焼土粒子・炭化粒子少量，焼土小ブロック極少量
3　にぶい赤褐色　焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量
4　にぶい赤褐色　炭化粒子・ローム粒子少量，焼土粒子極少量

覆土　2層からなる自然堆積である。

土層解説

1　暗褐色　焼土小ブロック・炭化粒子・ローム粒子少量，焼土粒子・炭化物・ローム小ブロック極少量
2　暗褐色　炭化粒子・ローム中ブロック・ローム粒子少量

遺物　覆土中から縄文土器の細片が少量出土している。



第376図　第128号住居跡出土遺物実測・拓影図

第376図1～3は縄文土器片の拓影図である。1は波状口縁の波底部片で，地文に縄文が施されている。隆帯による区画内には区画に沿って沈線が施されている。2も波状口縁の波頂部片で，隆帯に沿って沈線が施され，区画内には波状の条線が見られる。3は胴部片で，縄文を地文とし，隆帯上に刻文が施されている。中期阿玉台Ⅳ式前後の時期と思われる。

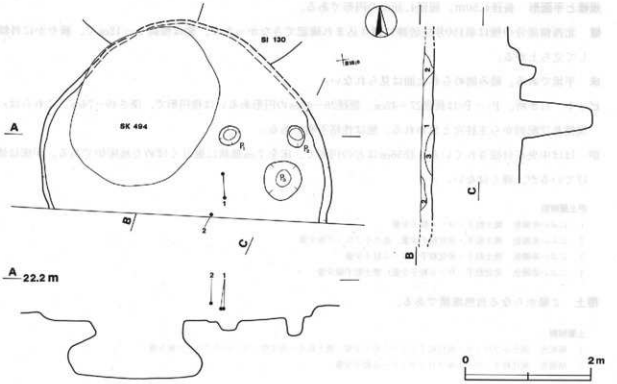
所見　第150号住居跡と重複している北西側部分は，主柱穴の配列と残存している壁からの推定である。出土遺物は少量であるが，縄文時代中期阿玉台Ⅳ式期前後の土器片が多いことから，本跡の時期もこの前後と思われる。

第129号住居跡（第377図）

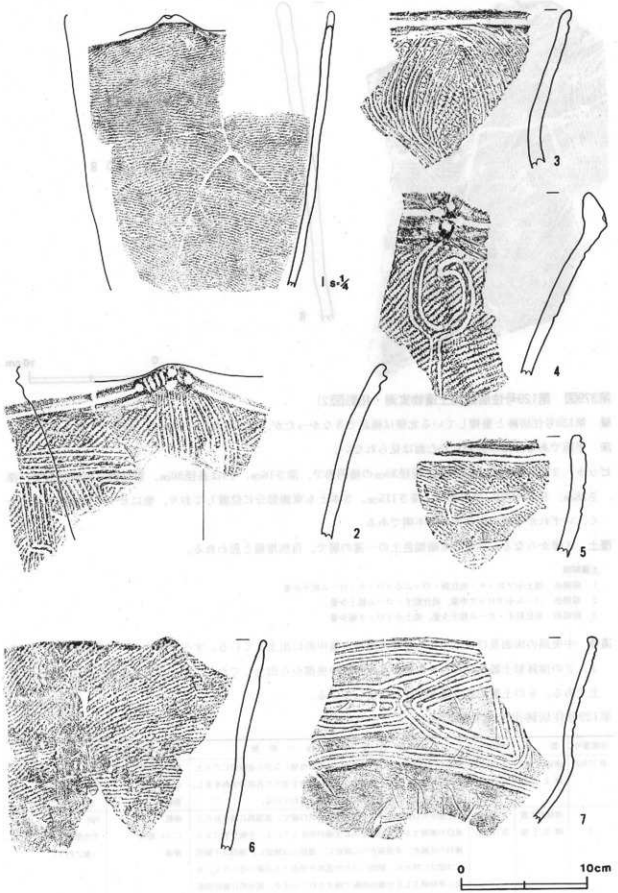
位置　調査区の西部，B16j₈区。

重複関係　本跡は，北側部分で第130号住居跡，第494号土坑と重複しているが，本跡の方が新しい。

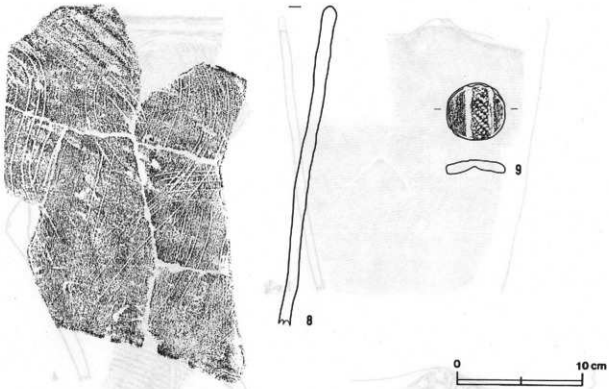
規模と平面形　南側部分が調査区域外に延びているため，全体の平面形は不明である。残存部は東西径4.55m，南北径(3.2)mで，北側の残存部は半円形をしている。



第377図　第129号住居跡実測図



第378図　第129号住居跡出土遺物実測・拓影図(1)



第379図　第129号住居跡出土遺物実測・拓影図(2)

壁　第130号住居跡と重複している北壁は確認できなかったが，他は壁高10～25cmで，外傾して立ち上がる。

床　平坦である。踏み固められた面は見られない。

ピット　3か所。P_1は長径34cm，短径30cmの楕円形で，深さ16cm，P_2は長径36cm，短径29cmの楕円形で，深さ28cm，P_3は径60cmの円形で，深さ115cm。3本とも東側部分に位置しており，他にピットは確認されてなく，いずれが本跡の主柱穴かは不明である。

覆土　3層からなる。3層とも暗褐色土の一連の層で，自然堆積と思われる。

土層解説

1　暗褐色　焼土小ブロック・炭化物・ローム小ブロック・ローム粒子少量
2　暗褐色　ローム小ブロック中量，炭化粒子・ローム粒子少量
3　暗褐色　炭化粒子・ローム粒子少量，焼土小ブロック極少量

遺物　中央部の床面及び覆土中から多量の遺物が集中的に出土している。すべて破片で，一括投棄と思われる。1，2の深鉢形土器及び3～8の破片もすべて中央部から出土しており，4，6の口縁部片は床面からの出土である。9の土製円板は覆土中から出土している。

第129号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第378図 1	深鉢形土器 縄文土器	A [28.2] B (29.0)	胴部から口縁部にかけての破片。胴部は外短しながら直線的に立ち上がり，口縁部に至る。口縁部は上端に刺突を加えた舌状の突起を有し，胴部には無節Lの縄文が横位回転で施文されている。	砂粒・長石・石英 にぶい褐色 普通	P87　20% 中央部覆土中層 (堀之内)
2	深鉢形土器 縄文土器	A [29.2] B (13.8)	胴上部から口縁部にかけての破片。波状口縁で，波頂部に施された3単位の刺突文から口唇部を巡る沈線が派生している。平載竹管による複列の沈線が，波頂部からに縦位に，頂部には横位に，頂部以下胴部には縦位に描かれ，胴部にはやや弧状や屈曲する沈線が見られる。地文に単節縄文Lrが横位回転で施文されているが，部分的に縦位回転も見られる。	砂粒 にぶい褐色 普通	P88　10% 中央部覆土中層 (堀之内1)

図版番号	器種	計測値(cm) 最大長	最大幅	最大厚	重量 (g)	現存率 (%)	器形及び文様の特徴	備考
第379図9	土製円板	4.6	4.7	1.2	22.4	100	表面に単節縄文LRと沈線区画の磨消帯　裏面に未貫通孔	DP25　覆土

第378・379図3～8は縄文土器片の拓影図で，いずれも口縁部片である。3は縄文地文で，複列の集合沈線で向かい合う弧が描かれている。4は口縁部が屈曲的に内傾し，口縁部外面に施された横走沈線を挟むように，刺突を施した瘤状の小突起が対で貼り付けられている。胴部には地文の縄文を切る「J」字状のモチーフが平行沈線で描かれている。5も縄文地文で，口縁部に平行する横走沈線，胴部には歪んだ長方形が沈線で描かれている。6は口縁部に舌状突起を有し，胴部は縄文が施されている。7は鉢形土器で，口縁部と胴部下位に巡らされた横走沈線の区画内に幾何学的モチーフが複列の沈線で描かれ，器面は磨きが施されている。8の器面には，直線や曲線あるいは流水状のモチーフが複列の浅い沈線で描かれている。後期堀之内1式に比定される土器である。

所見　本跡は，南側部分が調査区域外，北側部分が他の遺構と重複しているため平面形が不明である。また，炉が確認されず，しかもピットの性格も不明である。出土遺物は，中期加曽利EⅢ～Ⅳ式期のものも少量出土しているが，それらは第130号住居跡との関連が考えられ，大半は後期堀之内式期であり，本跡の時期と思われる。

第130号住居跡（第380図）

位置　調査区の西部，B16is区。

重複関係　本跡は，南側部分が第129号住居跡に，西部の床が第500号土坑に掘り込まれている。また，北側部分で第153号住居跡，第534号土坑と，南側部分で第551号土坑と重複している。第534号，551号土坑より本跡の方が新しいが，第153号住居跡との新旧関係は不明である。

規模と平面形　西側部分の覆土が薄く，壁の立ち上がりをとらえられなかったが，長径5.50m，短径〔5.45〕mのほぼ円形と推定される。

壁　東側の壁が残存しており，壁高3～35cmで，壁高の高い所はほぼ垂直に，低い所は外傾して立ち上がる。

床　平坦である。床の残りは良好で，全体に踏み固められている。

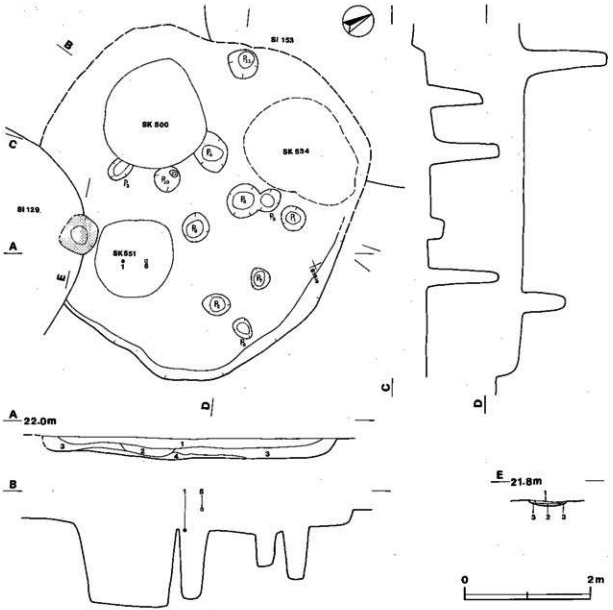
ピット　11か所。P_1は北東壁の内側0.55mに位置し，長径43cm，短径37cmの楕円形で，深さ83cm，P_2は東壁の内側0.57mに位置し，長径45cm，短径36cmの楕円形で，深さ70cm。この2本の間は1.45mで，主柱穴と考えると，対応する位置にP_3（長径40cm，短径30cmの楕円形で，深さ117cm），P_{11}（径48cmの円形で，深さ140cm）がある。規模的にややばらつきはあるが，これら4本は主柱穴と思われる。P_7は長径32cm，短径30cmの卵形で，深さ23cm。P_1，P_2間に位置し，補助柱穴と思われる。中央部にP_4～P_6，P_9，P_{10}，東壁寄りにP_8があるが，性格は不明である。

炉　南側に片寄って付設されている。南側部分は第129号住居跡の床下から確認され，長径55cm，短径50cmの卵形で，床を8cm掘りくぼめた地床炉である。炉床は火熱で赤く焼け，硬化している。

炉土層解説

1　にぶい赤褐色　焼土粒子・ローム粒子中量，焼土小ブロック・炭化粒子少量，ローム小ブロック極少量
2　褐　　色　焼土粒子多量，焼土小ブロック中量，ローム粒子少量，炭化粒子極少量
3　褐　　色　ローム粒子中量，焼土小ブロック・焼土粒子少量，炭化粒子極少量

覆土　4層からなる。壁際から褐色土が流れ込んだ後暗褐色土が覆った自然堆積である。



第380図　第130号住居跡実測図

土層解説

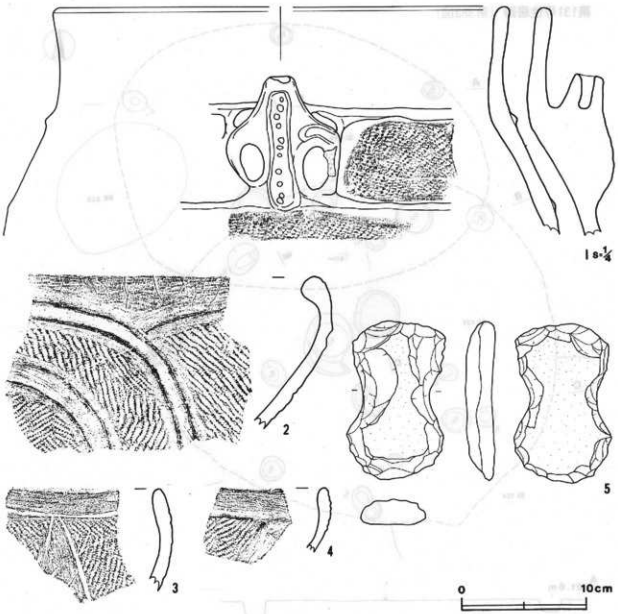
1　暗褐色　ローム粒子中量，焼土粒子・炭化粒子少量
2　暗褐色　ローム粒子中量，焼土粒子・ローム小ブロック少量，炭化粒子極少量
3　褐　色　ローム粒子中量，炭化粒子少量，焼土粒子極少量
4　褐　色　ローム小ブロック中量，ローム中ブロック少量，焼土粒子・炭化粒子極少量

遺物　南部床面及び覆土中から遺物が多量に出土している。破片が多く，一括投棄を思わせる出土状況である。

1の装飾把手付き深鉢形土器は炉の北側床面から，5の打製石斧は1の北側覆土中から出土している。

第130号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第381図 1	深鉢形土器 縄文土器	A [47.4] B (24.0)	胴上部から口縁部にかけての破片。胴上部は内傾して立ち上がり，口縁部は直立する。口縁部無文。隆部以下は縦位回転の単節縄文Rしが地文で，隆帯に隆起線で挽円区画文が描かれ，把手が付けられている。把手は注口状だが太貫通で，把手頂部から下部にかけて縦長の沈線区画文が施され，内部に縦位の円形刺突文が連続されている。区画文を中心に左右対称で上下2単位の円孔が見られる。	砂粒・スコリア 橙色 普通	P89　10% 炉北側床面 (加曽利E式)



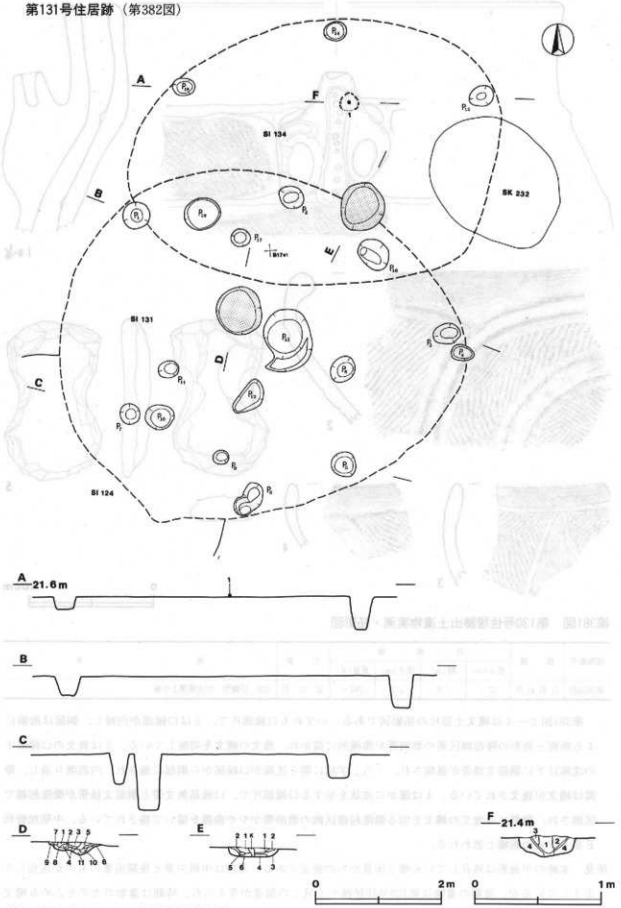
第381図　第130号住居跡出土遺物実測・拓影図

図版番号	器種	計測値				石質	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
第381図5	打製石斧	12.7	7.8	2.5	282.0	安山岩	021　分銅型　炉北側覆土中層

第381図２～４は縄文土器片の拓影図である。いずれも口縁部片で，２は口縁部が内彎し，胴部は指頭による断面三角形の隆起線区画の磨消帯が曲線的に描かれ，地文の縄文を切断している。３は無文の口縁部下の沈線以下に胴部文様帯が展開され，「八」字状に開く沈線が口縁部から胴部に施され，内部磨り消し，隙間は縄文が施文されている。４は僅かに波状を呈する口縁部片で，口縁部無文帯と胴部文様帯が微隆起線で区画され，胴部には地文の縄文を切る微隆起線区画の磨消帯がやや曲線を描いて施されている。中期加曽利ＥⅢ～Ⅳ式の範疇と思われる。

所見　本跡の平面形は残存している壁と床質からの推定である。遺物は中期中葉と後期前葉のものが混在して出土しているが，後期の遺物は第129号住居跡や土坑との関連が考えられ，時期は遺物の大半を占める縄文時代中期加曽利ＥⅢ～Ⅳ式期と思われる。

第131号住居跡（第382図）



第382図　第131・134号住居跡実測図

位置　調査区の西部，B16e₀区。

重複関係　本跡は，北側部分で第134号住居跡と，南側部分で第124号住居跡と重複している。第134号住居跡の炉が本跡の床の上に構築されており，本跡は第134号住居跡より古いと思われるが，第124号住居跡との新旧関係は不明である。

規模と平面形　覆土が薄く，壁の立ち上がりは確認できなかったが，長径(6.48)m，短径(5.45)mの楕円形と推定される。

長径方向　〔N－85°－E〕

床　平坦である。踏み固められた面は見られない。

ピット　16か所。P_1～P_3，P_5は長径40～45cm，短径35～42cmの楕円形で，深さ28～51cm。炉を取り巻くように位置し，配列から主柱穴と思われる。P_7（径33cmほどの円形で，深さ45cm）とP_{10}（長径46cm，短径40cmの楕円形で，深さ86cm）のいずれかが主柱穴に相当する南西側のピットと思われるが，P_7は第124号住居跡の補助柱穴の可能性があり，P_{10}は規模的に疑問があり，判断は難しい。P_9は第124号住居跡の主柱穴，P_{16}，P_{19}は第134号住居跡に伴うピットと思われる。他は性格不明である。

炉　ほぼ中央に付設されている。径76cmの円形で，床を20cmほど掘りくぼめた地床炉である。炉床は火熱で赤く焼け，硬化した焼土ブロックで凸凹である。

炉土層解説

1　暗赤褐色　炭化粒子中量，焼土粒子少量
2　黒褐色　炭化粒子中量，焼土粒子極少量
3　にぶい赤褐色　焼土粒子中量，焼土小ブロック・炭化粒子・ローム粒子少量
4　にぶい赤褐色　焼土粒子中量，焼土中ブロック・炭化粒子少量，焼土小ブロック極少量
5　にぶい赤褐色　焼土小ブロック中量，焼土粒子・炭化物少量
6　にぶい赤褐色　焼土小ブロック・炭化粒子・ローム粒子少量
7　暗赤褐色　焼土中ブロック・焼土粒子・ローム粒子少量
8　にぶい赤褐色　焼土粒子中量，焼土小ブロック・ローム粒子少量
9　にぶい赤褐色　焼土粒子・ローム粒子少量
10　にぶい赤褐色　焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
11　にぶい赤褐色　焼土中ブロック中量，焼土粒子少量，炭化物極少量

遺物　出土遺物は極少量で，いずれも細片で器形のわかるものはない。

第383図1，2は縄文土器片の拓影図である。1は口縁部片で，隆帯に沿い連続爪形文が施されており，中期阿玉台Ⅱ式に比定されると思われる。2は胴部片で，半截竹管による爪形文が見られ，勝坂Ⅱ式の影響が見られる。

第383図　第131号住居跡出土遺物実測・拓影図

所見　本跡は，覆土が削平されて壁の立ち上がりをとらえられず，平面形は炉を中心としたピットの配列からの推定である。時期を判断する遺物の出土はなく，時期の特定は困難であるが，縄文時代中期阿玉台Ⅱ－Ⅲ式期前後の遺物が極少量出土しており，本跡の時期もそれほど隔たりはないと思われる。

第134号住居跡（第382図）

位置　調査区の西部，B17d₁区。

重複関係　本跡は，東側部分が第232号土坑に掘り込まれている。南側部分で第131号住居跡と重複しているが，本跡の方が新しいと思われる。

規模と平面形　覆土が削平され，平面形を明確に確認できなかったが，長径〔5.53〕m，短径〔3.02〕mの楕円形と推定される。

長径方向　〔N－65°－W〕

床　平坦である。踏み固められた面は見られない。

ピット　8か所。P_{14}～P_{16}，P_{18}は長径35～59cm，短径30～52cmの楕円形で，深さ18～51cm。規模はばらばらだが，配列から主柱穴の可能性がある。P_2は第131号住居跡に伴うピットである。P_{17}は深さ12cmと浅く性格は不明である。

炉　南側に片寄って付設されている。長径80cm，短径70cmの楕円形で，床を14cm掘りくぼめた地床炉である。炉床は火熱を受け，硬化している面が部分的に見られる。

炉土層解説

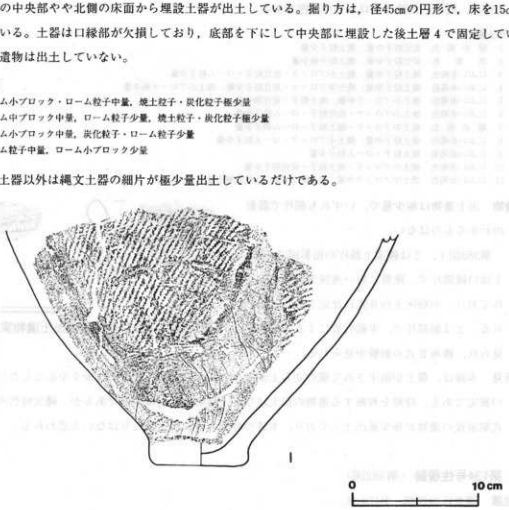
1　暗 褐 色　焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量
2　暗 褐 色　炭化物・ローム小ブロック少量，焼土小ブロック極少量
3　暗 褐 色　焼土小ブロック・炭化物・ローム小ブロック少量，ローム粒子極少量
4　暗赤褐色　焼土中ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
5　暗 褐 色　ローム小ブロック少量，炭化物極少量
6　暗 褐 色　炭化粒子・ローム小ブロック・ローム粒子少量

埋設土器　本跡の中央部やや北側の床面から埋設土器が出土している。掘り方は，径45cmの円形で，床を15cm程掘り込んでいる。土器は口縁部が欠損しており，底部を下にして中央部に埋設した後土層4で固定している。内部から遺物は出土していない。

埋設土器土層解説

1　褐　色　ローム小ブロック・ローム粒子中量，焼土粒子・炭化粒子極少量
2　褐　色　ローム中ブロック中量，ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子極少量
3　褐　色　ローム小ブロック中量，炭化粒子・ローム粒子少量
4　明褐色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量

遺物　1の埋設土器以外は縄文土器の細片が極少量出土しているだけである。



第384図　第134号住居跡出土遺物実測・拓影図

所見　本跡の覆土は削平され，平面形はピットの配列からの推定である。遺物は極少量で，埋設土器から時期を判断すると，縄文時代中期加曽利EⅣ式期が本跡の時期である。

第134号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第384図 1	深鉢形土器 縄文土器	B (18.6) C 7.9	胴上半部欠損。やや突出気味の平底で，側面はやや丸みを帯びる。胴部は外傾して立ち上がる。器面には単節縄文RLが縦位回転で施文され，微隆起線区画の磨消帯が文様を分断している。縄文は部分的に横位回転も見られる。底部から6cmほどは無文である。	砂粒・長石 明赤褐色 普通	P91 30% 縄設土器 (加曽利E IV)

第132号住居跡（第385図）

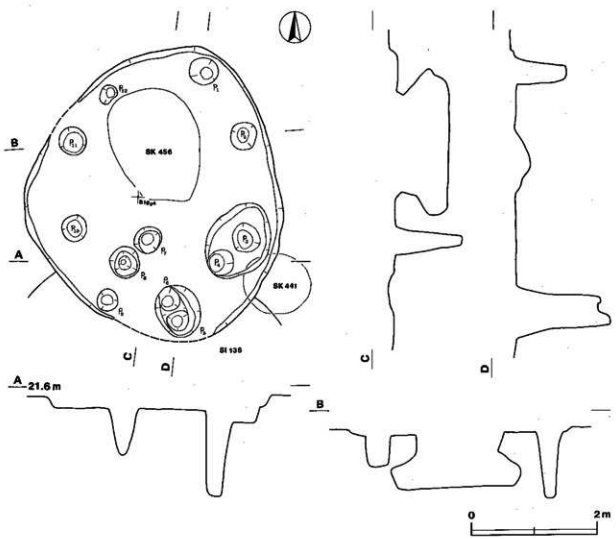
位置　調査区の西部，B16g4区。

重複関係　本跡は，中央部分で第456号土坑と，南側部分で第136号住居跡，第441号土坑と重複しているが，新旧関係は不明である。

規模と平面形　長径4.70m，短径4.14mの楕円形である。

長径方向　N－21°－E

壁　第136号住居跡と重複している南壁が部分的に削平されているが，残存部は壁高4cmほどで，外傾して立ち上がる。



第385図　第132号住居跡実測図

床　平坦である。所々に硬化したブロックが見られる。P_6とP_8の間に長径63cm，短径47cmの楕円形の範囲に，厚さ5cmほどの粘土の堆積部分が見られる。

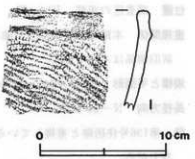
ピット　12か所。P_1～P_3，P_8，P_{11}は長径45～48cm，短径40～45cmの円形あるいは楕円形で，深さ52～106cm。規模的にはやや差があるが，配列から主柱穴と思われる。P_{10}（径40cmの円形で，深さ18cm），P_{12}（長径30cm，短径26cmの楕円形で，深さ26cm）は主柱穴間に位置し，補助柱穴と思われる。他は性格不明である。

覆土　覆土は薄く，堆積状況は不明である。

遺物　遺物は縄文土器の細片が極少量出土しているだけで，器形のわかるものはない。

第386図1は縄文土器片の拓影図である。口縁部片で，口縁部は幅の狭い無文帯，指頭による隆線を挟んで胴部には縄文が施文されている。中期加曽利EⅢ～Ⅳ式の時期と思われる。

所見　本跡から炉は確認されなかった。遺物は縄文時代中期加曽利E式期のものが極少量出土しているだけで，時期判断は難しいが，本跡の時期は縄文時代中期後半と考えられる。



第386図　第132号住居跡出土遺物実測・拓影図

第136号住居跡（第387図）

位置　調査区の西部，B16h$_4$区。

重複関係　本跡は，北側部分で第132号住居跡，第441号，445号及び471号土坑と，南西側部分で第449号土坑と重複しているが，新旧関係は不明である。

規模と平面形　本跡の覆土は削平され，規模及び平面形は不明である。

床　炉の周囲は平坦である。踏み固められた面は見られない。

ピット　炉の周囲に15か所。P_1，P_3，P_7，P_9，P_{12}が炉を囲むように位置し，長径33～45cmの円形あるいは楕円形で，規模的にもまた配列的にも主柱穴と考えられるが，判断は難しい。他は規模がばらばらで，配列的にも規則性がなく，性格は不明である。

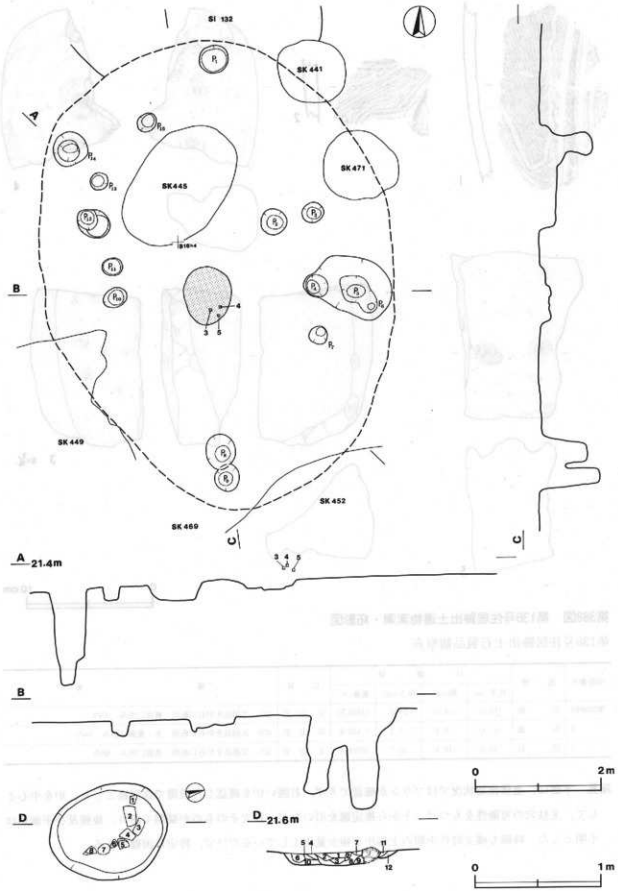
炉　長径93cm，短径75cmの楕円形で，破砕した石皿や凹み石で北側から東側を囲んだ石囲い炉である。床を10cmほど掘りくぼめてあり，炉床は火熱で赤く焼け，硬化している。

炉土層解説

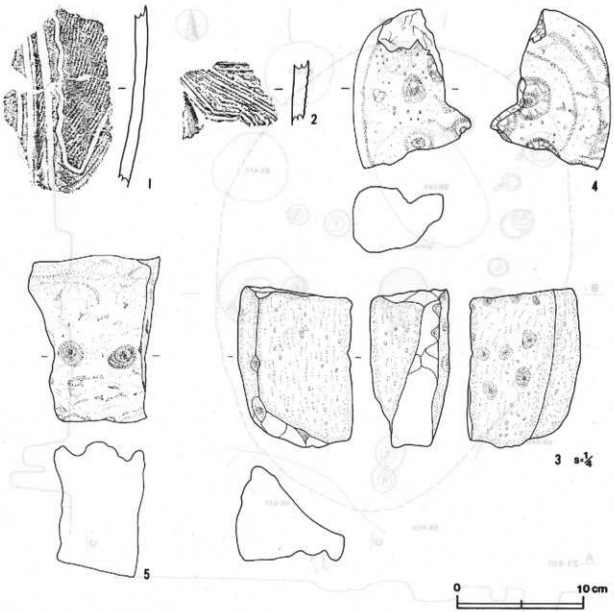
1 暗褐色	焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量	7 極暗赤褐色	焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
2 暗褐色	焼土粒子・炭化粒子少量，焼土小ブロック極少量	8 暗赤褐色	焼土粒子中量，焼土小ブロック・炭化粒子少量
3 暗褐色	焼土粒子中量，焼土小ブロック・炭化粒子少量	9 暗赤褐色	焼土粒子少量，ローム粒子極少量
4 暗褐色	焼土粒子・炭化粒子少量	10 暗赤褐色	焼土粒子少量，焼土小ブロック・炭化粒子極少量
5 暗褐色	炭化粒子少量，焼土小ブロック・焼土粒子極少量	11 暗褐色	炭化粒子・ローム粒子少量
6 暗褐色	焼土粒子少量，炭化粒子極少量	12 褐色	ローム粒子中量，炭化粒子極少量

遺物　炉内から炉体の石8個と縄文土器の細片が極少量出土している。3～5は炉石である。

第388図1，2は縄文土器片の拓影図である。いずれも胴部片で，1は隆帯と隆帯に沿う沈線が施され，2は隆帯の区画内に沈線が充填されている。1は縄文が地文に施されている。中期阿玉台Ⅲ～Ⅳ式前後の時期と思われる。



第387図　第136号住居跡実測図



第388図　第136号住居跡出土遺物実測・拡影図

第136号住居跡出土石製品観察表

図版番号	器種	計測値				石質	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
第388図3	石皿	(16.8)	(11.9)	10.0	(1949.8)	安山岩	Q23　欠損品を炉石に転用　裏面に凹み　炉内
4	石皿	(12.6)	(9.4)	5.2	(438.6)	安山岩	Q24　欠損品を炉石に転用　表・裏面に凹み　炉内
5	凹石	(13.3)	(10.4)	10.7	(1524.1)	安山岩	Q25　欠損品を炉石に転用　表面に凹み　炉内

所見　本跡は，遺構確認状況ではプランが確認できず，石囲い炉を確認した段階で住居跡とした。炉を中心として，主柱穴の可能性をもつピットから推定線を引いたが，柱穴そのものが疑問であり，規模及び平面形は不明とした。時期も縄文時代中期の土器片が極少量出土しているだけで，特定は困難である。

第138号住居跡（第389図）

位置　調査区の中央部，B17j₀区。

重複関係　本跡は，南側部分が第139号住居跡を掘り込んでいる。

規模と平面形　長径4.29m，短径3.94の楕円形である。

長径方向　N－58°－W

壁　第139号住居跡と重複している南壁の一部分は残存していないが，他は壁高6～12cmで，外傾して立ち上がる。

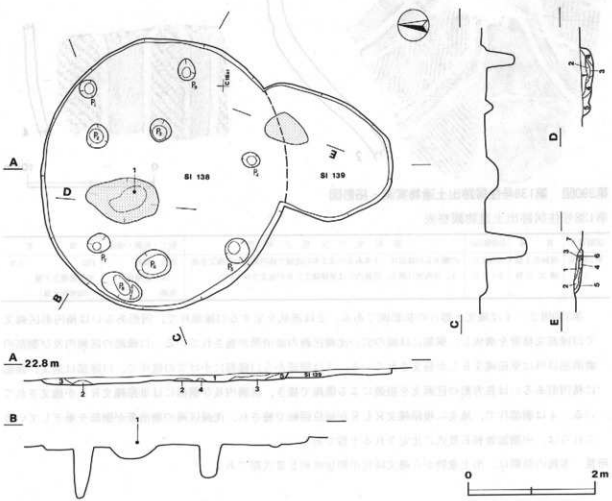
床　平坦である。踏み固められた面は見られない。

ピット　9か所。P_2，P_9，P_4は長径30～38cm，短径25～33cmの楕円形で，深さ24～35cm，P_6は規模的に大形で，長径55cm，短径43cmの楕円形で，深さ63cm。これらは，配列から主柱穴と思われる。他は性格不明である。

炉　やや北西側に付設されている。長径115cm，短径71cmの楕円形で，床を20cmほど掘りくぼめた地床炉である。炉床は，中央部が火熱で赤く焼け，硬化している。

炉土層解説

1　暗赤褐色　炭化粒子中量，焼土小ブロック・炭化物少量
2　暗赤褐色　焼土小ブロック・炭化物少量，ローム粒子極少量
3　暗褐色　焼土小ブロック中量，焼土粒子・炭化粒子少量
4　にぶい赤褐色　焼土小ブロック・ローム粒子少量，炭化物極少量
5　褐色　炭化粒子・ローム小ブロック・ローム粒子少量

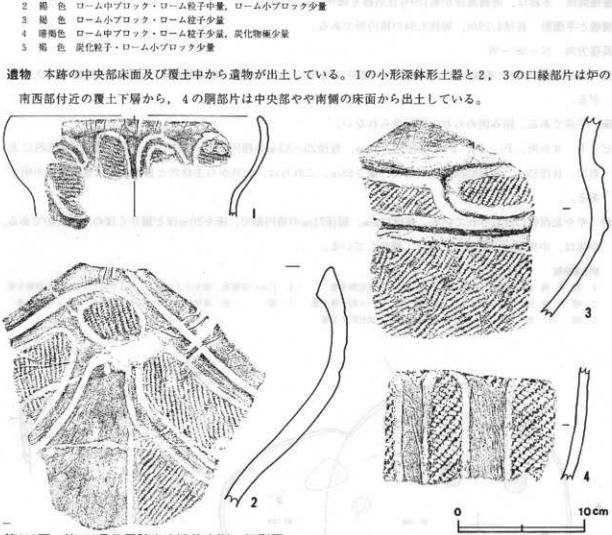


第389図　第138・139号住居跡実測図

覆土　5層からなる。壁際から褐色土が流れ込んだ後，中央部を暗褐色土が覆った自然堆積である。

土層解説
1　暗褐色　ローム小ブロック・ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子極少量
2　褐　色　ローム中ブロック・ローム粒子中量，ローム小ブロック少量
3　褐　色　ローム小ブロック・ローム粒子少量
4　暗褐色　ローム中ブロック・ローム粒子少量，炭化物極少量
5　褐　色　炭化粒子・ローム小ブロック少量

遺物　本跡の中央部床面及び覆土中から遺物が出土している。1の小形深鉢形土器と2，3の口縁部片は炉の南西部付近の覆土下層から，4の胴部片は中央部やや南側の床面から出土している。



第390図　第138号住居跡出土遺物実測・拓影図

第138号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第390図 1	深鉢形土器 縄文土器	A〔20.2〕 B〔8.0〕	内彎する口縁部片。1本あるいは2本の沈線で楕円形状の区画文を描き，区画周は磨き，区画内には単節縄文ＬＲが施文されている。	砂粒・長石 にぶい黄橙色 普通	P92　5％ 中央部覆土下層 (加曽利ＥⅢ)

第390図2～4は縄文土器片の拓影図である。2は波状を呈する口縁部片で，円形あるいは楕円形区画文で口縁部文様帯を構成し，胴部には幅の広い沈線区画の磨消帯が施されている。口縁部の区画内及び胴部の磨消部以外は単節縄文ＲＬが施文されている。3は胴部から口縁部にかけての破片で，口縁部は無文，頸部に楕円形あるいは長方形の区画文を指頭による隆線で描き，区画内及び胴部には単節縄文ＲＬが施文されている。4は胴部片で，地文に複節縄文ＲＬＲが縦位回転で施され，沈線区画の磨消帯が胴部を垂下している。これらは，中期加曽利ＥⅢ式に比定される土器である。

所見　本跡の時期は，出土遺物から縄文時代中期加曽利ＥⅢ式期である。

第139号住居跡（第389図）

位置　調査区の中央部，C17a₀区。

重複関係　本跡は，北側部分が第138号住居跡に掘り込まれている。

規模と平面形　北側部分が第138号住居跡との重複で立ち上がりが不明だが，長径〔2.62〕m，短径1.91mの楕円形と推定される。

長径方向　N－24°－E

壁　北壁が残っていないが，他は壁高8㎝ほどで，外傾して立ち上がる。

床　平坦である。踏み固められた面は見られない。

炉　北側に付設されており，第138号住居跡の床下から確認された。長径70㎝，短径45㎝の楕円形で，床を5㎝ほど掘りくぼめた地床炉である。炉床は中央が部分的に赤く焼け，硬化している。

炉土層解説

1　暗赤褐色　焼土小ブロック・焼土粒子・炭化物少量
2　暗赤褐色　焼土中ブロック・焼土小ブロック・炭化粒子・ローム粒子少量
3　にぶい赤褐色　焼土粒子中量，炭化粒子少量，焼土小ブロック極少量
4　暗赤褐色　焼土粒子中量，焼土中ブロック中量，焼土小ブロック・炭化物少量
5　暗赤褐色　焼土小ブロック・焼土粒子・ローム小ブロック少量
6　暗赤褐色　焼土粒子・炭化粒子少量
7　にぶい赤褐色　炭化粒子・ローム中ブロック少量

遺物　覆土中から縄文土器の細片が少量出土しているが，器形のわかるものはない。

第391図　第139号住居跡出土遺物実測・拓影図

第391図1，2は縄文土器片の拓影図である。1は口縁部片で，口縁部文様帯は隆線による区画文で構成され，区画内は縦位の沈線を充填，胴部は縄文が施文されている。2は胴部片で，絡状体の撚糸文を縦位に施し，3列の平行沈線が横走して文様が切断されている。中期加曽利ＥⅠ式に比定される土器である。

所見　本跡からピットは確認されなかった。遺物は阿玉台式期のものも僅かに混在しているが，加曽利Ｅ式期が主体であり，本跡の時期もその範疇と思われる。

第140号住居跡（第392図）

位置　調査区の中央部，C17a₀区。

規模と平面形　長径3.10m，短径2.92mのほぼ円形である。

壁　壁高10～13㎝で，外傾して立ち上がる。

床　平坦である。踏み固められた面は見られない。

ピット　4か所。P_1は北西壁を掘り込んでおり，長径55㎝，短径50㎝のほぼ円形で，深さ68㎝，P_2は東壁際に位置し，長径55㎝，短径45㎝の楕円形で，深さ62㎝，P_3は南西部の床を掘り込んでいる新しいピットで，長径80㎝，短径66㎝の楕円形で，深さ52㎝，P_4は炉の北側に位置し，径30㎝の円形で，深さ40㎝。配列に

規則性がなく，いずれも性格は不明である。

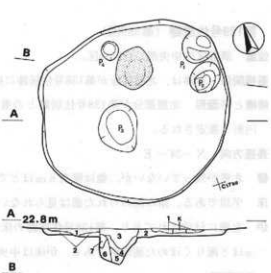
炉　北側に付設されている。長径72cm，短径56cmの楕円形である。覆土は薄く，やや赤みを帯び，硬化した炉床だけ確認できた。

覆土　本跡は2層からなる。土層3～7はP₃の覆土である。下層に褐色土が堆積した後暗褐色土が覆った自然堆積である。

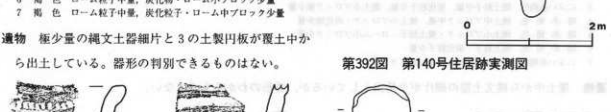
土層解説

1　暗褐色　ローム粒子中量，炭化粒子・ローム小ブロック少量，焼土小ブロック極少量
2　褐　色　ローム粒子中量，炭化粒子・ローム小ブロック少量
3　暗褐色　炭化物・ローム小ブロック・ローム粒子少量，焼土粒子極少量
4　暗褐色　炭化粒子・ローム小ブロック少量
5　暗褐色　炭化粒子・ローム小ブロック・ローム粒子少量
6　褐　色　ローム粒子中量，炭化物・ローム小ブロック少量
7　褐　色　ローム粒子中量，炭化粒子・ローム中ブロック少量

遺物　極少量の縄文土器細片と3の土製円板が覆土中から出土している。器形の判別できるものはない。



第392図　第140号住居跡実測図



第393図　第140号住居跡出土遺物実測・拓影図

第140号住居跡出土土製品観察表

図版番号	器　種	計測値(cm) 最大長	最大幅	最大厚	重　量 (g)	現存率 (%)	器形及び文様の特徴	備　考
第393図3	土製円板	4.2	4.6	1.6	22.6	100	表面摩滅が著しい	BP26　覆土

第393図1，2は縄文土器片の拓影図である。1は口縁部片で，隆帯に沿う角押文が見られ，中期阿玉台Ⅲ式に比定される土器と思われる。2は胴部片で，縄文と沈線が見られる。中期加曽利E式の範疇と思われる。

所見　本跡は，中期の遺物が極少量出土しているだけのため，時期の特定は困難であるが，縄文時代中期と考えておきたい。

第141号住居跡（第394図）

位置　調査区の中央部，C18a₂区。

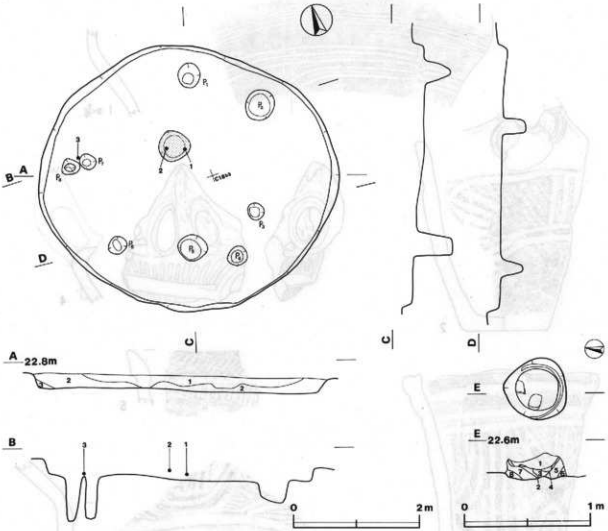
規模と平面形　長径4.55m，短径4.20mの楕円形である。

長径方向　N－38°－E

壁　壁高13～26cmで，ほぼ垂直に立ち上がる。

床　平坦であるが，北側に向かい僅かに傾斜している。踏み固められた面は見られない。

ピット　8か所。P₁～P₃，P₅～P₇は長径27～50cm，短径23～45cmの円形あるいは楕円形で，深さ28～73cm，



第394図　第141号住居跡実測図

これらは規模にばらつきは見られるが，配列から主柱穴と思われる。P_7の西側にほぼ同規模のP_8があり，これが主柱穴の可能性もある。P_4は径40cmの円形で，深さ39cm，位置的に補助柱穴とも考えられるが，規模的な面から性格は不明である。

炉　中央部やや北側に付設されている。径50cmの円形で，底部を打ち欠いた深鉢形土器を付設した土器埋設炉である。炉床は中央部が赤く焼け硬化しているが，部分的である。

炉土層解説

1　暗褐色　ローム小ブロック・ローム粒子中量，焼土粒子少量，炭化粒子極少量
2　暗褐色　ローム小ブロック・ローム粒子中量，焼土粒子少量，ローム中ブロック極少量
3　暗褐色　焼土粒子・ローム小ブロック・ローム粒子中量，焼土中ブロック・炭化粒子極少量
4　暗褐色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量，焼土粒子・炭化粒子極少量
5　褐　色　ローム中ブロック・ローム粒子少量，焼土粒子極少量
6　褐　色　ローム小ブロック・ローム粒子中量
7　褐　色　ローム中ブロック・ローム粒子中量，焼土粒子・炭化粒子少量
8　褐　色　ローム粒子中量，ローム中ブロック少量，焼土粒子極少量

覆土　3層からなる自然堆積である。

土層解説

1　暗褐色　焼土小ブロック・炭化粒子・ローム小ブロック・ローム粒子少量
2　褐　色　ローム粒子中量，炭化粒子少量，ローム小ブロック極少量
3　褐　色　ローム粒子多量，炭化粒子極少量

第395図　第141号住居跡出土遺物実測・拓影図

遺物　炉内及び覆土中から遺物が出土している。1は炉体土器である。2の深鉢形土器は横位の状態で炉体土器の中から，6の胴部片も炉体土器の中から出土している。3の深鉢形土器は横位の状態で西部覆土中から出土している。

第141号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第395図 1	深鉢形土器 縄文土器	B(9.3)	胴上部の破片。外傾した後僅かに内湾する。口縁部及び胴下半は意識的に打ち欠かれている。縄状体の撚糸文を複位に施文した後，横走あるいはクランク状に折れ曲がる櫛刷の沈線が施されている。部分的に煤が付着している。	砂粒・長石・石英・雲母 にぶい黄橙色 普通	P93　15% 炉内 (加曽利E I)

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第395図 2	深鉢形土器 縄文土器	A (13.8) B 15.2 C 6.4	口縁部から胴部一部欠損。平底で，胴部は外傾して立ち上がり，口縁部に至る。口縁部施文帯，孔を もつ把手または突起を有するが，欠損しているため形状は不明である。胴部文様帯は単節縄文RLの縦位回転が地文で，横位，縦位，斜位及び満状に平行沈線が描かれている。底部から4cmほどは無文である。	砂粒・長石 明赤褐色 普通	P94 70% 炉内 (加曽利EⅠ)
3	深鉢形土器 縄文土器	A 15.6 B (22.1)	底部欠損。胴部は外傾して立ち上がり，口縁部に至る。口縁部は肥厚し，上端に沈線が施されている。口縁部下の3段横走沈線以下に胴部文様帯が展開されている。胴部文様帯は垂下する平行沈線で4単位に分割され，中央に「X」字状が残るように沈線で三角形状のモチーフが描かれている。「X」字状の中央は突起状を呈し，左右の三角形は削り込まれている。器面には単節縄文RLが部分的に施文されている。	砂粒・長石・雲母 明赤褐色 普通	P95 85% 西部覆土中層 (勝坂Ⅲ)
4	把手 縄文土器	長さ(11.6)	口縁部把手片。三角形状に穿く上を向き，縁取りされた孔を左右側面に有する立体把手で，鳥あるいは蛇の頭部を想起させられる。孔と先端部には三叉文が彫刻され，把手下部には口縁部文様体を構成すると思われる沈線を沿わせた隆線と縦位の短沈線が見られる。	砂粒・長石・石英・雲母 にぶい橙色 普通	P96 5% 覆土 (中峰一加曽利EⅠ)

第395図5，6は縄文土器片の拓影図である。5は口縁部片で，口縁部外面に縄文が施文され，以下縦位の短沈線が充填されている。中期中葉の時期と思われる。6は胴部から頸部にかけての破片で，頸部は中央に沈線を伴う隆線と隙間に沈線が充填され，胴部には縄文が施文されている。中期加曽利EⅠ式の古段階と思われる。

所見　本跡の時期は，炉体土器及び出土遺物から縄文時代中期加曽利EⅠ式期である。

第142号住居跡（第396図）

位置　調査区の中央部，C18c2区。

重複関係　本跡は，東側部分が第19号溝に，南東側部分が第522号土坑に掘り込まれている。北側部分で第526号土坑と重複しているが，新旧関係は不明である。

規模と平面形　長径4.38m，短径3.67mの楕円形である。

長径方向　N－33°－E

壁　壁高14～21cmで，やや外傾して立ち上がる。

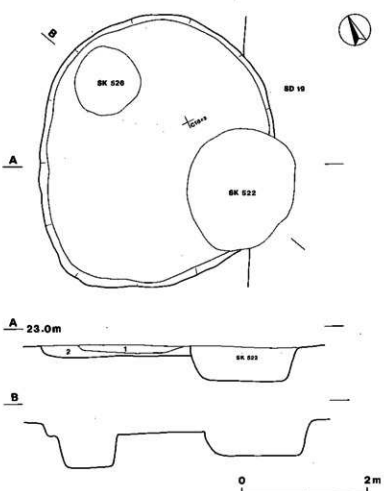
床　平坦である。踏み固められた面は見られない。

覆土　2層からなる自然堆積である。

土層解説

1　暗褐色　ローム粒子中量，炭化物・ローム小ブロック少量，焼土小ブロック極少量

2　褐　色　ローム粒子中量，炭化物・ローム小ブロック少量，焼土粒子・ローム中ブロック極少量



第396図　第142号住居跡実測図

遺物　縄文時代中期から後期にわたる遺物が少量出土しているが，いずれも細片で，器形の判別できるものはない。

所見　本跡には炉もピットもなく，床面もソフトであり，住居跡としての根拠には欠けている。遺物も縄文時代中期から後期にかけてのものが混在しており，時期不明である。住居跡というより竪穴状遺構と考えるのが妥当と思われる。

第143号住居跡（第397図）

位置　調査区の中央部，C18d₂区。

重複関係　本跡は，東側部分が第19号溝，第525号土坑に掘り込まれている。

規模と平面形　長径5.08m，短径4.34mの楕円形である。

長径方向　N－28°－E

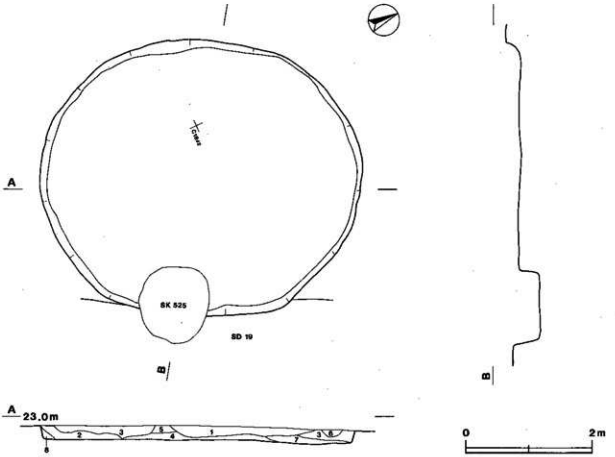
壁　壁高15～35cmで，やや外傾して立ち上がる。

床　平坦である。踏み固められた面は見られない。

覆土　8層からなる。分層してあるが，土層2，4，6～8の褐色土が流れ込んだ後，土層1，3，5の暗褐色土が上層に堆積した自然堆積と思われる。

土層解説

1　暗褐色　焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子・ローム小ブロック極少量
2　褐　色　ローム粒子・ローム小ブロック少量，炭化粒子極少量
3　暗褐色　ローム小ブロック・ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子極少量

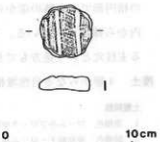


第397図　第143号住居跡実測図

4　褐　色　ローム粒子少量，炭化粒子・ローム小ブロック極少量
5　暗褐色　ローム粒子少量，炭化粒子極少量
6　褐　色　ローム粒子中量，ローム小ブロック極少量
7　褐　色　ローム粒子中量，炭化粒子・ローム小ブロック極少量
8　褐　色　ローム粒子多量，ローム小ブロック少量

遺物　覆土中から縄文時代中期～後期にかけての土器片が少量出土しているが，いずれも細片で，器形の判別できるものはない。1の土製円板は覆土中から出土している。

所見　本跡は，炉やピットが確認されず，床面もソフトであることから，竪穴状遺構の可能性が高い。出土遺物も縄文時代中期から後期にかけて混在しており，時期不明である。



第398図　第143号住居跡出土遺物実測・拓影図

第143号住居跡出土土製品観察表

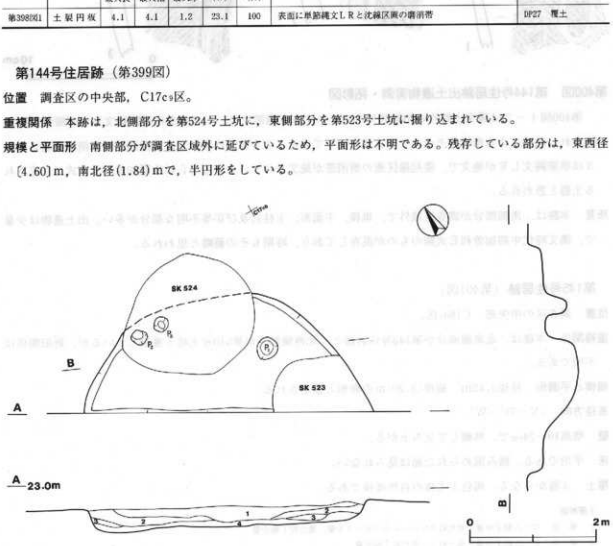
図版番号	器　種	計測値(cm) 最大長	最大幅	最大厚	重　量 (g)	現存率 (%)	器形及び文様の特徴	備　考
第398図1	土製円板	4.1	4.1	1.2	23.1	100	表面に単節縄文LRと沈線区画の磨消帯	DP27　覆土

第144号住居跡（第399図）

位置　調査区の中央部，C17c₅区。

重複関係　本跡は，北側部分を第524号土坑に，東側部分を第523号土坑に掘り込まれている。

規模と平面形　南側部分が調査区域外に延びているため，平面形は不明である。残存している部分は，東西径〔4.60〕m，南北径(1.84)mで，半円形をしている。



第399図　第144号住居跡実測図

壁　第524号，523号土坑との重複部分の立ち上がりは不明であるが，残存部は壁高24～27㎝で，やや外傾して立ち上がる。

床　平坦である。僅かに踏み固められている。

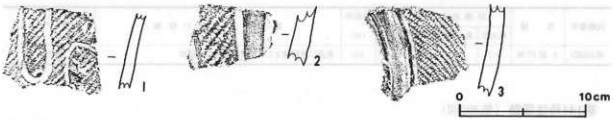
ピット　3か所。P_1は東側に位置し，長径36㎝，短径31㎝の楕円形で，深さ36㎝。P_2（長径25㎝，短径20㎝の楕円形で，本跡の床からの深さ70㎝）とP_3（径25㎝の円形で，本跡の床からの深さ71㎝）は第524号土坑内から確認されている。P_1は位置的に本跡の主柱穴で，推定線の内側のP_2，P_3のいずれかがP_1に対応する主柱穴という見方もできるが，P_2，P_3はP_1より深く，土坑に伴う可能性もあり，性格の判断は難しい。

覆土　4層からなる自然堆積である。

土層解説

1　黒褐色　ローム小ブロック中量，炭化物・炭化粒子少量
2　暗褐色　炭化粒子・ローム小ブロック・ローム粒子少量
3　暗褐色　ローム小ブロック・ローム粒子少量
4　褐　色　ローム粒子中量，炭化粒子・ローム中ブロック少量

遺物　覆土中から少量の遺物が出土しているが，細片であり，器形の判別できるものはない。



第400図　第144号住居跡出土遺物実測・拓影図

第400図1～3は縄文土器片の拓影図である。いずれも胴部片で，1は地文に単節縄文RLが縦位回転で施され，沈線による曲線的モチーフが文様を切っている。2も地文は同じで，沈線区画の磨消帯が施され，3は単節縄文LRが地文で，隆起線区画の磨消帯が施文されている。これらは中期加曽利EⅢ式に比定される土器と思われる。

所見　本跡は，南側部分が調査区域外で，規模，平面形，主柱穴及びかま等不明な部分が多い。出土遺物は少量で，縄文時代中期加曽利E式期のものが混在しており，時期もその範疇と思われる。

第145号住居跡（第401図）

位置　調査区の中央部，C18d₁区。

重複関係　本跡は，北東側部分が第143号住居跡と，北西側部分が第510号土坑と重複しているが，新旧関係は不明である。

規模と平面形　長径3.42m，短径〔3.20〕mの卵形と推定される。

長径方向　〔N－71°－W〕

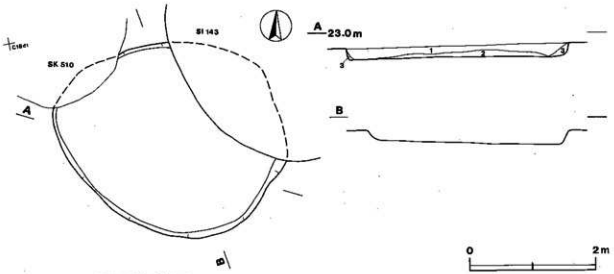
壁　壁高16～24㎝で，外傾して立ち上がる。

床　平坦である。踏み固められた面は見られない。

覆土　3層からなる。褐色土主体の自然堆積である。

土層解説

1　褐　色　ローム粒子中量，炭化粒子・ローム小ブロック少量，焼土粒子極少量
2　褐　色　ローム粒子中量，焼土粒子・炭化粒子極少量
3　明褐色　ローム粒子中量，ローム中ブロック・ローム小ブロック少量，炭化粒子極少量



第401図　第145号住居跡実測図

遺物　覆土中から縄文時代中期～後期にかけての土器片が少量出土しているが，いずれも細片で，器形の判別できるものはない。

所見　本跡から炉やピットは確認されず，床面も踏み固められた面は見られないことから，竪穴状遺構の可能性が高い。出土遺物も縄文時代中期から後期にかけてのものが混在しており，時期は不明である。

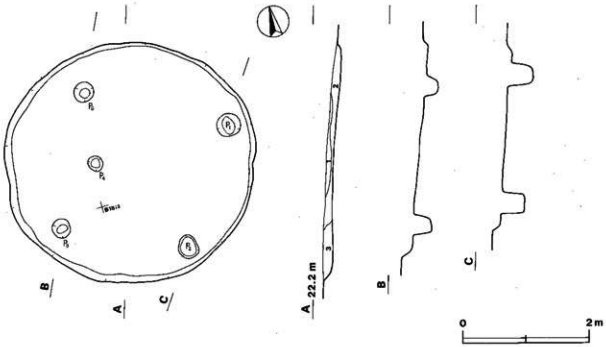
第147号住居跡（第402図）

位置　調査区の中央部，B18h₂区。

規模と平面形　長径4.03m，短径3.90mのほぼ円形である。

壁　壁高7～11cmで，外傾して立ち上がる。

床　平坦であるが，北側に向かい傾斜している。踏み固められた面は見られない。



第402図　第147号住居跡実測図

ピット　5か所。P_1～P_3，P_5は径30～37㎝の円形（P_3は長径39㎝，短径31㎝の楕円形）で，深さ18～38㎝。これらは，規模及び配列から主柱穴と思われる。中央部やや西側に位置するP_4（長径26㎝，短径21㎝の楕円形で，深さ15㎝）は性格不明である。

覆土　3層からなる。褐色土主体の自然堆積である。

土層解説

1　暗　色　ローム粒子中量，炭化粒子・ローム小ブロック少量，焼土粒子極少量
2　褐　色　ローム粒子中量，炭化粒子・ローム小ブロック少量
3　褐　色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量，焼土小ブロック極少量

遺物　縄文時代中期と思われる土器片が数点出土しているだけである。

所見　本跡から炉は確認されなかった。時期を判断する遺物が出土していないので，時期は不明である。

第148号住居跡（第403図）

位置　調査区の西部，B16h₅区。

重複関係　本跡は，東側部分が第149号住居跡を掘り込んでいる。

規模と平面形　長径4.55m，短径3.90mの楕円形である。

長径方向　N－48°－E

壁　壁高1～20㎝で，外傾して立ち上がる。

床　平坦である。全体的に踏み固められている。

ピット　11か所。P_1（長径51㎝，短径42㎝の楕円形で，深さ72㎝）とP_4（長径53㎝，短径47㎝の楕円形で，深さ117㎝）は長径の軸上で，壁沿いに位置している。他のピットは規模も配列も規則性がなく，性格不明である。P_{14}は第149号住居跡のピットと思われる。

覆土　4層からなる。下層に褐色土が堆積した後，上層を暗褐色土が覆った自然堆積である。

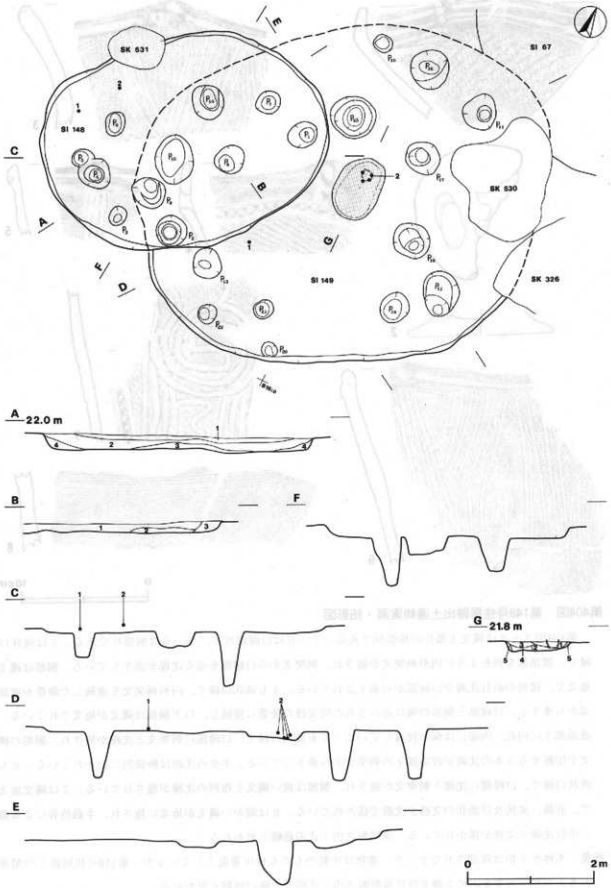
土層解説

1　暗褐色　ローム粒子中量，炭化物・ローム小ブロック少量，焼土小ブロック極少量
2　暗褐色　ローム小ブロック中量，焼土粒子・炭化粒子少量，焼土小ブロック・ローム中ブロック極少量
3　褐　色　ローム粒子中量，ローム中ブロック・ローム小ブロック少量，焼土粒子・炭化粒子極少量
4　明褐色　ローム中ブロック中量，炭化粒子極少量

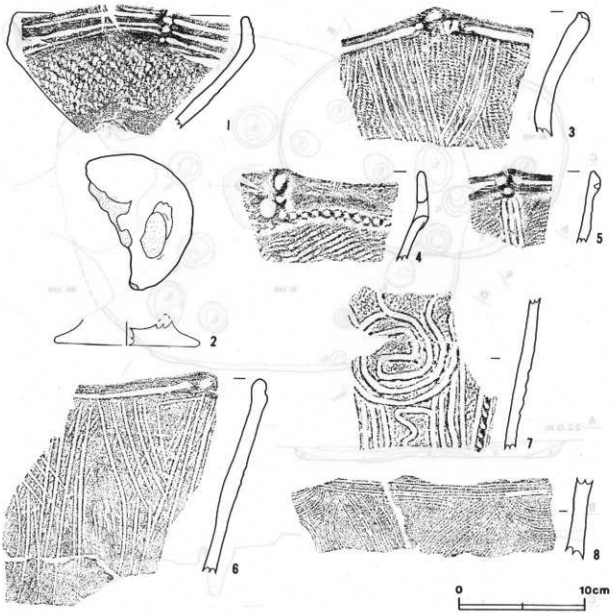
遺物　床面及び覆土中から多量の遺物が出土している。いずれも破片で出土しており，投棄遺物と思われる。西部からは1の鉢形土器と3の口縁部片が覆土中から，2の壷が床面から出土している。中央部やや西側の覆土中から7の胴部片が，東部床面から4，6の口縁部片が，覆土中から5の口縁部片と8の胴部片が出土している。

第148号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器　種	計測値(㎝)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第404図 1	鉢形土器 縄文土器	A(18.4) B(9.1)	胴部から口縁部にかけての破片。胴部は外反した後「く」の字に内傾し，口縁部に至る。口縁部外面に刺突文を3単位縦位に施し，刺突文から横走沈線が両側に派生している。胴部には横位回転の単節縄文RLが施文されているが，胴下部は無文である。	砂粒・雲母 にぶい褐色 普通	P97　20% 西部覆土下層 (堀之内1)
2	壷 縄文土器	高さ(1.9) 径 11.2	円形と思われる壷の破片。偏平な作りで，把手を有するが欠損しているため詳細は不明である。	砂粒・長石 橙色 普通	P98　50% 西部床面 (堀之内)



第403図　第148・149号住居跡実測図



第404図　第148号住居跡出土遺物実測・拓影図

第404図3～8は縄文土器片の拓影図である。3～6は口縁部片で，7，8は胴部片である。3は波状口縁で，波頂部を挟むように円形刺突文が施され，刺突文から口縁部を巡る沈線が派生している。胴部は縄文地文で，複列の斜行沈線が口縁部から垂下されている。4も波状口縁で，円形刺突文を連続した隆帯が波頂部から垂下し，口縁部と胴部の境に巡らされた同文様の隆帯に接続し，以下胴部は縄文が施文されている。波頂部下に円孔，内面には煤が付着している。5も波状口縁で，口縁部に刺突文と沈線が施され，胴部の縄文を切断する3本の沈線が波頂部下の刺突文から垂下している。中央の沈線は断続的に引かれている。6も波状口縁で，口縁部に沈線と刺突文が施され，胴部は粗い縄文と複列の沈線が施されている。7は縄文地文で，直線，波状及び渦状の文様が沈線で描かれている。8は細かい縄文が地文に施され，半截竹管による細い平行沈線で文様が描かれている。後期堀之内1式の範疇と思われる。

所見　本跡から炉は確認されなかった。遺物は中期のものも極少量混入しているが，第149号住居跡との関連が考えられ，大半を占める縄文時代後期堀之内1式期が本跡の時期と思われる。

第149号住居跡（第403図）

位置　調査区の西部，B16h9区。

重複関係　本跡は，東側部分が第326号，530号土坑に，西側部分が第148号住居跡に掘り込まれている。

規模と平面形　重複のため西側部分と覆土が薄い北側部分の立ち上がりは確認できなかったが，長径〔6.62〕m，短径〔5.35〕mの楕円形と推定される。

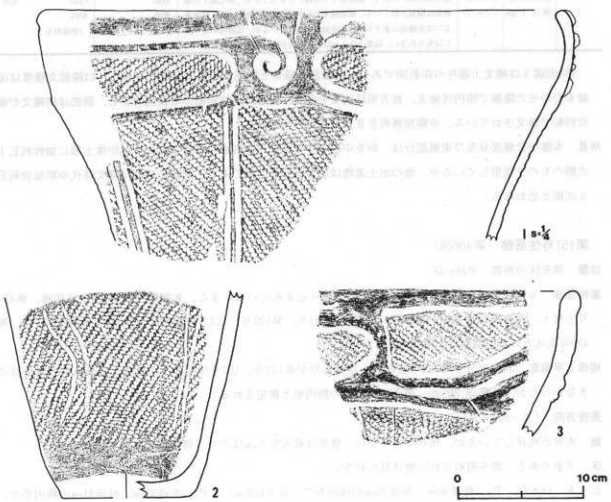
長径方向　〔N－51°－E〕

壁　南壁が残存しており，壁高14cmほどで，外傾して立ち上がる。

床　平坦である。踏み固められた面は見られない。

ピット　19か所。P_{11}～P_{14}は長径50～72cm，短径45～52cmの円形あるいは楕円形で，深さ56～85cm。これらは，規模及び配列から主柱穴と思われる。P_{12}，P_{13}間に位置しているP_{19}（長径50cm，短径45cmの楕円形で，深さ50cm）とP_{21}（径32～33cmの円形で，深さ49cm）は補助柱穴と考えられる。対応するP_{11}，P_{14}間にもP_{15}（長径35cm，短径28cmの楕円形で，深さ24cm）とP_7（径39cmの円形で，深さ16cm）があり，規模的にやや浅いが位置関係から補助柱穴の可能性をもつ。他は性格不明である。

炉　ほぼ中央に付設されていると思われる。長径104cm，短径70cmの小判形をしており，床を14cmほど掘りくぼめ，北側に深鉢形土器を埋設した土器埋設炉である。火熱で赤く焼け，硬化した炉床面が南側部分に見られる。



第405図　第149号住居跡出土遺物実測・拓影図

炉土層解説

1　にぶい赤褐色　ローム小ブロック中量，焼土小ブロック少量，炭化粒子極少量
2　暗　褐　色　ローム小ブロック・ローム粒子少量，焼土小ブロック・炭化粒子極少量
3　暗 赤 褐 色　焼土粒子中量，焼土小ブロック・炭化粒子・ローム小ブロック少量
4　褐　　色　焼土粒子・炭化粒子少量，ローム中ブロック極少量
5　暗　褐　色　ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子極少量

覆土　3層からなる。壁際からの自然堆積である。

土層解説

1　にぶい褐色　ローム粒子中量，焼土小ブロック・焼土粒子少量，炭化粒子極少量
2　にぶい褐色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量，焼土小ブロック・焼土粒子極少量
3　明　褐　色　ローム粒子多量，炭化粒子極少量

遺物　炉内，床面及び覆土中から遺物が出土している。2は炉体土器である。1の深鉢形土器は南東部の覆土中から，3の口縁部片は炉の北側床面から出土している。

第149号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	新土・色調・焼成	備　考
第405図 1	深鉢形土器 縄文土器	A(56.4) B(24.2)	胴部から口縁部にかけての破片。胴部は外張して立ち上がり，口縁部は内彎する。口縁部文様帯は沈線を沿わせた隆線で渦巻文及び楕円区画文を描き，区画内には複節縄文ＬＲＬが横位回転で施文されている。胴部文様帯は同縄文の縦位回転を施文とし，内部磨り消しの幅の狭い平行沈線が直線的に垂下して文様が分割されている。	砂粒・長石 褐色 普通	P99　20% 南東部覆土下層 (加曽利ＥⅡ)
2	深鉢形土器 縄文土器	B(15.3) C(10.3)	胴上部欠損。平底で，胴部はやや外傾して立ち上がる。胴上部との制離面は調整されている。単節縄文ＲＬが縦位回転で施文され，続行あるいは直線的に垂下する平行沈線が描かれているが，沈線間の磨り消しは見られない。底部から4cmほどは縄文が磨り消されている。	砂粒 橙色 普通	P100　30% 炉内 (加曽利ＥⅠ)

第405図3は縄文土器片の拓影図である。口縁部文様帯と胴部文様帯に分離しており，口縁部文様帯は沈線を沿わせた隆線で楕円区画文，長方形区画文を描き，内部に横位回転の単節縄文ＲＬ，胴部は同縄文が縦位回転で施文されている。中期加曽利ＥⅡ式のものと思われる。

所見　本跡の北側部分及び東側部分は，炉を中心とする柱穴の配列からの推定である。炉体土器に加曽利ＥⅠ式期のものを使用しているが，他の出土遺物は加曽利ＥⅡ式期であり，本跡の時期は縄文時代中期加曽利ＥⅡ式期と思われる。

第151号住居跡（第406図）

位置　調査区の西部，B16e$_5$区。

重複関係　本跡は，西側部分が第152号住居跡に掘り込まれている。また，北側部分で第124号住居跡，第490号土坑と，西側部分で第127号住居跡と重複しており，第124号，127号住居跡より本跡の方が新しいが，第490号土坑との新旧関係は不明である。

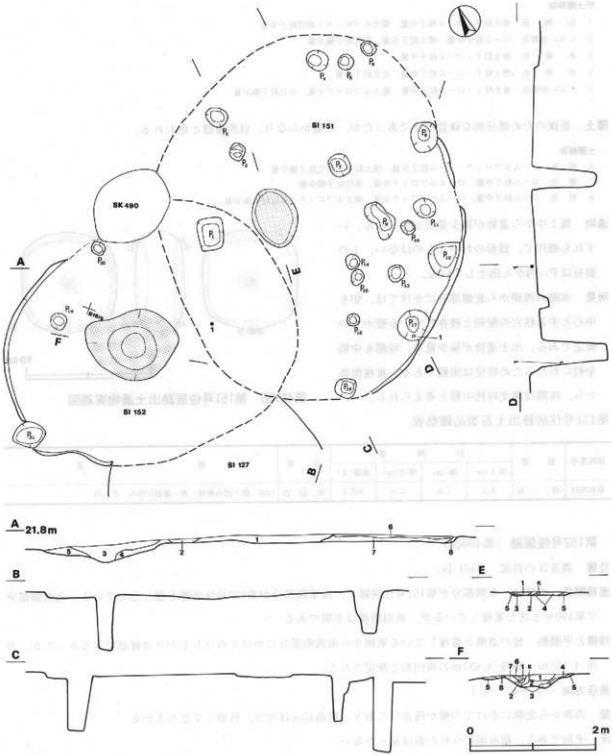
規模と平面形　北側部分が第124号住居跡，西側部分が第152号，127号住居跡との重複で立ち上がりは確認できなかったが，長径〔6.50〕m，短径〔4.83〕mの楕円形と推定される。

長径方向　〔N－67°－E〕

壁　南壁が残存しているが，残りは良くない。壁高は最大で8cmほどで，外傾して立ち上がる。

床　平坦である。踏み固められた面は見られない。

ピット　18か所。P_3（長径36cm，短径30cmの楕円形で，深さ122cm），P_4（長径37cm，短径31cmの楕円形で，深さ86cm），P_8（長径50cm，短径44cmの楕円形で，深さ69cm），P_{17}（長径51cm，短径45cmの楕円形で，



第406図　第151・152号住居跡実測図

深さ14㎝），P_{18}（長径35㎝，短径31㎝の楕円形で，深さ92㎝）は壁の内側沿いに並び，主柱穴と思われる。P_5（径25㎝の円形で，深さ35㎝）はP_4の補助柱穴，P_{11}（長径35㎝，短径30㎝の楕円形で，深さ26㎝）はP_8とP_{17}間に位置し，補助柱穴と思われる。第152号住居跡と重複している北西側部分ではピットが確認できなかった。他は性格不明である。

炉　ほぼ中央部に付設されていると思われる。長径95㎝，短径70㎝の楕円形で，床を5㎝ほど平坦に掘りくぼめた地床炉である。炉床は赤くなっているが，硬化はしていない。

炉土層解説

1　赤　褐　色　焼土粒子・ローム粒子中量，焼土小ブロック・炭化粒子少量
2　にぶい赤褐色　ローム粒子中量，焼土粒子少量，炭化粒子極少量
3　赤　褐　色　焼土粒子・ローム粒子中量
4　赤　褐　色　焼土粒子・ローム粒子中量，炭化粒子少量
5　にぶい赤褐色　焼土粒子・ローム粒子中量，焼土小ブロック少量，炭化粒子極少量

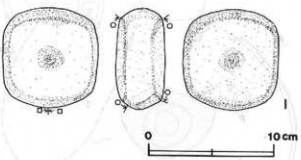
覆土　重複のため部分的な確認だけであったが，3層からなり，自然堆積と思われる。

土層解説

6　褐　色　ローム小ブロック・ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子極少量
7　褐　色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量，炭化粒子極少量
8　褐　色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量，焼土小ブロック・炭化粒子極少量

遺物　覆土中から遺物が極少量出土している。いずれも細片で，器形のわかるものはない。1の磨石はP_{17}内から出土している。

所見　本跡の西側から北側部分にかけては，炉を中心とする柱穴の配列と残存している壁からの推定である。出土遺物が極少量で，時期も中期全般にわたるため特定は困難である。重複関係から，時期は縄文時代中期と考えられる。



第407図　第151号住居跡出土遺物実測図

第151号住居跡出土石製品観察表

図版番号	器　種	計測値 長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石　質	備　考
第407図1	磨　石	8.1	7.6	3.9	403.2	安山岩	Q28　敲・凹み兼用　表・裏面に凹み　P_{17}内

第152号住居跡（第406図）

位置　調査区の西部，B16f$_9$区。

重複関係　本跡は，東側部分が第151号住居跡を，南東側部分が第127号住居跡を掘り込んでいる。北西側部分で第490号土坑と重複しているが，新旧関係は不明である。

規模と平面形　他の遺構と重複している東側から南西側部分にかけての立ち上がりは確認できなかったが，長径〔4.75〕m，短径〔3.63〕mの楕円形と推定される。

長径方向　〔N－47°－E〕

壁　西側から北側にかけての壁が残存しており，壁高12cmほどで，外傾して立ち上がる。

床　平坦である。踏み固められた面は見られない。

ピット　4か所。P_1は西側に位置し，長軸50cm，短軸35cmの長方形で，深さ27cm。P_{19}は炉の北側に位置し，径25cmの円形で，深さ85cm。P_{20}は北東壁際に位置し，径20cmの円形で，深さ28cm。P_{21}は北西壁を掘り込んでいる長径54cm，短径41cmの楕円形で，深さ36cm。規模もばらばらで，配列にも規則性がなく，性格不明である。

炉　ほぼ中央部に付設されていると思われる。長径147cm，短径114cmの不整楕円形で，床を20cm掘りくぼめた地床炉である。炉床は火熱で赤く焼け，硬化した焼土で凸凹である。

炉土層解説

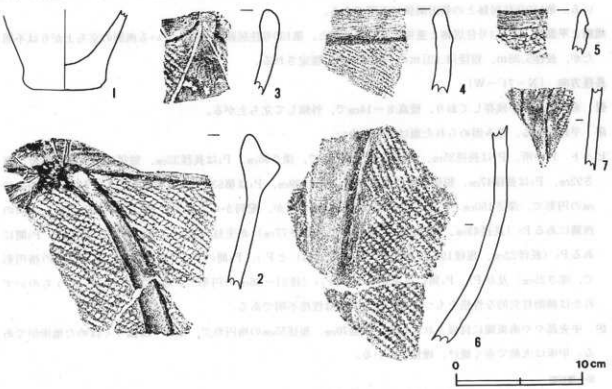
1 にぶい赤褐色　焼土粒子・ローム粒子中量，焼土小ブロック・炭化粒子・ローム小ブロック少量
2 にぶい赤褐色　焼土粒子多量，ローム小ブロック・ローム粒子中量，焼土小ブロック・炭化粒子少量
3 明 赤 褐 色　焼土粒子多量，ローム小ブロック・ローム粒子中量，焼土小ブロック・ローム中ブロック少量，焼土中ブロック極少量
4 にぶい赤褐色　ローム粒子多量，焼土粒子中量，焼土小ブロック少量，炭化粒子極少量
5 にぶい赤褐色　ローム粒子中量，焼土小ブロック・焼土粒子少量
6 にぶい赤褐色　ローム粒子中量，焼土粒子少量，焼土小ブロック・炭化粒子極少量
7 暗 赤 褐 色　ローム粒子中量，焼土粒子・ローム小ブロック少量，焼土小ブロック・炭化粒子極少量
8 にぶい赤褐色　焼土粒子・ローム粒子中量，焼土小ブロック少量

覆土　5層からなる。北側が部分的な人為堆積である。

土層解説

1 暗褐色　焼土小ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子少量，炭化粒子極少量
2 暗褐色　焼土中ブロック・焼土粒子・炭化粒子・ローム小ブロック少量，焼土大ブロック・ローム粒子極少量
3 暗褐色　焼土小ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子中量，炭化物・ローム中ブロック少量
4 褐　色　ローム粒子中量，焼土中ブロック・焼土小ブロック・ローム小ブロック少量
5 褐　色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量，焼土粒子極少量

遺物　炉内，床面及び覆土中から遺物が出土している。1の底部片は逆位の状態で炉の南東側から，6の胴部片は炉の南側から，2の口縁部片は炉の西側のいずれも床面から出土している。炉内からは4と5の口縁部片が覆土中から，7の胴部片が中央部炉床面から出土している。



第408図　第152号住居跡出土遺物実測・拓影図

第152号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器　種	記測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第408図 1	深鉢形土器 縄文土器	B（6.4） C　6.6	底部片。突出気味の丸みをもつ底部で，胴下部は外傾する。外面縦位の磨きが施されている。	砂粒 にぶい黄橙色 普通	P101　10% 炉南東側床面 （中期後半か）

第408図２～７は縄文土器片の拓影図である。２～５は口縁部片で，６，７は胴部片である。２は波状口縁で，無文の口縁部下に隆線が施されている。波頂部下に突起を有し，突起から胴部に隆線区画の磨消帯が，やや弧を描いて斜位に施され，地文である縦位回転の単節縄文ＬＲを分断している。３も波状口縁で，口縁部隆線区画による磨り消しの無文帯が波頂部下でせり上がって双耳状の小突起を形成し，波頂部下の逆三角形状の沈線区画の磨消帯が胴部地文の縄文を切っている。４は口縁部無文帯と胴部縄文体の境に隆線，５は口縁部下の沈線に円形刺突文が連続で施されている。６，７は胴部の縄文を切る微隆起線区画の磨消帯が見られる。中期加曽利ＥⅢ～Ⅳ式にかけてのものと思われる。

所見　第151号住居跡と重複している南東側部分は，土層の立ち上がりから推定している。出土遺物は縄文時代中期加曽利ＥⅢ～Ⅳ式期にかけての遺物が大半であり，本跡の時期と思われる。

第153号住居跡（第409図）

位置　調査区の西部，B16h₈区。

重複関係　本跡は，北側部分で第154号住居跡，第541号土坑と，東側部分で第534Ｂ号土坑と，南側部分で第130号住居跡，第534Ａ号，501号土坑と，西側部分で第532号土坑と重複している。第501号，534Ｂ号土坑は本跡を掘り込んでいる新しい土坑，第154号住居跡，第532号，534Ａ号及び541号土坑は本跡に掘り込まれている。第130号住居跡との新旧関係は不明である。

規模と平面形　第154号住居跡と重複している北側と，第130号住居跡と重複している南側の立ち上がりは不明だが，長径5.38m，短径〔4.63〕mの不整楕円形と推定される。

長径方向　〔Ｎ－71°－Ｗ〕

壁　東壁と西壁が残存しており，壁高８～14cmで，外傾して立ち上がる。

床　平坦である。踏み固められた面は見られない。

ピット　12か所。P_1は長径35cm，短径32cmの楕円形で，深さ66cm，P_2は長径35cm，短径29cmの楕円形で，深さ92cm，P_3は長径47cm，短径41cmの楕円形で，深さ139cm，P_4は第532号土坑を掘り込んでおり，径39～40cmの円形で，深さ150cm。これらは，深さはばらばらだが，配列から主柱穴と思われる。P_1でなく，P_2の西側にあるP_5（長径43cm，短径35cmの楕円形で，深さ77cm）が主柱穴という見方もできる。P_1，P_2間にあるP_6（長径22cm，短径19cmの楕円形で，深さ25cm）とP_1，P_4間のP_{11}（長径32cm，短径25cmの楕円形で，深さ25cm）及びP_3，P_4間に並ぶP_7，P_8，P_{12}（径31～36cmの円形で，深さ37～44cm）のうちのいずれかは補助柱穴的な性格をもつと思われる。他は性格不明である。

炉　中央部やや南東側に付設されている。長径70cm，短径55cmの楕円形で，床を６cm掘りくぼめた地床炉である。炉床は火熱で赤く焼け，硬化している。

炉土層解説

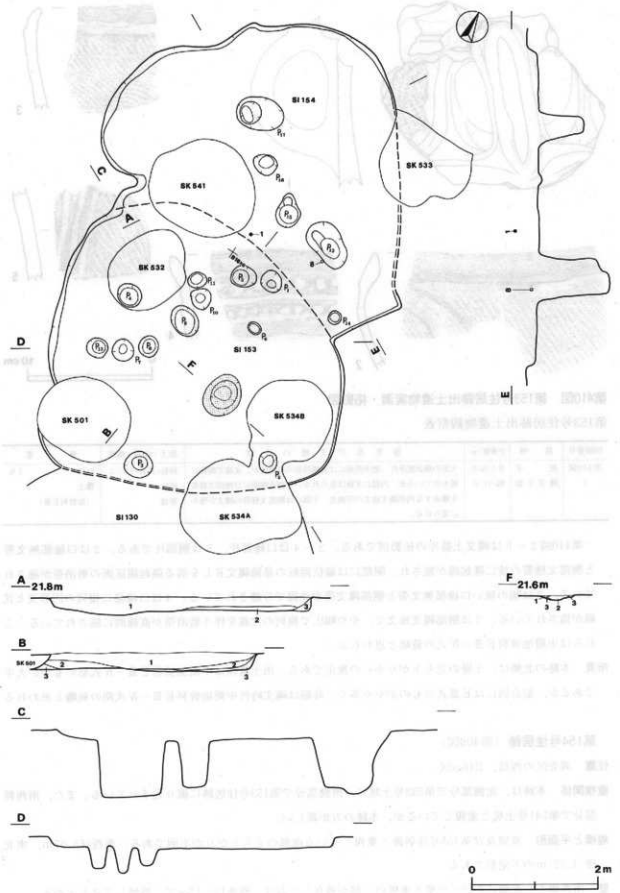
1　にぶい赤褐色　焼土小ブロック・焼土粒子・ローム粒子少量
2　にぶい赤褐色　焼土粒子多量，焼土小ブロック中量，ローム粒子少量，炭化粒子極少量
3　褐　　色　ローム粒子多量，焼土粒子・炭化粒子少量

覆土　３層からなる。壁際から土層３，２，１の順に流れ込んだ自然堆積である。

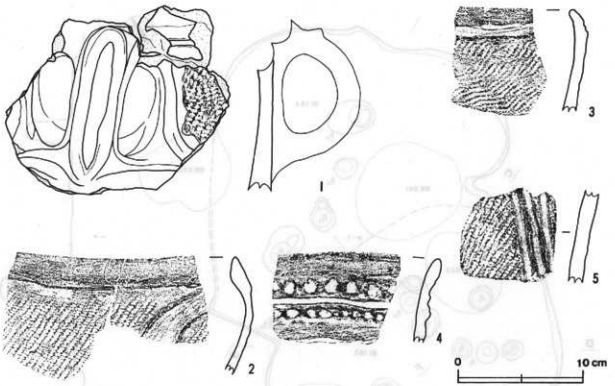
土層解説

1　黒褐色　ローム粒子中量，焼土粒子・炭化粒子・ローム小ブロック少量，焼土小ブロック極少量
2　暗褐色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量，焼土粒子・炭化粒子・ローム中ブロック極少量
3　褐　色　ローム粒子中量，焼土小ブロック・焼土粒子少量，炭化粒子・ローム中ブロック極少量

遺物　覆土中から少量の遺物が出土している。細片が多く，器形の判別できるものはない。



第409図　第153・154号住居跡実測図



第410図　第153号住居跡出土遺物実測・拓影図

第153号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第410図 1	把　手 縄文土器	長5(13.6) 幅(17.8)	大形の橋状把手片。把手外面には長楕円形の区画文が，沈線で縦位に描かれているが，内部に文様は見られない。把手側面に口縁部文様帯を構成する内部縄文施文の区画文，下部には胴部文様帯の縄文が僅かに見られる。	砂粒・長石・パミス 橙色 普通	P102　5％ 覆土 （加曽利ＥⅢ）

第410図２～５は縄文土器片の拓影図である。２～４は口縁部片，５は胴部片である。２は口縁部無文帯と胴部文様帯の境に隆起線が施され，胴部には縦位回転の単節縄文ＲＬを切る隆起線区画の磨消帯が施されている。３は幅の狭い口縁部無文帯と胴部縄文帯が沈線で分離されている。４は口縁部に複列の円形文と沈線が施されている。５は胴部縄文地文で，やや幅広で複列の沈線を伴う磨消帯が直線的に施されている。これらは中期加曽利ＥⅢ～Ⅳ式の範疇と思われる。

所見　本跡の北側は，土層の立ち上がりからの推定である。出土遺物は中期加曽利ＥⅢ～Ⅳ式期のものが大半であるが，割合的にはＥⅢ式のものがやや多く，時期は縄文時代中期加曽利ＥⅢ～Ⅳ式期の範疇と思われる。

第154号住居跡（第409図）

位置　調査区の西部，B16g₆区。

重複関係　本跡は，北側部分で第533号土坑に，南側部分で第153号住居跡に掘り込まれている。また，南西側部分で第541号土坑と重複しているが，本跡の方が新しい。

規模と平面形　東壁及び第153号住居跡と重複している南側の立ち上がりが不明である。東西径5.07m，南北径(3.52)mの不定形である。

壁　南西側から北側にかけての壁と東壁の一部が残存しており，壁高15～17cmで，外傾して立ち上がる。

床　平坦である。踏み固められた面は見られない。

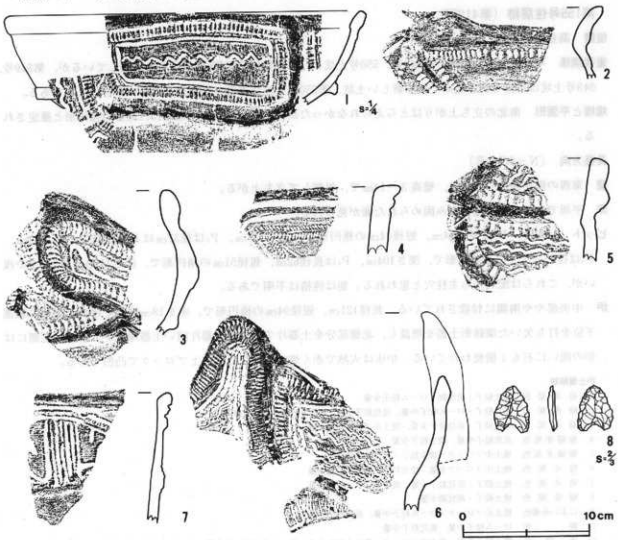
ピット　5か所。P_{17}は北西側に位置し，長径77cm，短径52cmの楕円形で，内部に深さ78cmと86cmの小ピットを2本有している。P_{13}は南東側に位置し，長径81cm，短径46cmの楕円形で，深さ115cm，P_{14}は南東壁寄りに位置し，径25cmの円形で，深さ30cm，P_{15}はほぼ中央に位置し，長径55cm，短径40cmの瓢箪形で，深さ22cm，P_{16}はP_{17}，P_{15}の間に位置し，長径41cm，短径32cmの楕円形で，深さ42cm。規模的にばらばらで，配列にも規則性がなく，性格は不明である。

覆土　3層からなる自然堆積である。

土層解説

1　暗褐色　ローム粒子中量，焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子・ローム小ブロック極少量
2　暗褐色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量，焼土粒子・炭化粒子・ローム中ブロック極少量
3　褐　色　ローム粒子多量，焼土粒子・炭化粒子極少量

遺物　遺物は南部の床面及び覆土中から出土しているが，破片が多い。1の深鉢形土器と3，5及び7の口縁部片はP_{15}の南側から，8の石鏃と4及び6の口縁部片はP_{13}の南側から，2の口縁部片は第541号土坑の北側から，いずれも床面から出土している。



第411図　第154号住居跡出土遺物実測・拓影図

第411図2～7は縄文土器片の拓影図で，いずれも口縁部片である。2～5は隆帯に沿って爪形文が施され，4は複列構成である。爪形文内部に3は曲線的モチーフの沈線，5は波状沈線が施されている。6は波頂部片で，刻文を加飾した隆帯に沿い結節沈線文が複列施され，内部に波状沈線，隆帯下には縦位の短沈線

が見られる。7は口縁部下の横走平行沈線文に接続する縦位の4列の平行沈線文が見られ，隙間は条線状の横沈線が描かれいる。4，7に勝坂Ⅱ式の影響が見られるが，いずれも中期阿玉台Ⅲ式の範疇と思われる。

第154号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第411図 1	深鉢形土器 縄文土器	A(37.8) B(9.8)	胴上部から口縁部にかけての破片。口縁部に長方形区画文を隆帯で描き，内部にキャタピラ文，沈線を沿わせ，区画中央には縦位沈線が横走されている。	砂粒 にぶい褐色 普通	10% P103 P_{11}南側床面 (勝坂Ⅱ)

図版番号	器種	計測値 長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	備考
第411図8	石鏃	1.8	1.4	0.3	0.7	チャート	Q27 凹基無茎鏃 P_{11}南側床面

所見　本跡から炉は確認されず，ピットの配列も不規則で，しかも重複のため全体像は不明な部分が多い。遺物は縄文時代中期阿玉台Ⅲ式期前後のものが多く，本跡の時期と思われる。

第155号住居跡（第412図）

位置　調査区の西部，B16i_7区。

重複関係　本跡は，炉の北側で第549号，550号土坑と，南東側部分で第643号土坑と重複しているが，第549号，643号土坑は本跡を掘り込んでいる新しい土坑，第550号土坑は本跡に掘り込まれている古い土坑である。

規模と平面形　南北の立ち上がりはとらえられなかったが，長径〔6.04〕m，短径〔5.12〕mの楕円形と推定される。

長径方向　〔N－82°－E〕

壁　東西の壁が残存しており，壁高3～14cmで，外傾して立ち上がる。

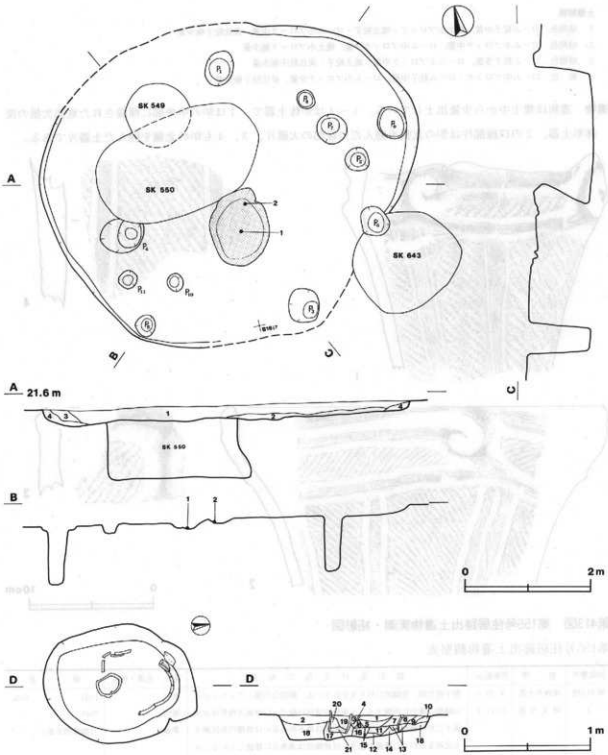
床　平坦である。炉周辺に踏み固められた面が見られる。

ピット　11か所。P_1は長径54cm，短径44cmの楕円形で，深さ124cm，P_2は径37cmほどの円形で，深さ64cm，P_3は径55cmほどの不整円形で，深さ104cm，P_4は長径62cm，短径51cmの楕円形で，深さ115cm。P_2がやや浅いが，これらは配列から主柱穴と思われる。他は性格は不明である。

炉　中央部やや南側に付設されている。長径121cm，短径94cmの楕円形で，床を18cm掘りくぼめ，中央に胴部下位を打ち欠いた深鉢形土器を埋設し，北側部分を土器片で囲った土器片囲い土器埋設炉である。北側には炉の囲いに石も1個使われている。炉床は火熱で赤く焼け，硬化した焼土ブロックで凸凹である。

炉土層解説

1　暗赤褐色　焼土粒子・炭化物・ローム粒子少量
2　暗赤褐色　焼土粒子・ローム粒子中量，炭化粒子少量，焼土小ブロック極少量
3　暗赤褐色　焼土粒子・炭化粒子少量，焼土小ブロック極少量
4　極暗赤褐色　炭化粒子中量，焼土粒子少量
5　黒暗赤褐色　焼土中ブロック・焼土粒子・炭化物少量
6　暗赤褐色　焼土小ブロック少量，焼土粒子・炭化粒子極少量
7　暗赤褐色　焼土粒子・炭化粒子少量，焼土小ブロック極少量
8　暗赤褐色　焼土粒子・炭化物少量
9　にぶい赤褐色　焼土小ブロック・ローム粒子中量，炭化粒子少量
10　褐色　ローム粒子中量，炭化粒子少量
11　赤褐色　焼土粒子多量，焼土中ブロック・焼土小ブロック・ローム小ブロック中量，ローム中ブロック少量
12　にぶい赤褐色　ローム中ブロック・ローム小ブロック多量，焼土中ブロック・焼土小ブロック少量
13　にぶい赤褐色　焼土粒子多量，焼土小ブロック・ローム粒子中量，炭化粒子少量
14　にぶい赤褐色　焼土ブロック層
15　明赤褐色　焼土ブロック中量
16　明赤褐色　焼土粒子多量，焼土小ブロック・ローム粒子中量
17　にぶい赤褐色　焼土粒子・ローム粒子中量，焼土小ブロック少量，炭化粒子極少量



第412図　第155号住居跡実測図

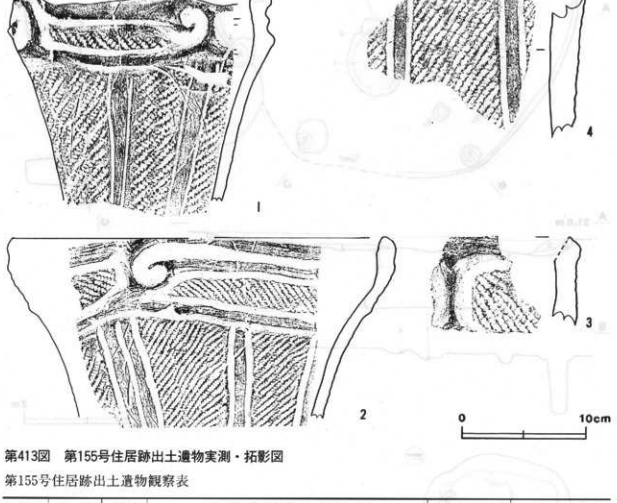
18　にぶい赤褐色　焼土のブロック層
19　暗　褐　色　焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子・ローム小ブロック少量
20　褐　　色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量，焼土小ブロック極少量
21　褐　　色　ローム粒子中量，焼土小ブロック・ローム中ブロック少量，炭化粒子極少量

覆土　4層からなる。壁際からの自然堆積である。

土層解説

1　暗褐色　ローム粒子中量，焼土小ブロック・焼土粒子・ローム小ブロック少量，炭化粒子極少量
2　暗褐色　ローム小ブロック中量，ローム中ブロック少量，焼土小ブロック極少量
3　暗褐色　ローム粒子多量，ローム小ブロック中量，焼土粒子・炭化粒子極少量
4　褐　色　ローム中ブロック・ローム粒子中量，ローム小ブロック少量，炭化粒子極少量

遺物　遺物は覆土中から少量出土している。1～4は炉体土器で，1は炉の中央部に埋設された底部欠損の深鉢形土器，2の口縁部片は炉の北側を囲んだ口縁部の大破片，3，4も炉の北側を囲んだ土器片である。



第413図　第155号住居跡出土遺物実測・拓影図

第155号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第413図 1	深鉢形土器 縄文土器	A 20.0 B (17.1)	胴下部欠損。意識的に打ち欠かれている。胴部は外傾して立ち上がり，口縁部は僅かに内彎する。4単位の波状口縁で，口縁部文様帯は波頂部下に形の崩れた渦巻文，波頂部間は長方形あるいは長楕円形区画文を沈線を沿わせた隆線で描き，区画凹部は渦巻文に接続している。区画内には横位回転の単節縄文Rしが施文されている。胴部文様帯は同縄文が横位回転で施文され，直線的に垂下する沈線区画の磨消帯に地文が分断されている。	砂粒 橙色 普通	P104　60% 炉内 （加曽利E II）
2	深鉢形土器 縄文土器	A (30.0) B (14.4)	胴上部から口縁部にかけての破片。胴部は外傾して立ち上がり，口縁部は僅かに内彎する。口縁部文様帯は沈線を沿わせた隆線で長楕円形，楕円形の区画文及び形の崩れた渦巻文を描き，区画内には単節縄文Rしが横位回転で施文されている。胴部文様帯は同縄文を縦位回転で施文し，直線的に垂下する平行沈線あるいは3本平行沈線区画の磨消帯に文様が分断されている。	砂粒・スコリア 橙色 普通	P105　20% 炉内 （加曽利E II）

第413図３，４は縄文土器片の拓影図である。３は口縁部片で，沈線を沿わせた隆帯で方形の区画文を施し，区画内は横位回転の単節縄文ＲＬが施文されている。４は胴部片で，地文に縦位回転の単節縄文ＲＬが施され，沈線区画の磨消帯が直線的に垂下されている。

所見　本跡の北側と南側は残存している壁からの推定である。時期は，炉体土器から縄文時代中期加曽利ＥⅢ式期と思われる。

第156号住居跡（第414図）

位置　調査区の東部，C19gs区。

重複関係　本跡は，南側部分で第662号，710号及び711号土坑と重複しているが，本跡の方が新しい。

規模と平面形　長径4.07m，短径2.77mの楕円形である。

長径方向　N－22°－E

壁　第662号土坑と重複している南東壁の一部の立ち上がりは確認できなかったが，他は壁高６～10cmで，外傾して立ち上がる。

床　平坦である。全体に踏み固められている。

ピット　２か所。P_1は径37cmの円形で，深さ81cm，P_2は径40cmの円形で，深さ74cm。東西の壁際に対称的に位置し，主柱穴と思われる。

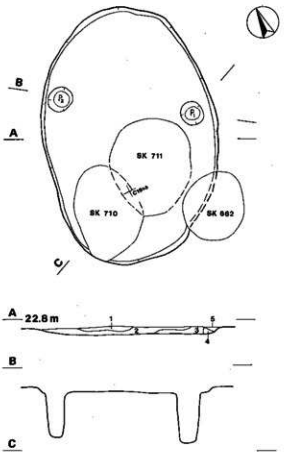
覆土　５層からなる。壁際の土層４，５は撹乱気味の層で，本跡は土層１～３の自然堆積と思われる。

土層解説

1　黒褐色　炭化粒子・ローム小ブロック少量
2　黒褐色　炭化粒子・ローム小ブロック・ローム粒子少量，粘土小ブロック極少量
3　暗褐色　炭化粒子・ローム粒子少量
4　褐　色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量
5　黒褐色　ローム小ブロック少量，焼土小ブロック極少量

遺物　極少量の遺物が出土しているが，細片である。

所見　本跡から炉は確認されていない。遺物は極少量で，時期も縄文時代中期～後期までのものが混在して出土しており，時期の特定は困難である。



第414図　第156号住居跡実測図

第157号住居跡（第415図）

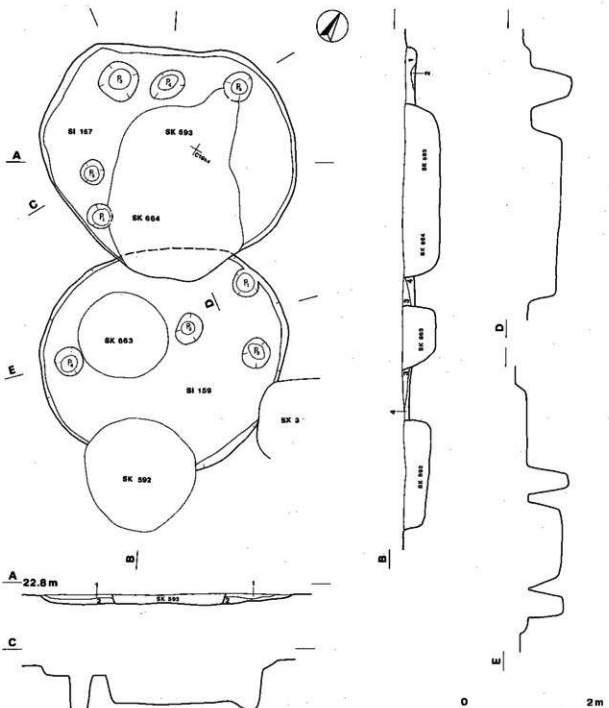
位置　調査区の東部，C19h3区。

重複関係　本跡は，中央部から南西側部分を第593号，664号土坑に掘り込まれている。また，南西側部分で第159号住居跡と重複しているが，新旧関係は不明である。

規模と平面形　長径4.08m，短径3.67mの楕円形である。

長径方向　N－59°－E

壁　第664号土坑と重複している南西側部分は残存してないが，他は壁高14～16cmで，外傾して立ち上がる。



第415図　第157・159号住居跡実測図

床　平坦である。踏み固められた面は見られない。

ピット　5か所。P_1～P_5は長径41～65cm，短径38～62cmの円形あるいは楕円形で，深さ50～74cm。西側の壁に沿って位置しており，主柱穴の可能性も考えられるが，東側でピットが確認されず，P_1，P_3，P_5が主柱穴という見方もできる。

覆土　中央部が土坑に掘り込まれ，部分的な確認にとどまった。2層からなり，自然堆積と推定される。

土層解説

1　暗褐色　炭化粒子・ローム粒子少量，焼土小ブロック極少量

2　暗褐色　炭化粒子・ローム中ブロック・ローム粒子少量

遺物　極少量の遺物が出土しているが，すべて細片で，器形の判別できるものはない。

所見　中央部が土坑に掘り込まれているため，炉の有無は確認できなかった。遺物は覆土中から極少量出土しているだけで，時期の特定は困難であるが，ほとんどが縄文時代中期のものであり，本跡の時期も中期と思われる。

第159号住居跡（第415図）

位置　調査区の東部，C19h4区。

重複関係　本跡は，北側部分が第664号土坑に，中央部が第663号土坑に，南東側部分が第592号土坑にそれぞれ掘り込まれている。東側部分で性格不明遺構と僅かに重複しているが，新旧関係は不明である。

規模と平面形　長径4.02m，短径3.60mの楕円形である。

長径方向　N－44°－E

壁　第664号土坑と重複している北西壁，第592号土坑と重複している南東壁及び不明遺構と重複している東壁は部分的に不明であるが，残存部は壁高7～18cmで，外傾して立ち上がる。

床　平坦である。踏み固められた面は見られない。

ピット　4か所。P_1，P_2，P_4は径55～57cmの円形で，深さ36～56cm。これらは規模及び配列から主柱穴と思われる。中央部やや北側のP_3（長径60cm，短径50cmの楕円形で，深さ65cm）は性格不明である。

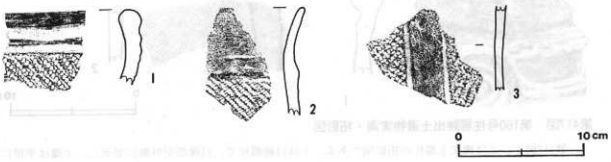
覆土　2層からなる。褐色土が下層に流れ込んだ後，暗褐色土が覆った自然堆積である。

土層解説

3　暗褐色　焼土小ブロック・炭化物・ローム小ブロック少量

4　褐　色　ローム粒子中量，炭化粒子・ローム小ブロック少量

遺物　極少量の遺物が出土しているが，すべて細片で，器形の判別できるものはない。



第416図　第159号住居跡出土遺物実測・拓影図

第416図１～３は縄文土器片の拓影図である。１は口縁部片で，口縁部に２列の横走沈線が施され，胴部は横位回転の単節縄文ＲＬが施文されている。２も口縁部片で，口縁部無文帯と胴部縄文帯の境に隆起線が施されている。単節縄文ＬＲの横位回転が地文である。３は胴部片で，地文の縄文を沈線区画の磨消帯が直線的に垂下し，文様を分断している。中期加曽利ＥⅢ式に比定されると思われる。

所見　本跡は，炉の有無は確認できなかった。遺物は中期加曽利Ｅ式期のものが主に出土しているが，その中でも加曽利ＥⅢ式期の割合が高い。ただ，出土量は極少量で，すべて覆土中のため，時期は縄文時代中期加曽利Ｅ式期の範疇と考えられる。

第160号住居跡（第418図）

位置　調査区の東部，C19hz区。

重複関係　本跡は，中央部が第４号不明遺構に，南東側部分が第607号土坑に掘り込まれている。中央部で第637号土坑と重複しているが，新旧関係は不明である。

規模と平面形　長軸6.58m，短軸5.82mの不整隅丸長方形である。

長径方向　Ｎ－33°－Ｅ

壁　不明遺構と重複している東壁と西壁の一部の立ち上がりが不明で，他の残存部も残りは少なく，壁高３cmほどで，緩やかに外傾して立ち上がる。

床　平坦である。踏み固められた面は見られない。

ピット　18か所。P_1，P_2～P_6，P_{10}，P_{12}，P_{15}～P_{18}は長径33～48cm，短径32～46cmの円形あるいは楕円形で，深さ36～79cm。不明遺構と重複している東側部分でこれらに相当するピットがないが，壁の内側に沿って位置する柱穴の可能性がある。ただ，等間隔に着目した場合，南側を巡る柱穴はP_1，P_3，P_5とP_8のどちらかとP_{10}の４本という見方もできる。他は性格不明である。

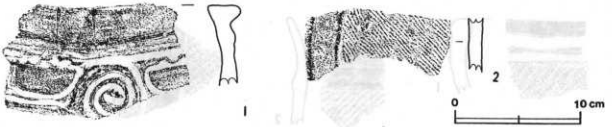
炉　南西側に片寄って付設されている。長径72cm，短径60cmの卵形で，床を18cmほど掘りくぼめた地床炉である。炉床は火熱で赤く焼け，硬化している。

炉土層解説

1　赤　褐　色　焼土小ブロック・焼土粒子多量，焼土大ブロック・焼土中ブロック中量
2　にぶい赤褐色　焼土小ブロック・焼土粒子中量
3　にぶい赤褐色　焼土粒子中量，焼土小ブロック少量，ローム粒子極少量
4　にぶい褐色　焼土粒子・ローム中ブロック中量，焼土小ブロック少量
5　にぶい赤褐色　焼土小ブロック・焼土粒子・ローム粒子少量
6　褐　　色　ローム中ブロック多量

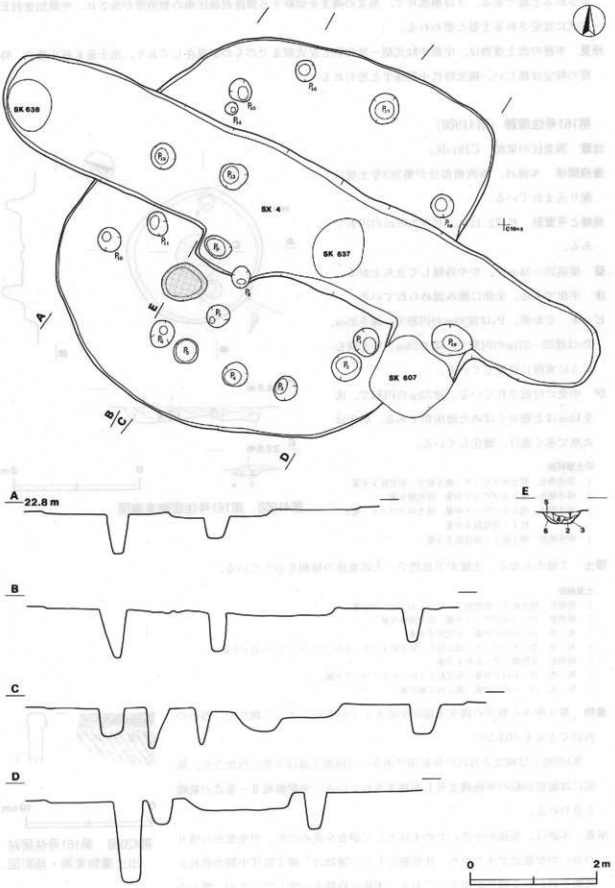
覆土　覆土は極めて薄く，堆積状況は不明である。

遺物　極少量の遺物が出土しているが，すべて細片で，器形の判別できるものはない。



第417図　第160号住居跡出土遺物実測・拓影図

第417図１，２は縄文土器片の拓影図である。１は口縁部片で，口縁部が外側に突出し，上端は平坦に作出されている。外面には交互刺突の「コ」字状文，沈線を沿わせた隆線で渦巻文が描かれ，中期中峠式に比



第418図　第160号住居跡実測図

定される土器である。2は胴部片で，地文の縄文を切断する微隆起線区画の磨消帯が施され，中期加曽利EⅣ式に比定される土器と思われる。

所見　本跡の出土遺物は，中期中峠式期～加曽利EⅣ式期までのものが混在しており，出土量も極少量で，時期の特定は難しい。縄文時代中期後半と思われる。

第161号住居跡（第419図）

位置　調査区の東部，C19j₂区。

重複関係　本跡は，南西側部分が第563号土坑に掘り込まれている。

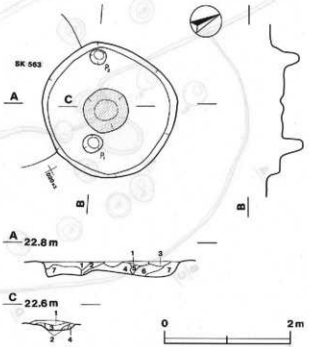
規模と平面形　長径2.12m，短径2.05mの円形である。

壁　壁高20～24cmで，やや外傾して立ち上がる。

床　平坦である。全体に踏み固められている。

ピット　2か所。P_1は径30cmの円形で，深さ35cm，P_2は径25～27cmの円形で，深さ28cm。炉を挟むように東西に位置している。

炉　中央に付設されている。径70cmの円形で，床を15cmほど掘りくぼめた地床炉である。炉床は火熱で赤く焼け，硬化している。



第419図　第161号住居跡実測図

炉土層解説

1　暗褐色　焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
2　暗赤褐色　焼土小ブロック中量，炭化物少量
3　暗赤褐色　焼土小ブロック中量，焼土中ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
4　暗赤褐色　焼土粒子・炭化粒子少量

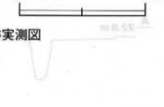
覆土　7層からなる。土層が不自然で，人為堆積の様相を示している。

土層解説

1　暗褐色　焼土粒子・炭化粒子・ローム小ブロック少量
2　暗褐色　ローム小ブロック少量，炭化物極少量
3　褐　色　ローム粒子中量，炭化粒子少量
4　褐　色　焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子・ローム小ブロック・ローム粒子少量
5　暗褐色　炭化物・ローム粒子少量
6　褐　色　ローム粒子中量，炭化粒子・ローム小ブロック少量
7　褐　色　ローム粒子中量，焼土粒子極少量

遺物　覆土中から数点の縄文土器片が出土しているが，すべて細片で，器形の判別できるものはない。

第420図1は縄文土器片の拓影図である。口縁部上端は平坦に作出され，胴部には縦位回転の単節縄文RLが施文されている。中期勝坂Ⅱ～Ⅲ式の範疇と思われる。



第420図　第161号住居跡出土遺物実測・拓影図

所見　本跡は，規模が小さいため土坑として調査を進めたが，中央部から残りの良い炉が確認できたため，住居跡とした。遺物は，縄文時代中期加曽利E式期と思われる細片が出土しており，本跡の時期を示唆しているが，覆土中から数点だけであり，特定は困難である。

第162号住居跡（第421図）

位置　調査区の東部，D19b3区。

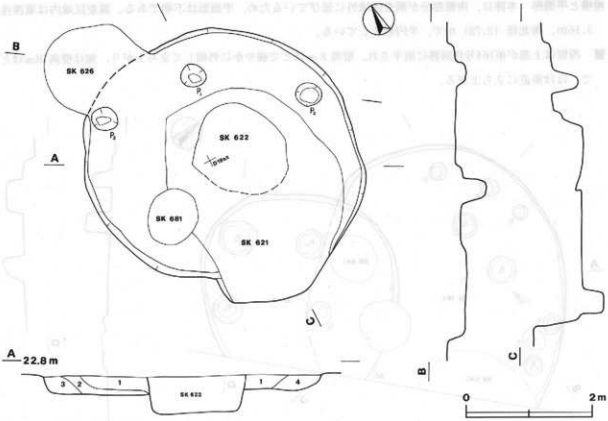
重複関係　本跡は，北側部分で第626号土坑と，中央部から南部にかけて第621号，622号及び681号土坑と重複している。第622号，626号及び681号土坑は本跡を掘り込んでいる新しい土坑，第621号土坑は本跡に掘り込まれている古い土坑である。

規模と平面形　土坑と重複している北側と南側の一部は不明であるが，長径4.52m，短径4.30mのほぼ円形である。

壁　部分的に北壁と南壁が残存していないが，他は壁高8～12cmで，外傾して立ち上がる。

床　中央部が土坑と重複のため残存していないが，残存部は平坦である。踏み固められた面は見られない。

ピット　3か所。P_1は長径40cm，短径35cmの楕円形で，深さ40cm，P_2は長径41cm，短径35cmの楕円形で，深さ21cm，P_3は長径41cm，短径37cmの楕円形で，深さ32cm。壁沿いの内側を巡り，規模及び配列から主柱穴と思われる。

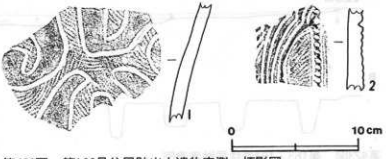


第421図　第162号住居跡実測図

覆土　4層からなる。壁際からの自然堆積と思われる。

土層解説

1　暗褐色　ローム粒子中量，炭化粒子少量
2　暗褐色　炭化粒子中量，ローム小ブロック少量
3　暗褐色　炭化粒子・ローム粒子少量
4　褐　色　ローム粒子中量，炭化粒子・ローム小ブロック少量



第422図　第162号住居跡出土遺物実測・拓影図

遺物　覆土中から極少量の遺物が出土している。いずれも細片で，器形のわかるものはない。

第422図1－2は縄文土器片の拓影図である。1は胴部片で，曲線的な沈線区画の磨消帯が施され，隙間は縄文が充填されている。後期称名寺1式に比定される土器である。2は口縁部付近の破片で，地文に縄文が施されている。刻文を施した直線的な隆線，緩やかな弧を描く複列の沈線及び刺突文などが見られ，後期堀之内1式に比定されると思われる。

所見　本跡は，中央部分が土坑に掘り込まれており，炉の有無は確認できなかった。出土遺物は縄文時代中期加曽利E式期～後期堀之内1式期のものが混在している。遺物は土坑との兼ね合いも考えられ，時期を特定するのは困難である。

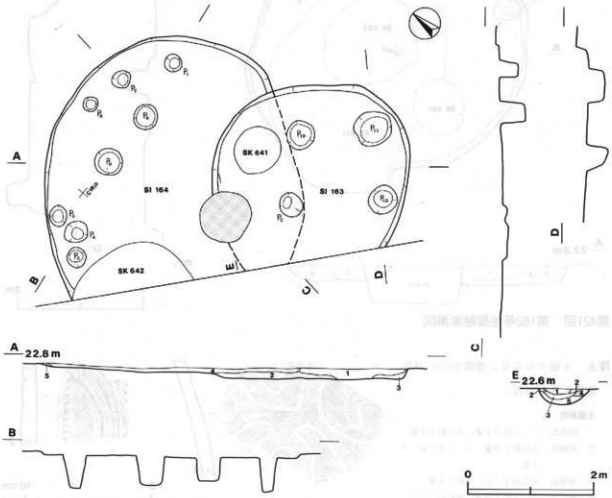
第163号住居跡（第423図）

位置　調査区の東部，C18j6区。

重複関係　本跡は，西側部分が第164号住居跡，第641号土坑に掘り込まれている。

規模と平面形　本跡は，南側部分が調査区域外に延びているため，平面形は不明である。調査区域内は東西径3.16m，南北径（2.78）mで，半円形をしている。

壁　西壁は上部が第164号住居跡に削平され，壁高8cmほどで緩やかに外傾して立ち上がり，他は壁高18cmほどで，ほぼ垂直に立ち上がる。



第423図　第163・164号住居跡実測図

床　平坦である。踏み固められた面は見られない。

ピット　4か所。P_{10}～P_{12}は径45～60cmの円形で，深さ30～35cm。規模及び配列から主柱穴と思われる。P_2は第164号住居跡のピットと思われる。

覆土　3層からなる自然堆積である。

土層解説

1　暗褐色　ローム粒子中量，焼土粒子・炭化粒子極少量
2　褐　色　ローム粒子多量，ローム小ブロック少量，焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子極少量
3　褐　色　ローム粒子中量，焼土粒子・ローム中ブロック極少量

遺物　覆土中から極少量の遺物が出土しているが，細片で器形の判別できるものはない。

所見　本跡から炉は確認されなかった。遺物は後期前葉の遺物の割合が高く，本跡の時期を示唆している可能性もあるが，出土量は極僅かで，すべて覆土中のため判断は難しい。

第164号住居跡（第423図）

位置　調査区の東部，C18j0区。

重複関係　本跡は，東側部分で第163号住居跡，第641号土坑と，西側部分で第642号土坑と重複している。第641号土坑は本跡より新しく，第163号住居跡と第642号土坑は本跡より古い。

規模と平面形　本跡は，南側部分が調査区域外に延びているため，平面形は不明である。調査区域内は東西径[4.05]m，南北径（3.88）mの半楕円形である。

壁　第163号住居跡と重複している東壁の一部の立ち上がりが確認できず，他も残りが良くないが，壁高4cmほどで，緩やかに外傾して立ち上がる。

床　平坦である。踏み固められた面は見られない。

ピット　9か所。P_1～P_3は長径29～39cm，短径26～35cmの楕円形で，深さ38～57cm。これらは規模及び配列から主柱穴と思われる。P_3の北側に近接するP_4（長径39cm，短径33cmの楕円形で，深さが54cm）もほぼ同規模で，P_3ではなくP_4が主柱穴の可能性もある。P_1，P_4間のP_5～P_9は長径25～43cm，短径23～42cmの円形あるいは楕円形で，深さ33～47cm。本跡に伴う柱穴が含まれている可能性もある。

炉　中央部やや南東側に付設されていると思われ，第163号住居跡の床及び壁の上に構築されている。長径86cm，短径80cmのほぼ円形で，床を25cmほど掘りくぼめた地床炉である。炉床は火熱で赤く焼け，硬化している。

炉土層解説

1　にぶい赤褐色　焼土小ブロック・焼土粒子中量，炭化粒子・ローム粒子極少量
2　暗 赤 褐 色　焼土小ブロック・焼土粒子少量，炭化粒子極少量
3　赤　褐　色　焼土小ブロック・焼土粒子多量，焼土大ブロック・焼土中ブロック中量
4　暗　褐　色　焼土小ブロック・焼土粒子・ローム粒子少量，炭化粒子極少量
5　にぶい赤褐色　焼土小ブロック・焼土粒子中量，ローム粒子極少量

覆土　2層からなる。覆土は褐色土が薄く残っているだけで，断定は難しいが，自然堆積と思われる。

土層解説

4　暗褐色　ローム小ブロック中量，炭化粒子極少量

5　暗褐色　ローム粒子中量，炭化粒子極少量

遺物　極少量の遺物が出土しているが，いずれも細片である。

第424図1は縄文土器片の拓影図で，口縁部片である。口縁部下に横走沈線と蕨手沈線文が施されており，後期堀之内1式に比定されると思われる。

第424図　第164号住居跡出土遺物実測・拓影図

所見　出土遺物は中期加曽利ＥⅢ式期のものも混在しているが，大半は後期前葉であることから，本跡の時期は縄文時代後期前葉の可能性が考えられる。

第165号住居跡（第425図）

位置　調査区の東端，D19a8区。

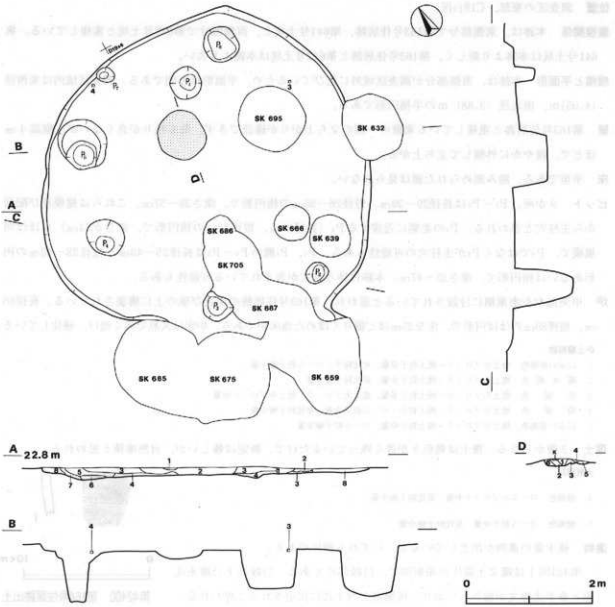
重複関係　本跡は，東側部分が第632号，695号土坑に，南側部分が第639号，659号，666号，675号，685～687号及び705号土坑に掘り込まれている。また，北東側部分で第631号土坑と接している。

規模と平面形　南側部分が土坑と激しく重複しており，部分的に不明であるが，長径5.36m，短径5.25mの円形である。

壁　土坑との重複部分が残存していないが，他は壁高8～15cmで，緩やかに外傾して立ち上がる。

床　平坦である。踏み固められた面は見られない。

ピット　7か所。P_2は長径37cm，短径30cmの楕円形で，深さ34cm，P_3は長径46cm，短径41cmの楕円形で，深



第425図　第165号住居跡実測図

さ72cm，P_4は長径62cm，短径55cmの楕円形で，深さ100cm，P_5は大規模のピットの中に小規模のピットがあり，小規模のピットは長径48cm，短径45cmのほぼ円形で，深さ84cm，P_6は径53cmほどの不整円形で，深さ42cm。これらは規模的にばらつきは見られるが，配列から主柱穴と思われる。P_1は炉の北側に位置し，径50cmほどの円形で，深さ64cm，P_7は北西壁を掘り込んでいる長径29cm，短径22cmの楕円形で，深さ15cmの小ピット。どちらも性格は不明である。

炉　中央部やや北寄りに付設されている。長径77cm，短径72cmのほぼ円形で，床を12cmほど掘りくぼめた地床炉である。炉床は火熱で赤く焼け，硬化した焼土ブロックで凸凹である。

炉土層解説

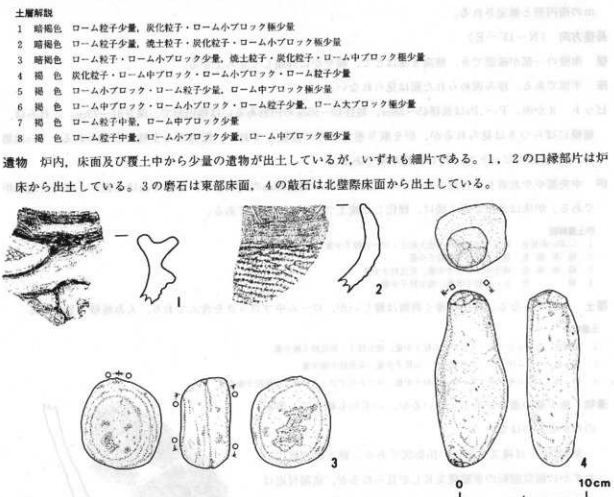
1　にぶい赤褐色　焼土粒子多量，焼土小ブロック少量，炭化粒子極少量
2　暗赤褐色　焼土粒子多量，焼土小ブロック中量，焼土中ブロック少量，炭化粒子極少量
3　暗赤褐色　焼土粒子多量，焼土小ブロック中量，炭化粒子極少量
4　暗赤褐色　焼土粒子中量，焼土小ブロック少量，炭化粒子極少量
5　暗赤褐色　焼土小ブロック・焼土粒子少量，炭化粒子・ローム粒子極少量
6　にぶい赤褐色　焼土粒子中量，焼土小ブロック・ローム粒子少量，炭化粒子極少量

覆土　8層からなる。不自然で複雑な人為堆積の様相を示している。

土層解説

1　暗褐色　ローム粒子少量，炭化粒子・ローム小ブロック極少量
2　暗褐色　ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子・ローム小ブロック極少量
3　暗褐色　ローム粒子・ローム小ブロック少量，焼土粒子・炭化粒子・ローム中ブロック極少量
4　褐　色　炭化粒子・ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子少量
5　褐　色　ローム小ブロック・ローム粒子少量，ローム中ブロック極少量
6　褐　色　ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子少量，ローム大ブロック極少量
7　褐　色　ローム粒子中量，ローム中ブロック少量
8　褐　色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量，ローム中ブロック極少量

遺物　炉内，床面及び覆土中から少量の遺物が出土しているが，いずれも細片である。1，2の口縁部片は炉床から出土している。3の磨石は東部床面，4の敲石は北壁際床面から出土している。



第426図　第165号住居跡出土遺物実測・拓影図

第426図1，2は縄文土器片の拓影図で，口縁部片である。1は沈線を沿わせた隆線で口縁部の区画文を描き，区画内は縄文が施文されている。2は口縁部無文帯で，胴部縄文帯との境に沈線が施されている。中期加曽利E Ⅲ式に比定される土器と思われる。

第165号住居跡出土石製品観察表

図版番号	器種	計測値 長さ(cm)	計測値 幅(cm)	計測値 厚さ(cm)	計測値 重量(g)	石質	備考
第426図 3	磨石	7.2	6.3	4.0	279.4	安山岩	028 裏面に僅かに凹み 東部床面
4	敲石	13.9	5.7	4.1	433.9	安山岩	029 北壁際床面

所見 出土遺物は極少量であるが，出土遺物はほとんどが縄文時代中期加曽利ＥⅢ式期のものであり，本跡の時期と思われる。

第166号住居跡（第428図）

位置 調査区の東端，C19g8区。

重複関係 本跡は，南部床面が第688号，689号土坑に，北側部分が第707号土坑に掘り込まれている。また，北側部分で第167号住居跡と重複しているが，本跡の方が新しい。

規模と平面形 覆土が薄く，壁の立ち上がりをとらえられない部分が多かったが，長径〔5.15〕m，短径〔4.31〕mの楕円形と推定される。

長径方向 〔N－15°－E〕

壁 南壁の一部が確認でき，壁高8cmほどで，緩やかに外傾して立ち上がる。

床 平坦である。踏み固められた面は見られない。

ピット 8か所。P_1～P_8は長径45～58cm，短径40～55cmの円形あるいは楕円形で，深さ31～73cm。これらは，規模にばらつきは見られるが，炉を取り巻くように位置しており，配列から主柱穴と思われる。P_{10}は第167号住居跡のピットで，P_7は性格不明である。

炉 中央部やや北寄りに付設されている。長径65cm，短径43cmの楕円形で，床を5cmほど掘りくぼめた地床炉である。炉床は火熱で赤く焼け，硬化した焼土ブロックで凸凹である。

炉土層解説
1 にぶい赤褐色 焼土小ブロック・焼土粒子・ローム粒子少量
2 暗赤褐色 焼土粒子・炭化粒子少量
3 暗赤褐色 焼土中ブロック中量，炭化粒子少量
4 褐色 ローム粒子中量，焼土粒子少量

覆土 3層からなる。覆土が薄く判断は難しいが，ローム中ブロックを含んでおり，人為堆積と思われる。

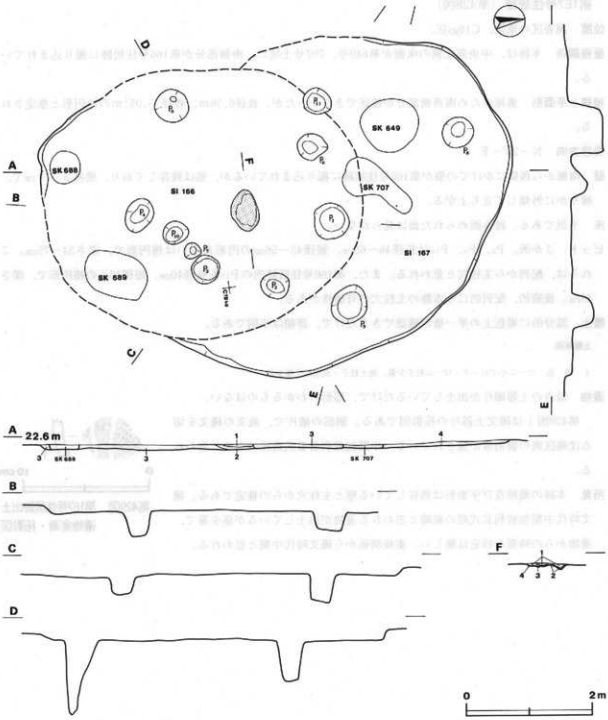
土層解説
1 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子極少量
2 褐色 ローム中ブロック中量，ローム粒子少量，炭化粒子極少量
3 褐色 ローム中ブロック・ローム粒子中量，ローム小ブロック少量，炭化粒子極少量

遺物 極少量の遺物が出土しているが，いずれも細片で，器形のわかるものはない。

第427図1は縄文土器片の拓影図である。胴下部の破片で，わずかに縦位回転の単節縄文ＲＬが見られるが，底部付近は磨り消されている。中期加曽利Ｅ式前半と思われる。

第427図 第166号住居跡出土遺物実測・拓影図

所見 本跡は，覆土が薄く壁が確認できたのも部分的であった。平面形は炉を中心とする主柱穴の配列及び北側は土層の立ち上がりからの推定である。出土遺物は極少量であるが，中期加曽利Ｅ式期のものであり，時期は縄文時代中期後半と考えられる。



第428図　第166・167号住居跡実測図

第167号住居跡（第428図）

位置　調査区の東端，C19g₈区。

重複関係　本跡は，中央部北側の床面が第649号，707号土坑に，南側部分が第166号住居跡に掘り込まれている。

規模と平面形　重複のため南西側部分が確認できなかったが，長径6.36m，短径〔5.05〕mの楕円形と推定される。

長径方向　N－23°－E

壁　南側から西側にかけての壁が第166号住居跡に掘り込まれているが，他は残存しており，壁高3～7㎝で，緩やかに外傾して立ち上がる。

床　平坦である。踏み固められた面は見られない。

ピット　3か所。P_8，P_9，P_{10}は長径46～65㎝，短径42－56㎝の円形あるいは楕円形で，深さ34～75㎝。これらは，配列から主柱穴と思われる。また，第166号住居跡内のP_{10}も長径40㎝，短径36㎝の楕円形で，深さ46㎝。規模的，配列的にも本跡の主柱穴の可能性がある。

覆土　部分的に褐色土の単一層が確認できただけで，詳細は不明である。

土層解説

4　褐　色　ローム小ブロック・ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子極少量

遺物　数点の土器細片が出土しているだけで，器形のわかるものはない。

第429図1は縄文土器片の拓影図である。胴部の破片で，地文の縄文を切る沈線区画の磨消帯が施されている。中期加曽利E Ⅲ式前後のものと思われる。

第429図　第167号住居跡出土遺物実測・拓影図

所見　本跡の規模及び平面形は残存している壁と主柱穴からの推定である。縄文時代中期加曽利E式期の範疇と思われる遺物が出土しているが極少量で，遺物からの時期の特定は難しい。重複関係から縄文時代中期と思われる。

表4　前田村遺跡C区住居跡一覧表

住居跡番号	位置	長径(軸)方向	平面形	規模(cm)(長径×短径)	壁高(cm)	床面	主柱穴	ピット	炉	覆土	出土遺物	備考 ※重複関係(新→旧)
53	B17ha	N-18°-E	楕円形	(5.00×4.30)	1~20	平坦	5	11	1	自然	縄文土器，土製品(円板)	本跡→S1-58，S1-59不明
54	B17gj	N-66°-W	楕円形	3.35×(2.75)	5	傾斜	2	1	1	自然	縄文土器	
55	B17ie		円形	3.97×3.95	7~10	平坦	4	1	1	自然	縄文土器	SE-210A-210B→本跡
57	B18gg								1			炉のみ残存
58	B18hd								1		縄文土器(炉周辺から)	S1-53・59→本跡，炉のみ残存
59	B17ie	N-28°-E	楕円形	6.80×(5.15)	3~14	平坦	(3)	7	1	自然	縄文土器	S1-146，SE-548，SD-18→本跡，S1-53不明
60	B17hf	N-85°-W	隅丸長方形	3.05×2.50	6~13	平坦		3	1	自然	縄文土器	SE-227→本跡
61	B17ie	N-28°-E	楕円形	4.90×4.40	10~23	平坦	3	6	1	自然	縄文土器，土製品(円板)	本跡→SK-35)
62	B17hf	N-47°-E	帆鏡形	5.91×5.67	8~16	平坦	4	37	1	自然	縄文土器	
63	B17de	N-46°-E	楕円形	3.98×3.12	4~10	平坦	5	2	1	自然	縄文土器	SK-233→本跡
64	B17es	N-59°-E	楕円形	6.65×5.56	6~12	平坦	7	5	1		縄文土器，土製品(円板)	SE-219・220・240・245・258・371・372→本跡
65	B17ie	N-39°-W	隅丸長方形	5.50×4.20	20~33	平坦	6	13	1	自然	縄文土器，石器	土器埋設炉
67	B16gb		楕円形	5.70×5.33	10~25	平坦	5	7	1	自然	縄文土器，土製品(円板)，石器	SK-328→本跡
68	B17gz	N-47°-W	楕円形	5.25×4.20	15~25	平坦	(3)	10	2	人為	縄文土器	S1-69→本跡，炉1は土器片囲い炉
69	B17gz		(円形)	(5.45×5.10)		平坦	(4)	11	1		縄文土器，土製品(円板)，石器	本跡→S1-68
70	B17ii										縄文土器，土製品(垂れ飾り)，石器	本跡→S1-77，炉のみ残存
71	B17hi											本跡→S1-77，炉のみ残存
72	B16ce	N-4°-E	楕円形	5.65×5.05	5~25	平坦		9		自然	縄文土器，石器	SE-436・437・464→本跡，部分的に人為埋積
73	B16js		(円形)	5.68×(2.98)	10~18	平坦	3	3			縄文土器，石器	S1-74B，SK-333・334不明，南側部分は調査区域外
74A	B16is	N-60°-W	(楕円形)	(4.32×3.96)	8~15	平坦		1	1	自然	縄文土器	S1-74B→本跡→SK-335・390，S1-73不明
74B	B16is	N-10°-W	帆鏡形	(4.15×3.15)		平坦	4	12	1		縄文土器，土製品(円板)	本跡→S1-74A，SK-335・390，S1-75不明
75	B17ii	N-29°-W	帆鏡形	(5.05×4.82)	4~20	平坦	6	18	1	人為	縄文土器，土製品(円板)，石器	本跡→S1-149，S1-74B不明，土器埋設炉
76	B17ii	N-46°-E	(楕円形)	(6.80)×5.10	3~40	傾斜	6	12	1	自然	縄文土器，土製品(円板)	SE-249・277・278→本跡→SK-276，溝有り
77	B17hi	N-8°-E	不整楕円形	5.32×4.75	5~25	平坦	2	19		自然	縄文土器	S1-70・71→本跡，二段掘り住居
79	C18ez			(4.40)×(1.90)	15	平坦	2	1	1	自然	縄文土器	SD-19→本跡→S1-80，SK-552，南側部分は調査区域外
80	C18es	N-74°-E	楕円形	3.75×2.75	20~40	平坦	2	3		自然	縄文土器	S1-79→本跡
81	C18es		円形	4.15×4.15	10~18	平坦	4	3	1	自然	縄文土器	SK-279・280→本跡
82	C18fs		円形	(4.47)×4.21	8~25	平坦	3	3		自然	縄文土器	SK-362~364→本跡
83	C18es		円形	2.95×2.95	15~18	平坦	2			自然	縄文土器	SK-287・301・321・381→本跡
87	C18er								1			炉のみ残存
88	C18fs	N-26°-E	楕円形	5.38×4.80	3~10	平坦	6	2		自然	縄文土器	SK-354~357・368→本跡
89	C18es	N-63°-E	(楕円形)	2.91×(2.52)	10~15	傾斜		1	1	自然	縄文土器	SK-303→本跡
90	C18es											炉のみ残存
91	C18er											炉のみ残存
92	C18es		(円形)	(4.90×4.90)	5~18	平坦	4	5		自然	縄文土器	本跡→S1-93
93	C18ds				8	平坦	3	10		自然	縄文土器	S1-92，SK-369→本跡，S1-81不明
114	C18gs		(円形)	(5.76×5.50)	2~5	平坦		6	1		縄文土器	SD-20，SK-560・561・569・570→本跡，土器埋設炉
118	B16es		円形	4.60×4.35	10~15	平坦	4	9	2	自然	縄文土器	SE-481→本跡，炉2土器埋設炉
119	B16hs	N-23°-E	不定形	(6.25×4.10)	6~15	平坦		8	1	自然	縄文土器	SE-505・527・547→本跡→SK-491
121	B16ds	N-68°-W	(楕円形)	(5.27×4.45)	4~15	平坦	4	14	1	自然	縄文土器	本跡→S1-123・125
122	B16cr								1		縄文土器	S1-123→本跡
123	B16es	N-31°-E	不整隅丸長方形	6.33×5.20	4~15	平坦	6	20	1	自然	縄文土器	S1-121→本跡→S1-122，整溝

住居跡番号	位置	長径(軸)方向	平面形	規模(m)(長径×短径)	壁高(cm)	床面	主柱穴	ピット	炉	覆土	出土遺物	備考 ※重複関係(新→旧)
124	B16ee		(不整円形)	(4.77)×4.60	8~18	平坦	4	10		自然	縄文土器	SI-151→本跡, SI-131不明
125	B16fi	N-29°-E	(不整隅丸長方形)	(3.50 × 2.95)	10	平坦	2	4		人為	縄文土器	SI-121→本跡→SI-126
126	B16ee	N-28°-E	(楕円形)	4.20 ×(3.10)	15	平坦		7		自然	縄文土器	SI-125→本跡→SI-133
127	B16fi	N-26°-E	楕円形	3.88 × 3.35	15~20	平坦	5	3		自然	縄文土器, 石器	SI-151・152, SK-483・533→本跡→SK-488・492
128	B16ee		円形	4.50 × 4.36	5~12	平坦	6	5	1	自然	縄文土器	SI-150→本跡
129	B16js		(半円形)	4.55 ×(3.20)	10~25	平坦		3		自然	縄文土器, 土製品(円板)	本跡→SI-130, SK-494, 南側部分は調査区域外
130	B16is		(円形)	5.50 ×(5.45)	3~35	平坦	4	7	1	自然	縄文土器, 石器	SI-129, SK-500→本跡→SK-534・551, SI-153不明
131	B15ee	N-85°-E	(楕円形)	(6.48 × 5.45)		平坦	5	11	1		縄文土器	SI-134→本跡, SI-124不明
132	B15gs	N-21°-E	楕円形	4.70 × 4.14	4	平坦	5	7			縄文土器	SI-136, SK-441・456不明
133	B16ee	N-40°-E	(楕円形)	5.50 ×(4.95)	6	平坦	3	2	1		縄文土器, 石器	SI-126, SK-493→本跡, 粗製土器
134	B17di	N-65°-W	(楕円形)	(5.53 × 3.02)		平坦	5	3	1		縄文土器	SK-232→本跡→SI-131, 埋設土器
136	B16hv					平坦	(5)	10	1		縄文土器, 石器	SK-441・445・449・471, SI-132不明, 石囲いか
138	B17je	N-58°-W	楕円形	4.29 × 3.94	6~12	平坦	4	5	1	自然	縄文土器	本跡→SI-139
139	C17ao	N-24°-E	(楕円形)	(2.62)× 1.91	8	平坦			1		縄文土器	SI-138→本跡
140	C17ao		円形	3.10 × 2.92	10~13	平坦		4	1	自然	縄文土器, 土製品(円板)	
141	C18ai	N-38°-W	楕円形	4.55 × 4.20	13~26	平坦	6	2	1	自然	縄文土器	土器埋設炉
142	C18cr	N-33°-E	楕円形	4.38 × 3.67	14~21	平坦				自然	縄文土器	SD-19, SK-522→本跡, SK-526不明, 竪穴状遺構か
143	C18di	N-28°-E	楕円形	5.08 × 4.34	15~35	平坦				自然	縄文土器, 土製品(円板)	SD-19, SK-525→本跡, 竪穴状遺構か
144	C17co		(半円形)	(4.60)×(1.84)	24~27	平坦		3		自然	縄文土器	SK-523, 524→本跡, 南側部分は調査区域外
145	C18di	N-71°-W	(卵形)	3.42 ×(3.20)	16~24	平坦				自然	縄文土器	SI-143, SK-510不明, 竪穴状遺構か
146	B17hs								1			本跡→SI-145, 炉のみ残存
147	B18hu		円形	4.03 × 3.90	7~11	平坦	4	1		自然	縄文土器	
148	B16hu	N-48°-E	楕円形	4.35 × 3.90	1~20	平坦		11		自然	縄文土器	本跡→SI-149
149	B15hu	N-51°-E	(楕円形)	(6.62 × 5.35)	14	平坦	4	15	1	自然	縄文土器	SI-148, SK-526・530→本跡, 土器埋設炉
150	B16er										縄文土器	SI-128→本跡, 南西壁のみ残存
151	B16es	N-67°-E	(楕円形)	(5.50 × 4.83)	8	平坦	5	13	1	自然	縄文土器, 石器	SI-152→本跡→SI-124, 127, SK-490不明
152	B16fs	N-47°-E	(楕円形)	(4.75 × 3.63)	12	平坦		4	1	人為	縄文土器	本跡→SI-151・127, SK-490不明
153	B16hs	N-71°-W	(不整楕円形)	5.38 ×(4.63)	8~14	平坦	4	8	1	自然	縄文土器	SK-501・534B→本跡→SI-154, SK-532・534A・541, SI-130不明
154	B16gs		不定形	5.07 ×(3.52)	15~17	平坦		5		自然	縄文土器, 石器	SI-153, SK-533→本跡→SK-541
155	B16iv	N-82°-E	(楕円形)	(6.04 × 5.12)	3~14	平坦	4	7	1	自然	縄文土器	SK-549・643→本跡→SK-550, 土器片囲い土器埋設炉
156	C19gs	N-22°-E	楕円形	4.07 × 2.77	6~10	平坦	2			自然	縄文土器	本跡→SK-662・710・711
157	C19hs	N-59°-E	楕円形	4.08 × 3.67	14~15	平坦	5			自然	縄文土器	SK-593・664→本跡, SI-159不明
158	B16gs			東西径6.80	2~19	平坦		5	(1)	自然	縄文土器, 石器	SI-119, SK-479・553→本跡, SK-491・545・546不明
159	C19hs	N-44°-E	楕円形	4.02 × 3.60	7~18	平坦	3	1		自然	縄文土器	SK-592・663・664→本跡, SI-157, SK-3不明
160	C19hs	N-33°-E	不整隅丸長方形	6.58 × 5.82	3	平坦	12	6	1		縄文土器	SK-607, SK-4→本跡, SK-637不明
161	C19is		円形	2.12 × 2.05	20~24	平坦	2		1	人為	縄文土器	本跡→SK-563
162	B19hu		円形	4.52 × 4.30	8~12	平坦	3			自然	縄文土器	SK-622・626・681→本跡→SK-621

住居跡番号	位置	長軸(軸)方向	平面形	規模(m)(長径×短径)	壁高(cm)	床面	主柱穴	ピット	炉	覆土	出土遺物	備考 ※重複関係(新→旧)
163	C18jo		(半円形)	3.16×(2.78)	8～18	平坦	3	1		自然	縄文土器	SI-164, SK-641→本跡, 南側部分は調査区域外
164	C18je		(半楕円形)	(4.05)×(3.88)	4	平坦	3	6	1	自然	縄文土器	SK-641→本跡→SI-163, SK-642, 南側部分調査区域外
165	D19ax		円形	5.36×5.25	8～15	平坦	5	2	1	人為	縄文土器, 石器	SK-632・639・659・666・675・685～687・695・705→本跡
166	C19gn	N-15°-E	(楕円形)	(5.15×4.31)	8	平坦	6	2	1	人為	縄文土器	SK-688・689・707→本跡→SI-167
167	C19gs	N-23°-E	(楕円形)	6.36×(5.05)	3～7	平坦	3				縄文土器	SI-166, SK-649・707→本跡

(2) 地下式壙

第2号地下式壙［ＳＫ－401］（第430図）

位置　調査区の西端部，B15d7区。

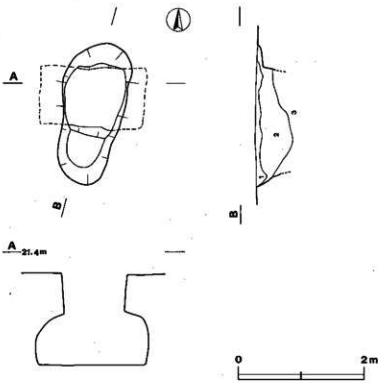
主軸方向　Ｎ－10°－Ｅ

竪坑　上面は，長径0.93m，短径0.84mの楕円形で，深さは1.00～1.15m。底面は，長径0.54m，短径0.51mの半楕円形で，主室と0.21mの段差がある。

主室　底面は，長軸1.67m，短軸0.94mの長方形で，平坦である。確認面から底面までの深さは1.46m，底面から天井部までの高さは0.87mである。

壁　竪坑はやや外傾し，主室は内傾して立ち上がる。

覆土　3層からなる。土層1は自然堆積，土層2，3はロームブロックを含み，人為的に埋め戻したものと思われる。



第430図　第2号地下式壙実測図

土層解説

1　暗褐色　炭化粒子中量，ローム大ブロック・ローム小ブロック少量
2　暗褐色　ローム中ブロック・ローム粒子中量，炭化物・炭化粒子少量
3　暗褐色　炭化粒子・ローム中ブロック中量，ローム粒子少量

遺物　覆土上層から混入したと思われる縄文土器片が極少量出土している。

所見　時期を判断する遺物の出土はないが，遺構の形態から小形の地下式壙と思われる。時期は，中世と考えられる。

第3号地下式壙［ＳＫ－406］（第431図）

位置　調査区の西端部，B15b8区。

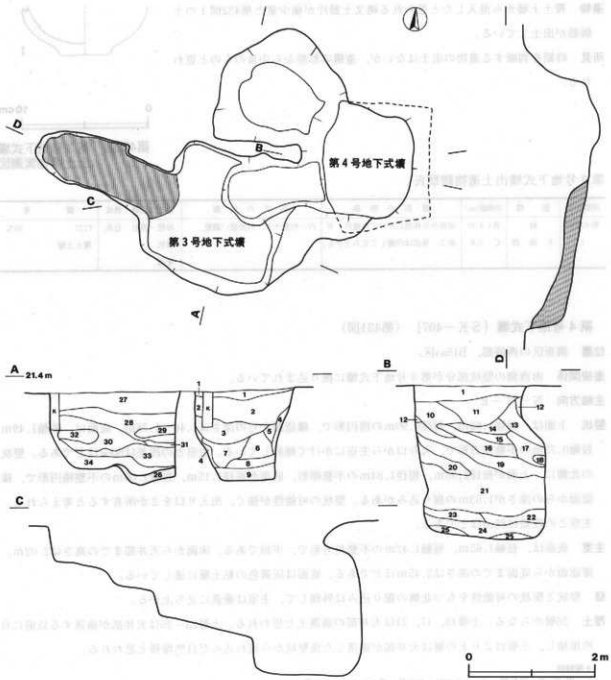
重複関係　北東側部分で第4号地下式壙と重複しているが，本跡の方が新しい。

主軸方向　Ｎ－116°－Ｅ

竪坑　上面は，長径2.30m，短径0.85mの長楕円形で，深さは0.10～0.71m。底面は，長径2.24m，短径0.68mの長楕円形で，入り口からスロープ状に緩やかに傾斜している。底面には，灰黄色の粘土が20～48cmの厚さで張り付けられている。主室との段差は24cmである。

主室　底面は，一辺1.85mほどの方形で，やや起伏が見られる。確認面から底面までの深さは1.05～1.20mである。

壁　竪坑は外傾して，主室はほぼ垂直に立ち上がる。



第431図　第3・4号地下式壙実測図

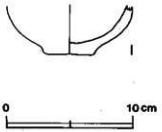
覆土　8層からなる。土層29，31は天井部の崩落土，土層34は第4号地下式壙の竪坑の上に貼った貼床部分と思われる。部分的に天井部の崩落によるローム ブロックを含む層もあるが，自然堆積と思われる。

土層解説

27　暗褐色　ローム小ブロック・ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子極少量
28　黒褐色　ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子極少量
29　黒褐色　ローム大ブロック・ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子中量
30　黒褐色　ローム小ブロック・ローム粒子・暗褐色土のブロック少量，ローム大ブロック極少量
31　褐　色　ローム大ブロック・ローム中ブロック多量
32　黒褐色　ローム粒子中量，ローム中ブロック少量，ローム小ブロック極少量
33　暗褐色　ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子中量
34　褐　色　黒色土大ブロック・黒色土中ブロック・粘土中ブロック・粘土小ブロック中量

遺物　覆土上層から混入したと思われる縄文土器片が極少量と第432図1の土師器が出土している。

所見　時期を判断する遺物の出土はないが，遺構の形態から中世のものと思われる。



第432図　第3号地下式壙出土遺物実測図

第3号地下式壙出土遺物観察表

図版番号	器種	残存値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第432図 1	椀 土師器	B(4.0) C 3.8	底部から体部にかけての破片。平底で，体部は内彎して立ち上がる。	内・外面ナデ。外面粗い調整。	砂粒・長石・石英 橙色 普通	P137　80% 覆土上層

第4号地下式壙［SK－407］（第431図）

位置　調査区の西端部，B15a9区。

重複関係　南西側の竪坑部分が第3号地下式壙に掘り込まれている。

主軸方向　N－73°－E

竪坑　上面は，長径1.60m，短径0.90mの楕円形で，確認面からの深さは1.46～1.78m。底面は，長軸1.49m，短軸0.73mの不整長方形で，入り口から主室にかけて傾斜している。主室との段差は60cmほどである。竪坑の北側に，上面が長径2.05m，短径1.84mの不整卵形，底面が長径1.15m，短径1.00mの不整楕円形で，確認面からの深さが1.53mの掘り込みがある。竪坑の可能性が強く，出入り口を2か所有すると考えられる。主室との段差は85cmほどである。

主室　底面は，長軸1.65m，短軸1.42mの不整長方形で，平坦である。床面から天井部までの高さは2.02m，確認面から底面までの深さは2.45mほどである。底面は灰黄色の粘土層に達している。

壁　竪坑と竪坑の可能性をもつ北側の掘り込みは外傾して，主室は垂直に立ち上がる。

覆土　26層からなる。土層16，17，21は天井部の崩落土と思われる。土層23～25は天井部が崩落する以前に自然堆積し，土層21より上の層は天井部が崩落した後竪坑から流れ込んだ自然堆積と思われる。

土層解説

1　黒褐色　炭化物・ローム小ブロック中量，焼土小ブロック少量
2　黒褐色　ローム小ブロック中量，炭化物・ローム粒子少量，粘土小ブロック極少量
3　黒褐色　炭化粒子中量，ローム大ブロック・ローム中ブロック・ローム粒子少量
4　褐　色　ローム小ブロック多量，炭化粒子極少量
5　暗褐色　ローム小ブロック・ローム粒子中量，炭化物少量
6　暗褐色　ローム小ブロック中量，炭化粒子・ローム粒子少量
7　暗褐色　ローム小ブロック中量，炭化物・ローム粒子少量
8　暗褐色　ローム粒子中量，炭化粒子少量
9　黒褐色　炭化物・ローム粒子・粘土小ブロック少量，焼土小ブロック極少量
10　黒褐色　ローム小ブロック・ローム粒子少量，焼土粒子・炭化物極少量
11　黒褐色　ローム小ブロック・ローム粒子中量，炭化物・ローム中ブロック少量
12　暗褐色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量，炭化粒子極少量
13　黒褐色　ローム小ブロック・ローム粒子少量
14　黒褐色　ローム中ブロック少量，炭化粒子・ローム小ブロック・ローム粒子極少量
15　黒褐色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量
16　暗褐色　ローム大ブロック・ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子中量
17　褐　色　ローム小ブロック・ローム粒子多量，ローム中ブロック中量
18　極暗褐色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量
19　黒褐色　炭化物中量，ローム小ブロック・ローム粒子少量
20　極暗褐色　ローム小ブロック・ローム粒子中量，ローム中ブロック少量

21　褐　色　ローム大ブロック・ローム中ブロック多量
22　褐　色　ローム粒子中量，炭化粒子・ローム大ブロック少量
23　褐　色　炭化粒子・ローム粒子中量
24　暗褐色　炭化粒子中量，ローム粒子少量
25　褐　色　ローム粒子多量，ローム小ブロック中量，炭化粒子少量
26　褐　色　ローム粒子多量，ローム小ブロック・粘土小ブロック中量，粘土粒子少量

遺物　覆土上層から混入したと思われる縄文土器片が極少量出土している。

所見　時期を判断する遺物の出土はないが，遺構の形態から中世のものと思われる。西側に竪坑を２か所有する可能性が考えられる。

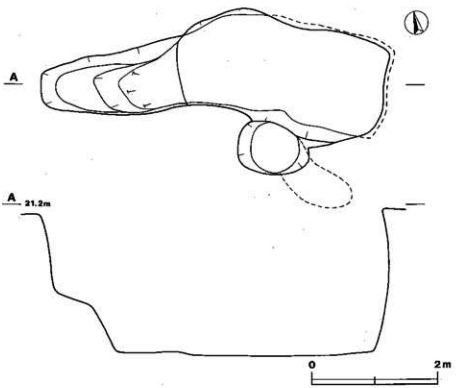
第５号地下式壙［ＳＫ－419］（第433図）

位置　調査区の西端部，B15d9区。

重複関係　西側部分が第477号土坑を掘り込んでいる。

主軸方向　N－114°－E

竪坑　西側の他にも南側に竪坑状の掘り込みが見られる。西側の竪坑は，上面が長軸2.21m，短軸1.04mの長方形，底面は長軸1.96m，短軸0.77mの不整長方形で，２段になっている。上段の深さが1.27～1.40mで主室に向かい傾斜しており，下段が2.20mほどでほぼ平坦である。上段と下段の段差が80cmほど，下段と主室の段差は数センチである。南側の掘り込みは，上面が長径1.18m，短径0.86mの楕円形で，深さが1.98m。底面は径78cmの円形で，主室との段差は20cmほどである。底面から南東方向へ１mほどのところに，最深部の高さが45cmほどの横穴が掘られており，底面から炭化物が出土している。



第433図　第５号地下式壙実測図

主室　底面は長軸3.36m，短軸1.53mの不整長方形で，平坦である。確認面から底面までの深さは2.25mである。

壁　竪坑と南側の掘り込みはほぼ垂直に，主室はわずかにオーバーハングして立ち上がる。

覆土　ベルトが崩落して部分的な確認だったため，土層断面図は割愛したが，すべての層にロームブロックが多量に含まれており，人為堆積の様相を呈している。

遺物　覆土上層から混入したと思われる縄文土器片が極少量出土している。

所見　時期を判断する遺物の出土はないが，遺構の形態から中世のものと思われる。西側と南側に２か所の竪坑を有する地下式壙，あるいは地下式壙２基の重複という２通りの見方ができる。

(3) 土坑

C区で調査した土坑は437基である。ほとんどの土坑が縄文時代のものであるが，中には近世の粘土張り遺構や，形態及び出土遺物から縄文時代とは異なる時期のものも検出されている。地下式壙については(2)で述べたが，ここでは次の観点から①～⑤に分類して記載した。

① 中・近世と思われる竪穴状遺構

② 粘土張り遺構

③ 埋設土器が出土しているもの

④ 袋状土坑，著しく深さのある円筒状土坑，円形もしくは楕円形で小ピットを持つ等形状に特徴のある土坑，完形に近い土器や貝が出土している等出土遺物に特徴のある土坑

⑤ その他の土坑

①～③については遺構及び遺物の実測図とともに文章で記述する。④は遺構と遺物の実測図の掲載と，特に遺構についての説明を必要とするものは文章で記述し，さらに遺物が出土している場合には遺物の観察表，拓影図の解説を記述する。⑤については遺物の実測図，拓影図及び遺物観察表，拓影図の解説にとどめる。なお，③～⑤の位置や規模等については一覧表に一括して掲載する。

なお，一覧表中の「土坑の分類」の欄は，以下を基準とした。

[平面形]	[壁　面]
A　円形系統	Ⅰ　緩斜
B　楕円形系統	Ⅱ　外傾
C　方形（長方形，隅丸，不整含む）系統	Ⅲ　ほぼ垂直
D　不定形	Ⅳ　内傾及び袋状
[規　模]	[深　さ]
a　長径100㎝未満	1　50㎝未満
b　長径100㎝以上，200㎝未満	2　50㎝以上，100㎝未満
c　長径200㎝以上	3　100㎝以上，150㎝未満
	4　150㎝以上

小ピットを持つものについては，一覧表「P」の欄に数を記入した。

時期については，土坑内の出土遺物で特に時期が集中して量的に多いもの及び底面出土の遺物から推定したが，多時期にわたり，しかも遺物の偏りがない場合は「～」で記載した。出土遺物が少なく，推定困難なものについては空欄とした。

重複関係については「備考」欄に記載した。

① 竪穴状遺構

ここでは，縄文時代の土坑とは形態が異なる方形竪穴状遺構及び中・近世の遺物が出土している竪穴状遺構について記述する。

第270号土坑（第435図）

位置　調査区の中央部やや東側，C18c₆区。

長径方向　N－50°－W

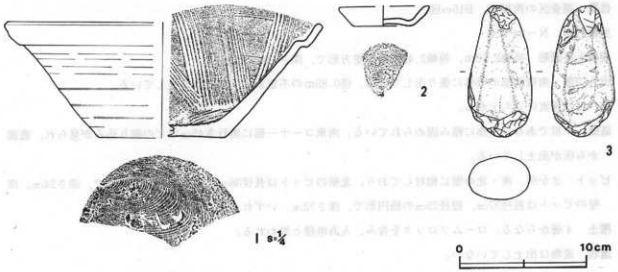
規模と平面形　長径3.97m，短径3.50mの楕円形で，深さ54cmである。

壁　やや外傾して立ち上がる。

底面　平坦である。

覆土　4層からなる自然堆積である。

遺物　1の擂鉢は南東部底面から破砕された状況で，2の土師質土器は覆土中から出土している。他に混入したと思われる極少量の縄文土器片と3の磨製石斧が覆土中から出土している。



第434図　第270号土坑出土遺物実測・拓影図

第270号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第434図 1	擂鉢 陶器	A(33.2) B 12.0 C(13.2)	底部から口縁部にかけての破片。平底。体部は直線的に外傾して立ち上がり，屈曲して口縁部に至る。	ロクロ成形。底部回転糸切り。内面に18条1単位の擂目が施されている。内面及び外面下端まで鉄釉施釉。	砂粒 胎土：浅黄橙色 釉：黒褐色 普通	P121　30% 南東部底面 （瀬戸・美濃系）
2	皿 土師質土器	A(7.2) B 1.6 C(4.6)	底部から口縁部にかけての破片。やや上げ底で，体部は外傾して立ち上がる。	体部内・外面横ナデ。底部回転糸切り。	砂粒 にぶい橙色 普通	P122　45% 覆土 口唇部煤付着

図版番号	器種	計測値 長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	備考
第434図 3	磨製石斧	(10.4)	5.0	3.5	(275.5)	緑泥片岩	Q36　乳棒状　覆土上層

所見　本跡は，出土遺物から中世末から近世初頭にかけての竪穴状遺構と思われる。

第398号土坑（第435図）

位置　調査区の西端部，B15b7区。

長軸方向　N－15°－W

規模と平面形　長軸3.57m，短軸2.00mの長方形で，深さ75cmである。

壁　南北壁はやや外傾して，東西壁はほぼ垂直に立ち上がる。

底面　平坦である。

ピット　中央部からやや南側に位置し，一辺35cmほどの方形で，深さ59cm。柱穴と思われる。

覆土　3層からなる。ロームブロックを含む土層3が一挙に埋め戻された後，土層1，2が自然堆積したものと思われる。

遺物　覆土中から混入したと思われる縄文土器片が極少量出土している。

所見　時期を判断する遺物の出土はないが，長方形を呈する中世の竪穴状遺構と思われる。

第409号土坑（第435図）

位置　調査区の西端部，B15e8区。

主軸方向　N－34°－E

規模と平面形　長軸2.52m，短軸2.42mの不整方形で，深さ126cmである。

出入口部　南壁西部の壁外に張り出している。径0.85mの不定形で，階段状を呈している。

壁　ほぼ垂直に立ち上がる。

底面　平坦である。全体に踏み固められている。南東コーナー部に奥行き45cmほどの掘り込みが見られ，底面から灰が出土している。

ピット　2か所。南・北の壁に相対しており，北壁のピットは長径36cm，短径24cmの楕円形で，深さ24cm。南壁のピットは長径37cm，短径25cmの楕円形で，深さ32cm。いずれも柱穴と思われる。

覆土　4層からなる。ロームブロックを含み，人為堆積と思われる。

遺物　遺物は出土していない。

所見　時期を判断する遺物の出土はないが，遺構の形態から中世の方形竪穴状遺構と思われる。

第470号土坑（第435図）

位置　調査区の西部，B16i1区。

重複関係　北側部分で第474号土坑と重複しているが，本跡の方が新しい。

長軸方向　N－78°－W

規模と平面形　長軸3.27m，短軸2.82mの不整方形で，深さ80cmである。

壁　外傾して立ち上がる。

底面　平坦である。

ピット　東壁に位置し，径35cmほどの円形で，深さ33cmである。

覆土　8層からなる。土層1～3はロームブロックを含み，東壁際から一挙に埋め戻され，土層4～6も西壁際にブロック状に堆積しており，人為堆積と思われる。

遺物　覆土中から混入したと思われる縄文土器片が極少量出土している。

所見　時期を判断する遺物の出土はないが，遺構の形態から中世の方形竪穴状遺構と思われる。